

238

互先定石中卷

特 259

16

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始



特 259
16



互先定石
中卷



例言

- 一 本卷には「一間夾」及び「二間夾」定石の全部を収めました。
- 一 所謂新定石若しくは新趣向の採用すべき價值ありと認められたものは悉く掲げて洩らさざりしこと、上卷に異なりません。たゞ二間夾中、小斜走こせうさいに對する出切でせきの變化は定石として考ふべきものなりや否や、大いに問題でありませう。本卷には省略しました。定石としてではなく、研究の意味に於て下卷に關説する豫定であることをお約束して置きます。
- 一 一間夾二間夾三間夾に共通する類型の多いことに就てはその定石の現れる毎に指摘

- して置きました。この點、なほ本文各處に於て注意せられることを望みます。
- 一 本文と圖との關係は、主として右上隅に示されるものを基とし、その變化を他の隅に掲げるやうにしたこと、従つて右上隅に就てその右上隅なる所以を特にことわらなかつたこと、上卷に同じです。
 - 一 互先定石は上下二卷に收容できる豫定でありました所、新定石若しくは新趣向を採録すること多かりしがために「三間夾」は下卷として獨立するの餘義無きに至りました。眞に已むなき事情であります。ご諒承を請ふ。
 - 一 なほ別紙正誤表の後部について御了解あらんことを希望します。

一間夾定石

白一・三々頂の型	白頁	三	至頁	六
白一・斜走頂引の型	七	一		
白一・同頂行の型	一	二	三	八
白一・斜走掛の型	三	九	五	三
白一・斜走飛出の型	五	四	五	七
白一・一間夾返の型	五	八	六	四
白一・二間夾返の型	六	五	七	四
白一・三間夾返の型	七	五	七	九
白一・一間飛の新型	八	〇	一	〇
手抜定石	一	〇	四	一

二間夾定石

白一・三々頂の型	白頁	二	一	二	四
白一・頂を基とする型	一	二	四	一	五
白一・二間飛の型	一	五	七	一	六
白一・同黒二と高く受る新型	一	六	七	一	七
白一・斜走掛の型	一	七	六	一	八
白一・一間夾返の型	一	八	二	一	八
白一・二間夾返の型	一	九	〇	一	〇
白一・三間夾返の型	二	〇	四	二	〇
白一・間明の新型	二	〇	八	二	二
手抜定石	二	二	一	二	三

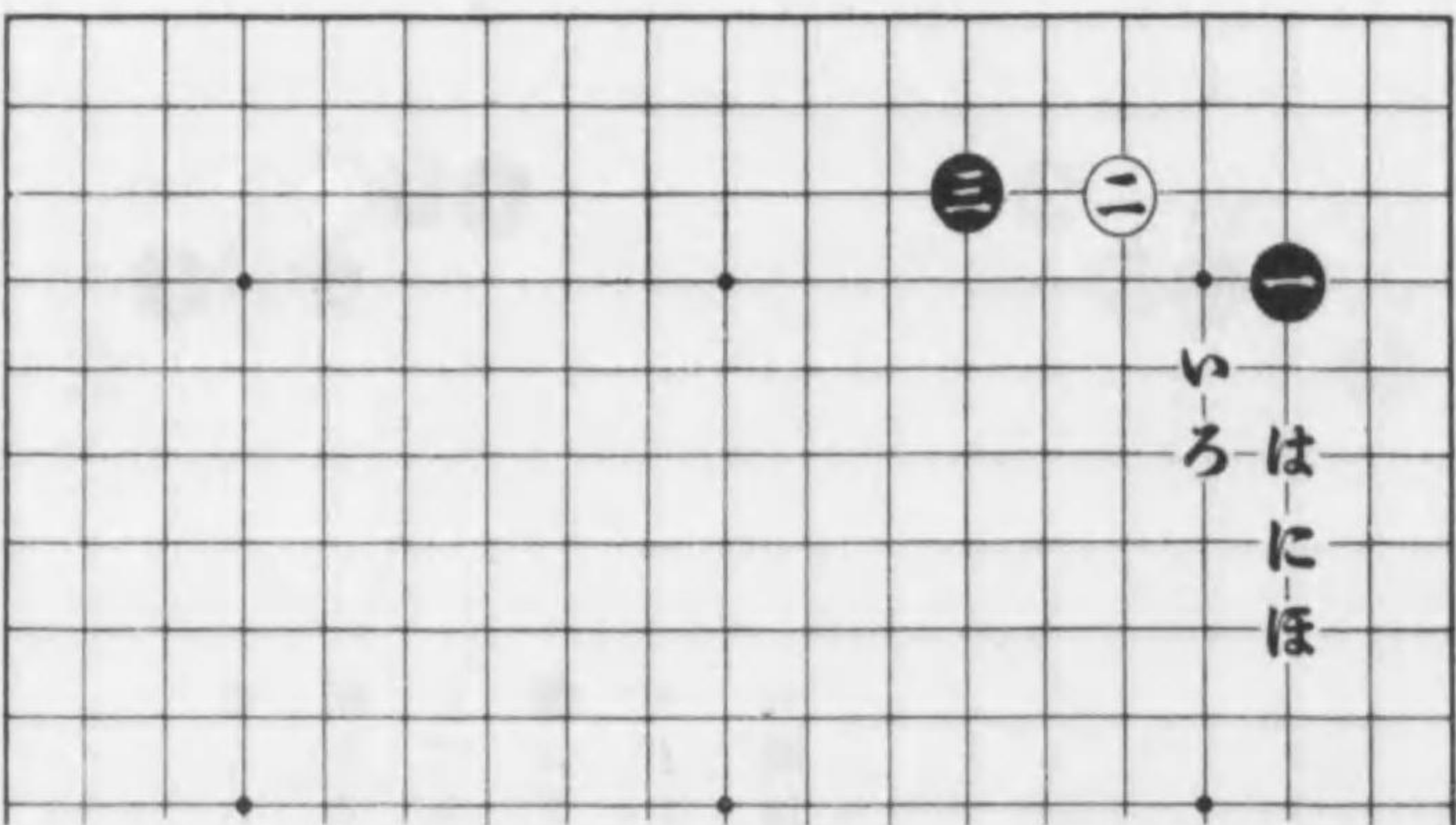
互先定石 中巻

二十一世 本因坊秀策

一間夾定石

(第一圖) 黒一の小目、白二の小斜走掛りに於る黒三を指して一間夾と呼び、これに對する白四以後、雙方の正統なる應酬を總稱して一間夾定石とします。

黒三の使命は勿論白二を夾撃する所にあるのですが、攻るは守るなりの原理が語る如く、他面自衛の意味も大いに含まれてゐることは否定できません。則ち三に依つて、白よりするいろはには等を牽制し、緩和します。但攻るといふ點

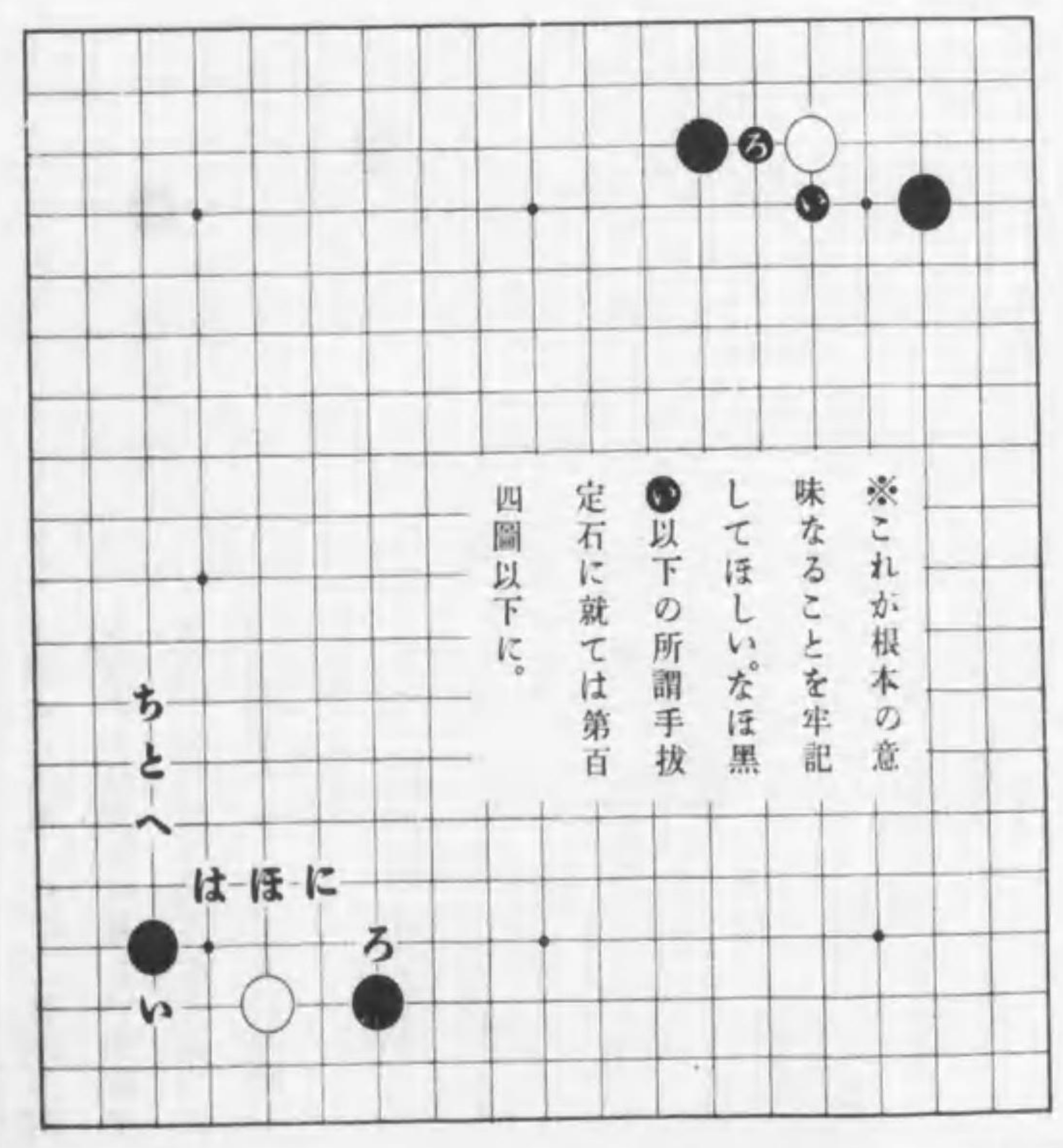


を主として考へれば、二間夾三間夾等よりは遙かに嚴しい手段であることも、二に最も近く迫つてゐる關係からして、容易に推斷し得られませう。

(註一) 黒三を省略して白からいろ以下種々著手される型は直ちに目外定石に歸する。

(註二) 一間夾は白のいろ等々を牽制し緩和すると言ひましたが、畢竟三無き形に比しての相對的意味に於てである。而して一間夾に於る白以下は、目外定石のそれ等と、當然對照して研究されねばなりませぬ。

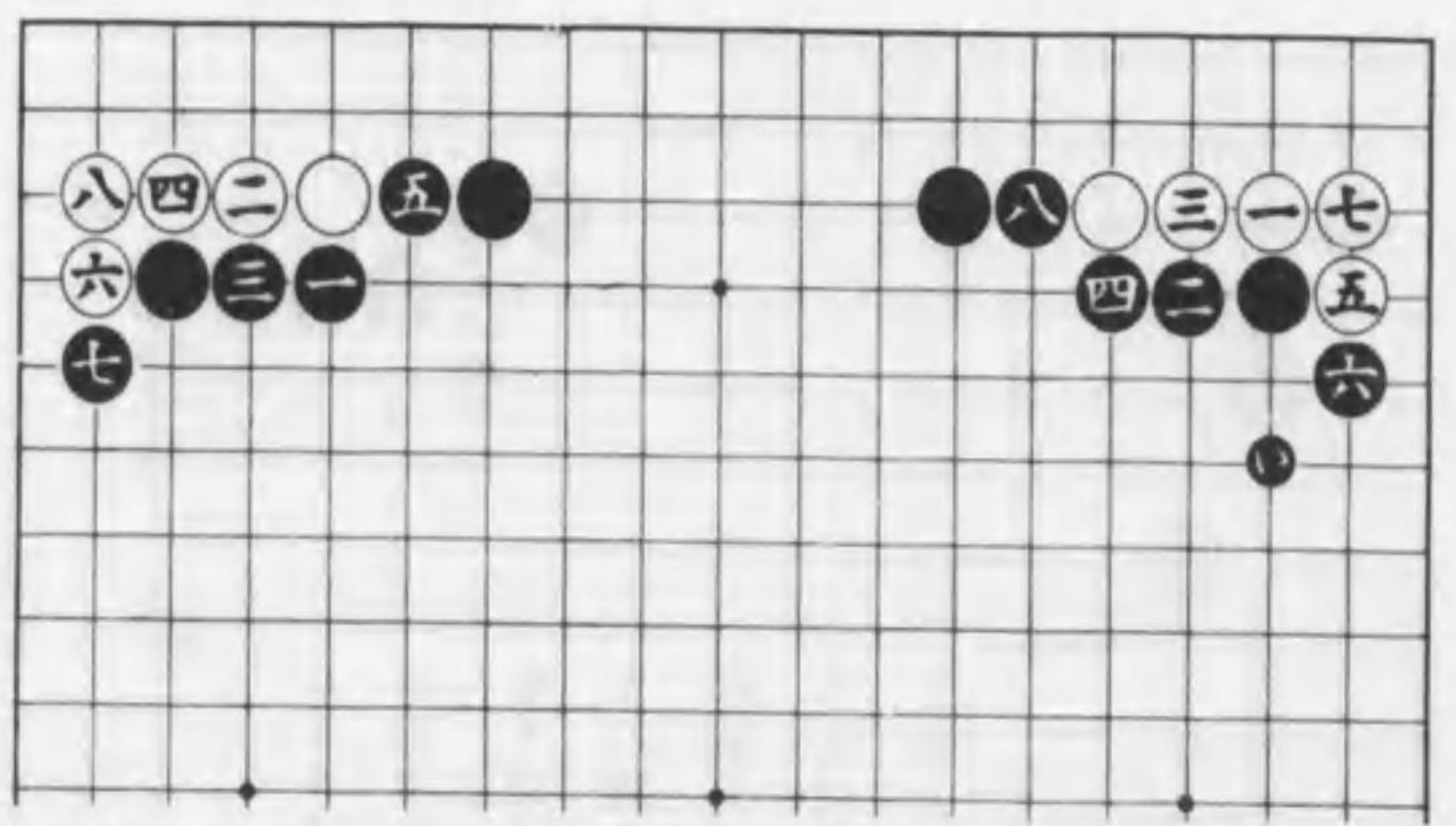
(第二圖) 一間夾は白が應手を
 忘れれば●と頂けてこの隅に白を
 封鎖し、以て黒自らは外勢の厚壯
 を期する、それが主眼です。●に對
 して更に白が手を抜けば、黒●に
 依て完全に取り切つてしまふ。二間
 夾三間夾にはこれだけの嚴しさが
 有りません。(二三三間夾参照)
 ※白の應手はこの黒●を防ぎ、もし
 くは緩和する所から出發する。則
 ち左下隅いの三々頂ろの頂はの
 斜走掛にの斜走ほの一間飛へと
 ちの夾等々孰れも然りです。
 (註) 以下一間夾の形のみは單
 に黒白の丸を以て示します。



※これが根本の意
 味なることを牢記
 してほしい。なほ黒
 ●以下の所謂手抜
 定石に就ては第百
 四圖以下に。

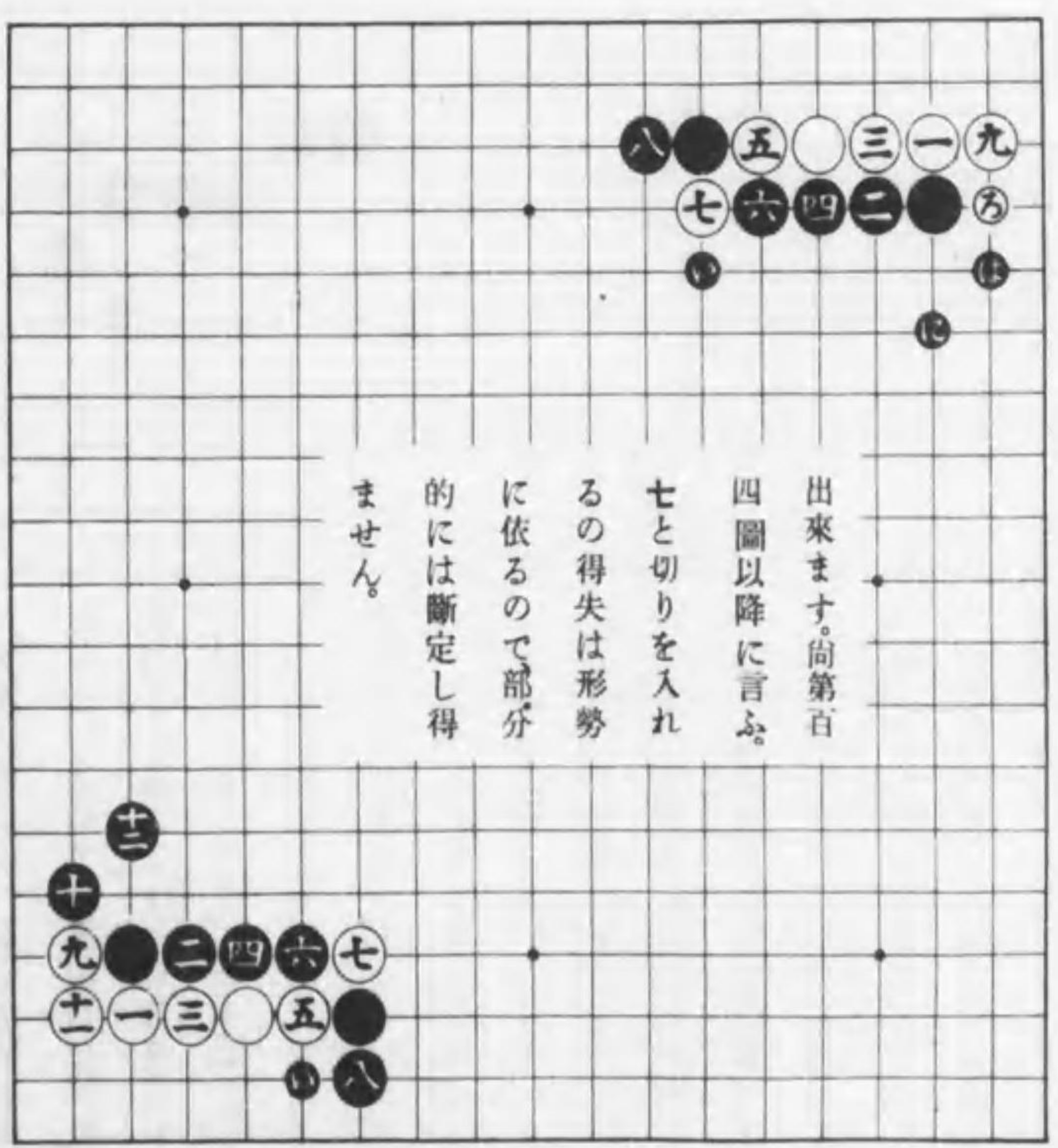
ちとへ
 はほに
 ろ
 い

(第三圖) 白一の三々頂から入
 ります。この一は本來隅に根據を
 求めて、此處を先手に治まる。少
 くとも一時は一意匠です。
 黒二を七に締る通型は次圖に言
 ひますが、一間夾に限つて二と行
 出す手法が成立する。
 白三は絶對、誤つて四に押し、黒三
 と出られては一の趣意にも反き
 非常の不利です。
 白五に至つては八に突張ること
 もあり、又黒八をいに掛粘ぐ型も
 ありますが、要は黒が二・四と此處
 を封鎖してその外勢を厚且壯な
 らしめた所にある。



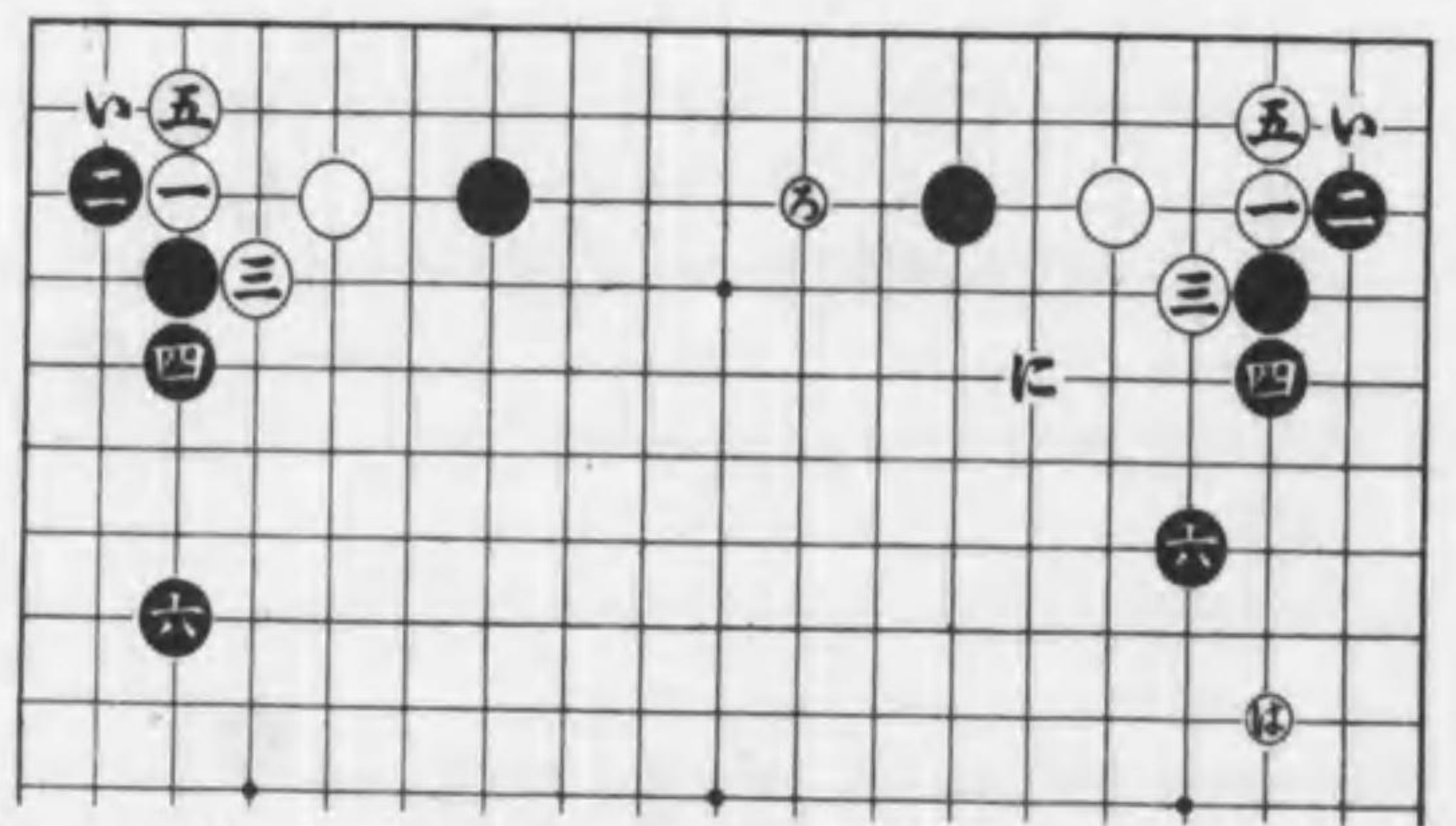
左上隅は後に述べる手抜定石中
 の一つであつて、其詳細は第百四
 圖以下に譲りますが、白二を三に
 締込むことができず、斯く二と行
 るのは白最も不利としてある。そ
 の不利の型(白が手抜したと同理
 の)に導いた點こそは、右上隅黒
 二の効果でなければなりません。
 四の手までが、左右兩隅とも同結
 果に達してゐる所に注意します。
 (註) 右隅白五及左隅黒五以下
 に就ては手抜定石に詳説する。兎
 に角右上隅黒二は常に相當有力
 なる趣向として成立することを
 提唱する者であります。

(第四圖) 白五と突當り七の切を一つ入れてから九と下つて置く型。但し七の一子を黒いと征に抱へられる憂ひ無き場合に限るのです。九に依て隅に多少の地を獲得と共に七を今後如何に有効に用ゐやうかと黒の態度を觀望します。九で⑤に綽ね黒⑥白九黒⑦と成つては黒の姿形が熟し、同時に七の効果が滅殺される。左下隅黒八と若し下つたならば今度は白も九十一と綽粘ぎます。單に十一に下つて黒九と約へられると白⑧が略けない。九十一と打てばこの儘白は手を抜く事が



出來ます。尙第百四圖以降に言ふ七と切りを入れるの得失は形勢に依るので部分的には斷定し得ません。

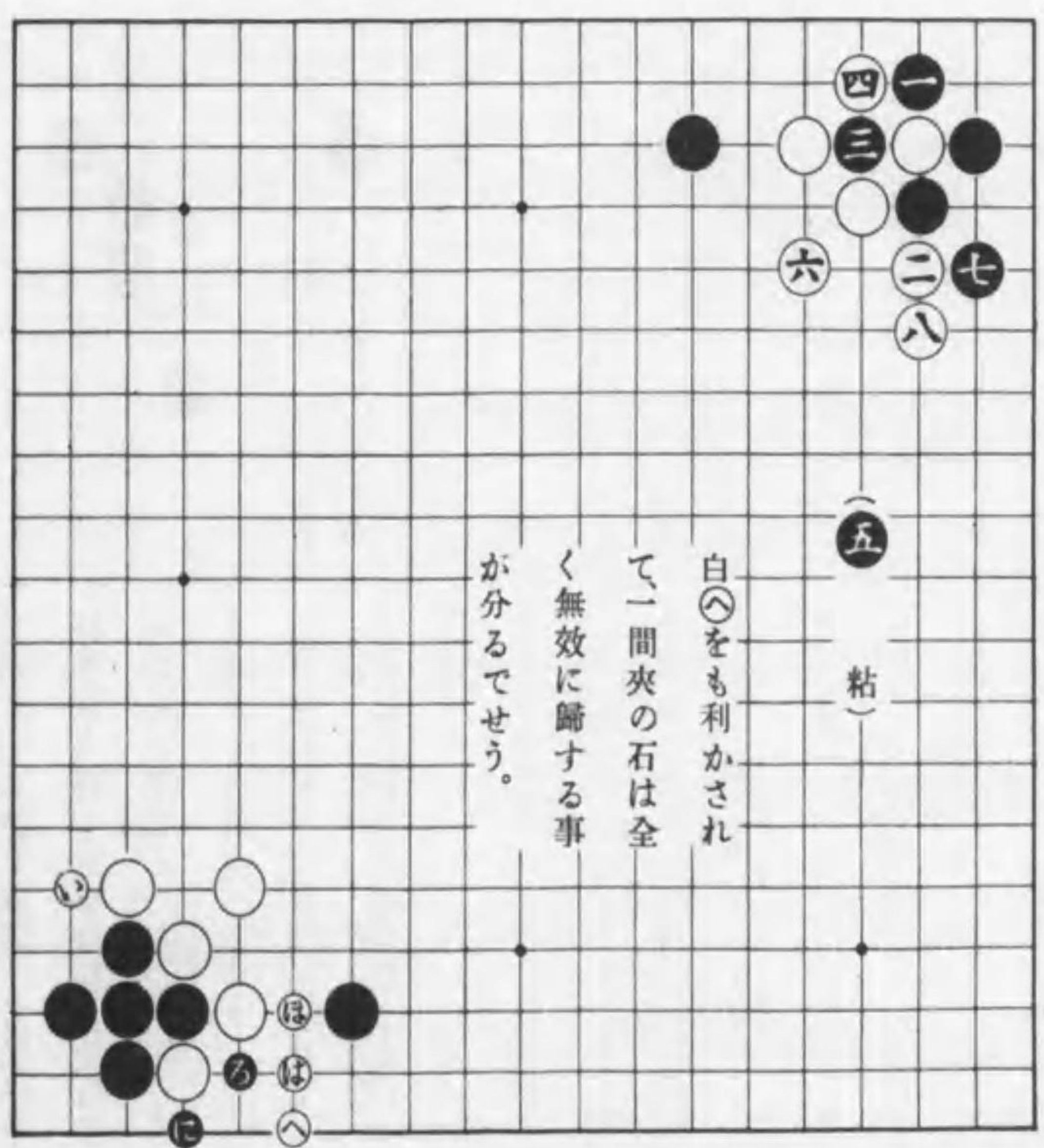
(第五圖) 白一に對して黒二と綽れば極めて普通。黒四を五に綽捲ることが絶無とは言へません。次圖に示す。白五はまづ決り手と言つて宜しい。これに依て根據を確保します。黒六の斜走で一段落。六に次いで白は必ずしも直にいに曲るを要しない。又それでこそこの隅を先手に治まる所以にも適ふのです。然し又いは、機を見てすれば孰れから打つても非常の好點ではあります。白からいに曲れば、續いて必然的に⑧若しくは⑨より迫つ



て、何れかの黒を攻撃する狙ひを持ち得る。而していの曲りを白は六に次いで直ちに打つて然るべき場合も勿論有るので。逆に黒からいに約へられたならば、白はに斜走して進出する位のものでせう。左上隅黒六と拓くのは最も古風であつて、今日では用ゐません。斯の如きは初めの一問夾の急迫したると、全然呼應せざる緩著であります。たゞ三問夾に於てのみ、往行はれるに過ぎない。いの點には孰れから打つても愈々急を要せぬことが容易に推究されませう。

(第六圖) 黒一と綽捲る型。

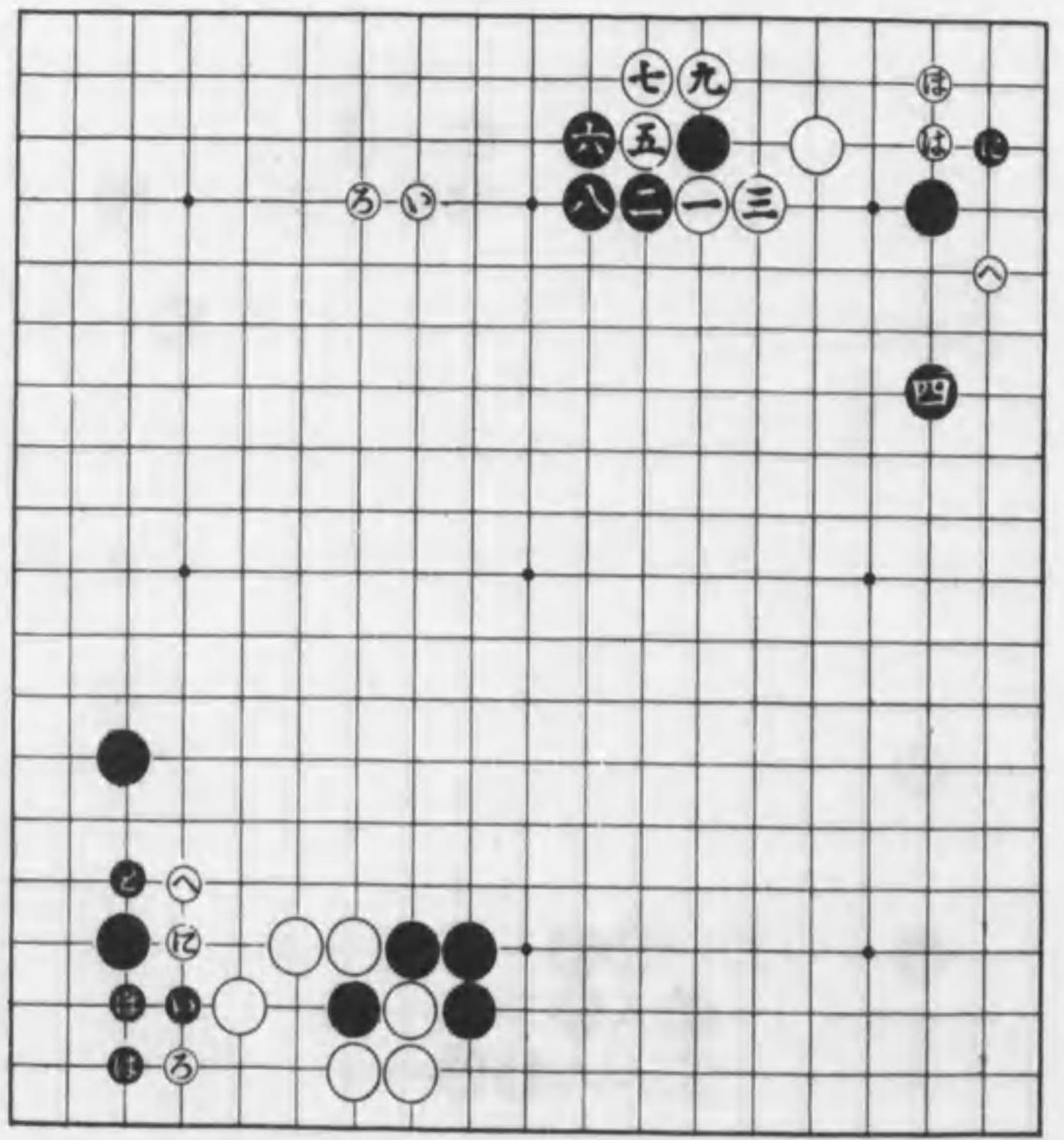
白二を三に粘ぎ、黒二と行られては白が形を成さぬことになる。白四は盤りの防ぎ、黒五も不得止、黒七を怠つて白から此處に下られると左下隅の不利を生じます。白八迄、この隅に優先権を持してゐた黒が蟄伏して白却つて外勢を張るの奇觀を呈しました。その白の外勢が威力を發揮する惧れなき稀有の場合にのみ黒一は容さるべく、一般には黒の姿勢の陋固を最も忌みます。一間夾の石さへ薄弱に陥つたのである。左下隅、白①以下⑧迄の後に、更に



白⑥をも利かされて、一間夾の石は全く無効に歸する事が分るでせう。

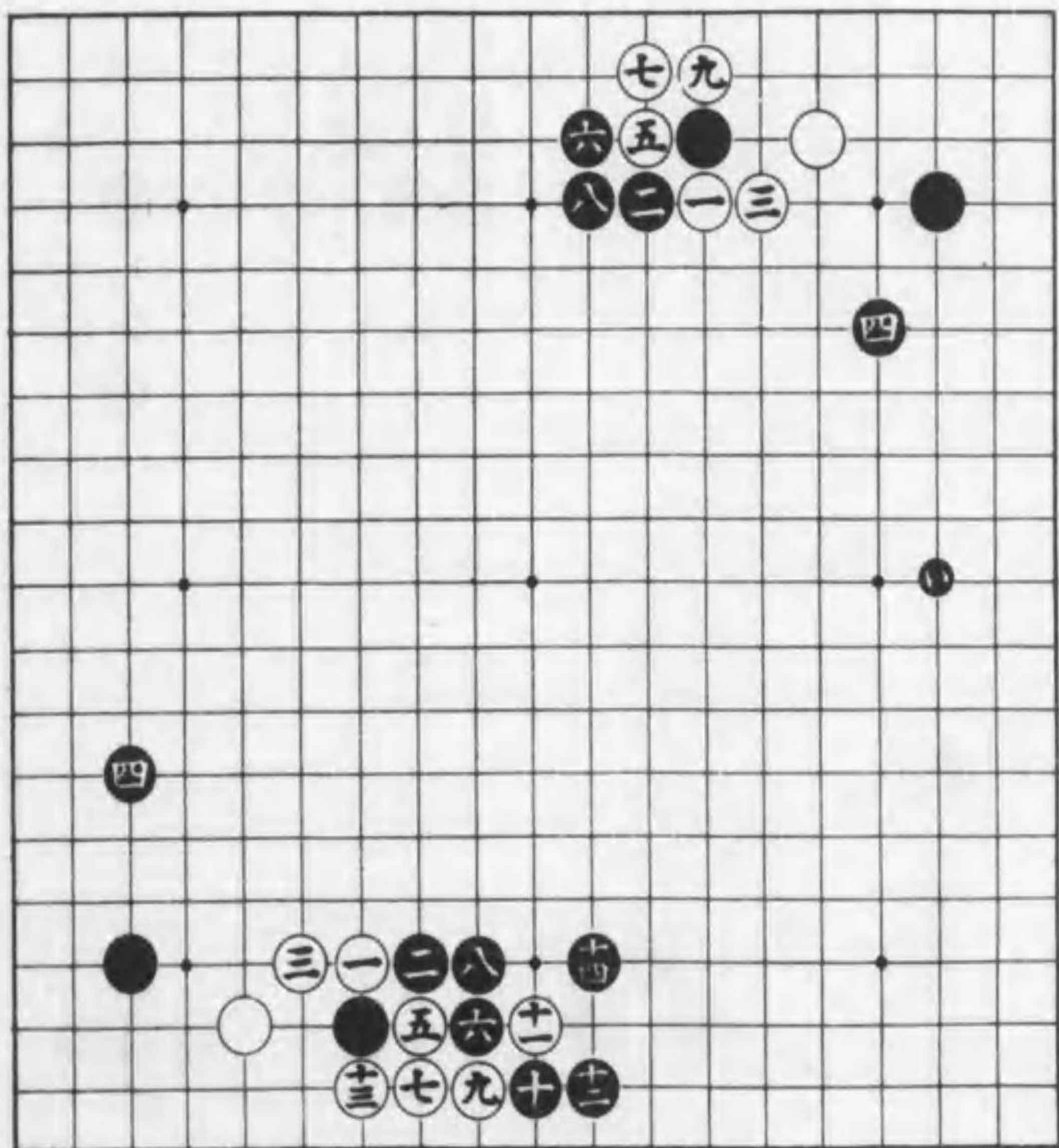
(第七圖) 白一三と頂引く型、自ら治まる意味が主で、その點からは、手堅い、何れかと言へば黒の探るべき定石とも観られます。

黒四にて六に掛粘ぐ型に就ては第八圖に示す。黒八は先手を取る所以であり、白九迄で一段落、なほ白から他日二以下の黒に迫るとすれば、①或は②を選びます。後に隅に對つては白③④と頂下つて收束し、更に⑤等の狙ひ有り、又黒からは左下隅⑥と尖頂け、白⑦以下と應じて始末する位のものです。



(第八圖) 若し右邊●等に黒の先著有る場合ならば斯く四と高く斜走して釣合を保つべきは當然であります。

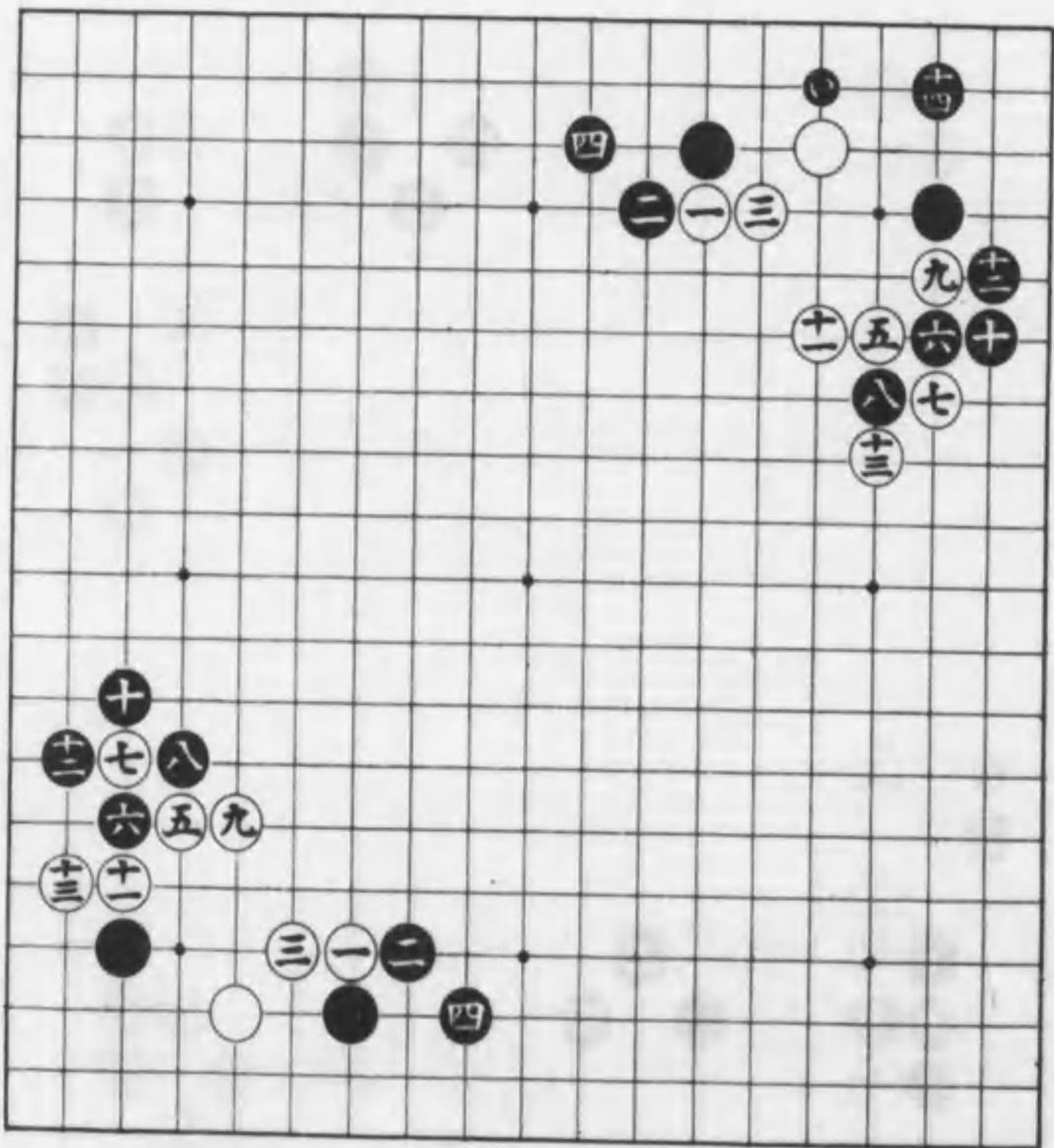
白が是非とも先手を取りたいといふ時には、左下隅九十一を先にして十三と抱へる。但し黒十二で十一の一子を征に取られる際には、この手段は成立しません。黒の姿勢を重くし、且つ先手を獲る所が九十一の生命です。然し乍ら九以下の交換夫自身は絶対的には損です。先手といふ事は緊急なりや否やと、今申した征關係とを必ず見定めるを要します。



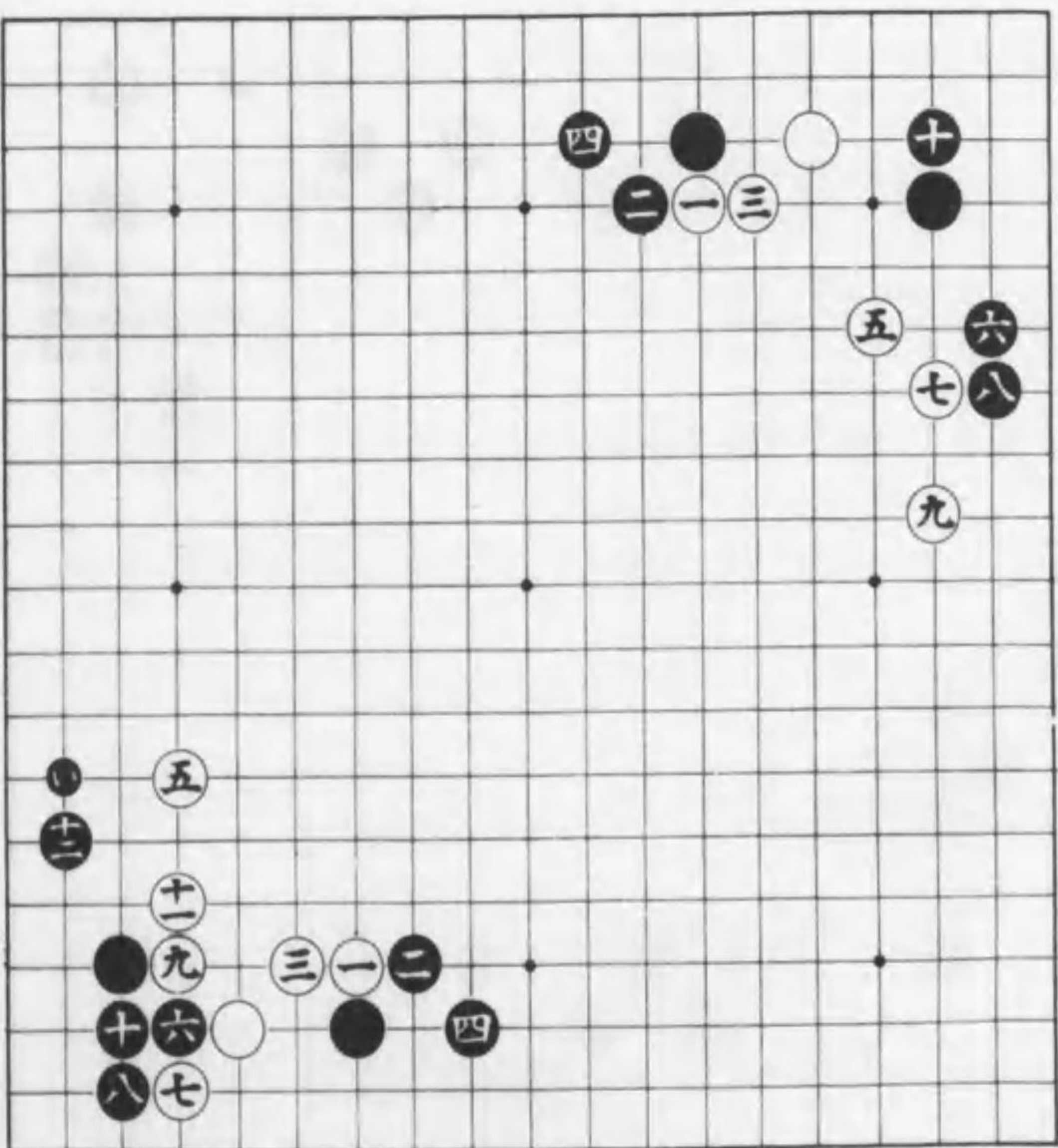
(第九圖) 黒四と掛粘ぐ型と前

二圖との優劣は抽象的には言へません。加之次に示すやうな征關係をも考慮に入れねばならぬので先づ作戦と配石の工合とに依るとのみ言つておきませう。

白五を八に打つ變化は別に示す。黒六以下十四迄は最も普通の應接。但し白十三と抱へる征の成立しない場合には本定石その物の破綻を意味する。なほ又黒十四は後に●に依ての盤りを含みませう。左下隅白九と單に引くのは、十三まで隅は保有し得ても、味は悪いし、損です。必ず右上隅に従ふ。

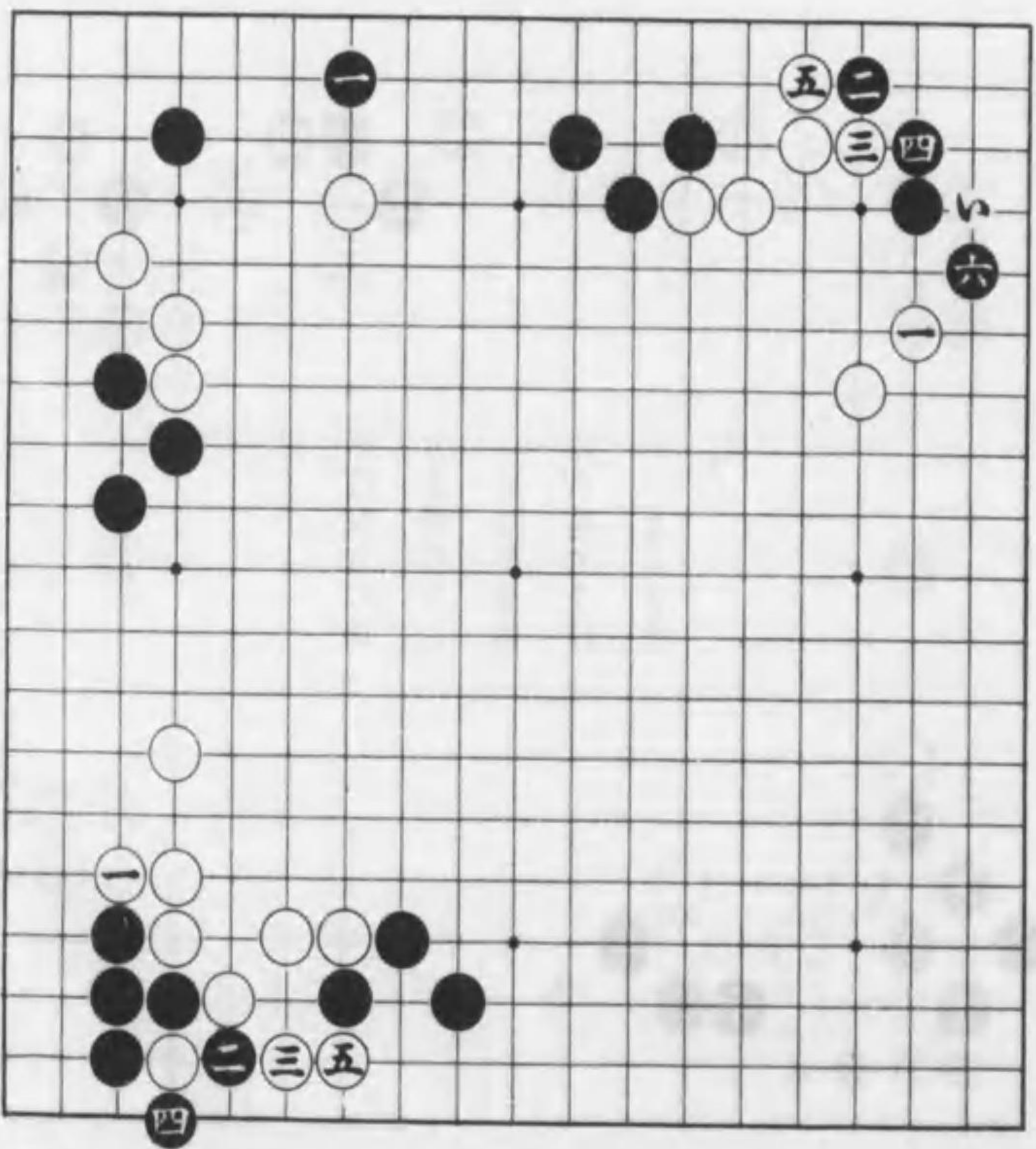


(第十圖) 黒六と平易に斜走する事も出来ます。
 白七九に依てこの方面の黒の活動が阻止された時に、黒十と下つて治まるまで、一段落です。
 左下隅白五は、前圖で言つた征關係の不利なる際と觀られる。
 黒六は次圖の如く手抜する事も可能。直に打つとすれば斯く尖頂けて十二迄となるか、次圖左上隅に従ふか、何れかとなります。
 黒十二を●迄進めるは、後續の手段に窮する故却つて拙い。心すべき處、十二迄、黒が治まると共に、白も十一と行ひて好形を獲ました。



(第十一圖) 黒が手抜して白から打つとしても、一と尖む位のもの。格別妙策も有りません。黒六迄と治まる。
 白三を單に五ならば、黒三白六黒いと活きます。

左上隅黒一と單に走るのは、前圖左下隅に比して輕快なる意味が有る代りには、白から術策を弄される餘地有る事も否まれません。左下隅は參考迄に掲げるのです。が前圖左下隅黒十二を省略して白一と約込まれると必然五迄となつて、三子が全然根據を失ふ不利は殆ど堪へられぬでせう。



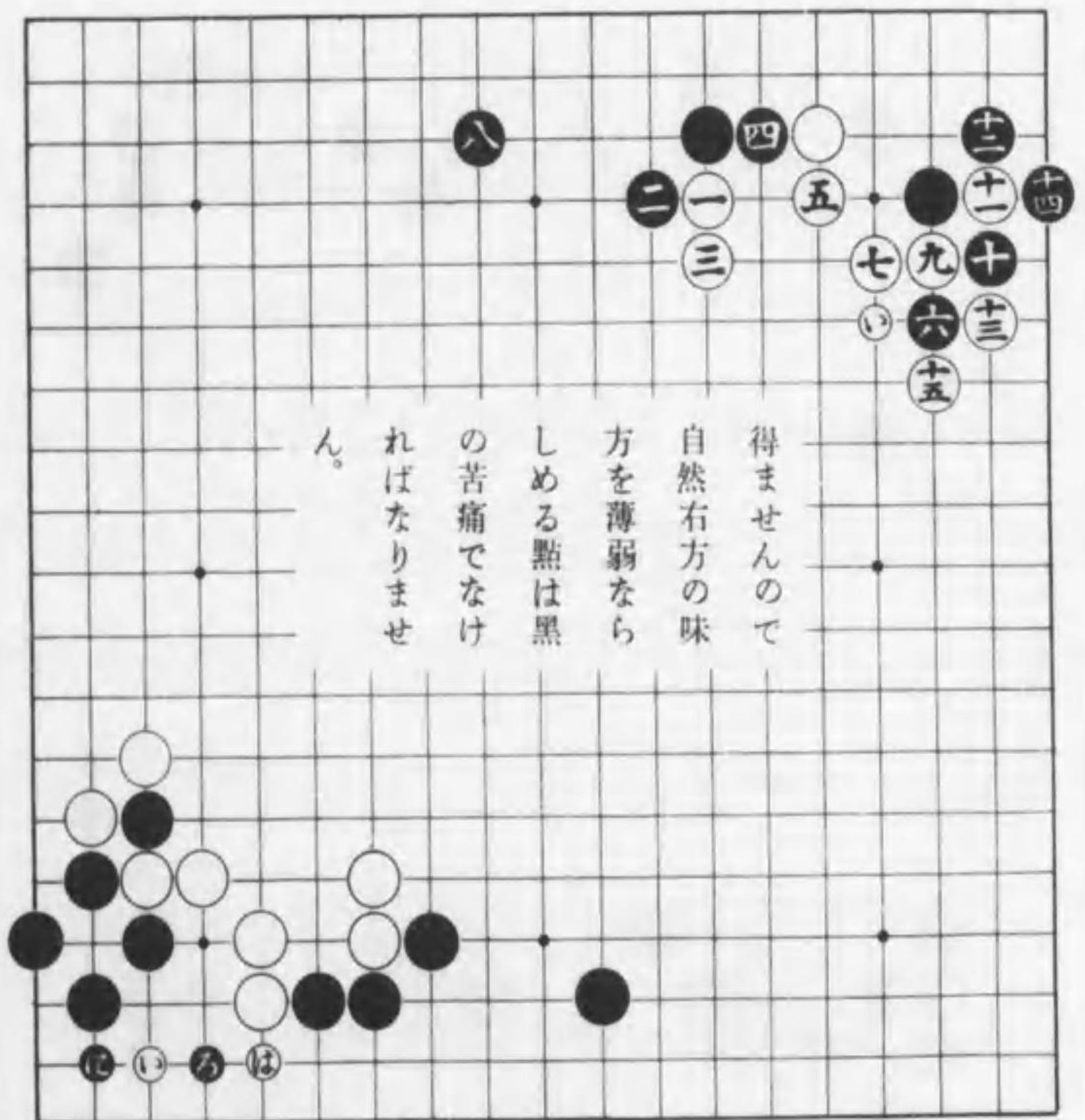
(第十二圖) 白一三と頂行る型には左右何れかの黒を攻る意味が有る點、第七圖と對比されなければなりません。

白五及び黒六の變化に就ては順次に示します。

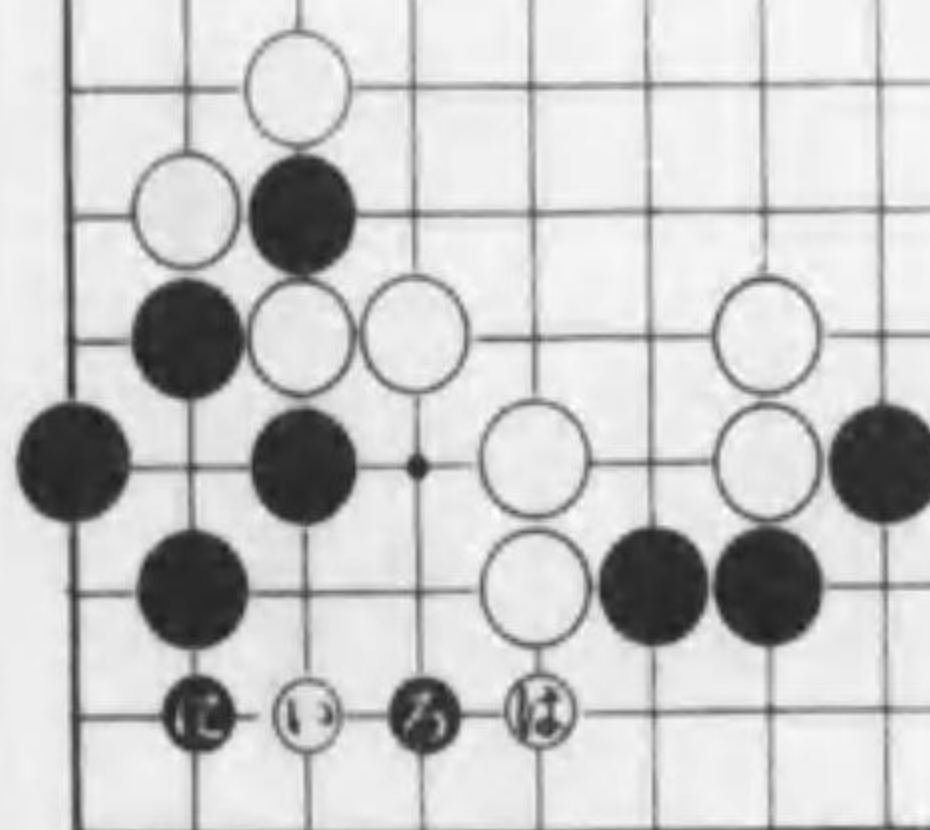
黒六は八と拓く前提、従つて八で九に粘ぐが如きは無意味です。

白七の變化は第十七圖参照。

黒十二で次圖に従ふ事も可能ですが、十二と抱へれば十五迄は絶對、但し白十五の征が成立するを要するは勿論、將來白⑤は略けぬ。この結果、他日、左下隅白⑥と迫られた時に、⑥迄に依て凌がざるを



得ませんので、自然右方の味方を薄弱ならしめる點は黒の苦痛でなければなりません。

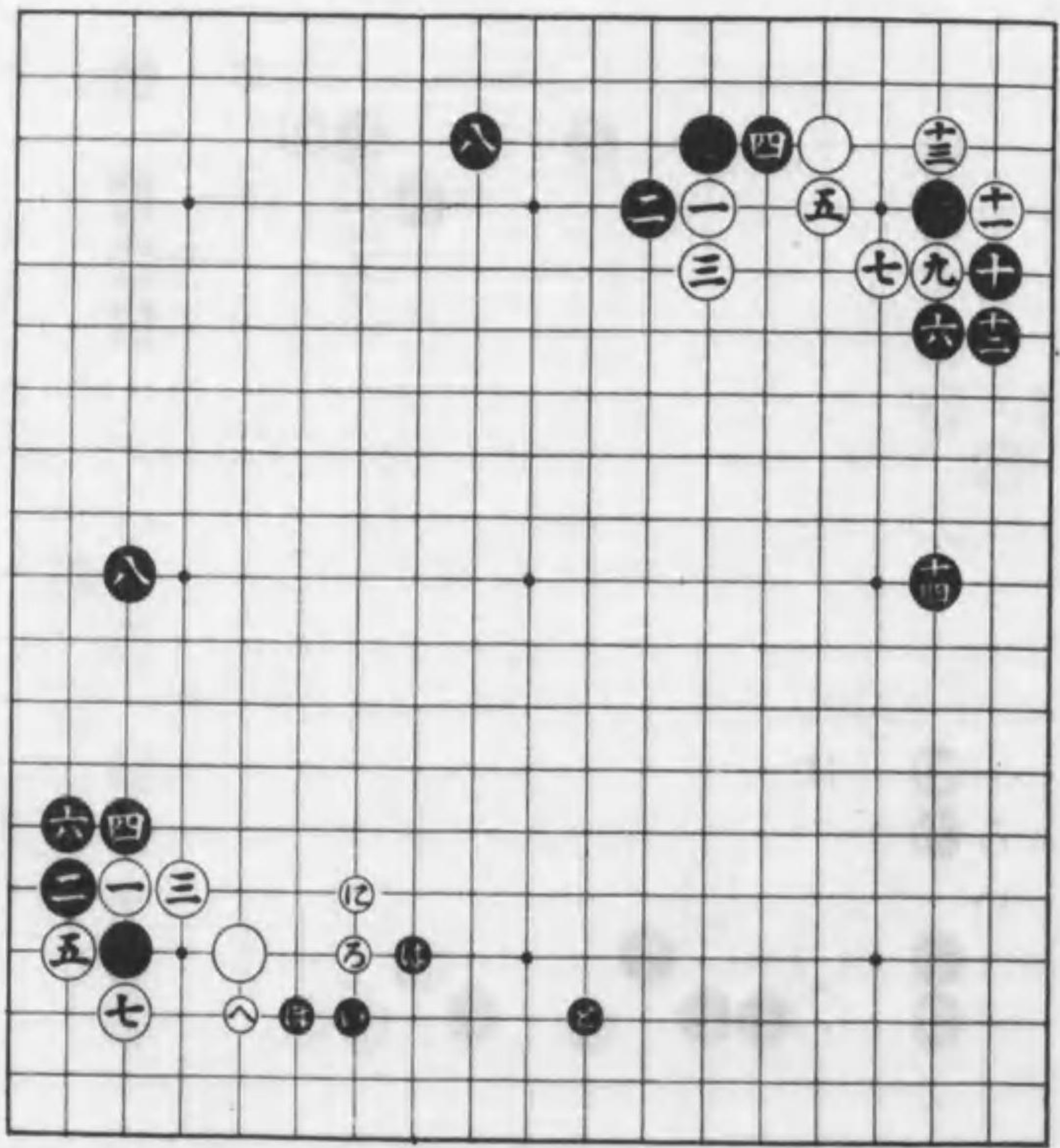


(第十三圖) 黒十二と此方を粘

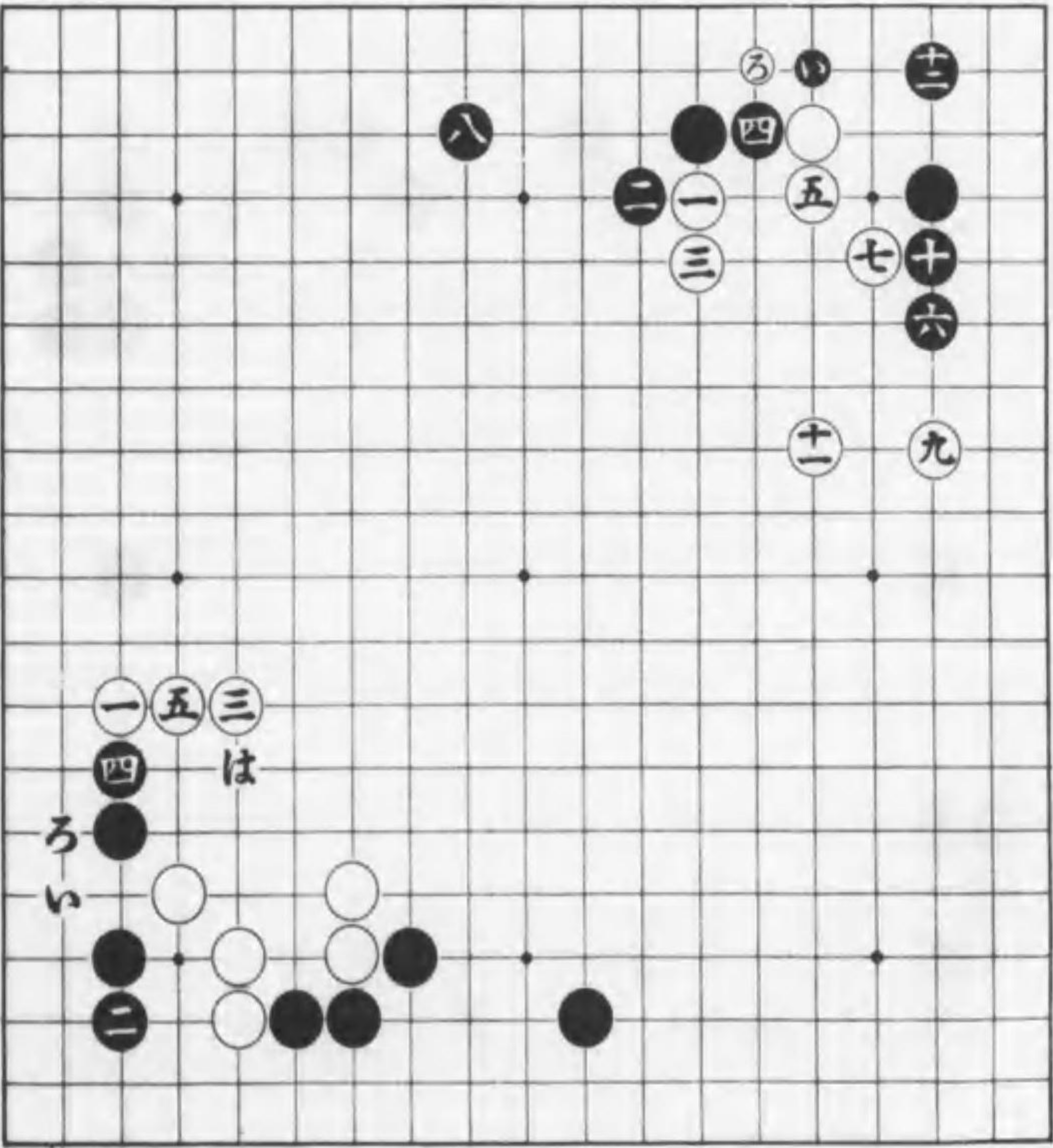
ぐ變化、六の一子を取られる事を不利と観た場合である。前圖との取捨は黒の任意なのです。

黒十四を以て一段落とします。

左下隅白一より白五迄は上巻に掲げた高目定石の一部分、而して黒六では、切つて來た方を取るの原則に従ひ、白五を抱へるべきであり、斯く六と粘ぐ理は無い處ですが、今其不利を犯したとして、八迄を假定し、後に黒⑥と迫つて⑥迄となつた物とすれば、白⑥以下は此堅固に、明らかに著子の重複、黒六の不當と充分に相殺します。

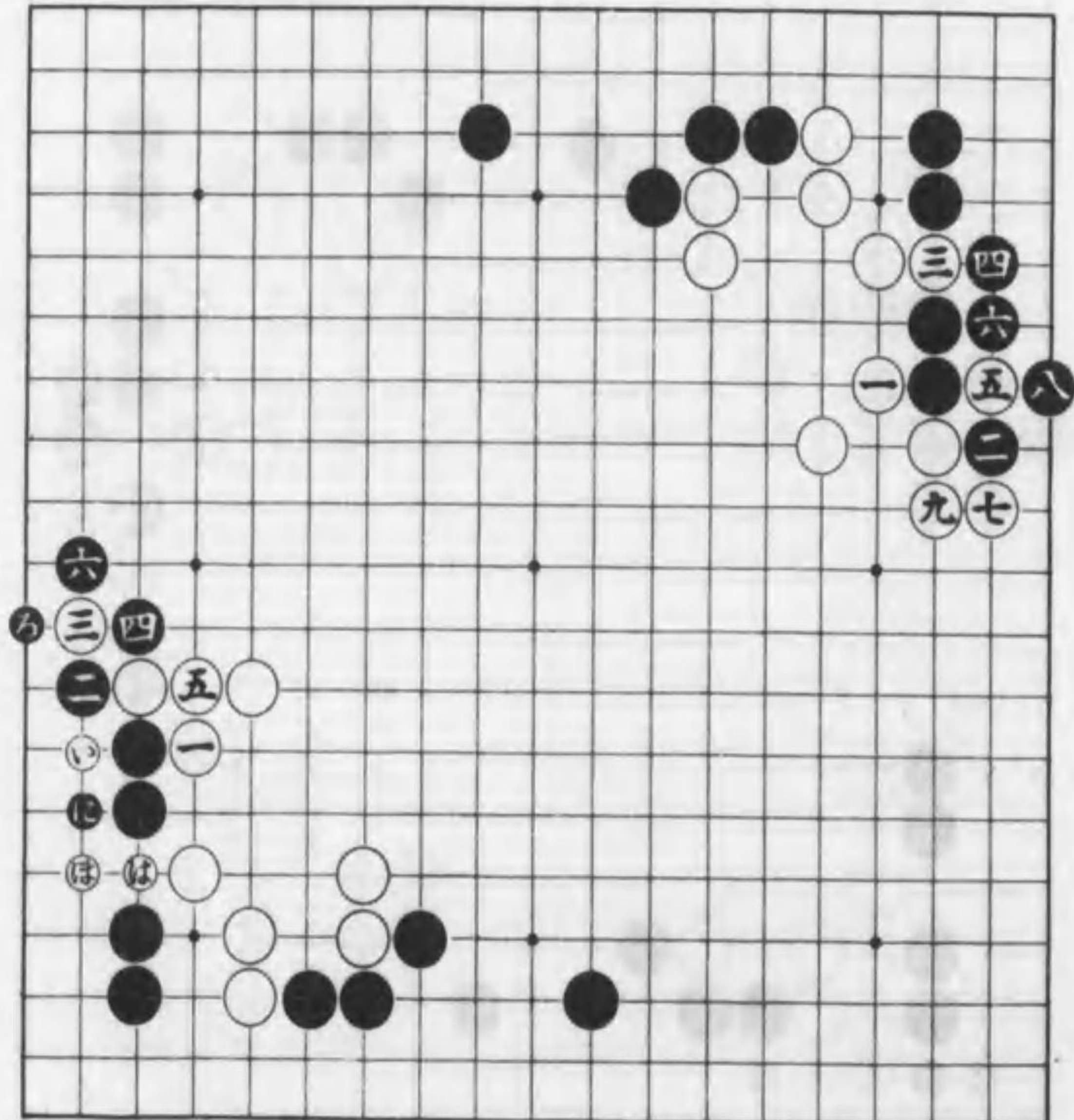


(第十四圖) 白九と詰る變化黒六を征に抱へ得ぬ際の一策です。黒十は左下隅に従ふ事も出来る。白十一と飛んで黒の發展を妨げ黒十二と治まつて一段落。白は十一の處が幾分薄いけれど急には黒からも手段は有りません。且つ後に黒の盤りは、白の著理有り、畢竟邊陲の小事です。左下隅は黒二と守り、白三の意味は前に等しい。黒四を略いても活路は有りますが、白い又ろの味が残つて不利莫大です。必ず四と突當つておく。白五は黒はに備へて明瞭でせう。



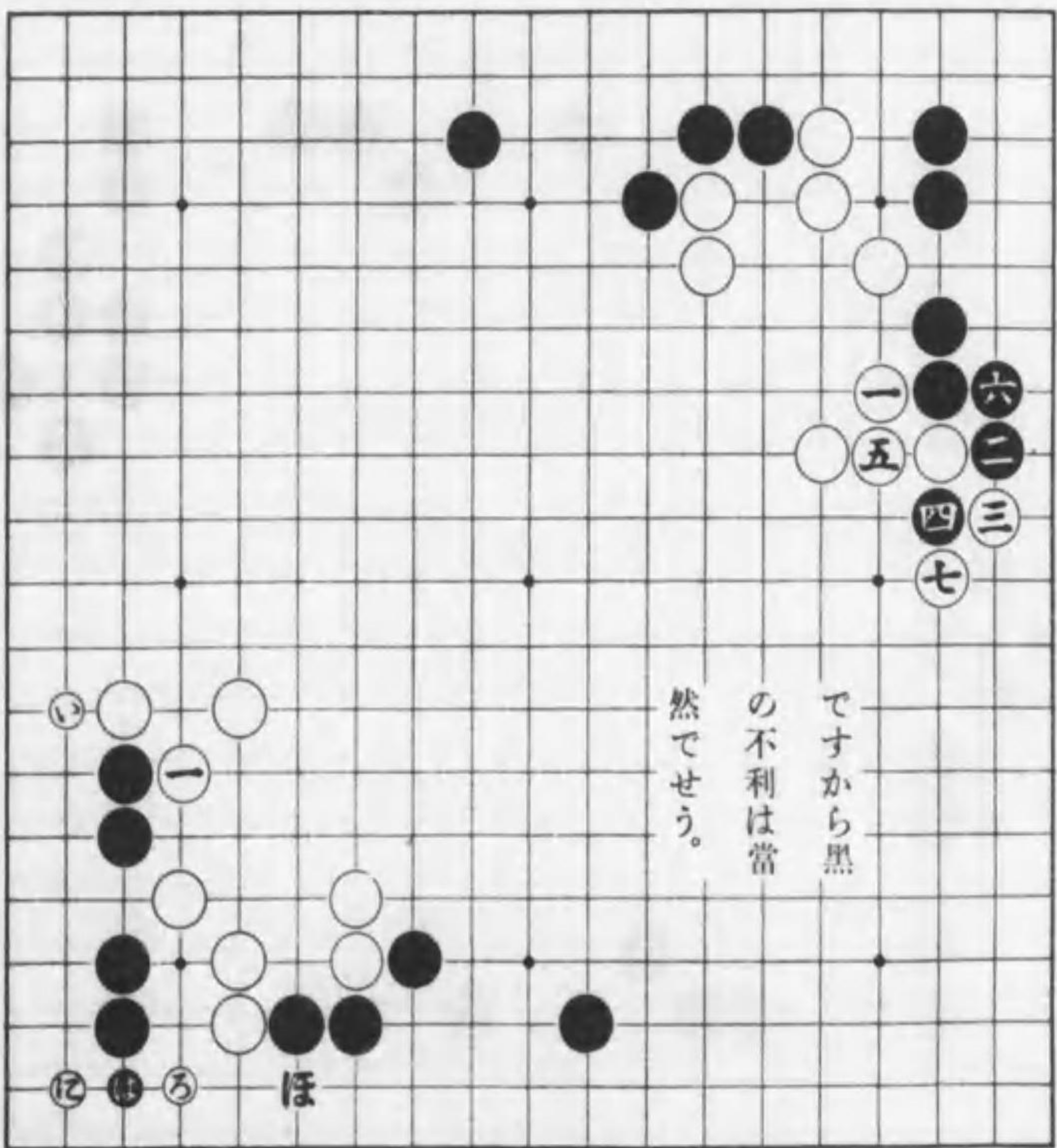
(第十五圖) 白一と約へるも時に一策、黒二は先づ略けません。白三五が巧みなる手順です。黒六で九に締れば、白六と切られる。九迄は必然の歸結と觀ます。黒に多少の實利を與へた代りに白は完全に外勢の厚壯を致しました。即ちこの結果が右下隅方面の條件次第で白に有力なる場合は随分有り得ませう。殊に前圖の白が、なほ幾分薄い缺點あると對比されねばなりません。

左下隅白三と急に約へるは、黒四六と抱へ、次で白一以下迄の振替と成て黒有利。更に次圖に言ふ。



(第十六圖) 前圖下隅六の手で黒は斯く粘ぐ事も出来ず。この結果は前圖の上隅に比して、黒四の切を入れられてゐるだけに白が不完全です。前圖上隅白三五を手順とするの所以。

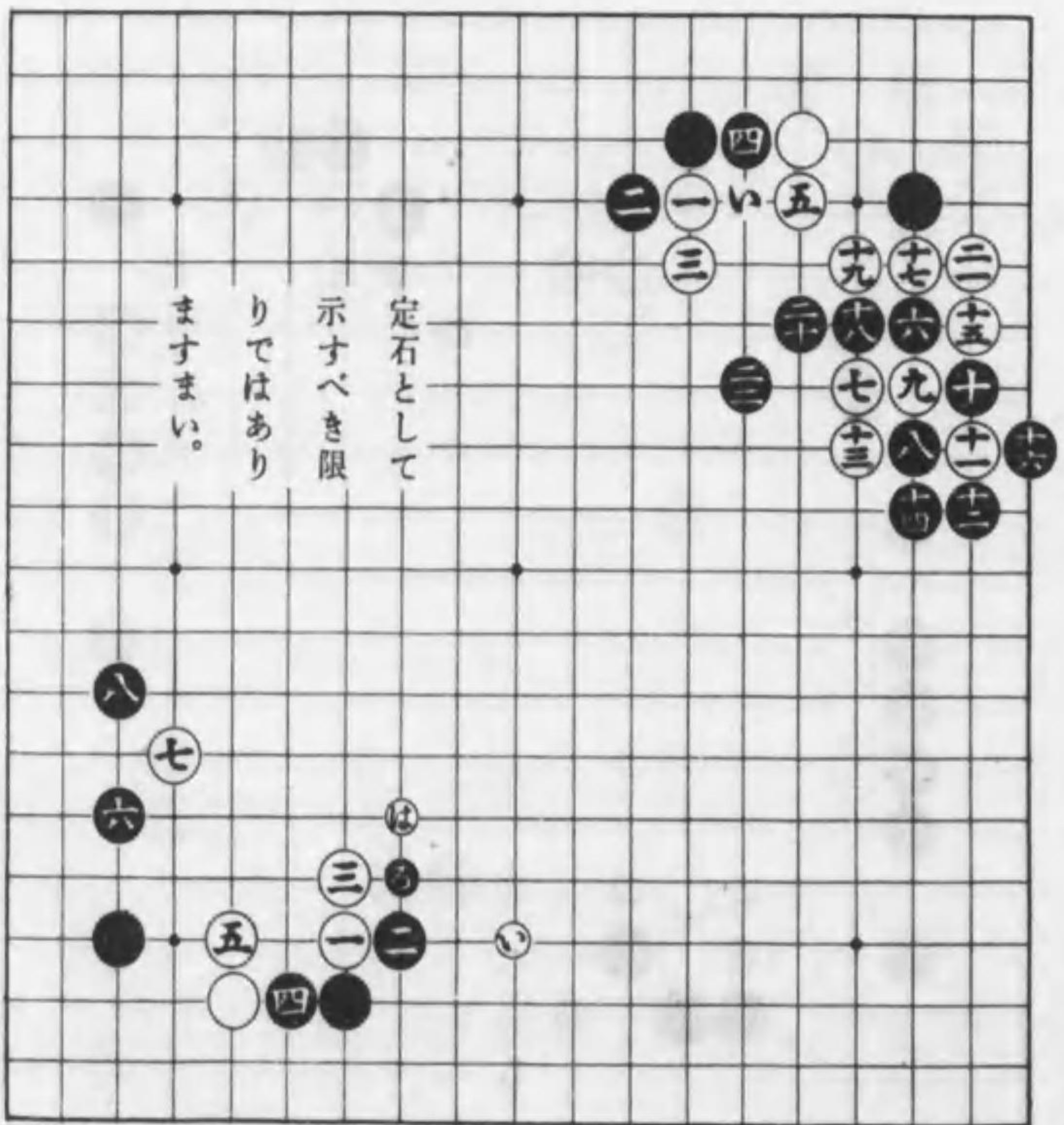
左下隅は白一と約へられた時に黒が手を抜くの不利を参考までに示すのですが、勿論白⑤の下りが来る。是に對して今黒が應ずるは前圖右上隅との差莫大ゆへ、再び手抜するものとせば、更に白⑥黒⑦白⑧と頂る著理が有つて、劫を免れません。即ち白ほ等が右方に向つて何時でも利いてゐる理



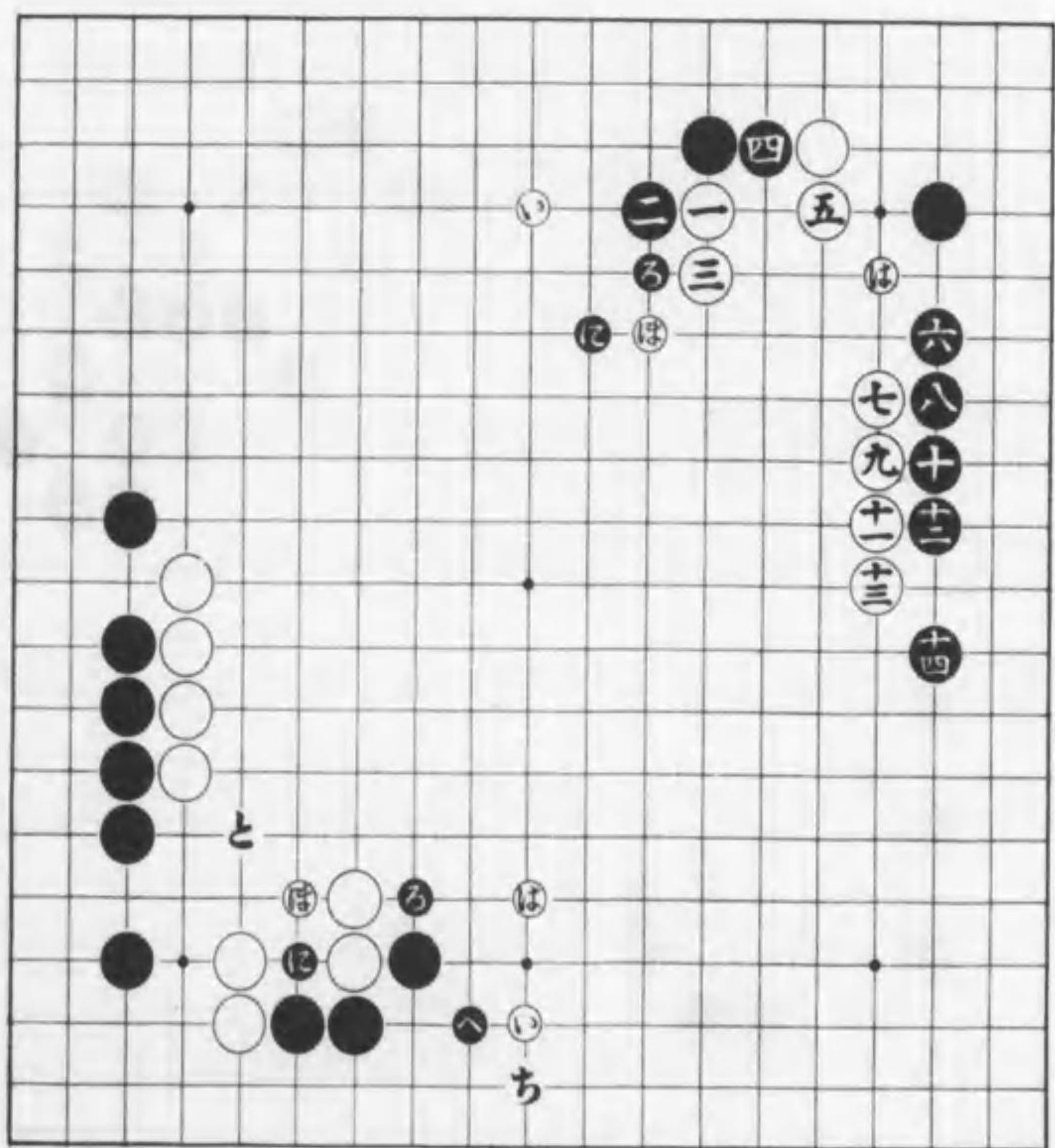
(第十七圖) 白七と掛る變化。

黒八で萬一にも十八に出で、白二十と約へられると、恰も白の缺點を救ふ事になります。但し黒八を九に押す型も有る。次圖に言ふ、白九十一と直に出切れれば以下二二迄は先づ必然ですが、この結果白三子の不安定と、いの弱點とを控へた其不利は隅を獲た位の事では到底引合ひません。

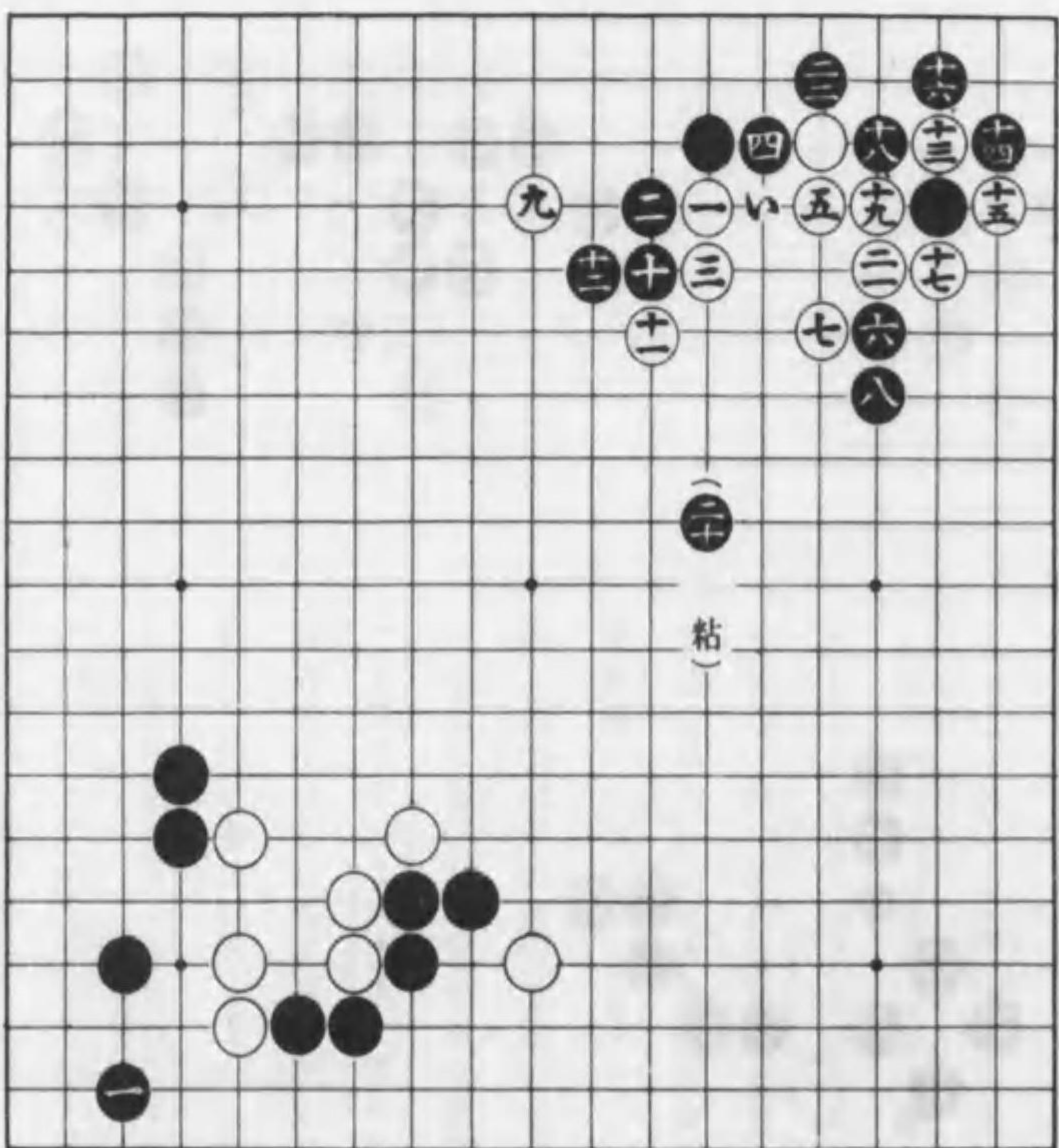
黒八の輕妙が致す所であります。左下隅黒八に次いで、白⑨黒⑩白⑪に依て黒の動靜を窺ふ等は一種の作戦として認められる。是で左方の打方を決するのです。但し



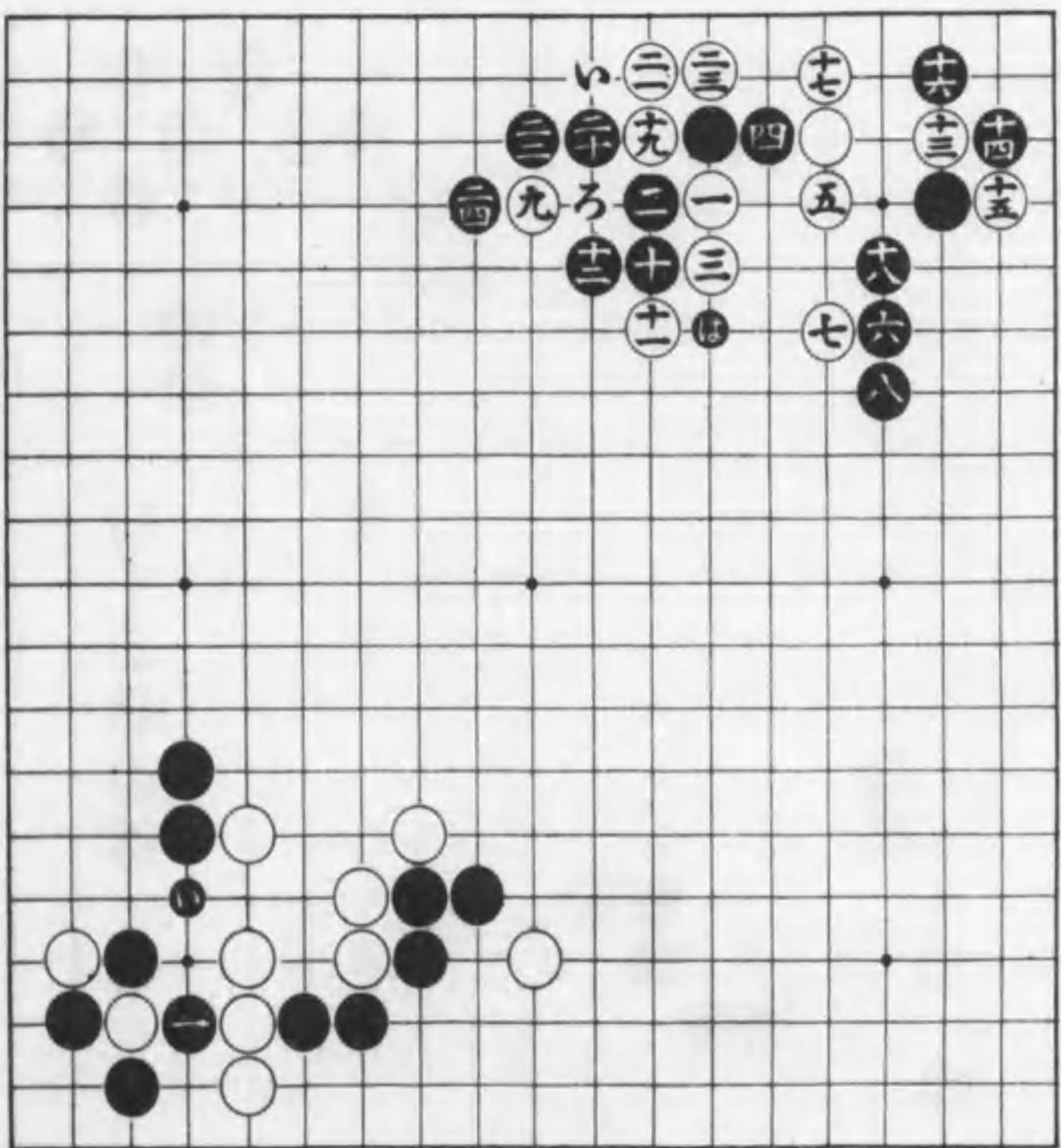
(第十八圖) 黒八以下と平易に
 應ずる事も可能。前圖との比較は
 左上隅方面の配石關係に依るべ
 く、其方面に白の勢力が有つて、十
 四の次に白(四)と迫られ、黒(五)白(六)
 と打たれるが如きは、黒として成
 算が持てません。逆に左上隅に黒
 が有れば、白(一)は毫も恐れる所無
 してす。即ち白(一)黒(二)白(三)黒(四)で
 宜しいし、又此白(六)を(七)に綽ねた
 なら、黒(八)と激しく綽返して打つ。
 左下隅白(九)と低く迫る事も有り
 右下隅方面との條件次第ですが
 黒(十)以下(十一)と應じて、次に(十二)を
 含む手筋に依ります。



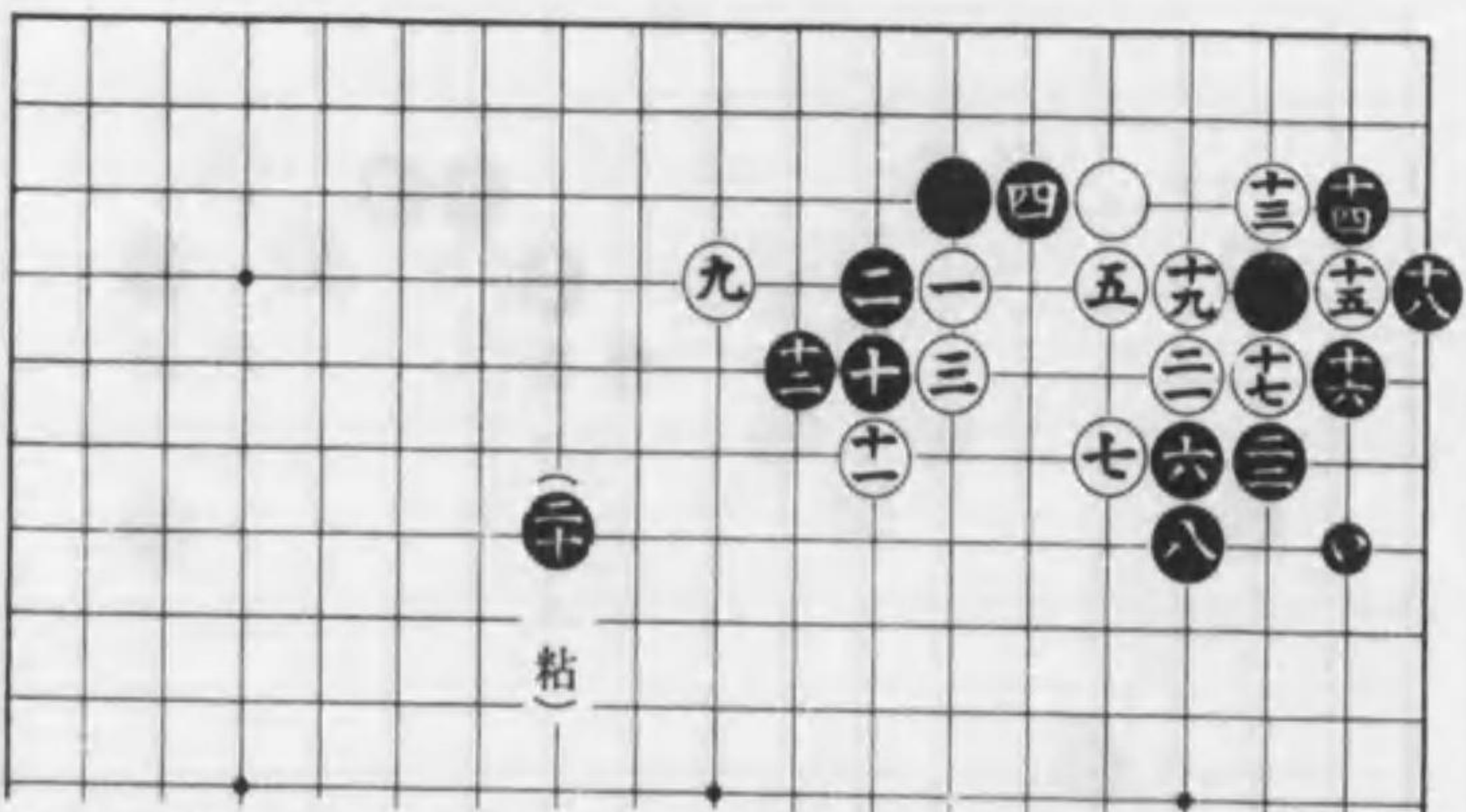
(第十九圖) 黒六と斜走する型。
 七八は黒に有利の交換ですが、白
 九が黒の急所に當ります。
 白七に依て、い(五)の缺點が癒された
 以上、白九に對して、屈した形では
 あるが黒も十二と應ぜざるを
 得ません。なほ次圖参照。
 白十三以下は機を見て著手する。
 二二迄の結果、六八の二子が孤立
 に陥りました。一般には黒不利で
 す。が、それも右邊の形勢次第で、絶
 對にとは言へない。但し黒十六白
 十七の變化は、次々に示します。
 白十三無き時に、黒からは矢張り
 機を得て左下隅一と守つておく。



(第二十圖) 前圖白十七の變化
 斯く下るのも一策です。
 黒十八は味も宜しいし、これに限
 るのですが、なほ左下隅参照。
 黒二二・二四が肝要です。二二でい
 に約へ、白二三黒ろと粘ぐなどは
 黒の姿勢が鈍重を極めます。
 後に●と切る狙ひを存する點は
 十八の働いてゐる所以、白二五以
 降は示すべき限りでないが、黒の
 形の熟さぬ所、是を攻る餘地有る
 關係に於て、左上隅に白の配置有
 る際等に白十七は成立し得ます。
 左下隅黒一は結局●に補ひを要
 する缺點から、採る譯に行かぬ。

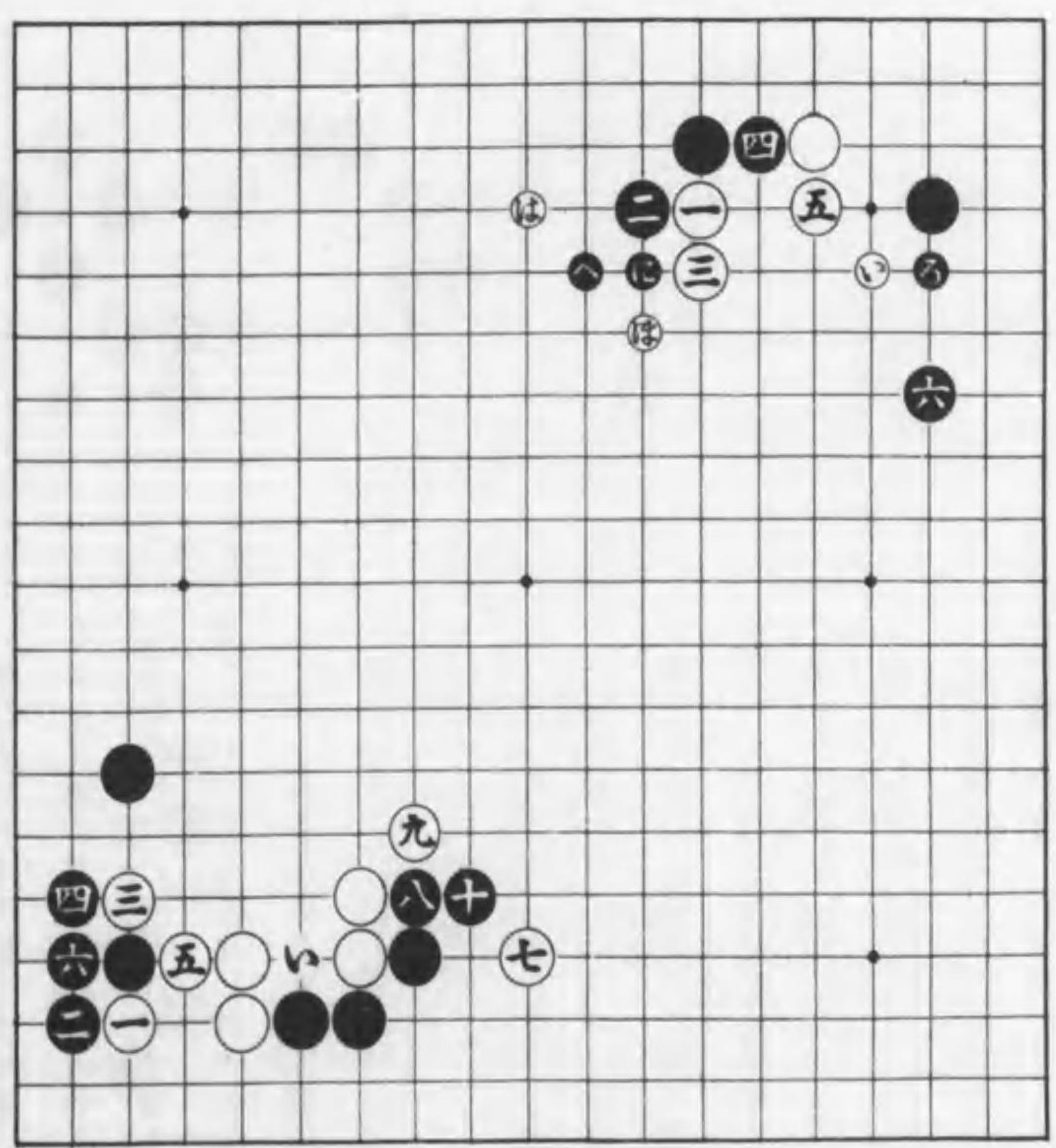


(第廿一圖) 黒は十六と抱へる
 方が、軽い意味からも優つてゐる。
 黒二十は必ず斯く粘ぐものとは
 限らず、二二に當て、劫争を敢行
 する事も可能です。劫争に勝つて
 白十七を打抜けば、白全部の眼形
 が失はれる。而して逆に白が此劫
 に勝つとしても、先づ劫を粘ぐの
 外無いので、●と掛粘ぐ餘裕が有
 るだけに、黒としては負擔が軽い
 理です。
 又一面、圖の二二迄の如きは、白か
 ら觀れば打徳、利かせ徳の意味も
 無いではない。即ち黒は著子、多
 い割合には實利を擧げ得てゐな



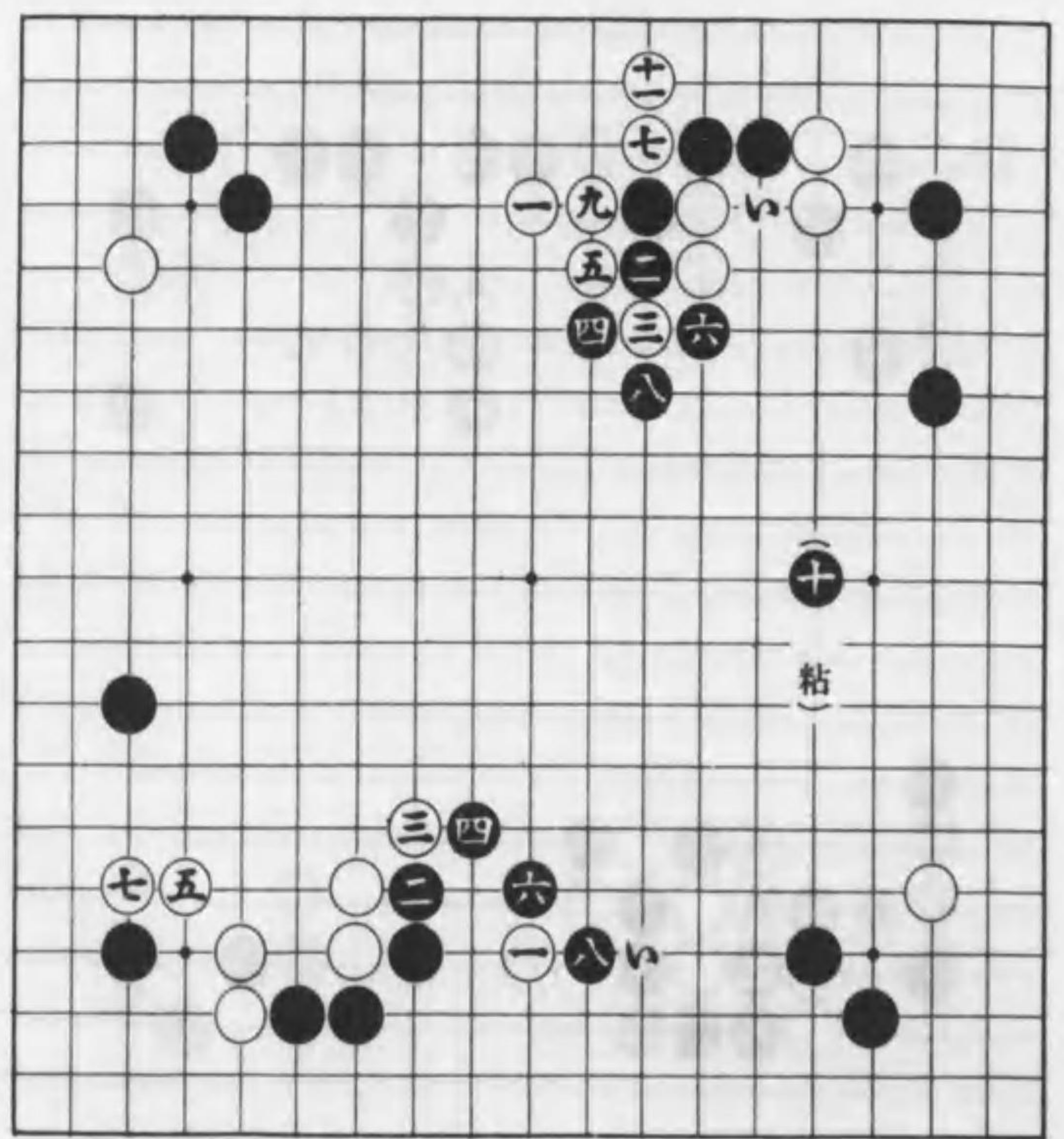
い嫌ひが有ります。従つて又黒と
 しては、上述の劫争に出る可能性
 が多いだけに、白十三は必ず機を
 察して打つ事を要する理である。
 更に左上隅の配石状態が前圖及
 本圖の得失を左右する重大なる
 鍵を握つてゐるのです。
 抑々白九は黒の急所を衝いて、且
 つ一三の頂行びに含まれた使命
 でもあるが、左上隅方面に黒の配
 置有つては、白は九に依て此處に
 勢力を張る餘地が有りません。而
 して黒六以下は必然なので、すか
 ら、此兩定石に就ては、黒白共に深
 察を要する點であります。

(第廿二圖) 黒六と拓く型。古風ではあるが、排斥さるべきものではない。堂々たる定石です。而して六のまゝ一段落。
 この後白(1)と来れば黒(2)と應ずる迄。そして白(3)黒(4)白(5)黒(6)と受けて宜しい。次圖下隅参照。なほ六以後の打方を兩三示しておきませう。
 左下隅白一と機を見て頂る。
 五迄は白が利かせたのですが、これに依ていの瑕瑾に備へて次いで七と迫ります。右下隅に黒の勢力を控へた場合ならば、八十と應じて、黒は勿論仔細は有りません。



(第廿三圖) 白一三と急に来た

時に、黒四は平易に五に曲つて良いが、斯く四と綽る事も出来ず。白五には左下隅の變化が有る。白七で八に行る變化は次圖に。白十一迄となつても、いに關點を控へてゐるだけに、黒は右邊また中央に於て絶大の厚壯を加へます。この方で打つから宜しい。
 左下隅白五とこゝで尖んだなら黒は願はずに六八と振替つてしまひます。若し又白一で先に五と来たならば、直ちに前圖上隅となる。なほ黒八はいに打つても大差有りません。右下隅の配置次第です。

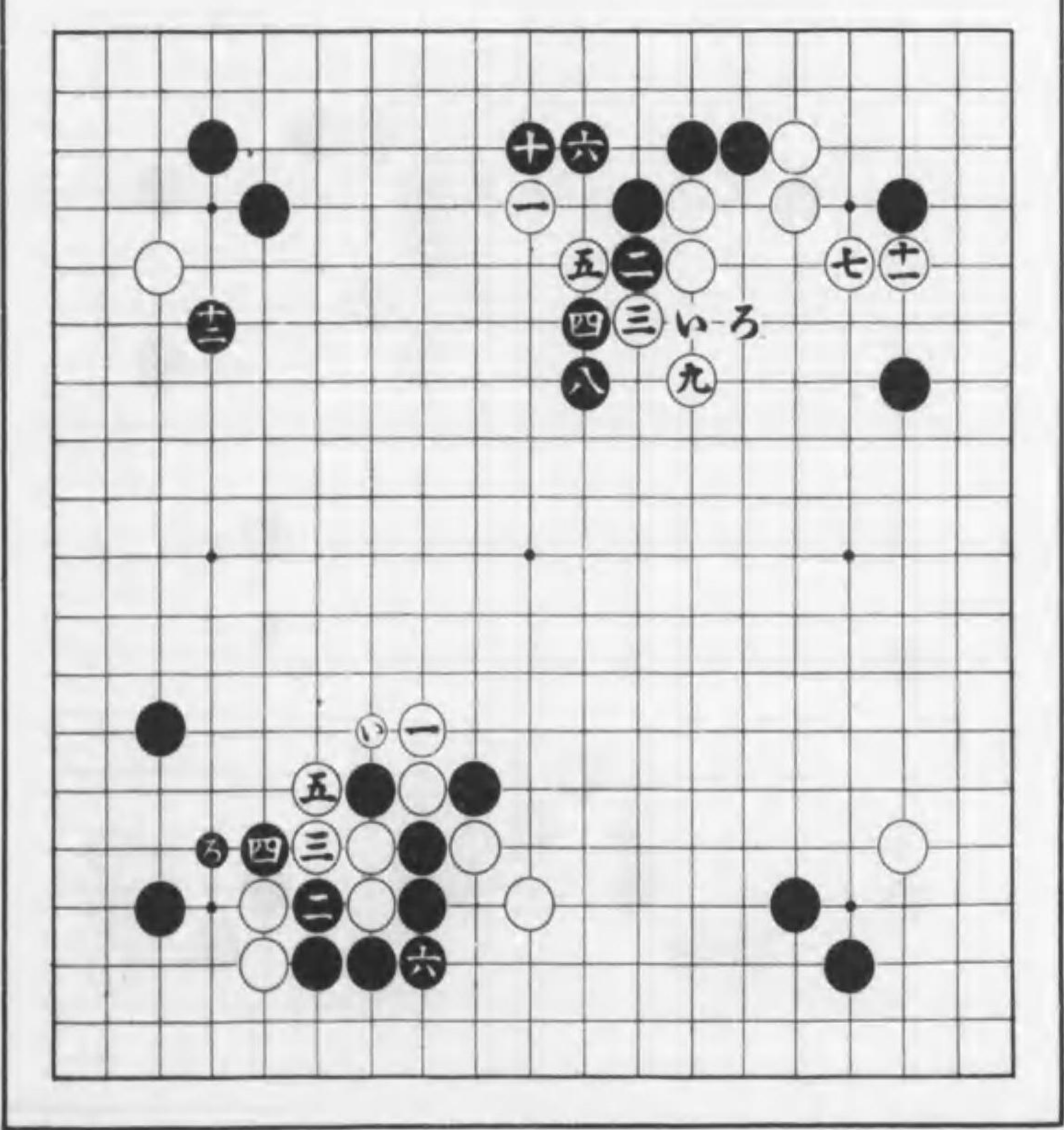


(第廿四圖) 前圖右上隅を萬一面白からずとせば、黒六と掛粘ぐ。白九は怠ると黒いと切られ、黒ろが利いて三の一子を征に取られる、その防ぎです。

白十一迄となつても隅はまだ完全に取り切れてはみません。黒十と振替り、十二と打つに到つてその有利は明瞭でせう。

左下隅は同じく前圖右上隅白七の變化、黒は二・四と出切つておいて、六と粘ぎます。

白は①と打抜く位のものですから、黒②と備へて宜しい。要するに第廿二圖黒六は立派に成立する。



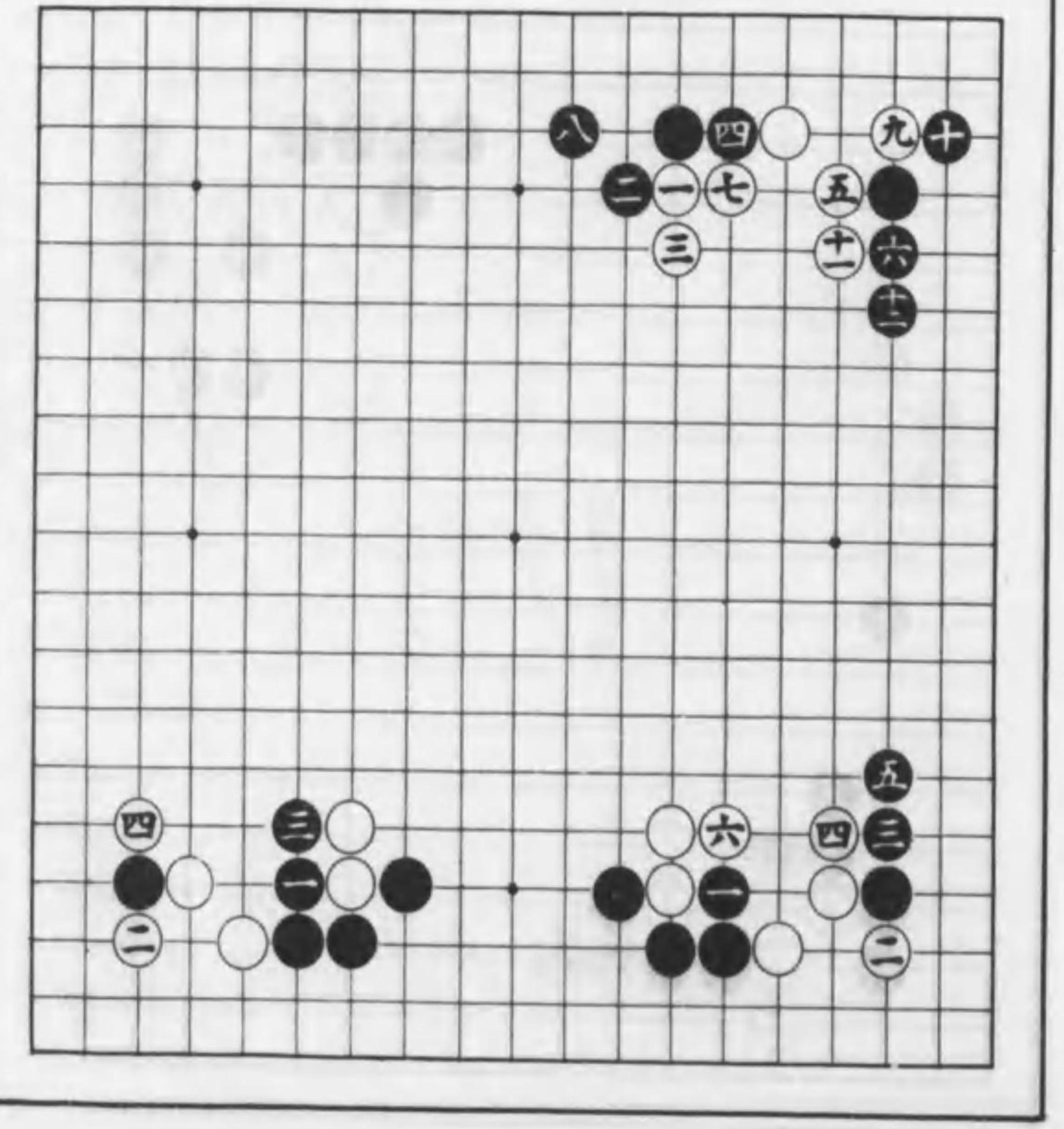
(第廿五圖) 白五と尖頂る變化。黒は六と引くに限るので、六を七に出る變化は左下隅に示します。

黒十二迄で一段落ですが、兎に角黒は左右兩方共打つてみますから、白の良い筈が有りません。

左下隅黒一と出れば、白は二と隅より約へるが肝要。

黒三白四となれば、黒も手厚いけれど、その白二子にはなほ命脈を存するに反し、白は隅を確保した上に、更に發展の餘地を有します。

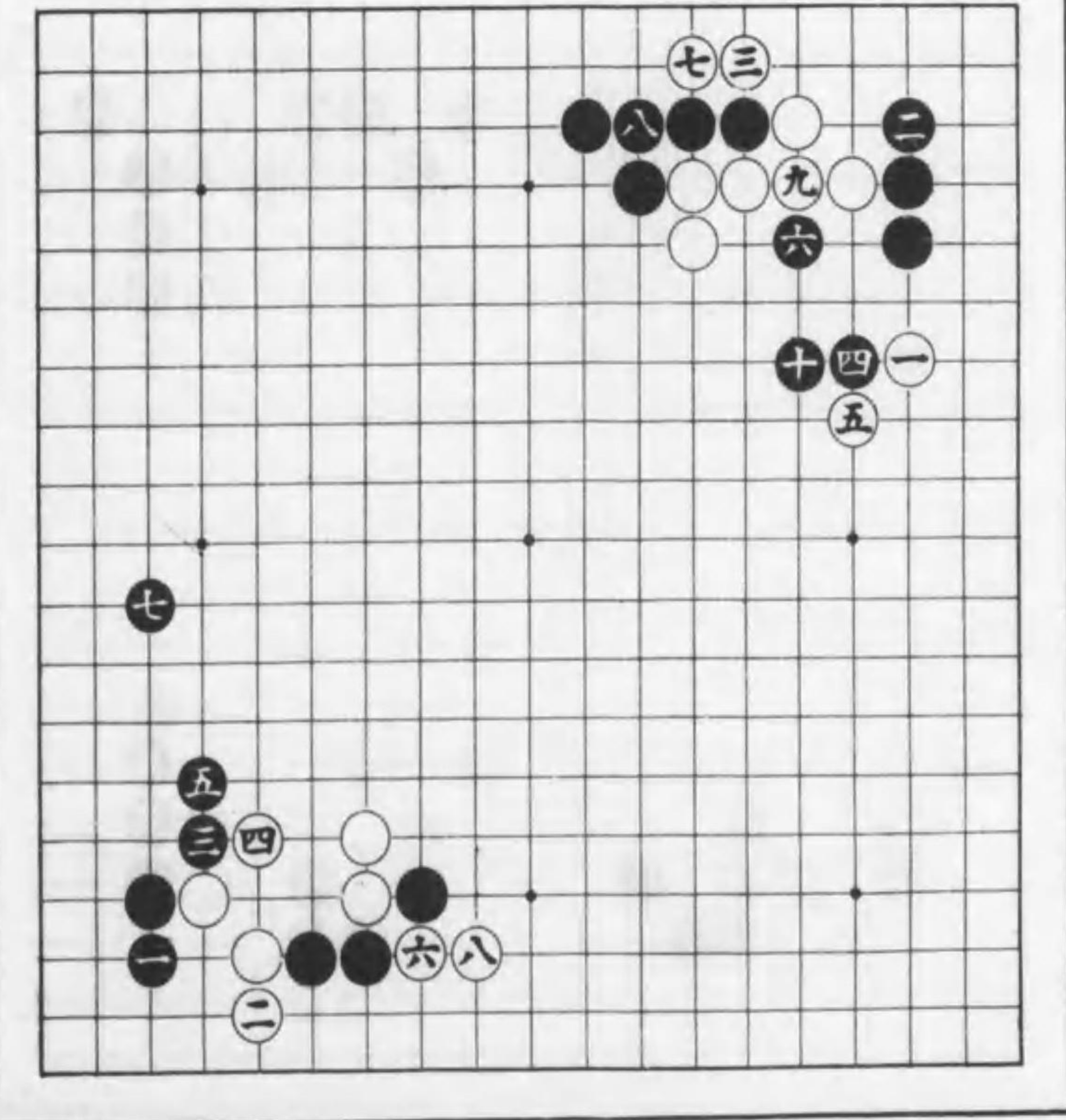
右下隅黒三は一と矛盾する。一・六の交換が黒不利故、引くならば一で單に三に引いて右上隅に従ふ。



(第廿六圖) 前圖右上隅白九の變化。二に約へず白一と此方から詰めました。

白三七に依て此黒の眼形を奪ひ次いで是を攻めんと稱した點が前圖に比して工夫されたる處と見られる。局部的には是非を言ふべき限りではないけれど、左上隅方面に其勢力有らば、黒は先づ差支へ無しです。左下隅は黒一と下の不當を示すのですが、白六と切られては黒の二子に救援の道は有りません。

白八迄となつて、黒の不利は自明でせう。

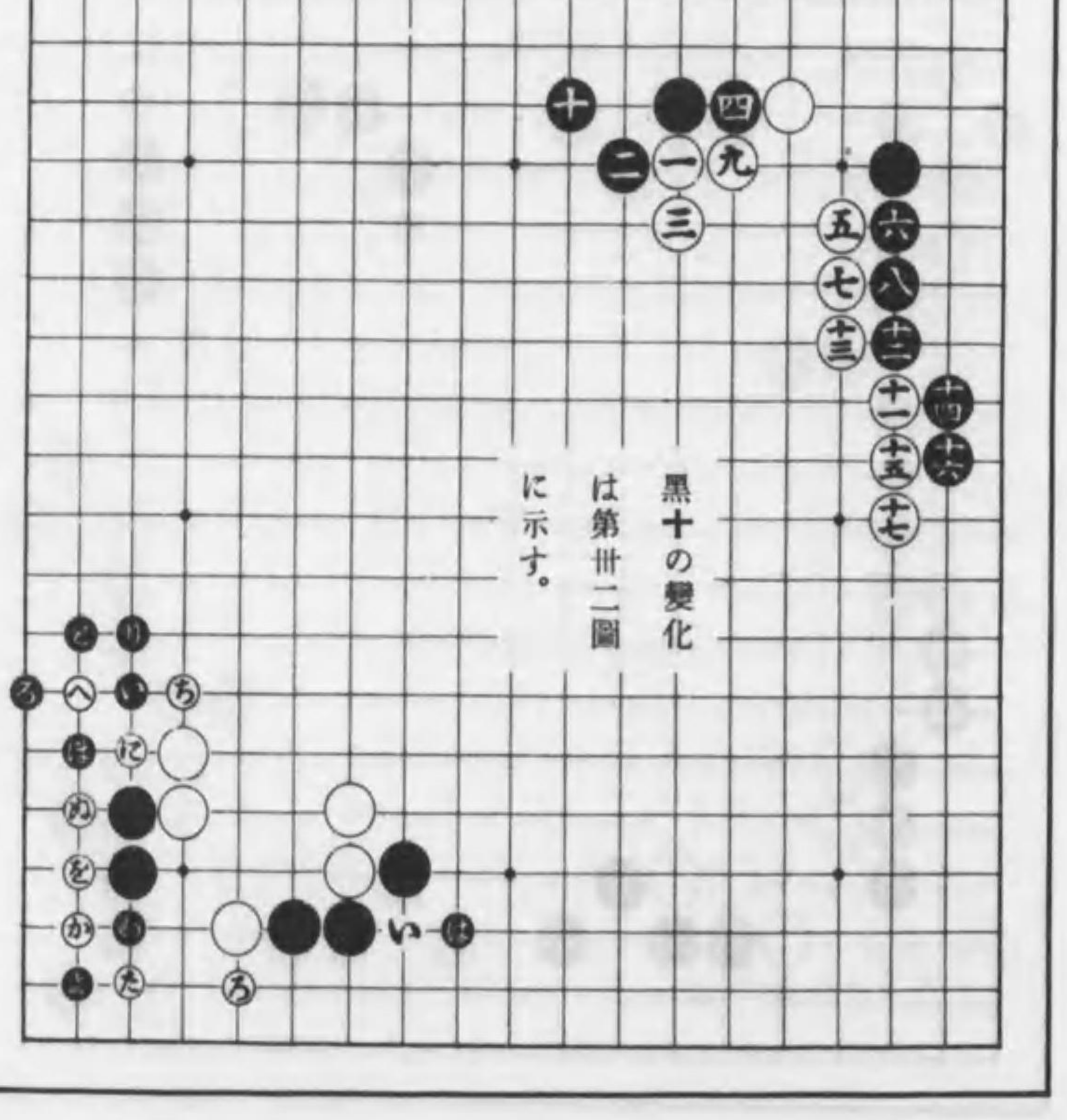


(第廿七圖) 白五と掛る型。前々圖右上隅に比し、白の方が一步宛先に出た所が相違である。

黒八を誤つて十二に飛ぶと、左下隅白⑧以下の損失を招致します。白は九十一と打つのが肝腎で、九又十一を平凡に十三に行ては、今度こそ黒十一と飛ばれ、是も黒に左右兩方共打たれる事になる。

黒十二以下は却つて味を失ひ、白の中腹に厚壯を附する嫌ひが有ります。次圖に従ふを良しとする。

左下隅は黒④で白⑤に備へれば白⑥が有り、又白⑦の次に、孰れを助けても黒の不利は免れません。

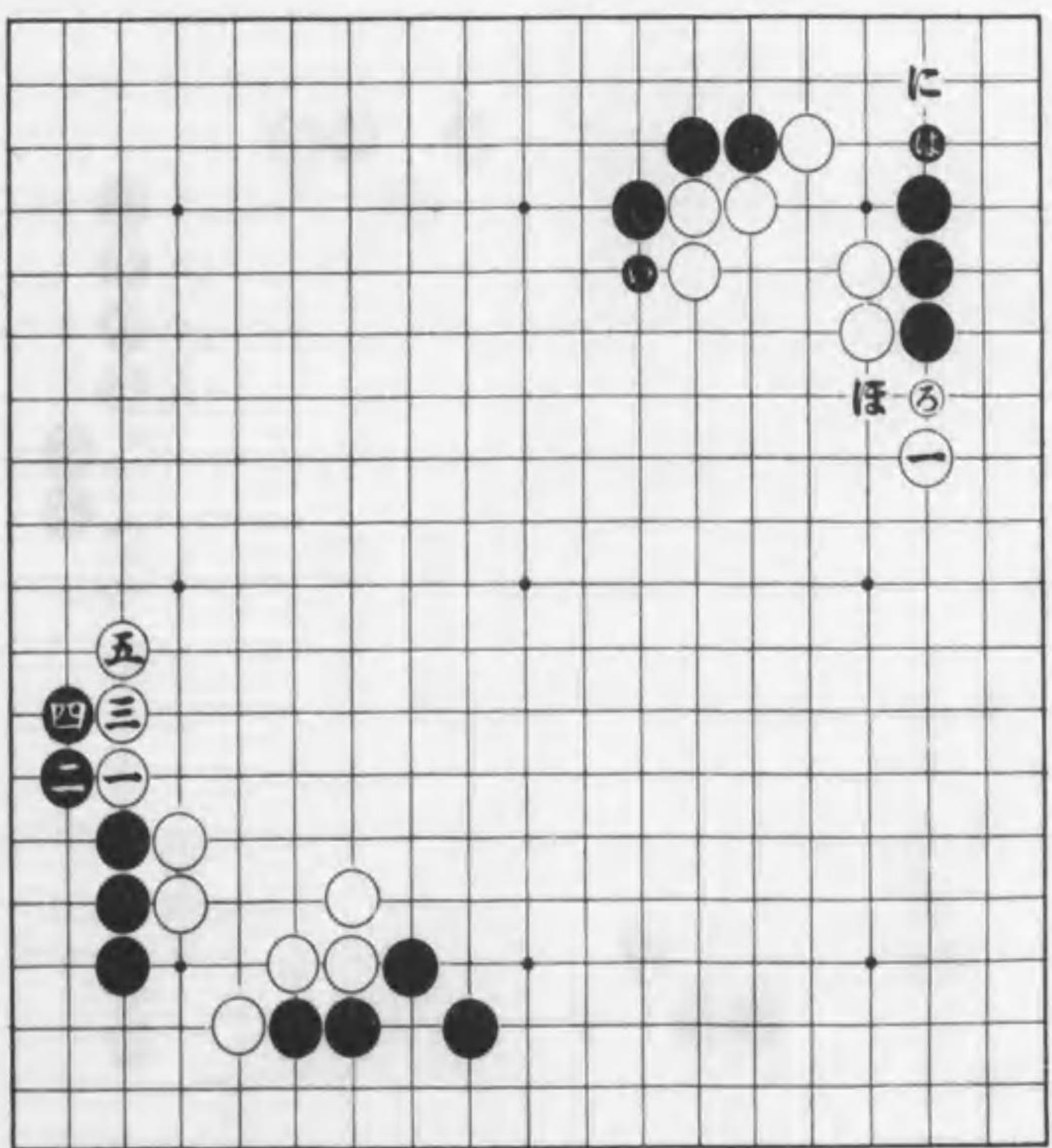


黒十の變化は第卅二圖に示す。

(第廿八圖) 白一のまゝ、黒は手を抜いて宜しいが、此處を打つには●と押して、白の虚路詰りを見ます。そして白○黒●と治まる●をに飛ぶのは味に於て稍不可。兎も角も白一は心得べき著理です。一と斜走するか、或は次に示す如く○に約へるか、でほに行ひて黒一と飛ばれるのは、絶対に無い打方と知つてほしい。

左下隅白一と急に約へる型も有ります。

黒二以下は前圖右上隅に比して一層不利なる事勿論。二は次圖に依らねばなりません。



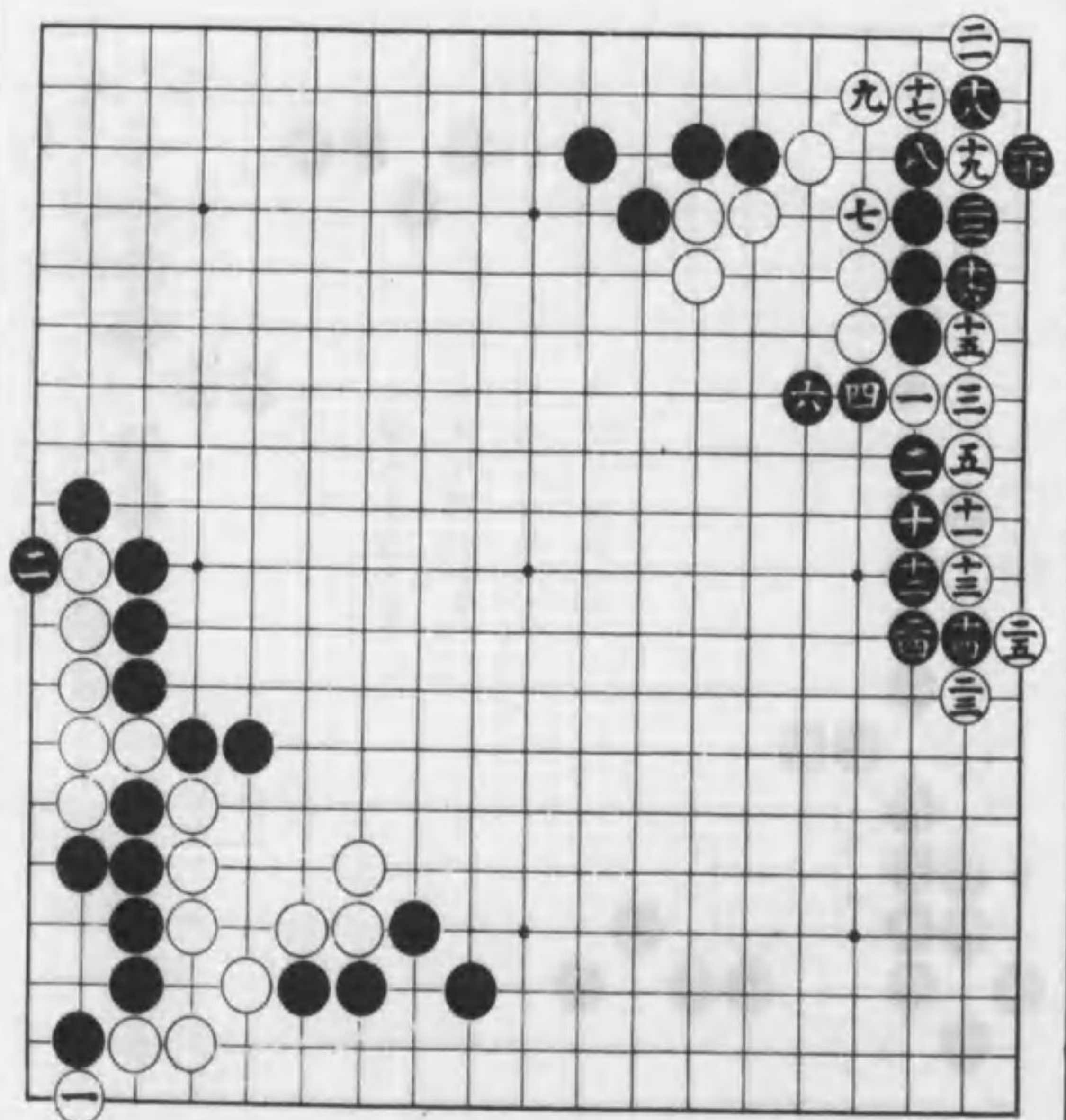
(第廿九圖) 白一に對しては黒二と夾む事を要します。

白三を四に、黒三と成つては、一で四に行ひ、黒二の飛を許したに等しいから、白三は勢の必然です。

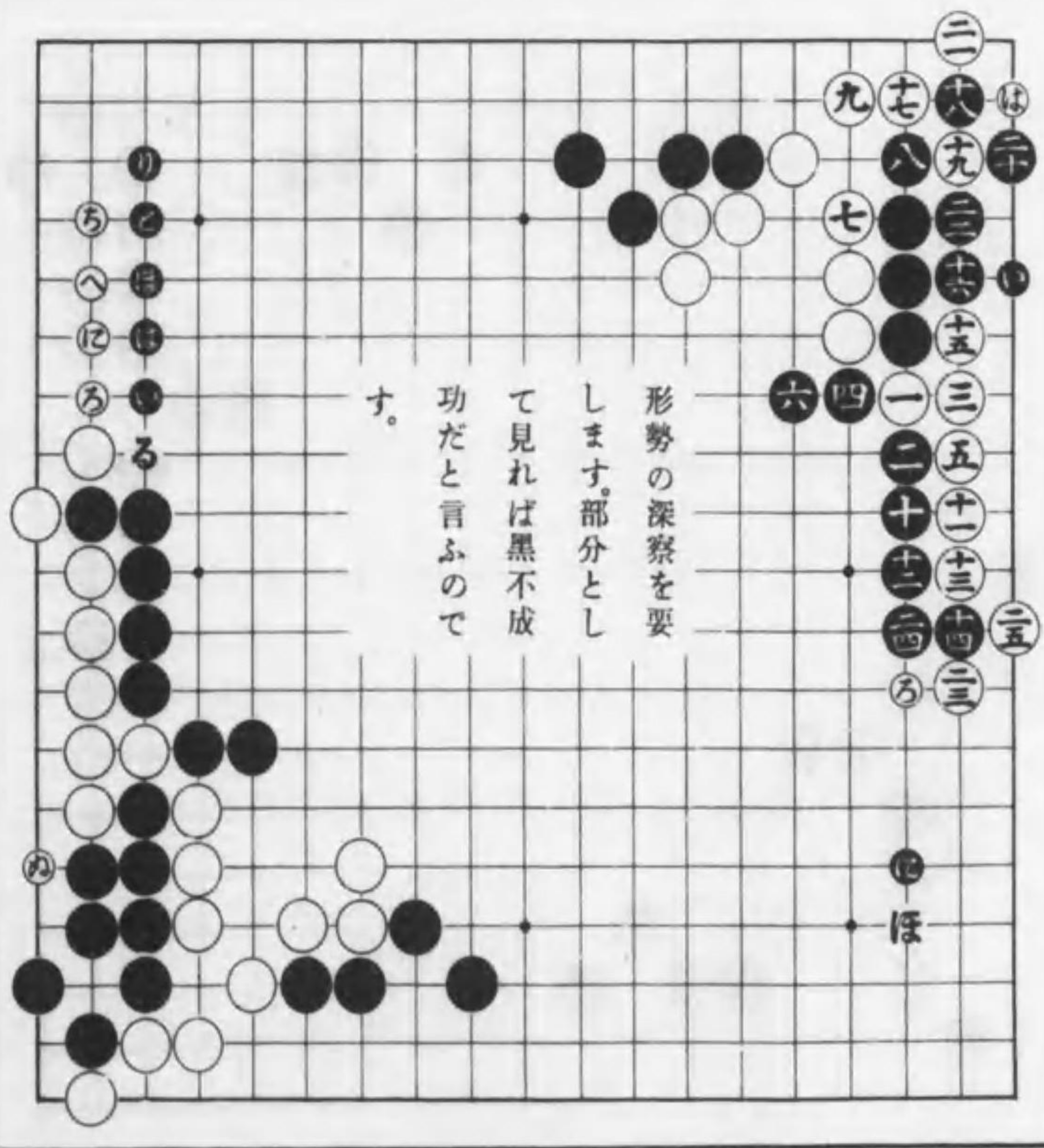
黒六白七共に肝要であつて、これに就ては第卅一圖参照。

白十九で單に二一に綽ると、左下隅の如く攻合白敗に終る。以下二五迄となるのですが、更に次圖に於て言ふ事が有ります。

左下隅は黒二と綽られてそれ迄です。右上隅の如く黒二十二二を餘儀無からしめて、二三・二五と盤る所が手順の妙である。

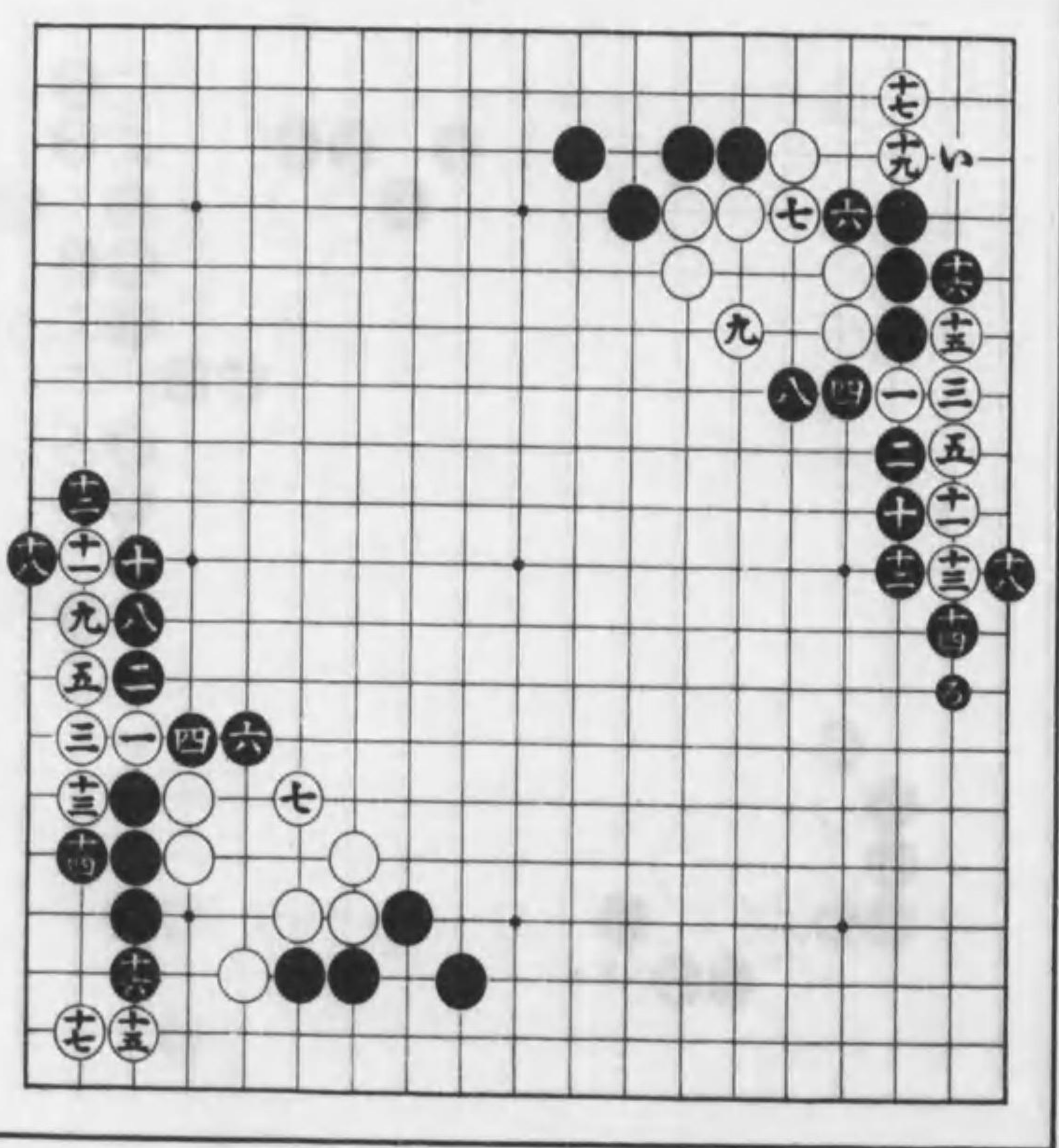


(第三十圖) 白二五に次いで黒
 ①と下れば、白は②に押しします。隅
 は白から③と行くのが二段劫ゆ
 へ、その點は黒も幾分餘裕が有る
 には違ひないけれど、兎も角も黒
 の良くない結果と言はざるを得
 ません。畢竟黒二以下が成立する
 爲には、右下隅④若しくはほに、黒
 の配置が先に有る事を要します。
 逆に右下隅に白有り、或は黑白何
 れも無くして、左下隅の如く、黒が
 無償で取られてはその不利は明
 瞭である。なほ第卅二圖参照。但し
 ⑤迄の結果は、るの缺點を別にす
 れば黒も手厚き委ゆへ、雙方共に



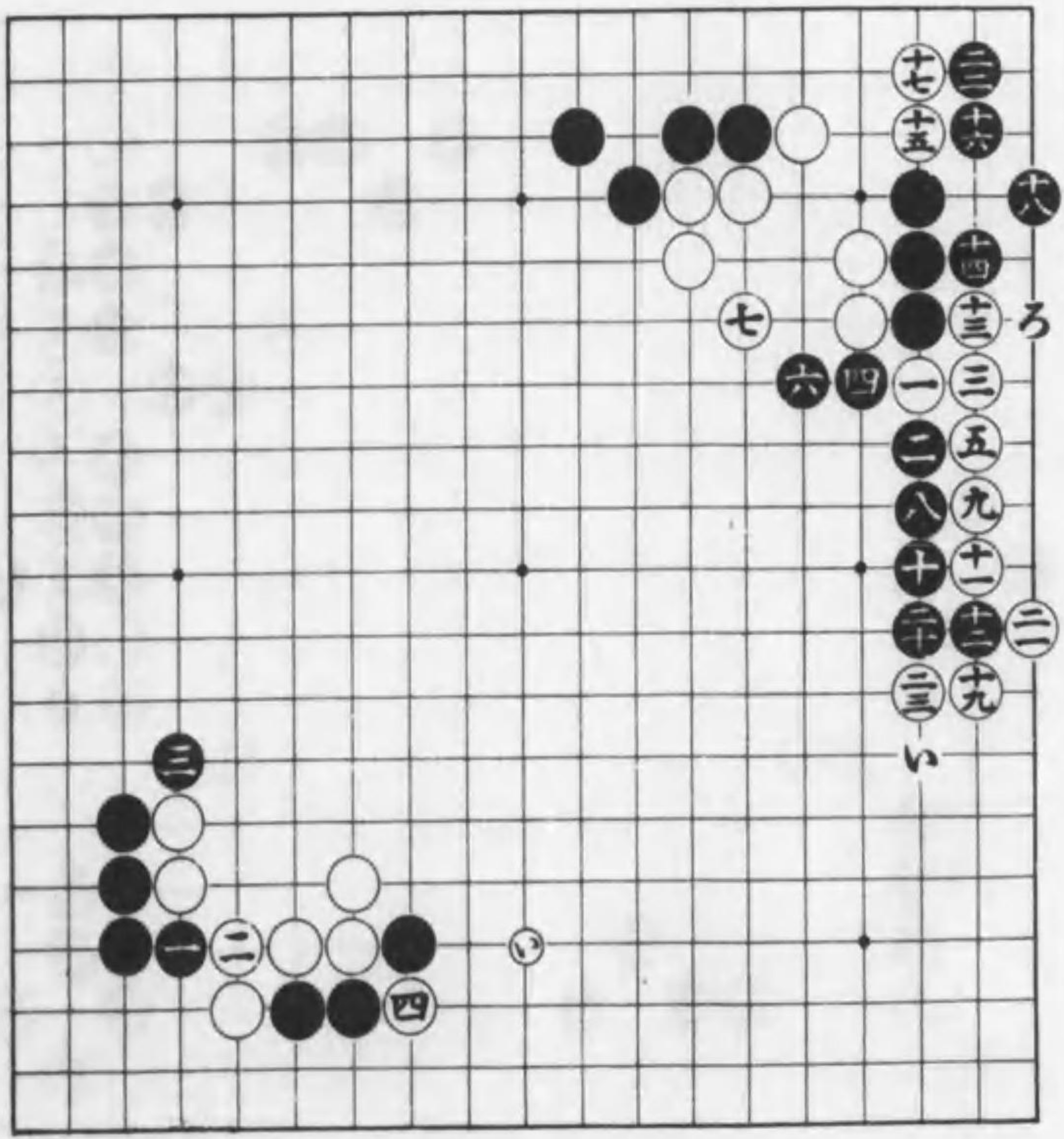
形勢の深察を要
 します。部分とし
 て見れば黒不成
 功だと言ふので
 す。

(第卅一圖) 前々圖黒六に就て
 の注意ですが、斯く六八と打つ
 のは、自ら虚路を詰るに外ならず、白
 十七十九に依つて自滅に終る。但
 し黒十八をいに尖めば、その時白
 ろと夾み、前圖の經路を履んで白
 は盤つてしまひます。
 左下隅は前々圖白七に關する注
 意。下の如く七と弛めると、以下十
 八迄に依て、今度は白が挫折する。
 この白十五に就ては今一つ次圖
 の變化が有りますけれど、要する
 に前々圖黒六白七共に絶對なる
 所以は右にて證明されました。反
 覆玩味される事を望みます。



(第卅二圖) 前圖左下隅白十五の變化。下の如く十五・十七と頂下れば、黒十八と眼を持つて手数の延長を兼ねる。

白十九以下二三迄となるのですが、これならば黒も打てる形と言へます。即ち白七の不當なる所以なほ黒二二でいに掛けると、白ろの下りて、隅は結局屠られて終ふ。左下隅は第廿七圖黒十より變化。從來所掲の數圖に就て不利と煩雜の惧れを免れぬならば、黒は此定石に依るのが最も簡明です。白四を右下隅方面との關係から⑤に打つ事もある。なほ次圖に。

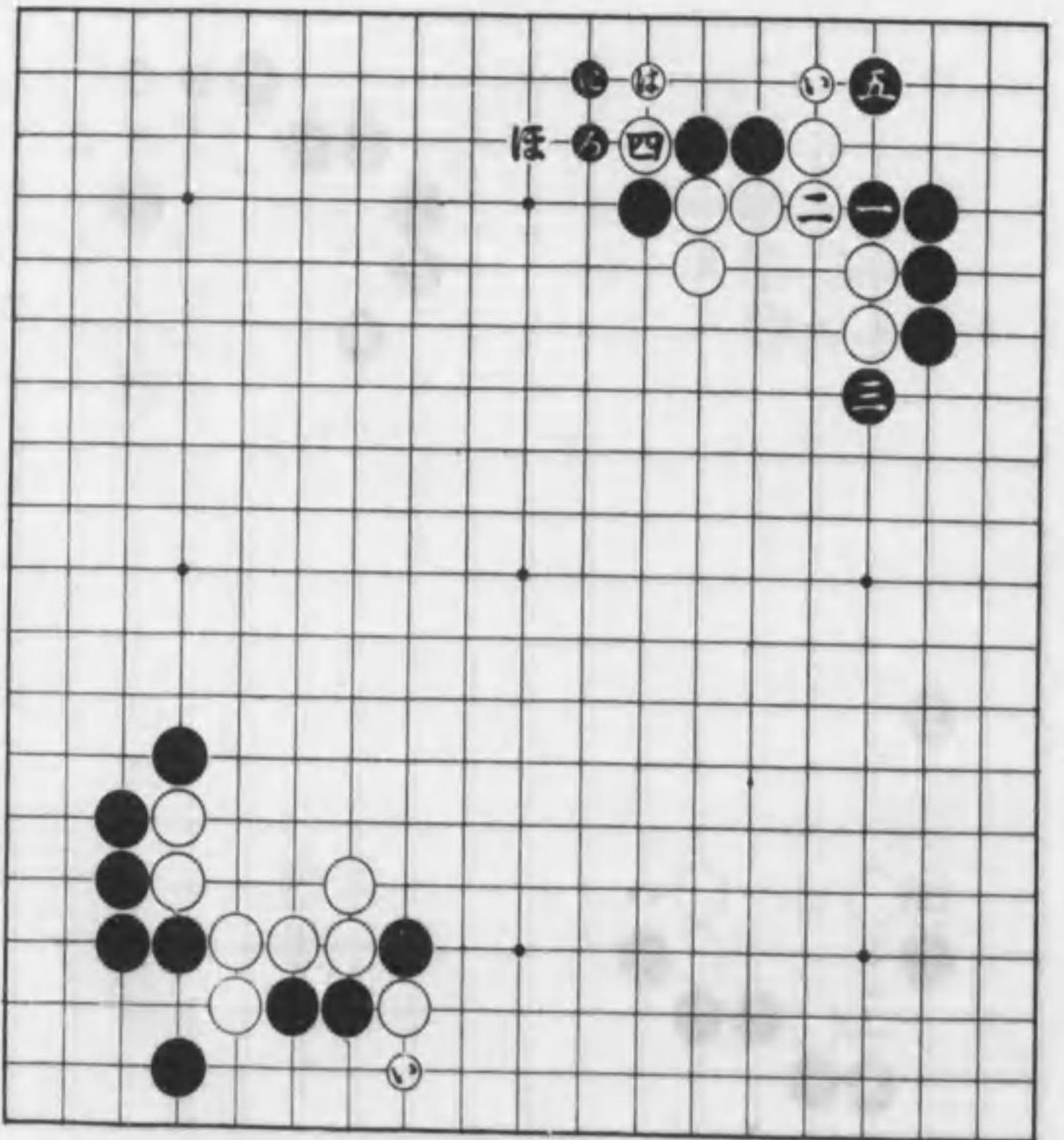


名人圍碁全集 (三二)

(第卅三圖) 黒五は必ずしも直に打つを要しない。然し輕妙なる著理ちであつて、捨てた二子を飽迄も働かせやうとの意です。

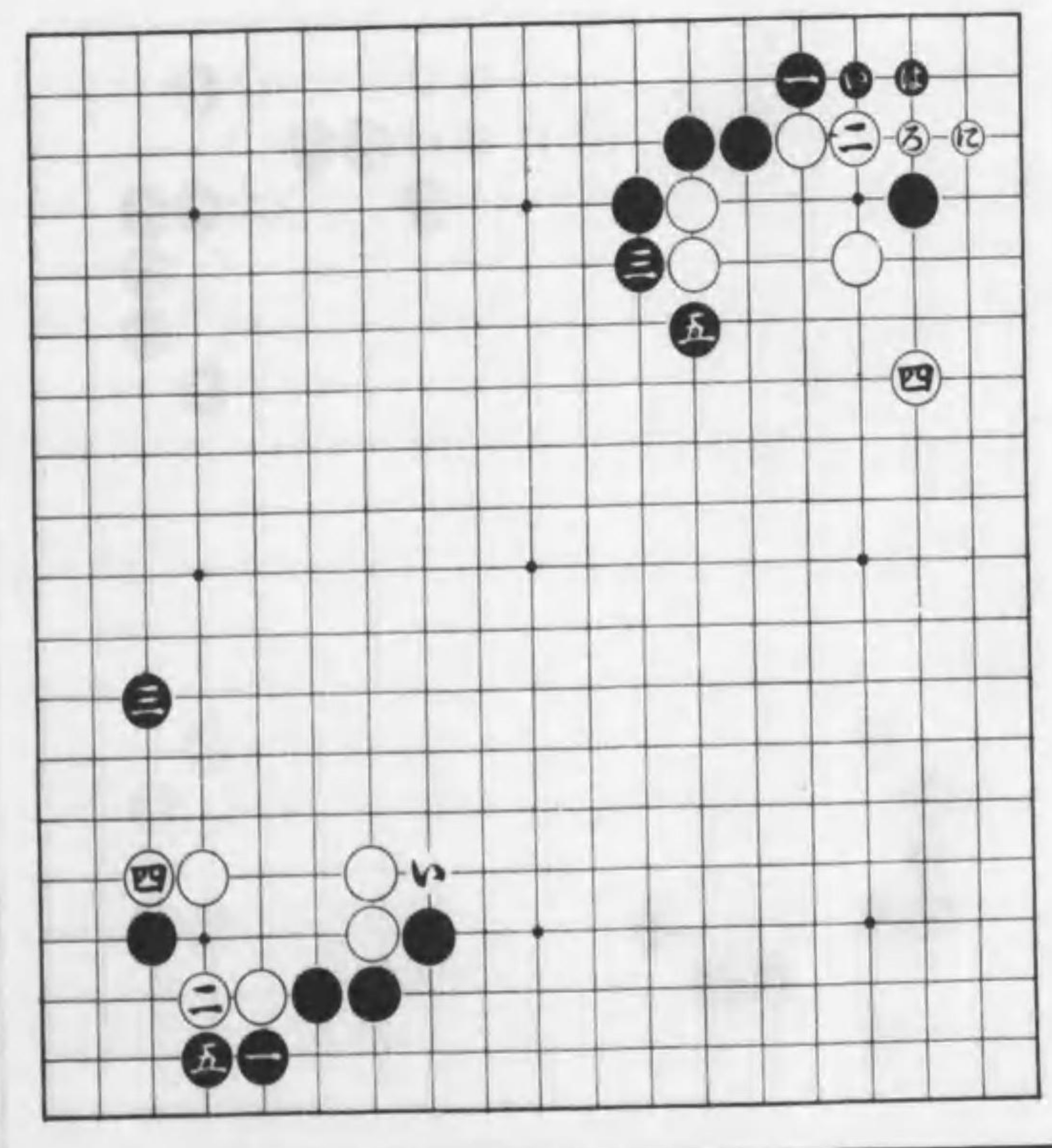
五に應じて白⑥と下つた時には、次いで黒⑦白⑧黒⑨といふ様に打つ含み、若しくは黒⑩に當てず、單にほの邊から利かせる運び、何れも一旦白に與へた二子をば極度に有利に用ゐんとする心に差は無いが、すべて機を見てする事を要します。

左下隅白⑥と下れば、右方からは黒より利かさね代りに、隅に徳が出来ぬので、一利一害ではある。

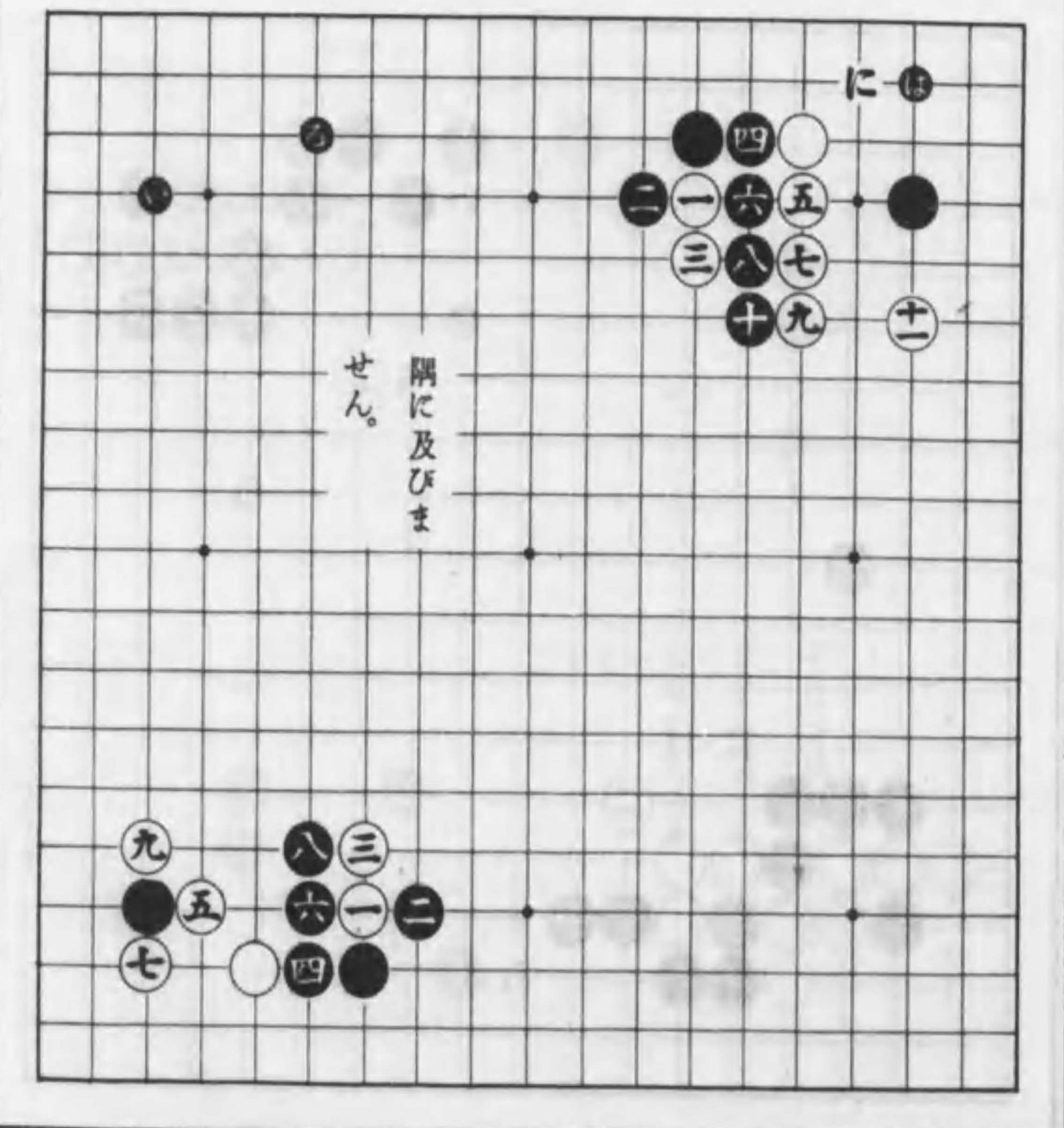


名人圍碁全集 (三三)

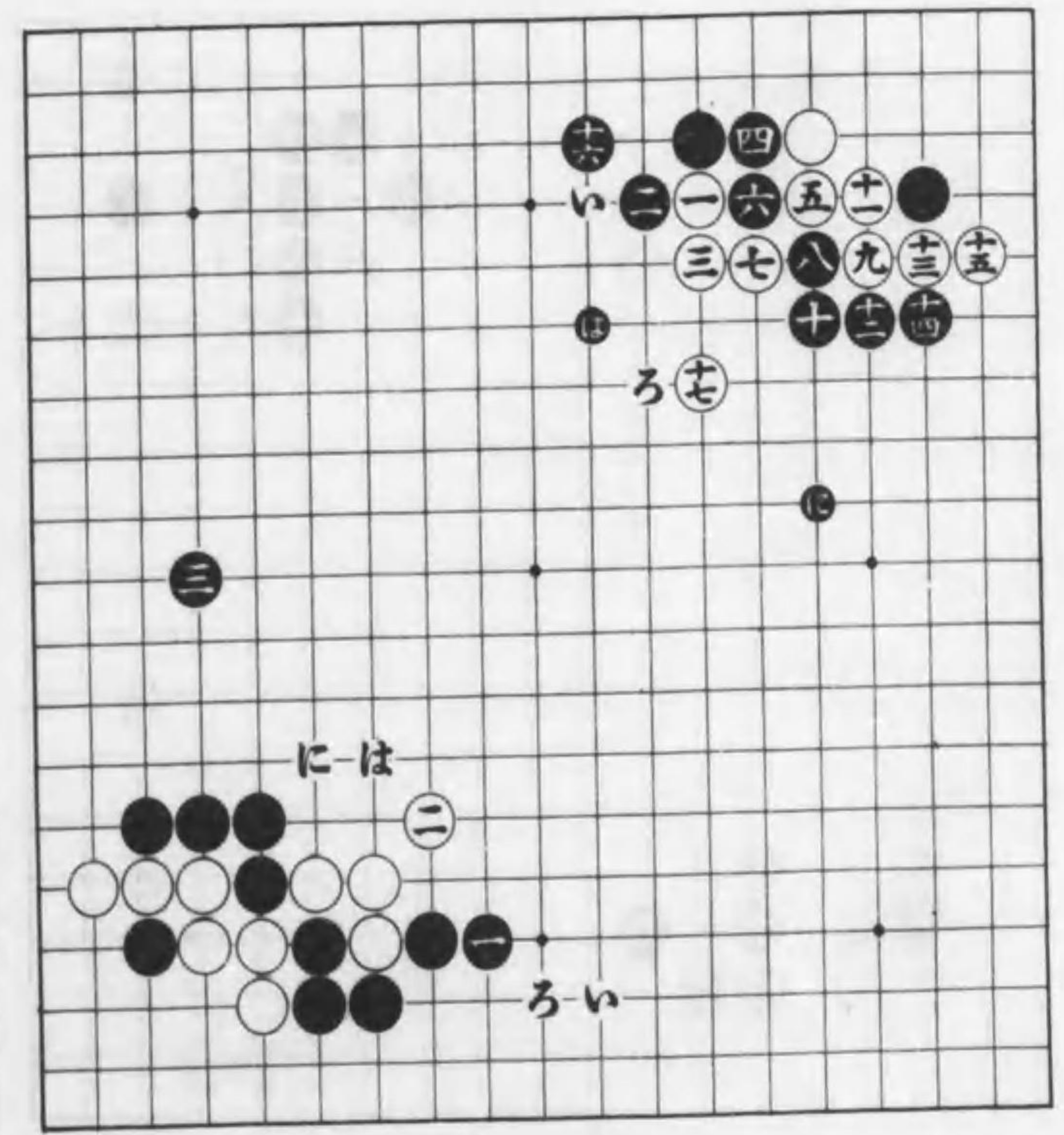
(第卅四圖) 第廿七圖黒六の變化時として斯く一と綽ねて悪くない事が有り得ませう。
 黒三五に依て上邊に形勢を張つて良いやうな場合がそれである。白四は先づこれ位のもので、後に黒①と出れば白は②迄應ずる外無く、従つて機を見て白から③に約へるのは大きな手である。左下隅、黒三でいに押して善い際にも三と迫る策が有る。これには左邊の條件も加はりますが、畢竟白四と應ぜしめて、更に五と泳ぎ兩方を打つ心に外なりません。本圖は參考迄に掲げました。



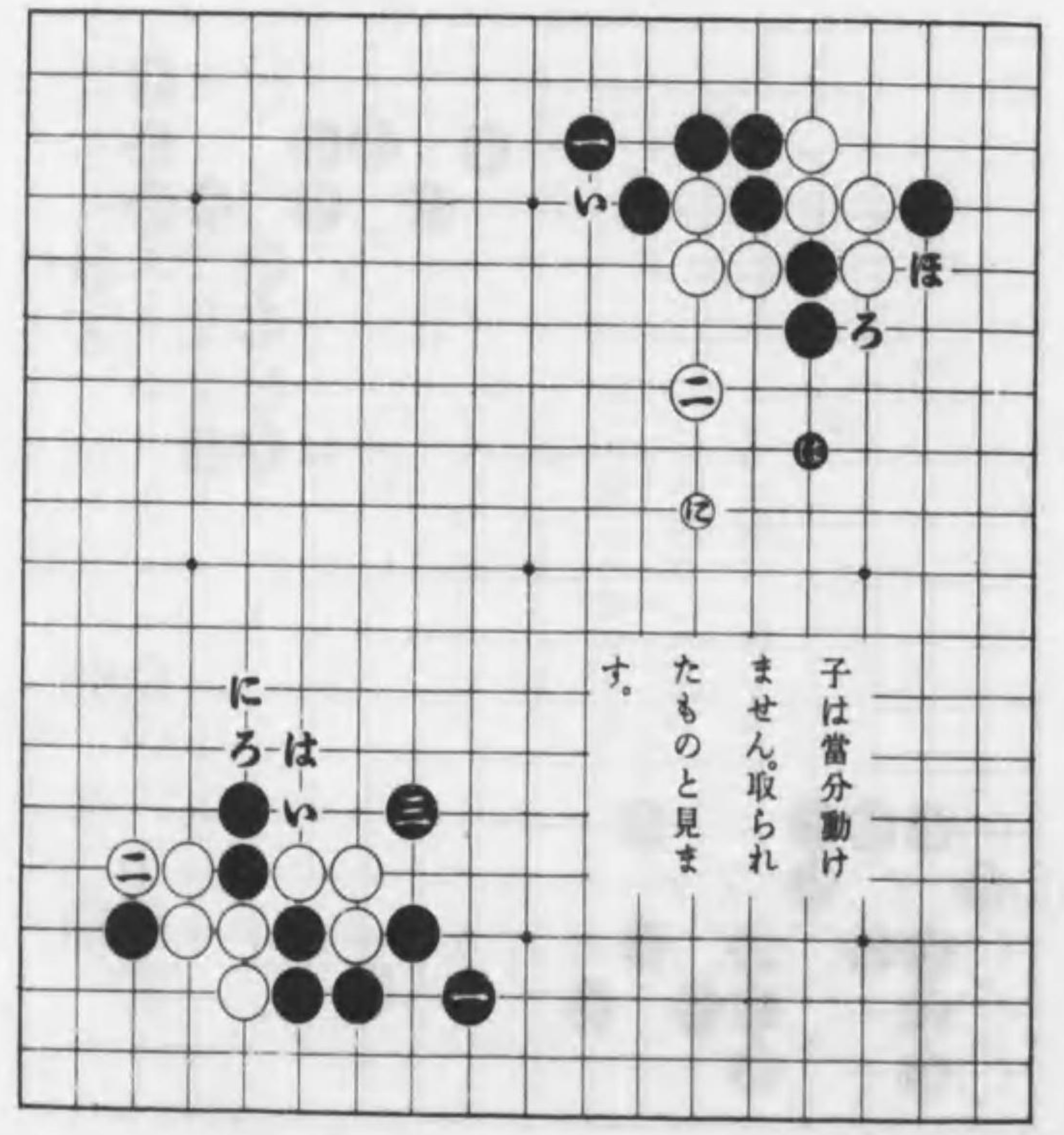
(第卅五圖) 第十二圖以降の白五と立つ型に戻つて、黒六と出る新しい打方が有ります。
 白七で八に約へる方が多く行はれる。然し七と弛めれば黒十迄は絶對。そして白十一で一段落です。此結果の是非は左上隅方面の間に依て決せられる。勿論其方面に白が有つては悪いが、黒①②の締りでも有る如き、廣い場合ならば黒の優勢は疑ひありません。なほ隅は後に黒③又、執れに依ても活路を存します。
 左下隅は第廿五圖所掲の定石ですが、白としては本圖の上隅は下



(第卅六圖) 白七と約へれば黒八と切り、十五迄殆ど絶對です。黒十六をいに並ぶ型も有る。即ち左下隅ですが、其選擇は主として左上隅方面との條件に依ります。白十七普通。時にこれをろに寄せ打つ事も有る部分としての善悪は言明の限りではない。十七の次に黒は、●●の中を形勢に従つて取捨します。左下隅黒一は、白からいろ等を利かされる惧れなき場合、即ち一般には右下隅方面に黒の勢力有る際です。白二黒三共に普通二では飛ぶは、黒にが有つて拙い。

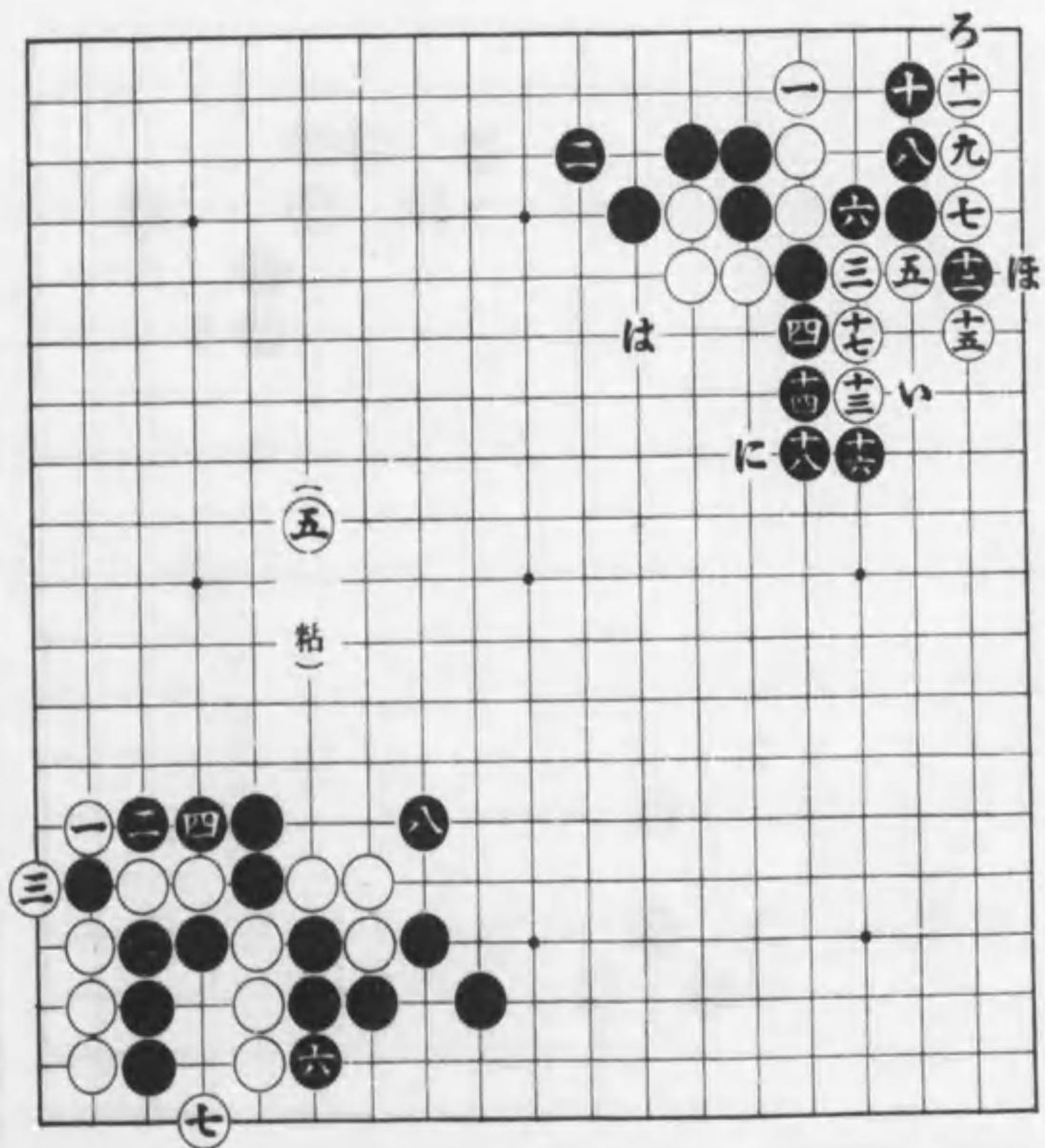


(第卅七圖) 前圖右上黒十二の變化、隅にはなほ味を存して、單に一と掛粘ぐも、時には一策です。勿論一はいに並ぶ事も出来ず。白二でろに押すのは、三子を弱めて黒に厚壯を添へる事となる。二に次いで黒●白●位のもの。それ以上を言ふは定石として越權です。但し黒からは何時でもろの曲りを打つ事が可能である。結局白ほと補はなくは不完全なる點が黒一の狙ひ所なのです。左下隅白二と直に備へれば、黒三と門せらる。白い黒ろ白は黒にと出るのは愚ですから、三のまゝ白三



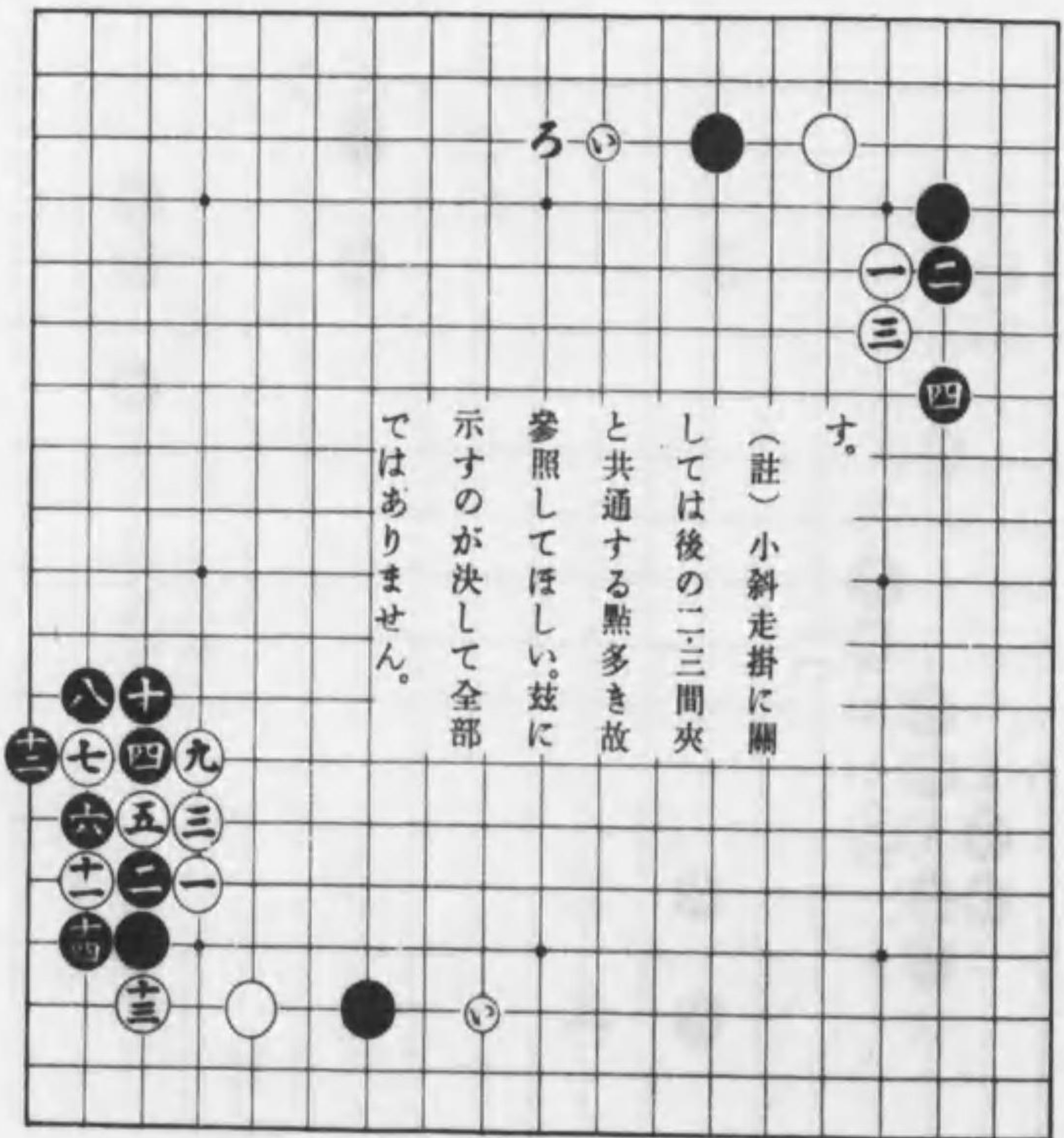
子は當分動けません。取られたものと見ます。

(第卅八圖) 白一と下る手段が絶無とは言へません。黒二は絶對白三五で取込まうとする。黒六以下はこれを犠牲に供して中央に厚壯を附する作戦。黒十二が好手順であつて、白十三で直に十五に抱へると、左下隅の不利が堪へられぬでせう。白十五をいに並ぶのでは、黒ろと掉られて一以下三子が凌げない。黒十六ではに門せても三子は取れますし、又十八をにに掛粘いで宜しく、或は先づいに、白ほ黒十八と粘ぐ事も出来る。白地の小なるを遺憾とします。



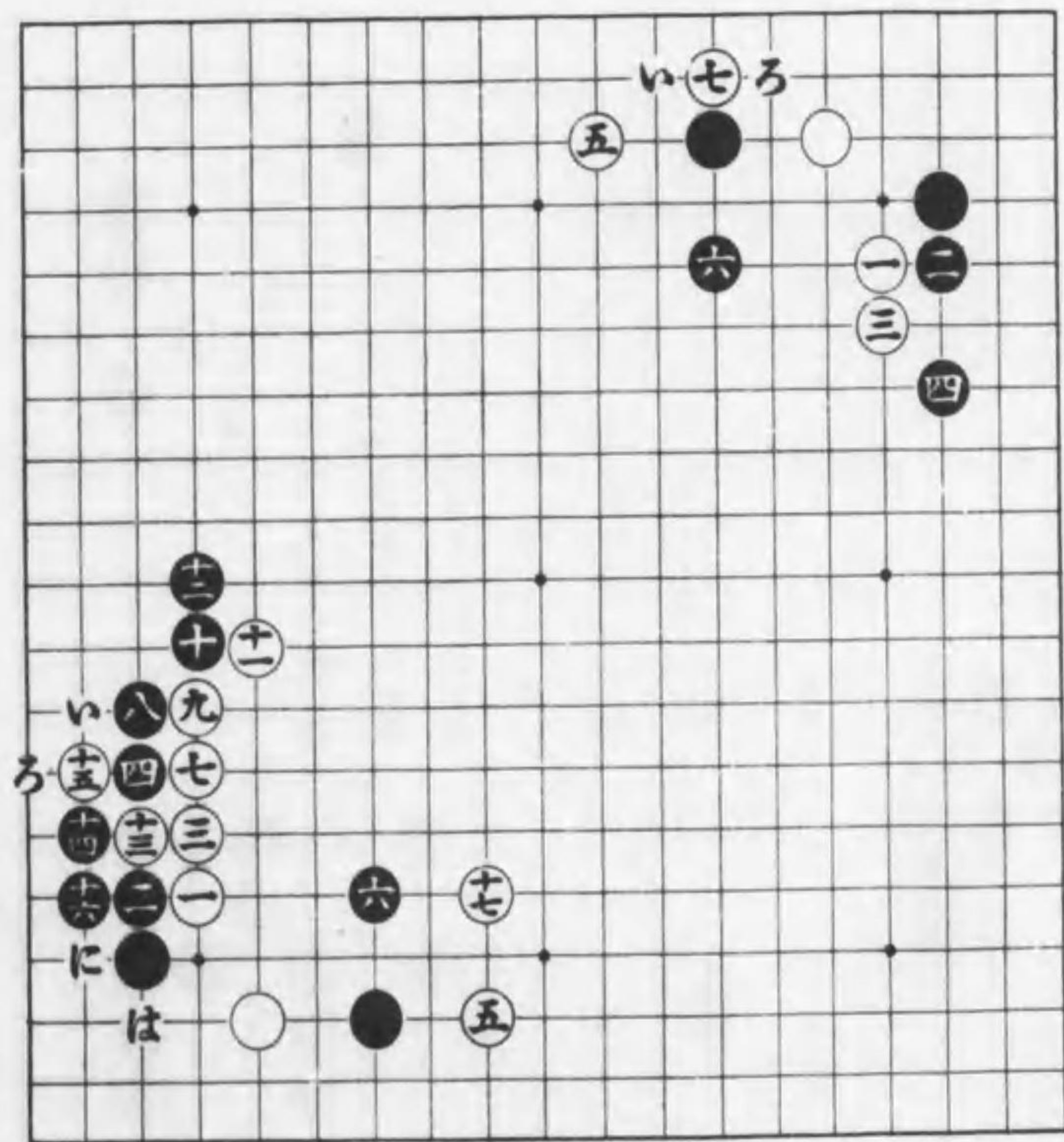
(第卅九圖) 白一の小斜走掛に入ります。二三の意味は、第二圖で言つた黒の封鎖を凌ぐと共に黒を壓迫してこゝに自ら勢力を加へ、次いで㊦又ろと夾撃して左上隅方面に形勢を張るのが根本です。従つて原則としては左上隅に白の配置有るを條件としますが例外も少くはありません。而して黒四を以て一段落です。

左下隅白五以下は斯く黒を堅固ならしめても其影響を被る恐れ無き場合に、黒を疑らす意味が主であるけれども、㊦に迫るならば五で直に㊦に赴くを普通としま

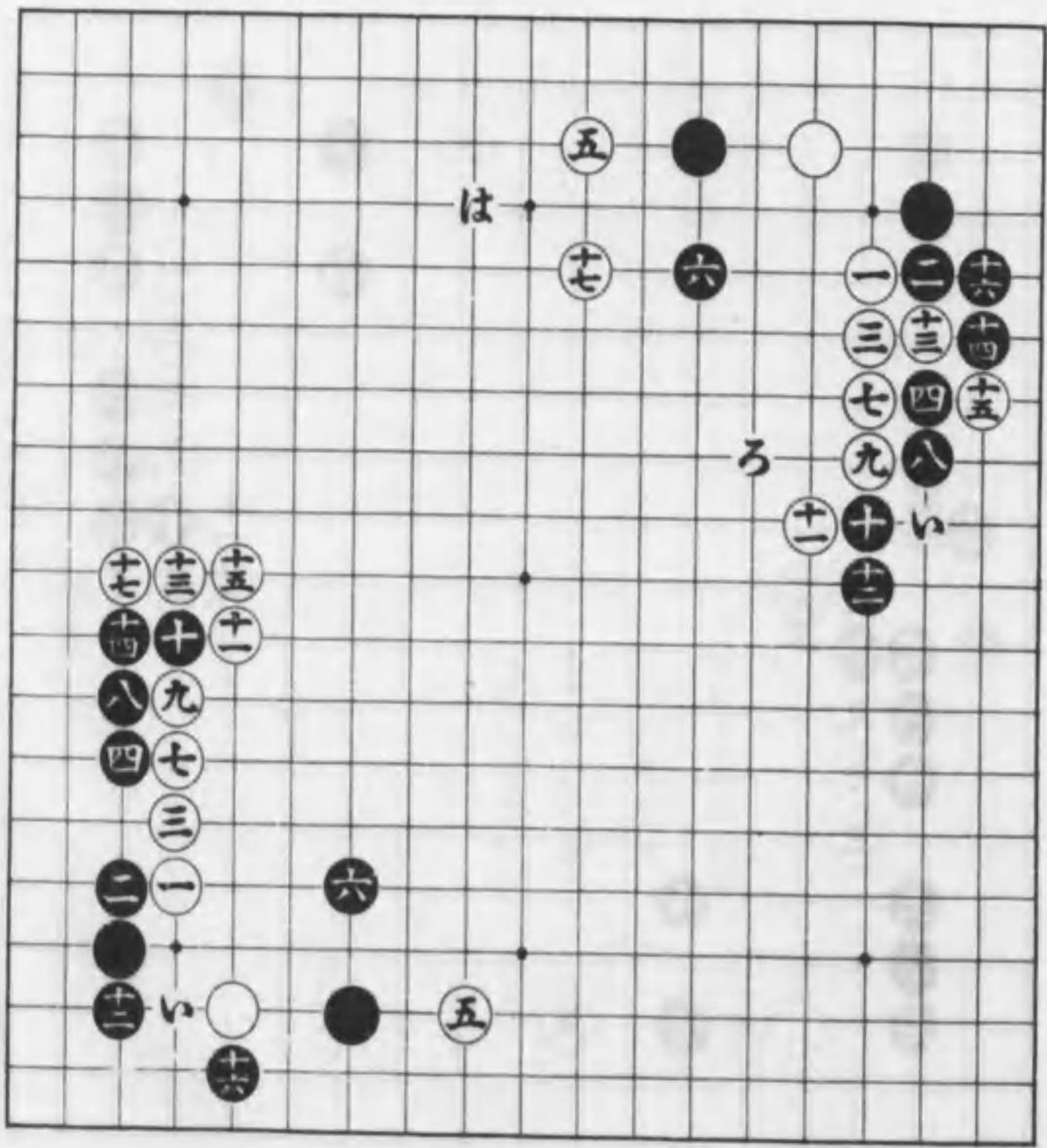


(註) 小斜走掛に關しては後の二三間夾と共通する點多き故参照してほしい。茲に示すのが決して全部ではありません。

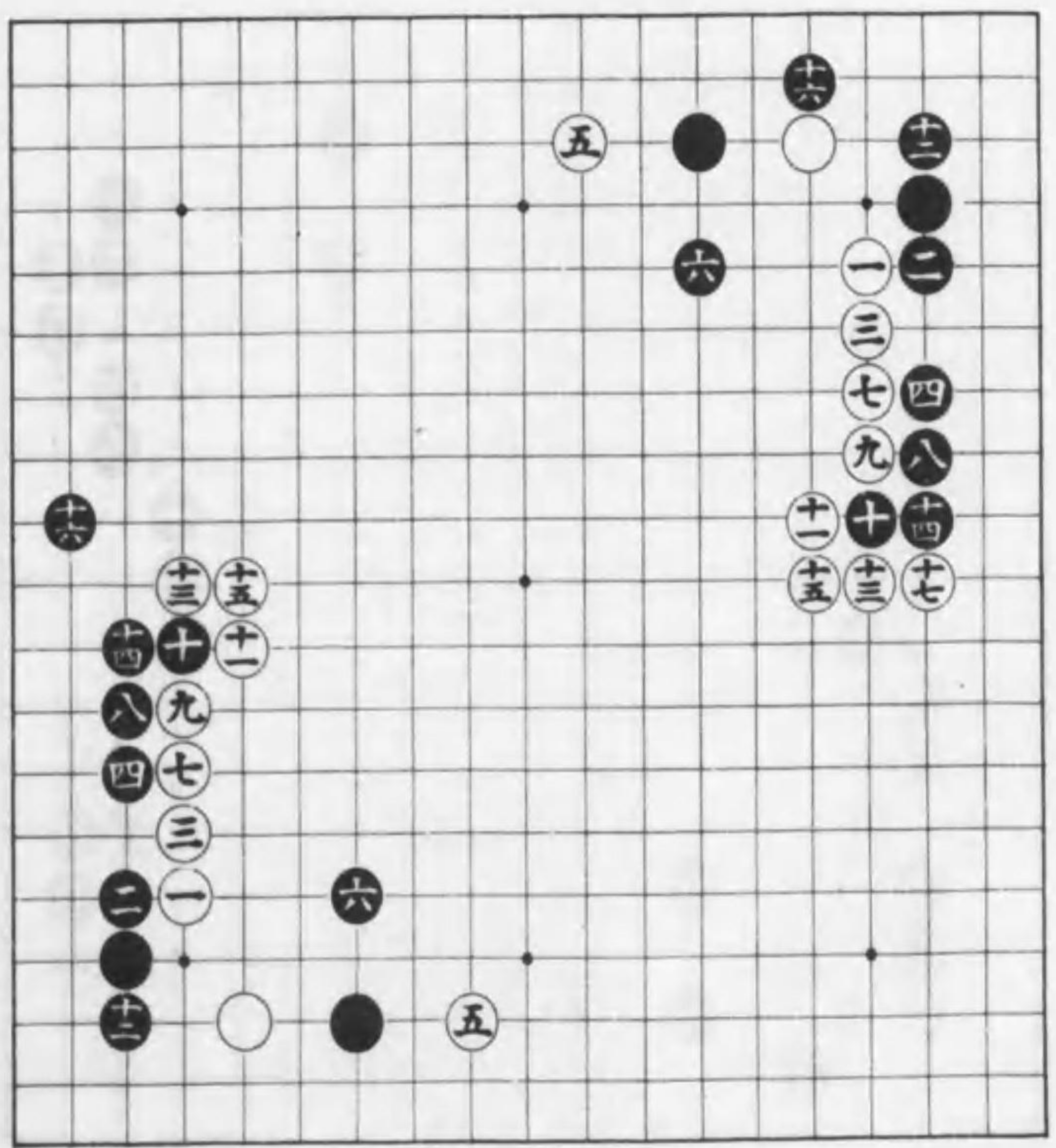
(第四十圖) 白五は黒四に次いで直ちにと言ふのではなく、部分的の手順として示す迄の事です。黒六の次に、白七に就ても同じ意味の事が言はれる。
後に黒い又ろの繰出は有りますが勿論直接の事ではない。
左下隅は白が七以下の勢力を先に扶植してから十七と飛んで黒を追撃しつゝ形勢を張る意匠。就中十三十五の出切が肝要です。
黒十六をいに抱へれば、白十六黒ろ白は黒にと利かせ、そして十七に飛んで白は宜しい。なほ次圖に續きます。



(第四十一圖) 白は今後の切味を含んで打つ事になるので、十七では時にろに掛粘ぐも一策。次に黒十七と曲られても、白はと應じて、左上隅との關係の良い場合は即ちそれである。
左下隅は黒十二と下る變化です。この十二をいに尖頂ける事も有りますが、兩者共に右上隅白十三十五を防ぐ點に至つては等しい。其代り、白十三の痛撃を被るので、右上隅の出切と此十三の打撃と兩方を黒は一時に免れる事は不可能です。孰れか一方は白に打たれる。なほ次に言ひます。

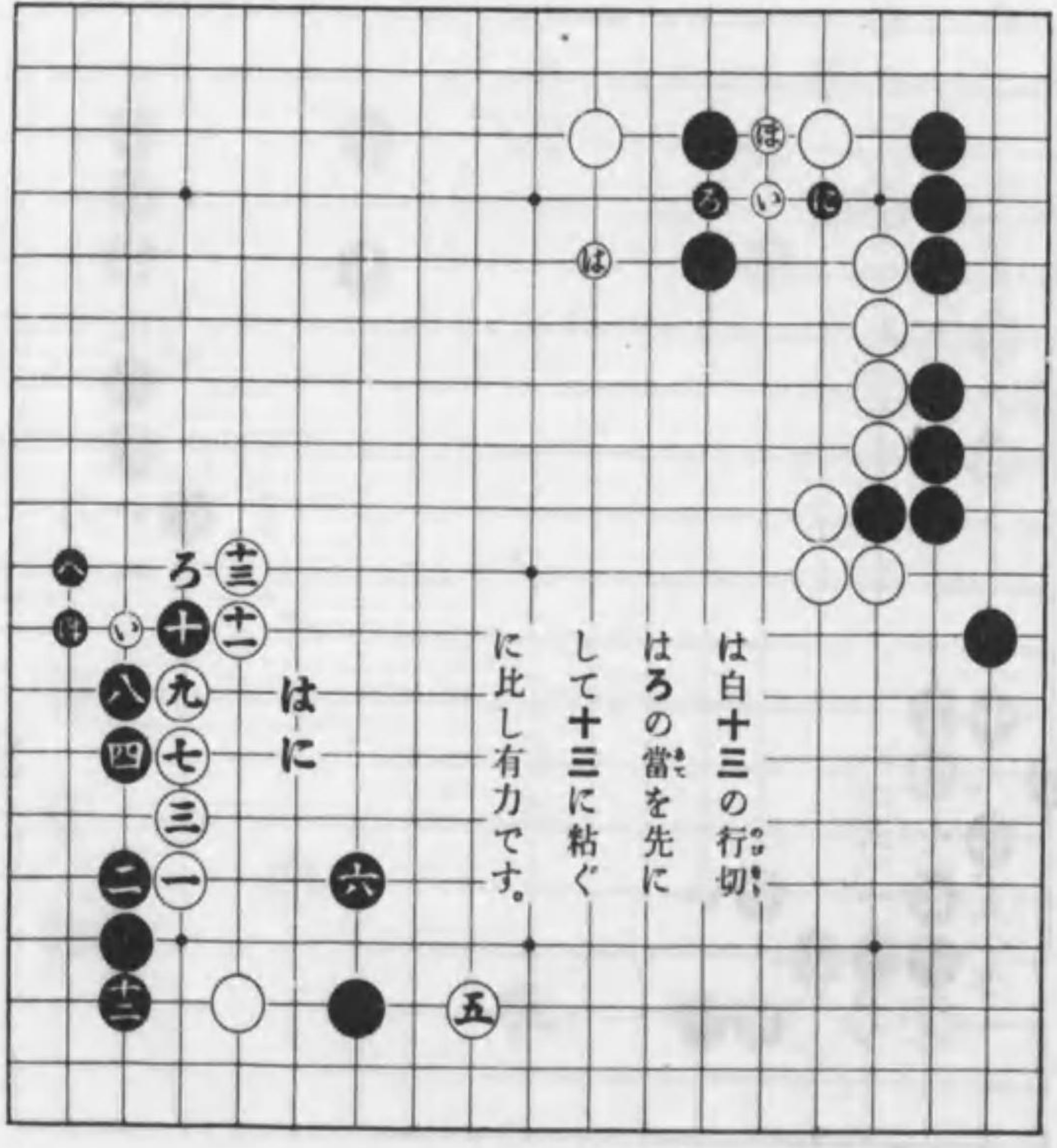


(第四十二圖) 黒十六と頂けて盤りを求めます。この故に六の方の二子は安全ですが、白十五十七は又厚且つ壯を致しました。但し十六の處には後に幾分味を存して完全の盤りとは觀られない憾みが有ります。勿論此十六は直に打つものとは限りません。然し白十七と約込まれるを不利とせば、黒は左下隅に従ふ事が出来ず。左下隅黒十六と走るのが即ち夫。白十三には猶次に示す有力なる別法が有ります。これ等の中、孰れを採るべきか、雙方豫め深謀を要する處、更に次圖の殘説参照。



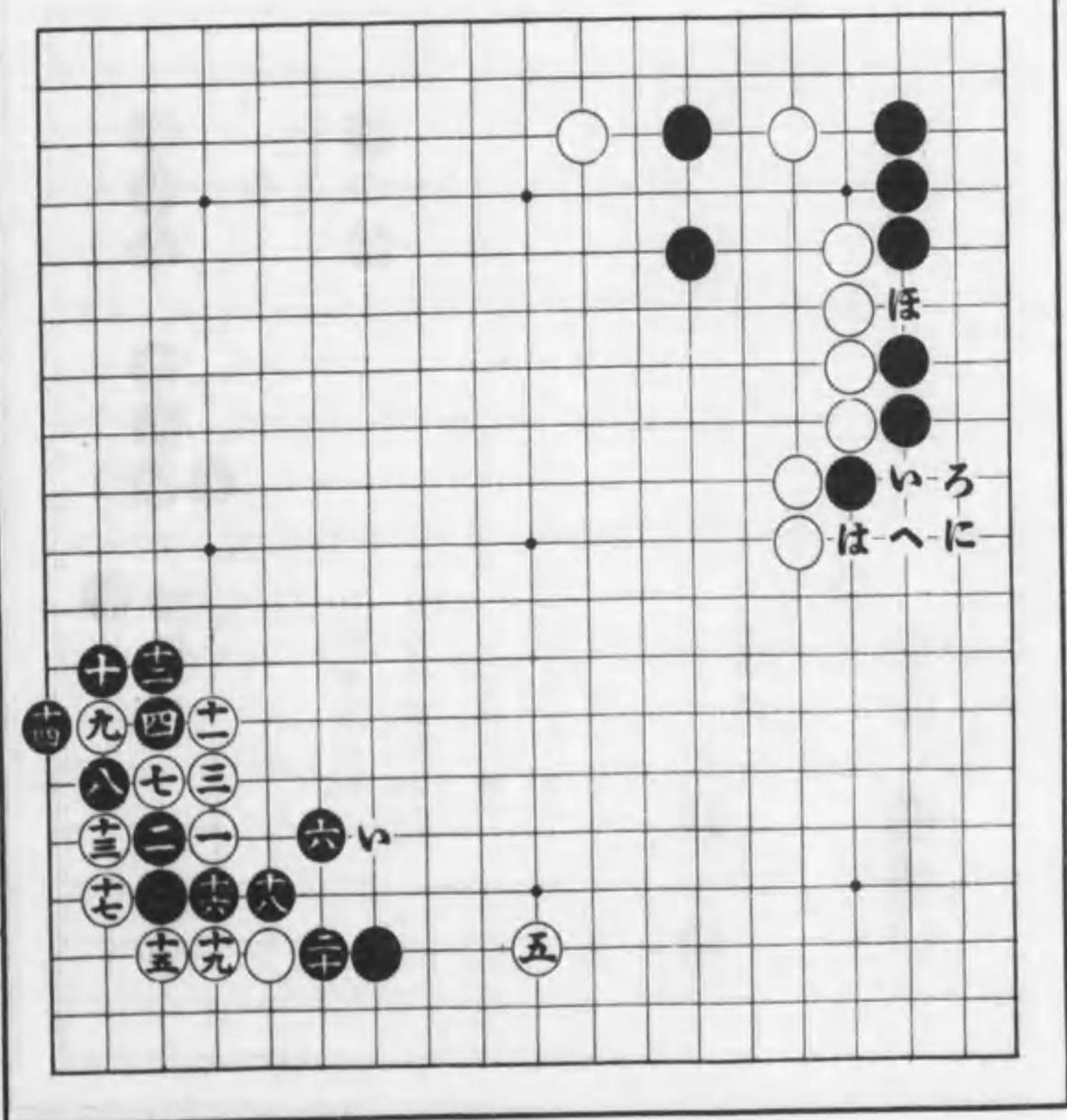
(第四十三圖) 前圖下隅の後に

白(十三)黒(十四)と運ばれると、黒の盤りが失はれる關係有る事も亦注意を要します。即ち黒(十四)白(十五)に依て、急には連絡の途が無い。左下隅は白十三と單に行切る別策(十六)の切とろの當と、白は兩方を見るのです。(十七)の切を存する限り、黒はに等の覗きは無効である。これ黒十の効果を消滅して白の中央に勢力を加へる所以、結局白(十八)に切れば、黒(十九)白(二十)となる位ですが、兎に角何れからも此處は急に決めて終ふべきではない。而して一般に、少くとも著理として



(第四十四圖) 前圖下隅の結果に於て、白黒ろ白は黒にとなるを面白からずとせば、白はいに切らず、はより當る事も可能。その時に黒にと走るは、ほの缺點を有する故、白ろと頂越され、又白へと突當られる著理がある。而して白は黒い白へは即ち前々圖上隅に歸します。要するに斯く弾力性に富む所が前圖下隅白十三の有力なる所以なのです。

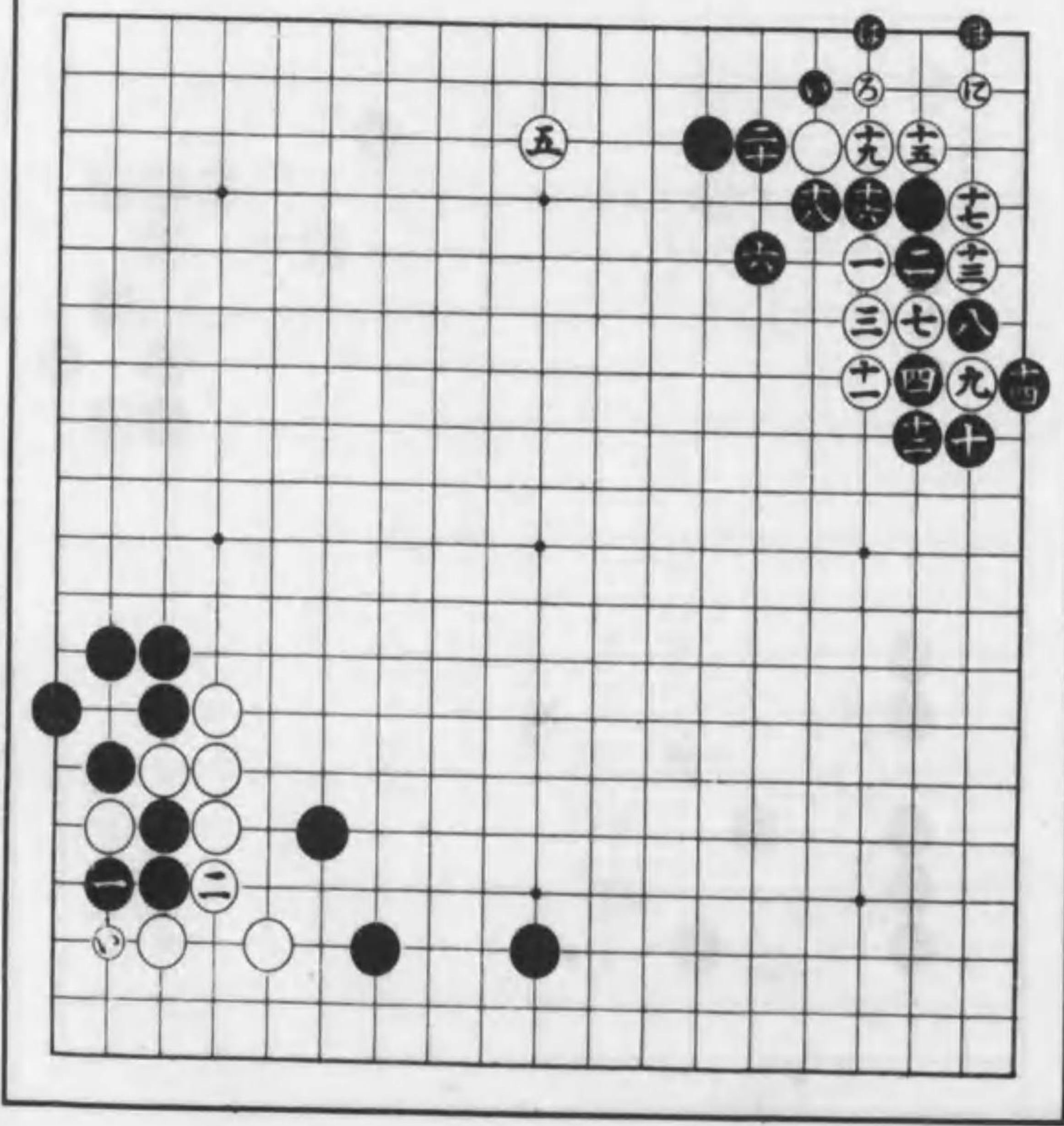
左下隅は白五と一路遠く夾んだ場合、黒六を單にいに飛んで悪くないが、斯く斜走して白の斷點を窺ふも常用手段です。なほ次に。



(第四十五圖) 白七以下は黒の著子を重複せしめ、自らは勢力を加へて且つ十五の頂を利かせ、六の方の黒を攻る意なる事、既に述べた通りです。但し白七に就ては次圖以下の變化が有ります。

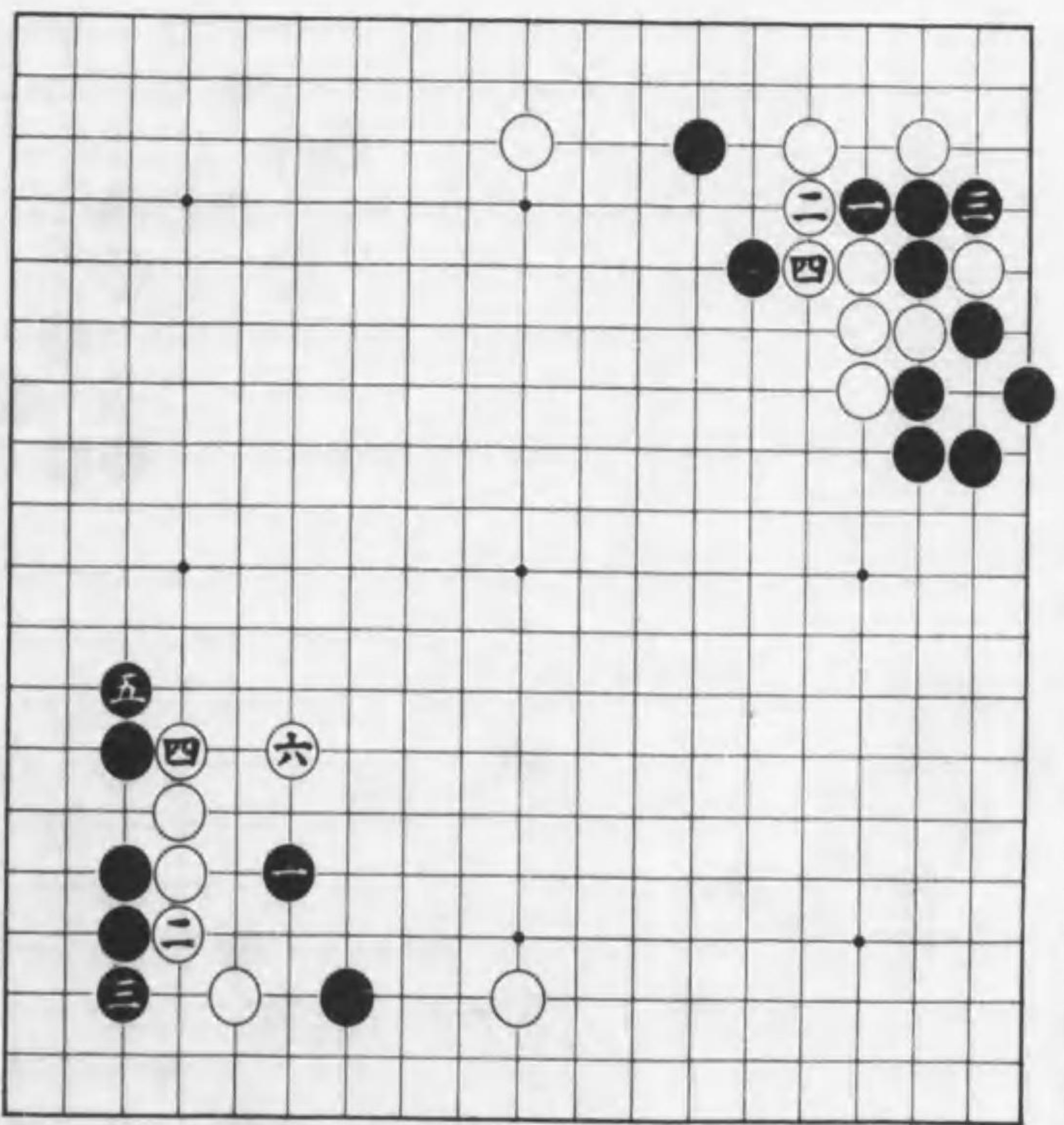
黒十六は白の意圖を挫きました。誤つて是を十七に應じては、下隅の不利を生じます。二十迄となれば黒の有利は疑ひ有りません。なほ他日黒●●の二段緯に依て白◎と屈せざるを得ず、然る後にも黒●の味を存する。

左下隅は白◎が直接に厳しい。次圖と對比すれば得失は自明。



(第四十六圖) 前圖上隅白十七の變化。白は斯く二と約へて四と粘ぐ外無い。隅の徳を放棄し、愚形を取つたのは已むを得ません。前圖下隅に比して、これならば黒は悪くない理です。

左下隅白二と應ずれば最も普通。而して前述來の不利を避ける所以でもあります。この白二を促し黒三と下つて隅の要點を獨占したのこそは、實は當初一に含まれた意圖に外なりません。黒七以下、定石として示すべき限りではないけれど、猶二三間夾に於て説く所をも参照してほしい。



(第四十七圖) 白一と更に遠く

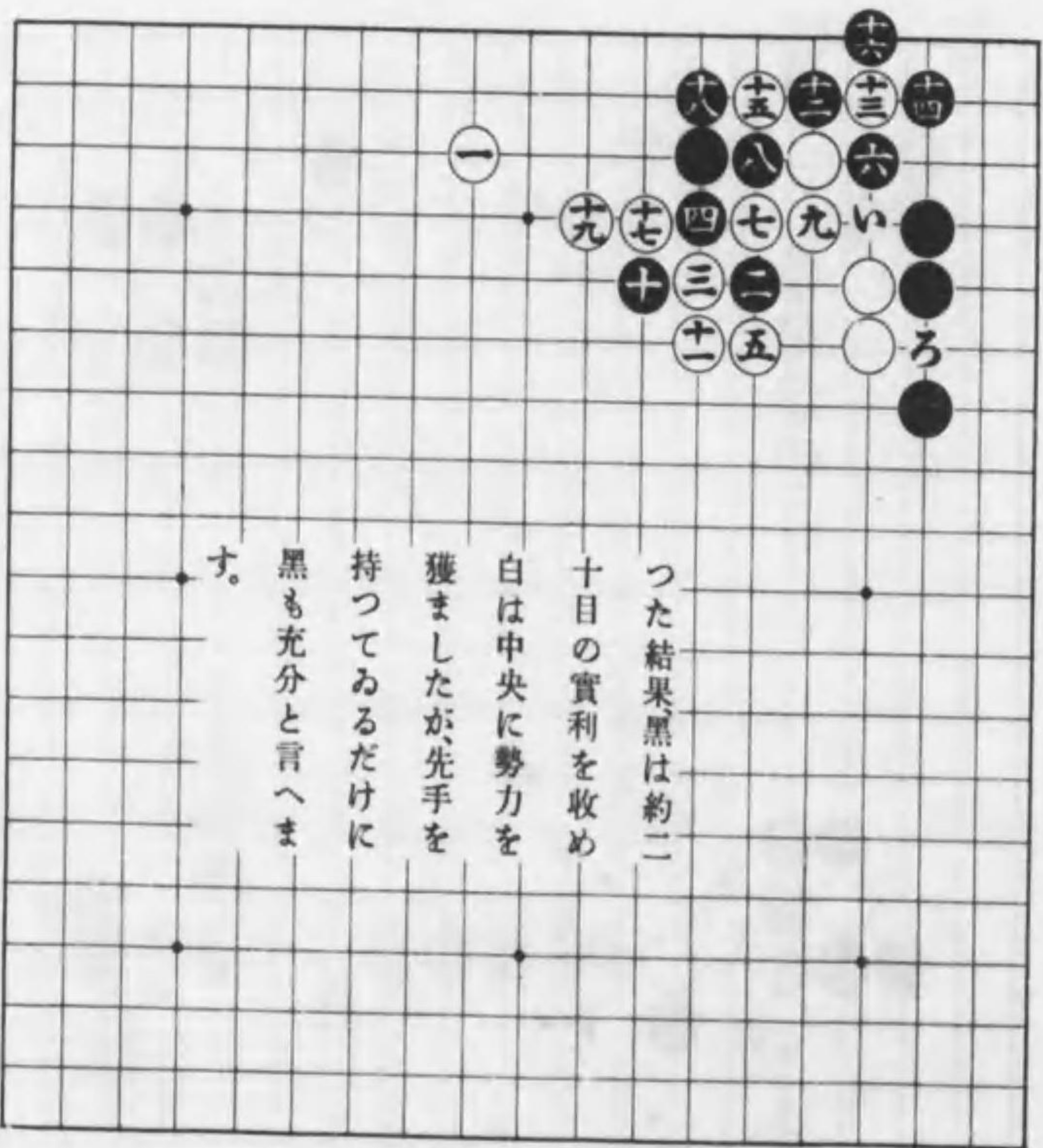
夾んで來た場合。これは左上隅に白の締り有る際に、その關係から多く用ゐられます。

黒二は三に飛んで穩當ですが、斯く斜走したのは畢竟前圖下隅に導かうの作戦。

されば白三は黒の意中を察して工夫を施した譯で、又有力なる手筋の一種に外なりません。三をいに應ずるのは、稍眞拳に過ぎる嫌ひも有ります。

白十三十五は共に犠牲。

黒十四はろの缺點を控へる以上當然であり、白十九迄の變化とな

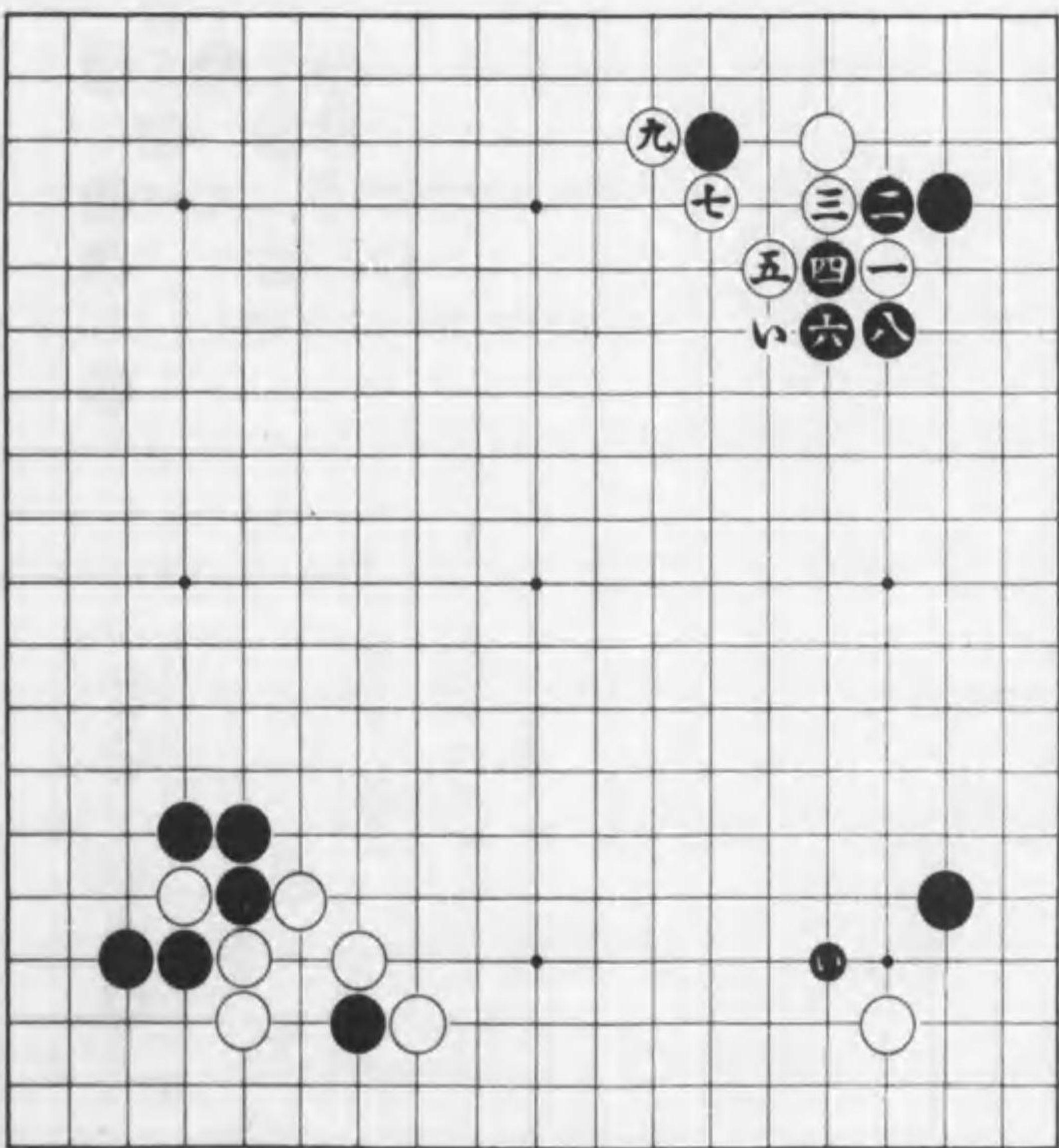


つた結果、黒は約二十目の實利を收め、白は中央に勢力を獲ましたが、先手を持つてゐるだけに、黒も充分と言へます。

(第四十八圖) 黒二四と出切る

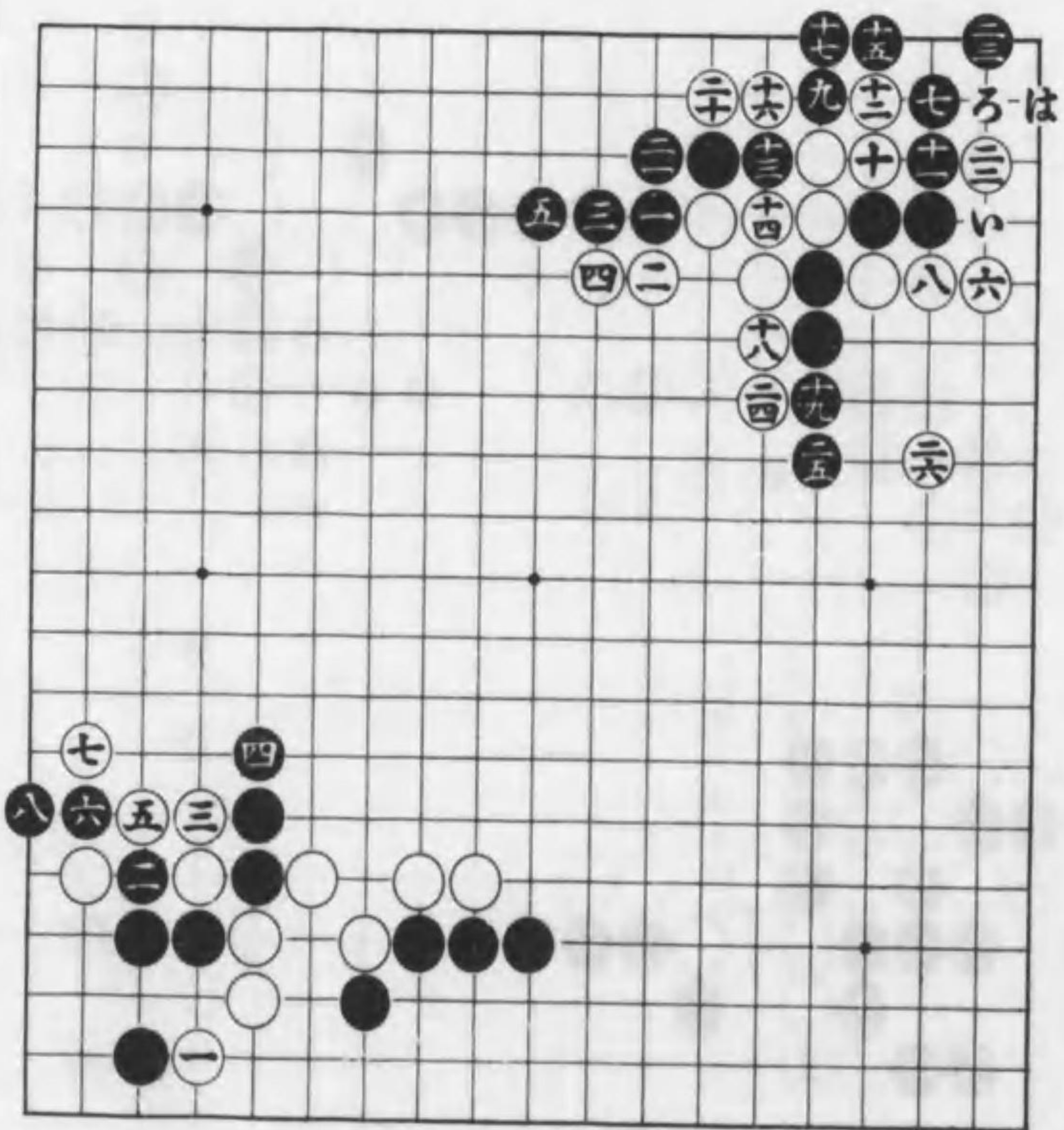
定石。往時は無かつた型です。黒八の變化は次々に示しますが、斯く八と曲つて白九の抱へとなれば最も普通。互角の勢と言へる。黒が先手を持するは則ち先著の齎す効果の現れに外なりません。前圖迄の如く二で受けてゐては右邊の姿勢の低きに堪へられぬ場合、又右下隅の配置を假定して次いで黒●と壓迫し、逆に白を低位に導く等は、この出切の根本觀念である。

右下隅に黒の締りが有つて、いに押す事を得れば黒は理想的です。



(第四十九圖) 黒一と綽上る型。

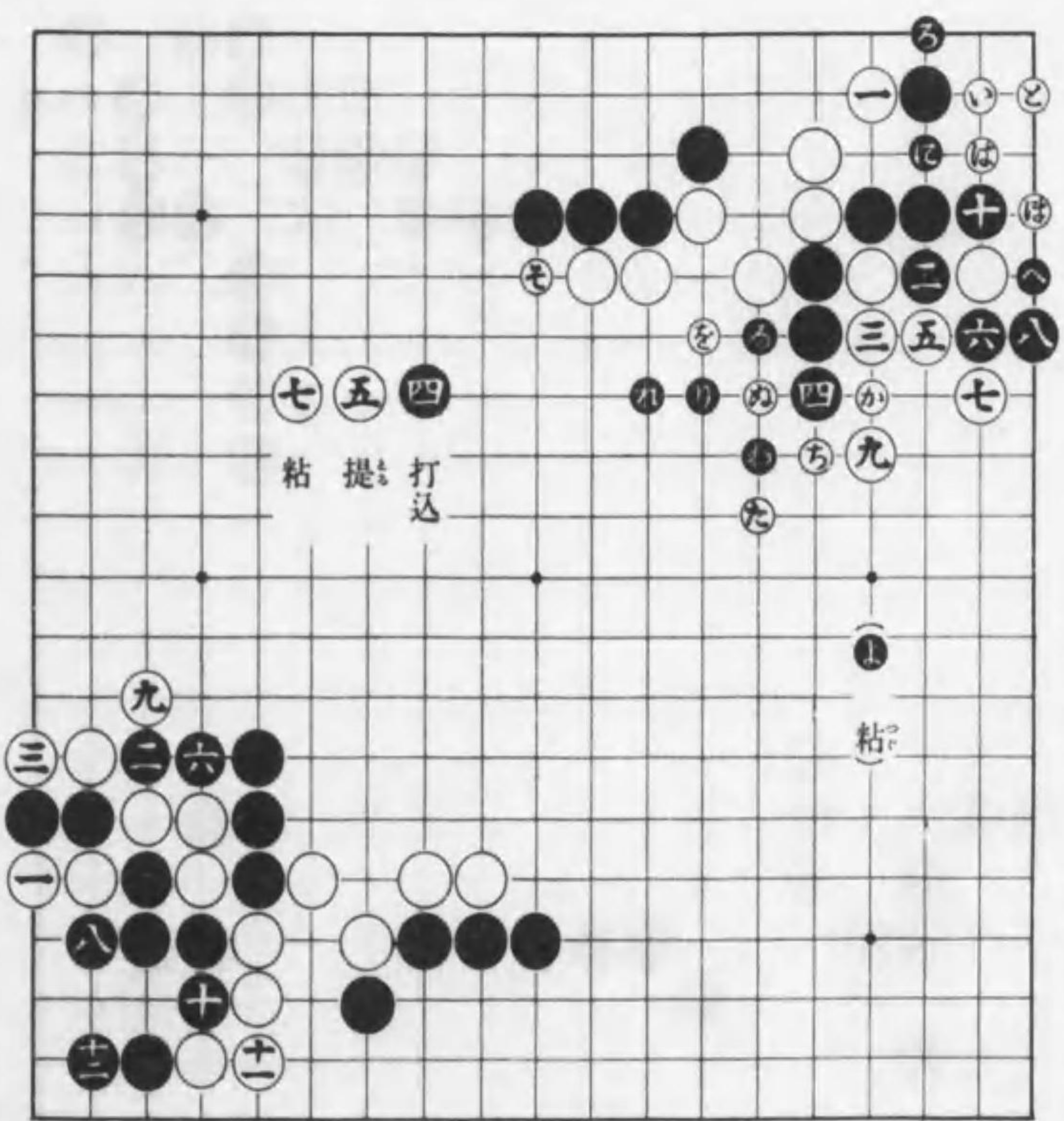
左上隅に黒の配置有れば正當ですが、必ずしも絶對にではない。白六は著理。黒七で八に出るのは無理の傾きが多い。後に示します。白八に就ては左下隅以降参照。白二十は左方からの狙ひを失つて惜しい處ですが、直に二二に頂けては、黒二十と抱へられて隅の遺利が無くなります。將來必要に應じて白いろは迄も利かせ得るは、二二二の働きに依るので、白二四で單に二六も有りませう。左下隅白一は不可。黒六八が好手順です。なほ順次に。



(第五十圖) 白九は己むを得ません。左下隅参照。

黒十と治まれば白の不利は否まれません。他日、左右の白が強固になつた時には、白(九)以下の手段は有る。但し是ととも小利を譲つて黒(八)を(七)の點に頂れば、大半は活路を保ちます。

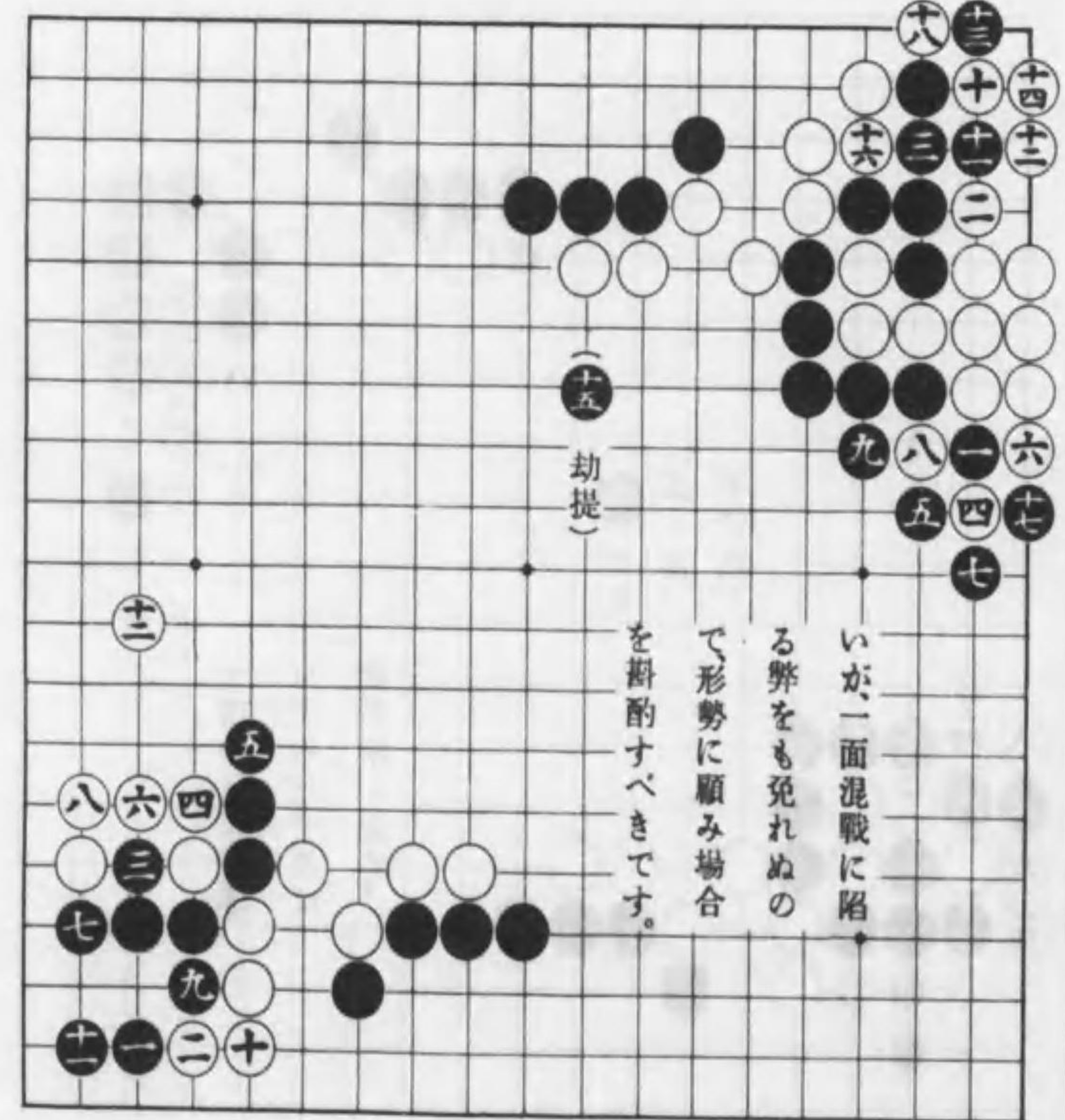
十の次に白(九)以下などが想像されるけれど、結局左上右下兩隅の配置次第と言ふ外ありません。左下隅白一以下は穩當を缺くものと考へる。十二迄、隅を活きてさへおけば、黒は立派に戦へます。白の形が熟してゐない。



名人圍碁全集 (五〇)

(第五十一圖) 前圖下、隅黒八の變化。こんな歸結も有り得ます。劫争が加はつて來るので煩はしいけれど、部分としては白十八迄となり、此結果白は約二十目の實益を挙げたに對し、黒は先手を以て味好く外勢を張りました。黒が悪くありません。

左下隅は前圖上隅黒六の變化。斯く七と約へて十一迄活きるも可然し十二と拓いて、何となく白がゆつくりしてゐる點、前圖に比し黒稍劣る氣味が有るやうです。第四十九圖上隅黒一と綽上る型は、一般に黒に少くとも不利は無

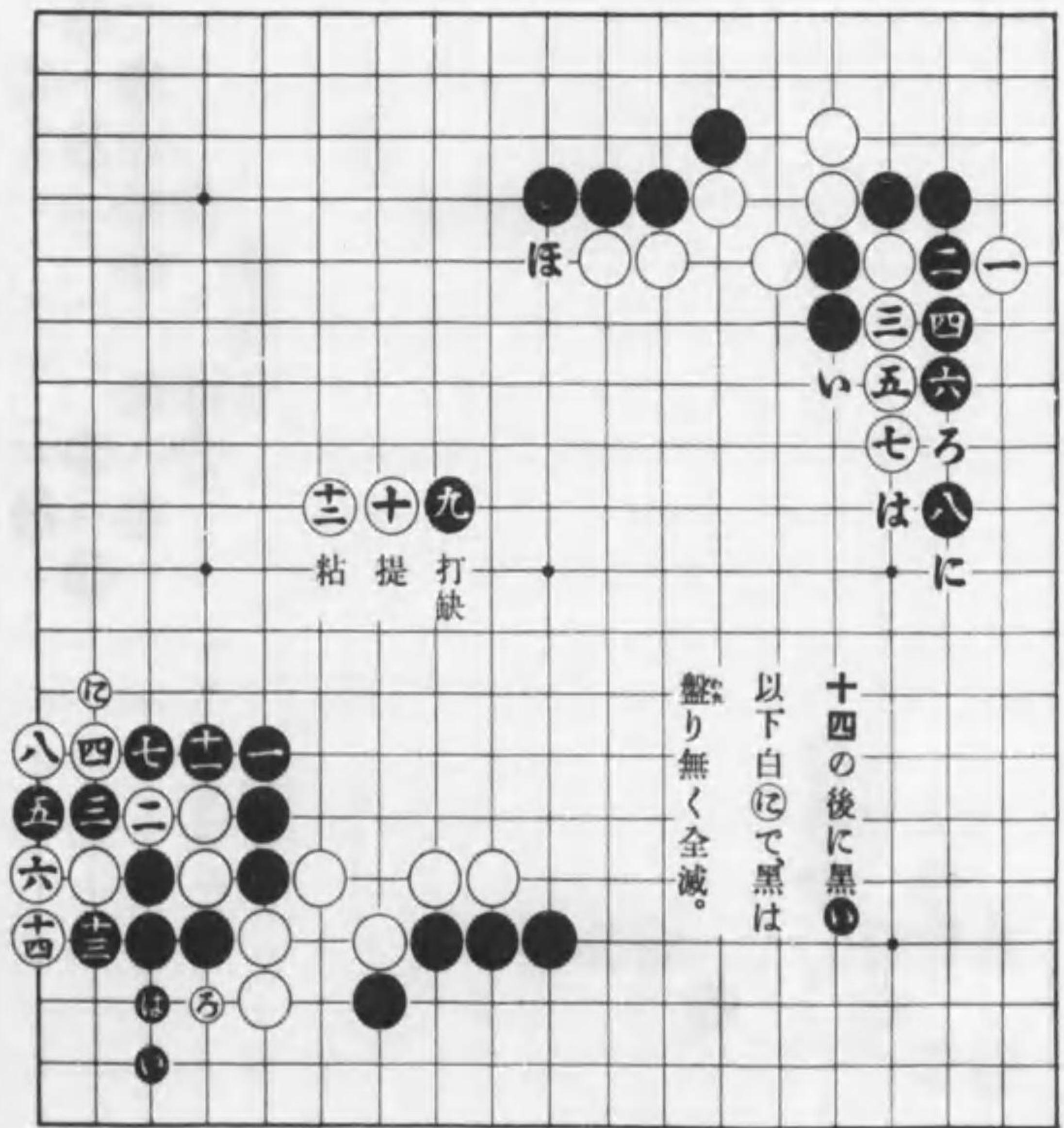


いが、一面混戦に陥る弊をも免れぬので、形勢に顧み場合を斟酌すべきです。

名人圍碁全集 (五一)

(第五十二圖) 黒二と直に出るのは、中腹の厚壯を期した白一の意中を行く事になつて、多くは成功しません。

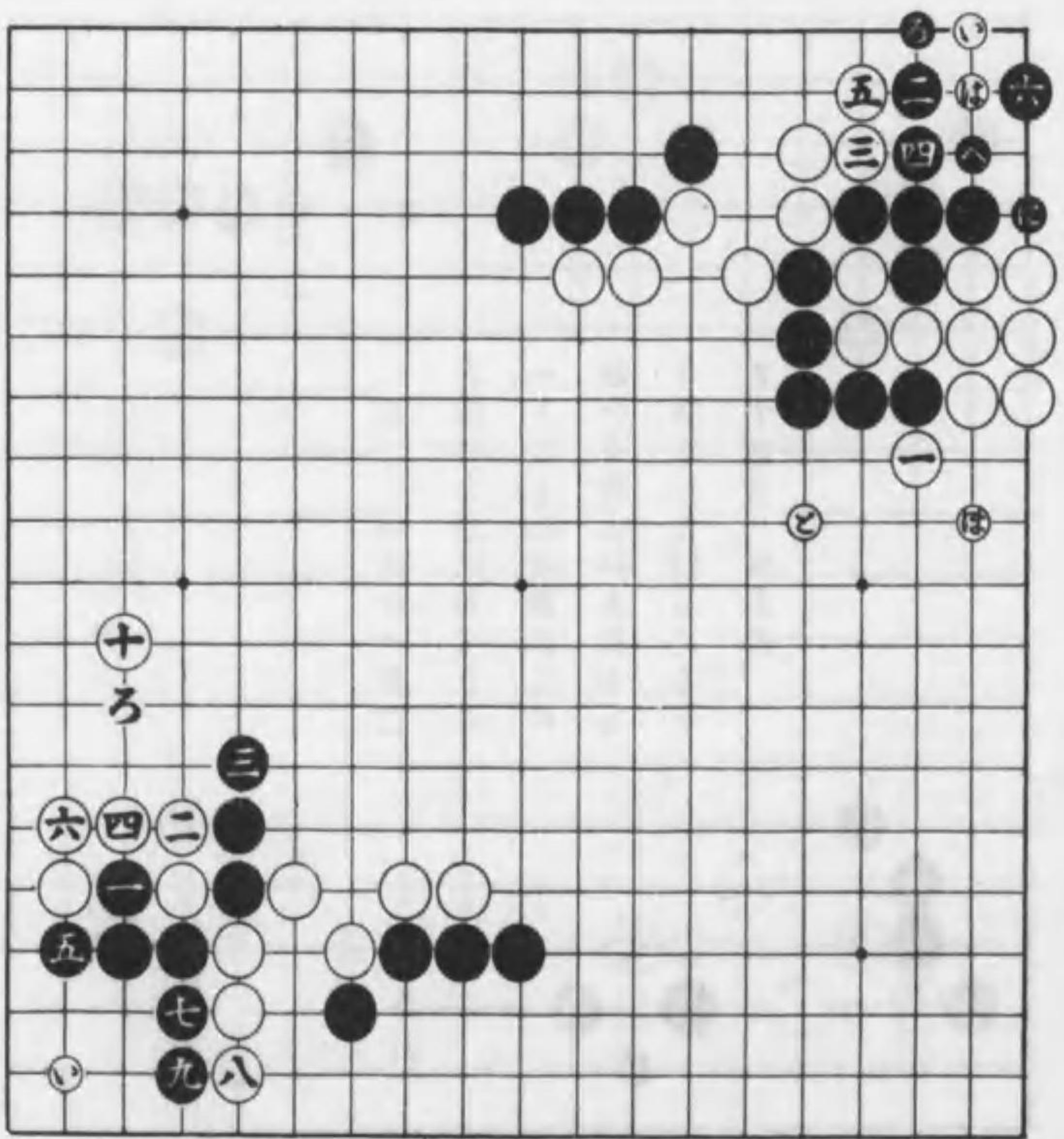
黒四でいに行る變化は次に示す。黒八でなほ一著ろに押し、白は黒にと飛べば黒ははに押す好點を失ふと同時に、ろの瑕瑾からも免れますが圖の如く單に八と飛ぶのははの好點を有する代りに、ろの弱處を控へるに依て、隅には白に多少の遺利を見られるのです。八の次に白ははほ何れかを押す。左下隅黒一三は、十四迄となつて黒が旨く行きません。なほ次に。



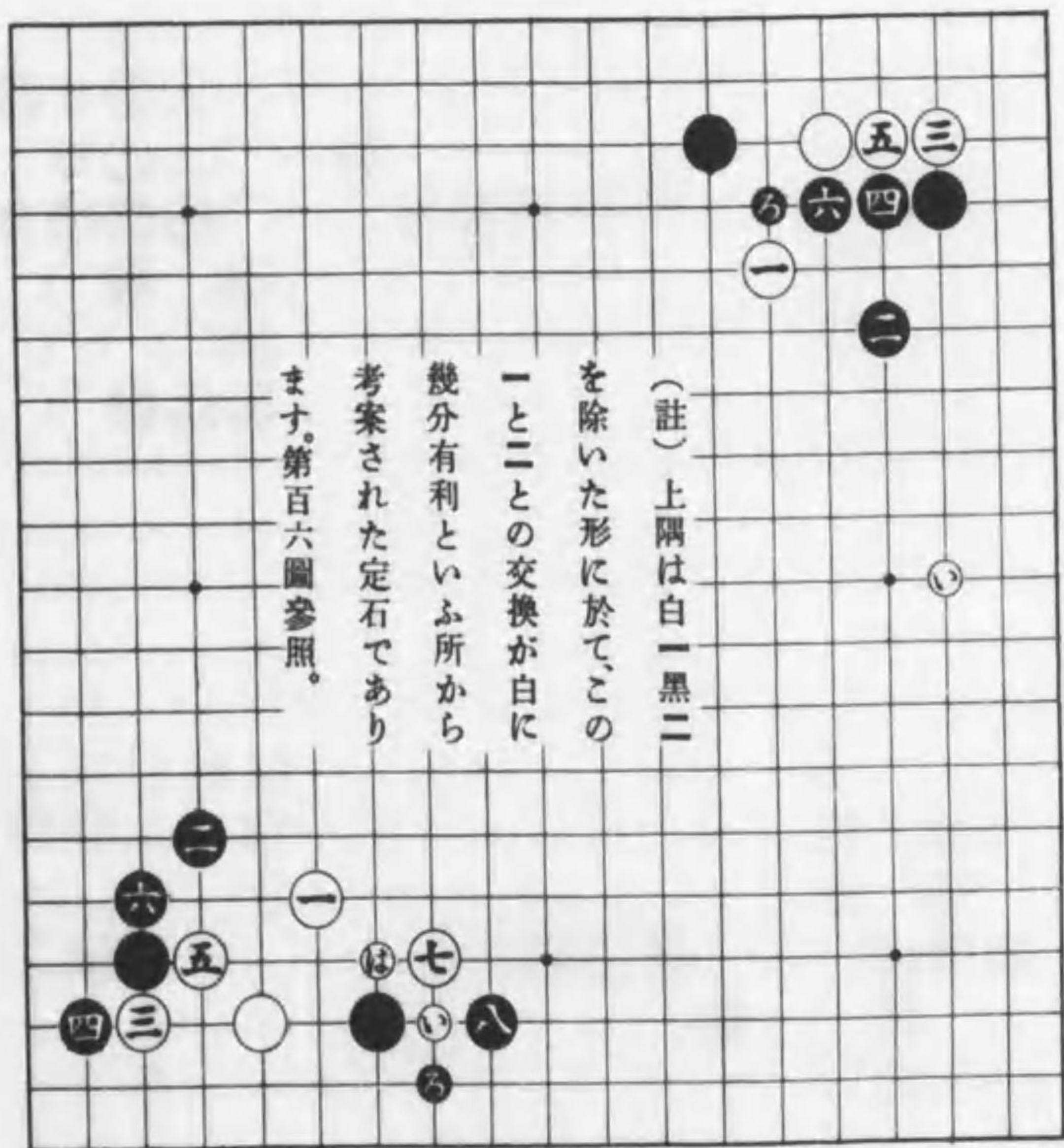
(第五十三圖) 白は前圖下隅十

四の手で斯く一と絆ねても良い。黒六に次で白(1)と置かれ、結局(2)と(3)との交換を強ひられる點が黒の忍びない處です。

白(2)となつては黒が旨くない。左下隅は後に白(1)と置かれる劫の手段が残るので、これも黒が不十分なる事疑ひありません。但し黒九をろに行けば、白九で黒死。出切の變化に就ては以上に依て略説き盡しましたが、黒としては何時でも第四十八圖の簡明に従ふ事は出來ます。なほ二・三間夾の出切をも参照してほしい。

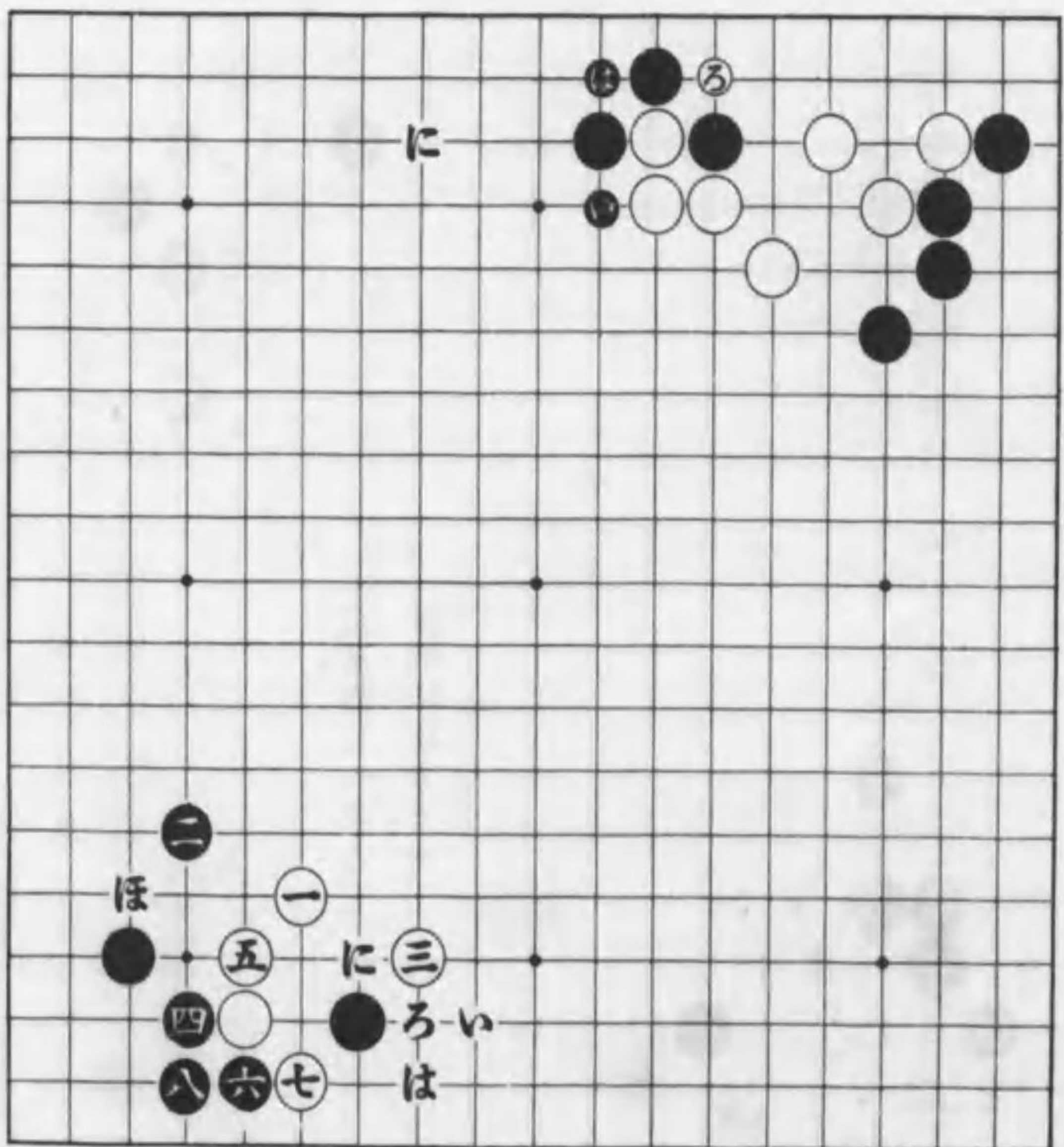


(第五十四圖) 白一と斜走する型。勿論黒六の頂を凌ぐ心です。黒二四の變化は次々に述べますが、四の手は斯く行びる方が普通であり、一般に有力である。黒六迄で一段落。後に白が①の方面に加はつた時に、黒②と連絡します。③を怠つて白から此點に打たれては、黒に有利なる筈が無い。左下隅は黒四と絆ねる變化ですが、第五圖右隅の定石に比して、白の方が働いた形である。白④以下は自己の治まるを主として機を得て打つべきものと思はねばなりません。なほ次に。



(註) 上隅は白一黒二を除いた形に於て、この一と二との交換が白に幾分有利といふ所から考案された定石であります。第百六圖参照。

(第五十五圖) 前圖下隅の後に黒が此處を打つとせば先づ●と押す位です。但左上隅に黒の締り其他の勢力有る事を前提とする。●の次に白⑤黒⑥と粘ります。逆に白の勢力有る際には、●に押す手に、拓くやうな事となる。左下隅は参考迄に掲げるのです。が、白三と掛けて黒四と尖頂けられては、白が宜しくありません。黒四は肝要であつて、是をいかに受け、白黒は白となるのは、隅の定まらざるだけ、前圖より黒不利。四に次で白五ならば黒六白七黒八にて、白ほの頂越も無く、黒有利。



(第五十六圖) 黒二と尖む變化。

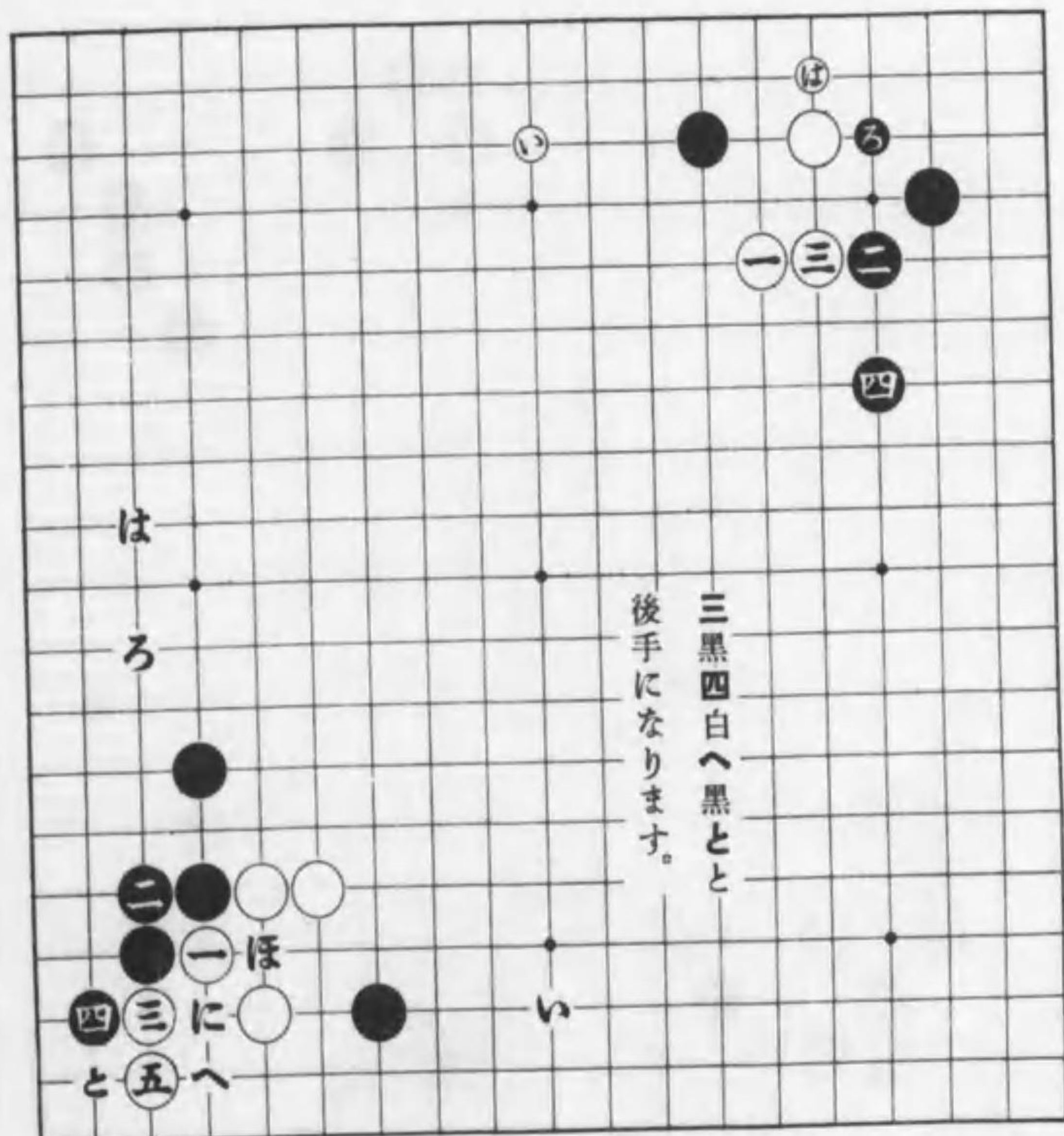
これも普通に行はれます。

黒四は穩當ですが、次圖に言ふ注意を要する。

四の次に白⑤と夾んで来れば黒⑥白⑦と應ぜしめたまふ、他に轉ずる事となります。

左下隅白一以下の手順を履むのは、先づ自己の根據を確めてからに夾撃せんか、又ろの方より追らうかと見合ふ意匠です。黒は形勢に従つて、いなりはなり適當とする點に拓いて宜しい。

黒二と單に粘ぐべきで、にに當て白ほの交換を先にして粘れば、白



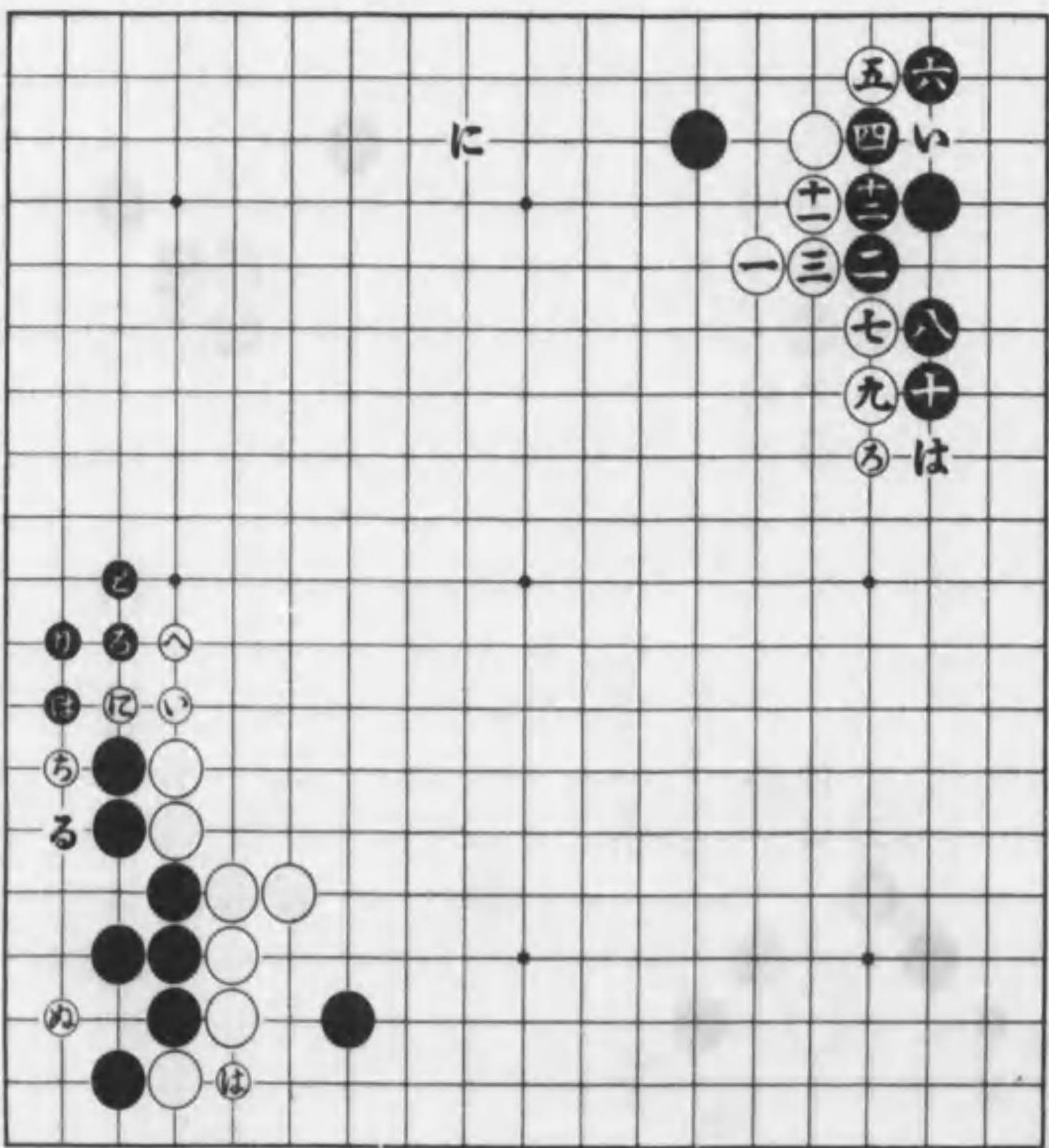
三黒四白へ黒とと
後手になります。

(第五十七圖) 黒四とこゝで尖

頂けるのが前圖下隅に顧みてその理有る如くして實は太だ宜しくない手です。

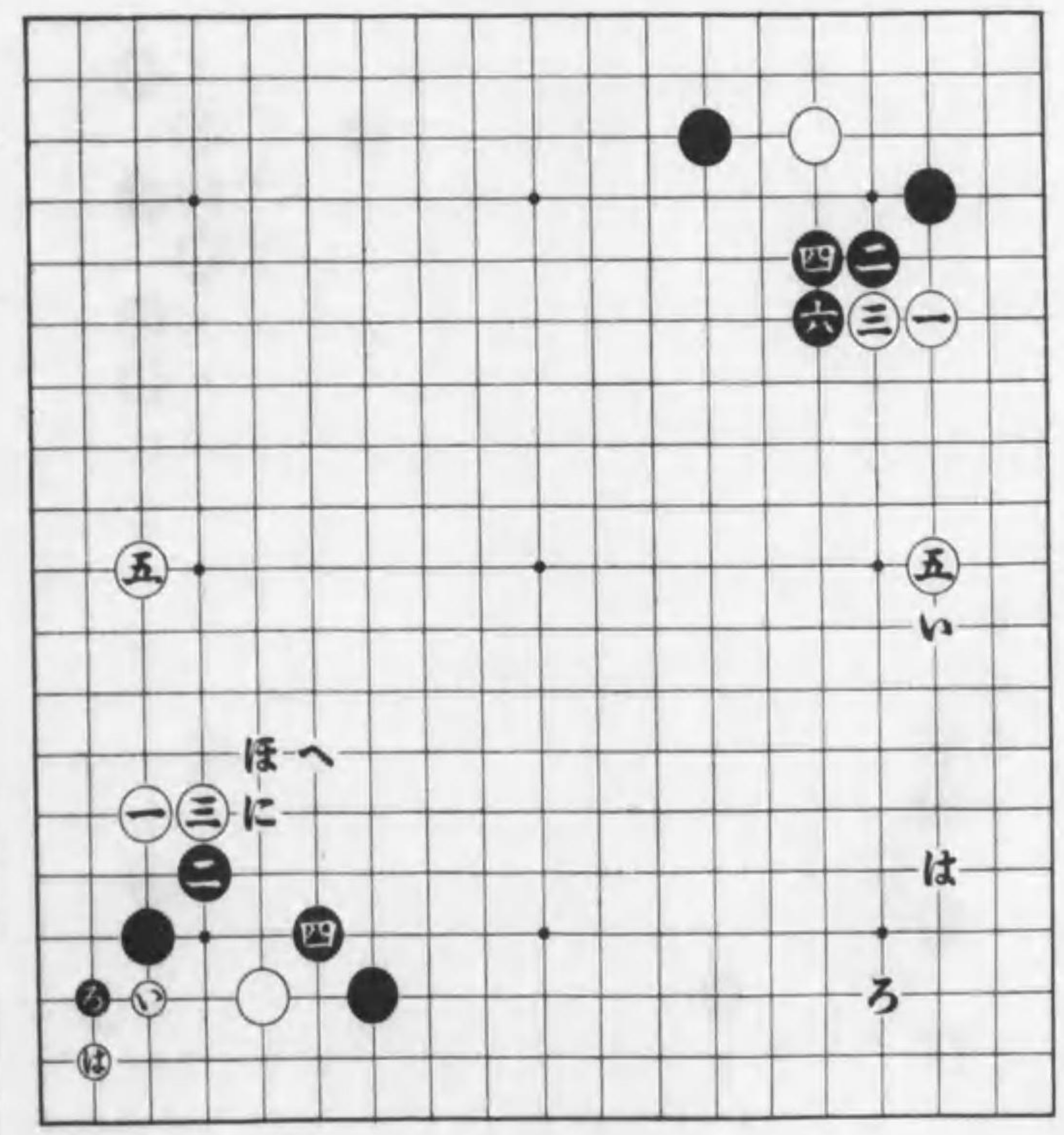
黒十二はいに粘ぐ事も出来るけれど、孰れにせよ、白十一を好便に利かされて、徒らに白の勢力を増すに過ぎず、次に白⑧と行ひられはの約込み、にの夾撃、兩者何れかを見られる。

左下隅は白⑤黒⑥の後に白⑦が加はつて、黒手抜すると、白⑫以下黒⑪に次いで、白⑩と置かれる手段を残します。但し黒⑧をるに抱へるのは、それだけでも黒不利。



(第五十八圖) 白一の間夾返。
是が爲には右下隅方面に白の配置有るを便宜とする。二間夾に於る此夾返は幾分強行の傾きを免れぬやうです。

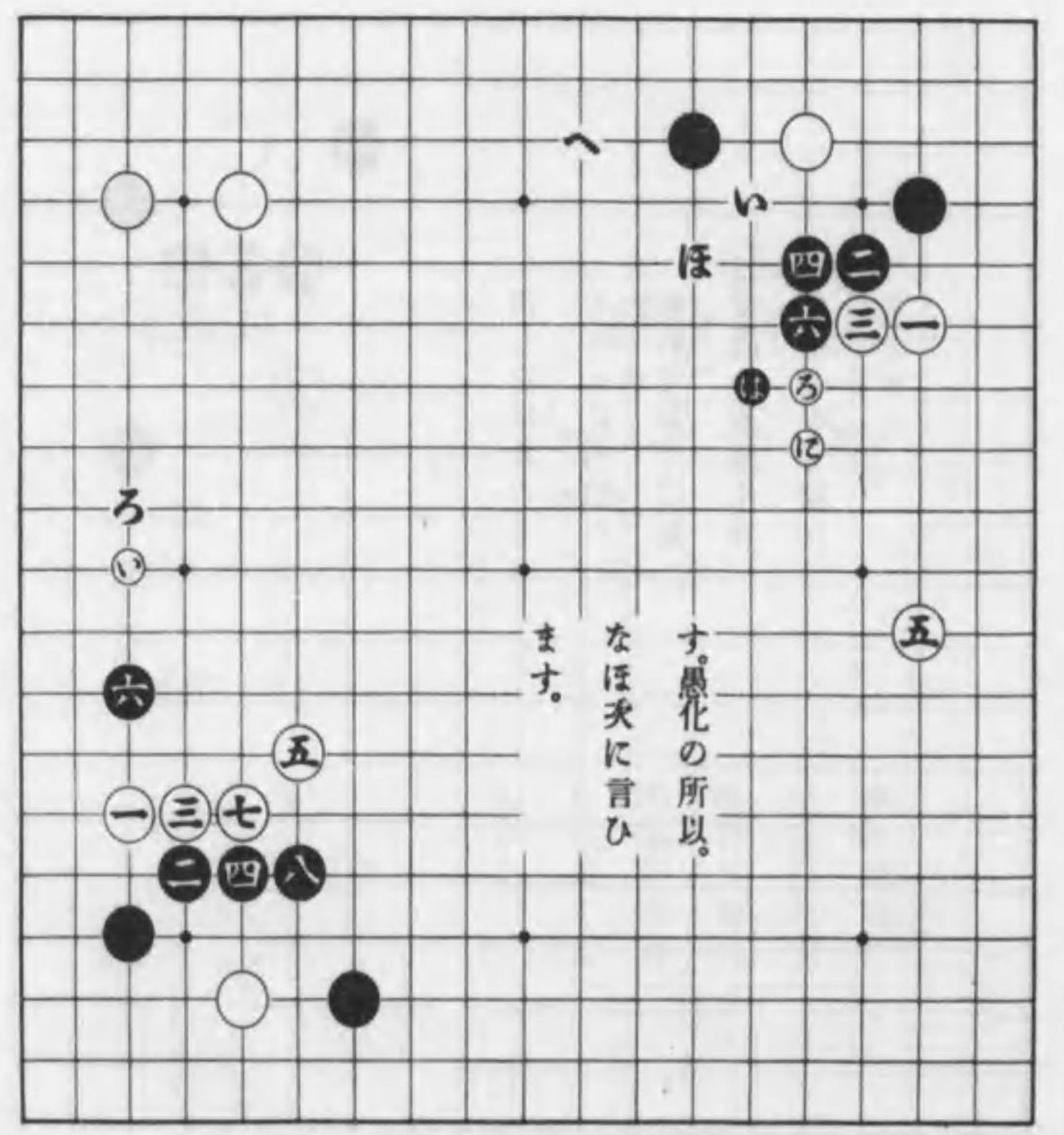
黒二の變化は順次に示します。白五をいに進める事も可能。右下隅に白ろ黒はの交換ある際等は殊に然りです。なほ次圖に言ふ。左下隅黒四も往々行はれますが機を見て白(一)(三)と二段に約へられる味が残るので、五の次に白にと手厚く行切り隅の味を見て打たれるのが黒の苦痛。而も黒からに、白ほ黒への二段倅は不可能。



(第五十九圖) 前圖上隅の續説。

黒六は白いの尖出に備へつゝ、右邊への打込を含む。六に應じて白は(一)(三)と倅行る位のもので、後に黒はほ若しくはへと補つて隅を完全に保有します。

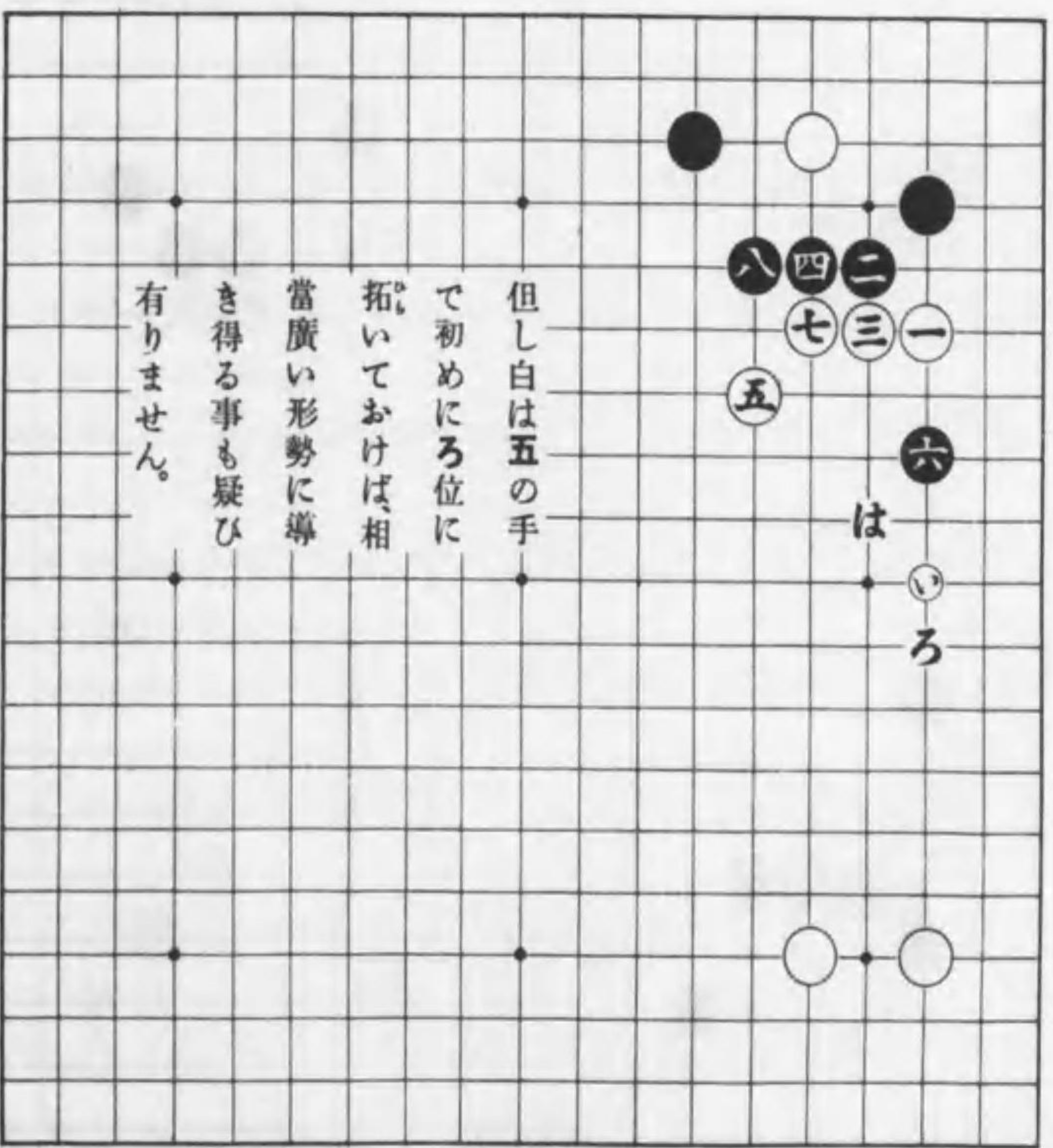
左下隅は白五と斜走する型。上隅黒六の曲りを嫌ひました。殊に左上隅に白の締り有る際等に用ゐる。即ち黒八の次に、白(一)又ろと夾んで地域を開拓するのです。黒六は著理。是に依て七八の交換を促し、白五を愚化せしめました。七八を先にしたと假定すれば、黒六に對して白五は緩漫に過ぎま



す。愚化の所以。なほ次に言ひます。

(第六十圖) 更に七八の交換に依て、隅の白一子は、假令多少の味は有するにせよ、逸出の途を失ひました。これ亦六の著理の效果である。

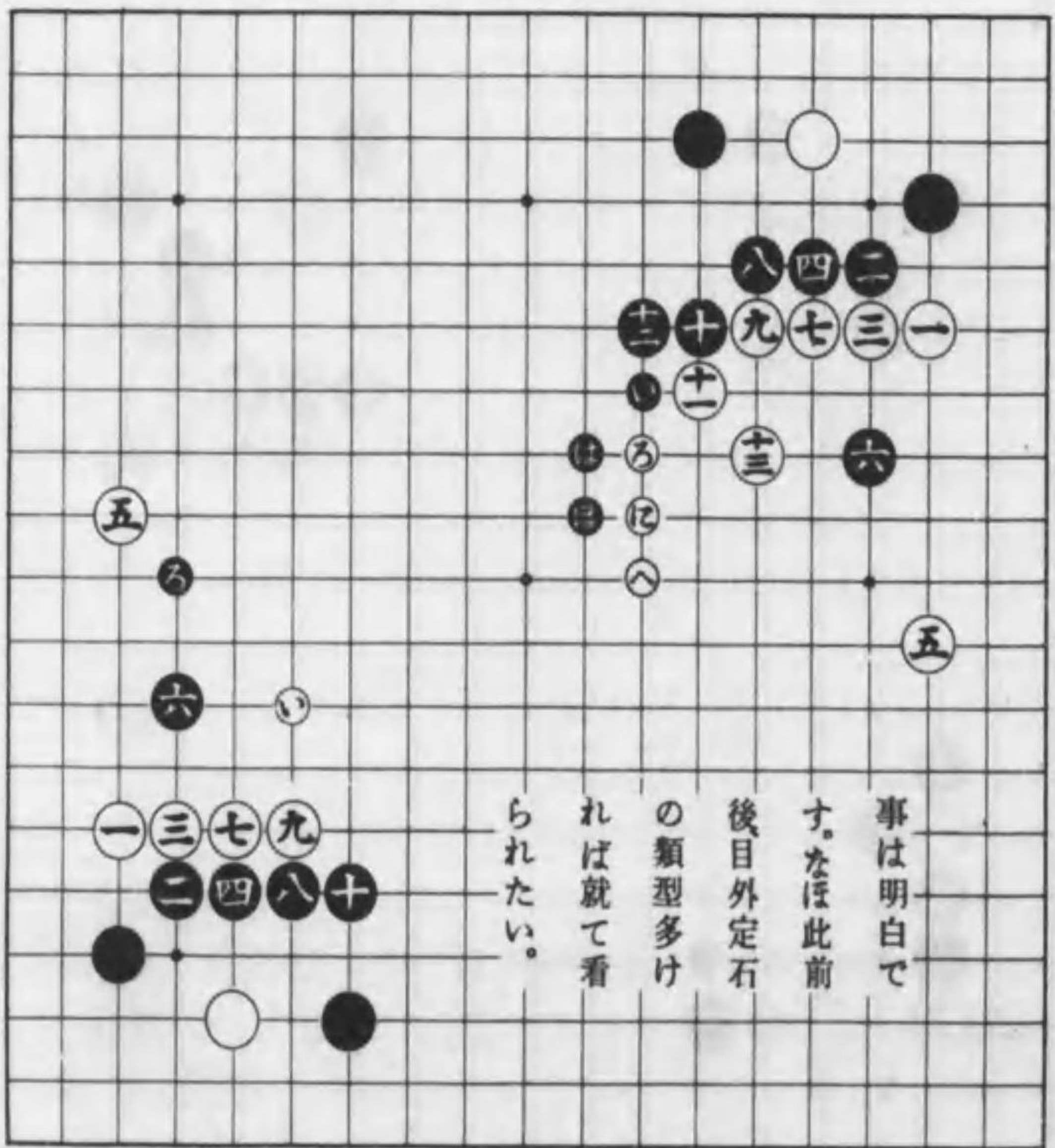
黒八に次で白⑤若しくはろと、この方から迫るべきは當然ですが何れにしても黒六が有る爲に、右邊の模様は完全に白地となり得ません。又黒は六の手で、高くは打込む事も出来る。要するに黒六或ははの著理は、一間夾無くとも、即ち目外定石成立するのですから本圖は白不利と斷ずるを妨げない。



但し白は五の手で初めにろ位に拓いておけば、相當廣い形勢に導き得る事も疑ひ有りません。

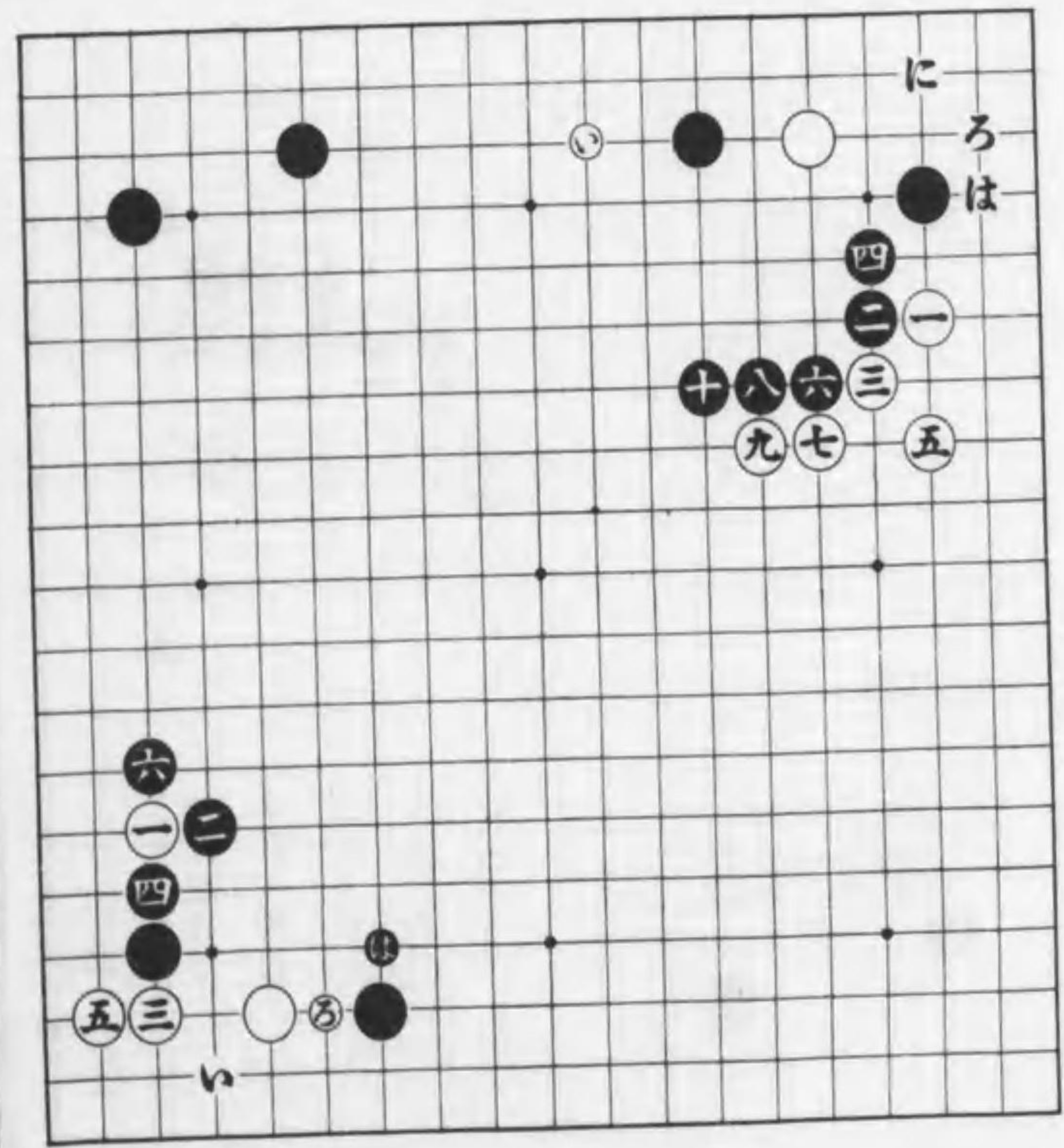
(第六十一圖) 白五と廣く拓いた際、黒六と打込む手段も有りませす。白七以下を促して自然に十二迄運び、是に依て上邊一帯に大なる形勢を張り得る時に成立する。

白十三に次で黒以下、極力豫定の作戦を遂行する事は可能です。然しながら左上隅方面の關係から、斯く運んでも大模様を張るに不便と觀た場合には、黒は十の手で左下隅の如く行切つて、隅を確保する。次に白⑤が加はつても、他日機を見て黒の有る事、其他すべて上巻目外定石参照。彼に比し一間夾有るだけに黒の有利なる

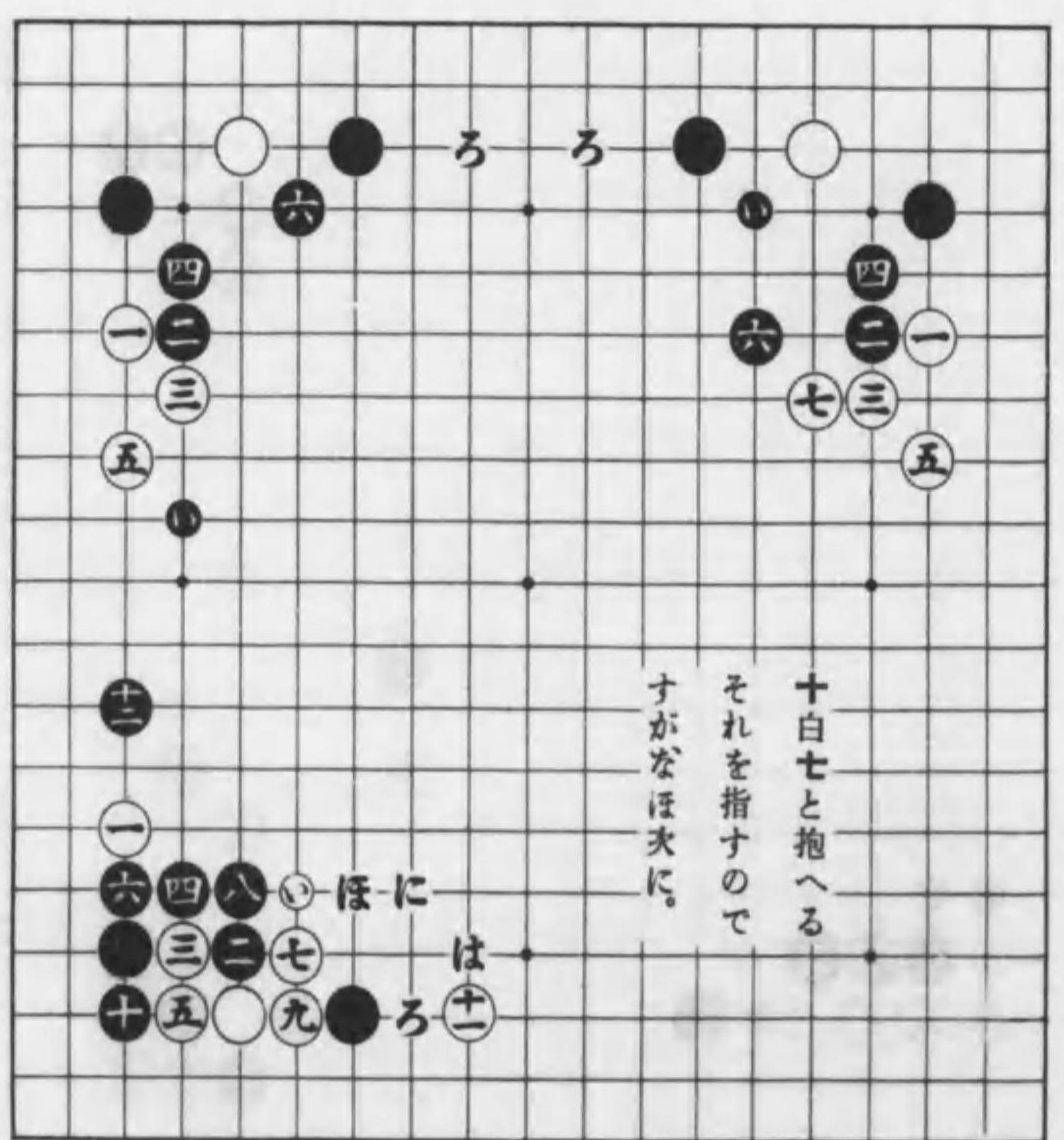


事は明白です。なほ此前後目外定石の類型多ければ就て看られたい。

(第六十二圖) 黒二四と頂引く型。右邊を白に廣く取られまいとするのが主眼ですが、左上隅に圖の如き大締りでも有れば格別、一般には黒は勢のみ壯に見えて實質に乏しい憾みを免れません。白(1)を利かされる缺點の不斷に有るのが最大の缺點です。且つ隅にも機を見て白ろと置いての味を狙はれます。白ろ黒は白にて急にはこの石を屠る事不可能である。なほ次圖参照。



(第六十三圖) 黒六と飛ぶ變化。白七に次いで(8)と尖まざるを得ない點、六は緩著の非りを免れませんが、前圖上隅よりは實質に於ては優ります。白ろは無効です。左上隅は黒六と單に尖んで、この一手で完全に隅を封鎖しました。而して機を見て黒(9)と迫る狙ひを持つ。白ろは矢張り利きません。左下隅黒二と頂れば征の如何に拘らず、白三と縛込んで十二迄となる位のもの。十二の次に白(10)と押して、黒ろ白は黒に白(11)黒ほに備へる。時に此型も採用出來ます。征とは黒四を五から切り、白四黒

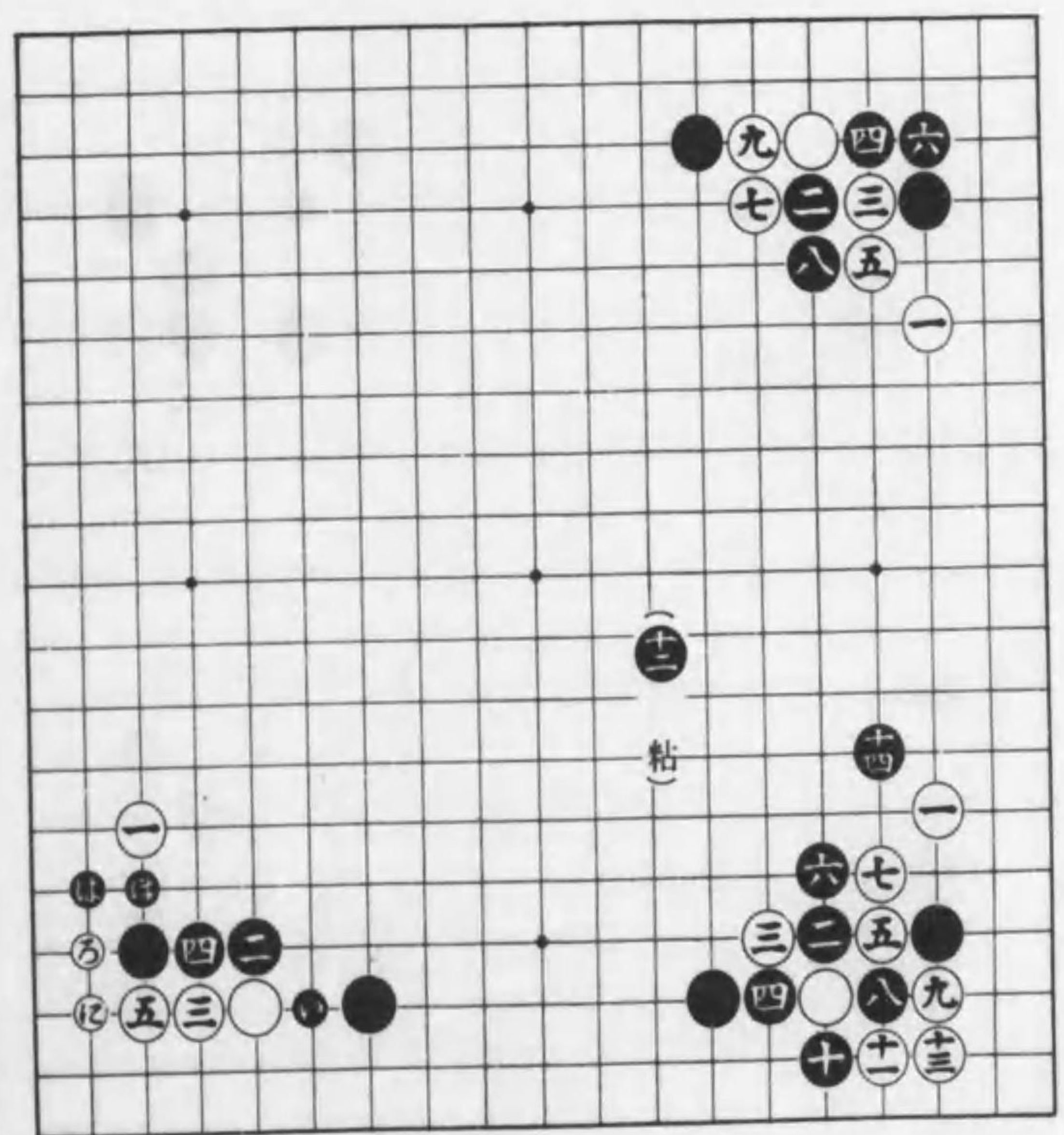


十白七と抱へる
それを指すので
すがなほ次に

(第六十四圖) 征關係が白に不利として、黒八と行出して、白九と粘がれては、黒は危険を免れず、少くとも成算は持てぬでせう。形勢にも依るけれど、定石として數ふべきものではありません。

左下隅白三五と隅を活きるので、一と夾返した石が黒の堅壁に接近して孤立します。第百六圖の手抜定石の後に白一を加へたに略等しく、感服出來ない。置碁大斜走三々打込定石にも歸する理。

右下隅白三と繰出すのは全然無謀。参考迄に示すのですが、十四と掛ければ黒が宜しい。

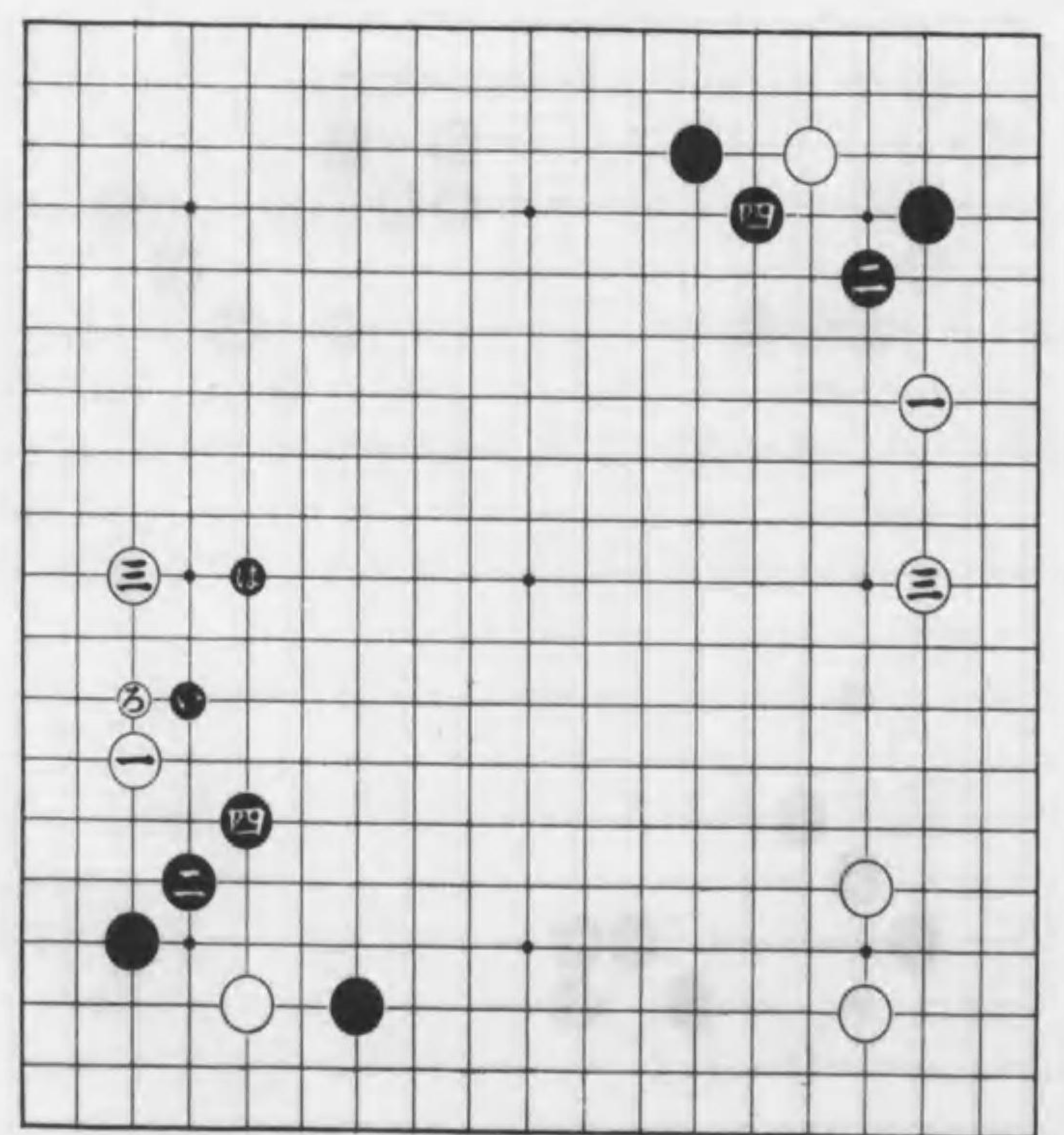


名人圍碁全集(六四)

(第六十五圖) 二間夾返に入る。黒二白三の變化に就ては順次に言ひます。黒四迄となれば最も無事であり、而して是にて一段落。

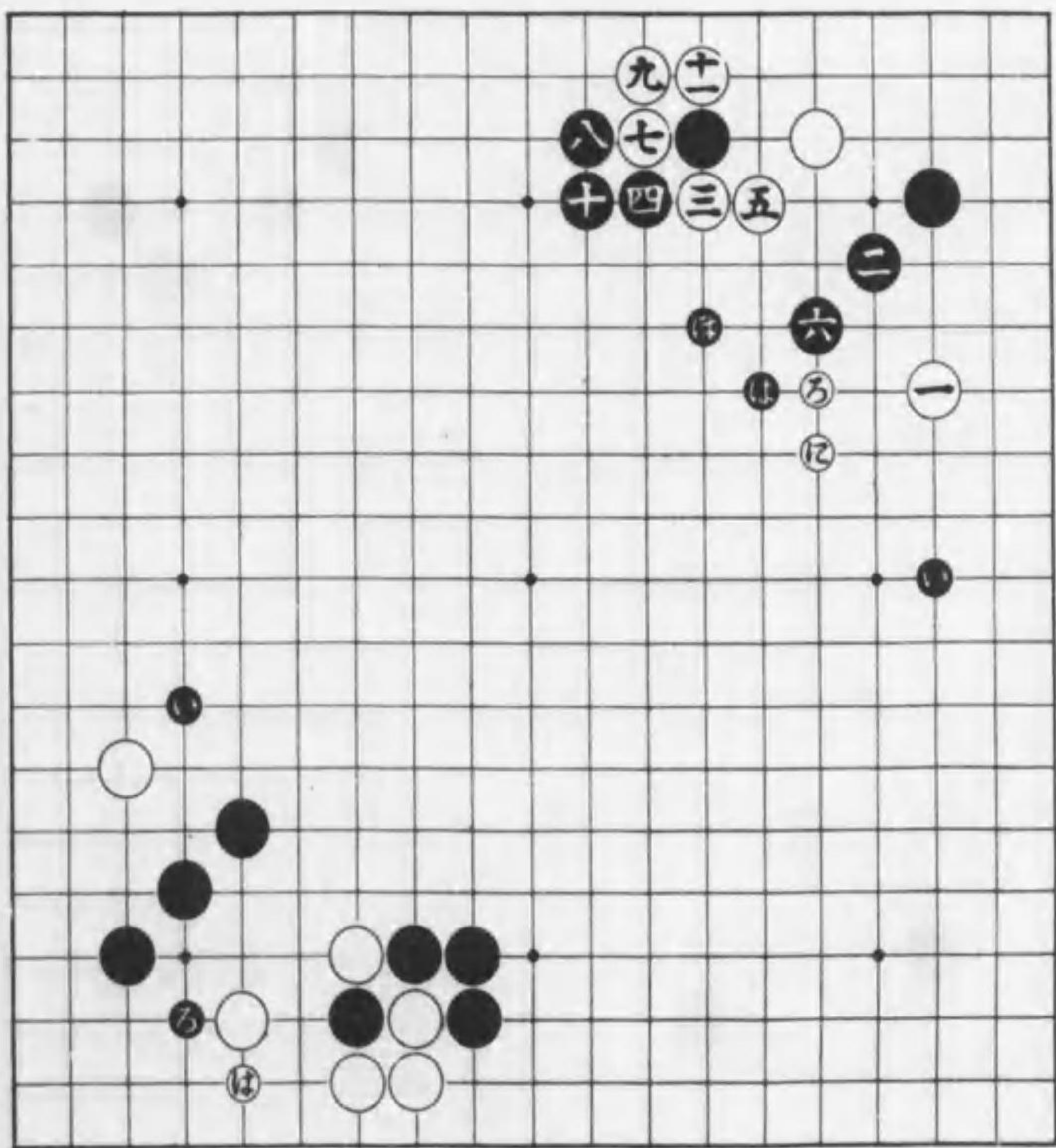
右下隅に圖の様な縮りでも有れば理想的ですが、實際には右下隅の配置如何を超越して白一三が成立します。なほこの二間夾返に關しては第七十四圖左下隅に掲げる根本條件が必要である。

左下隅黒四は、二子三子を布かせて、白の打つ事が往々あるといふ迄。機を見て黒●白○黒●と煽る含みですが、右上隅の完全なるには及びません。



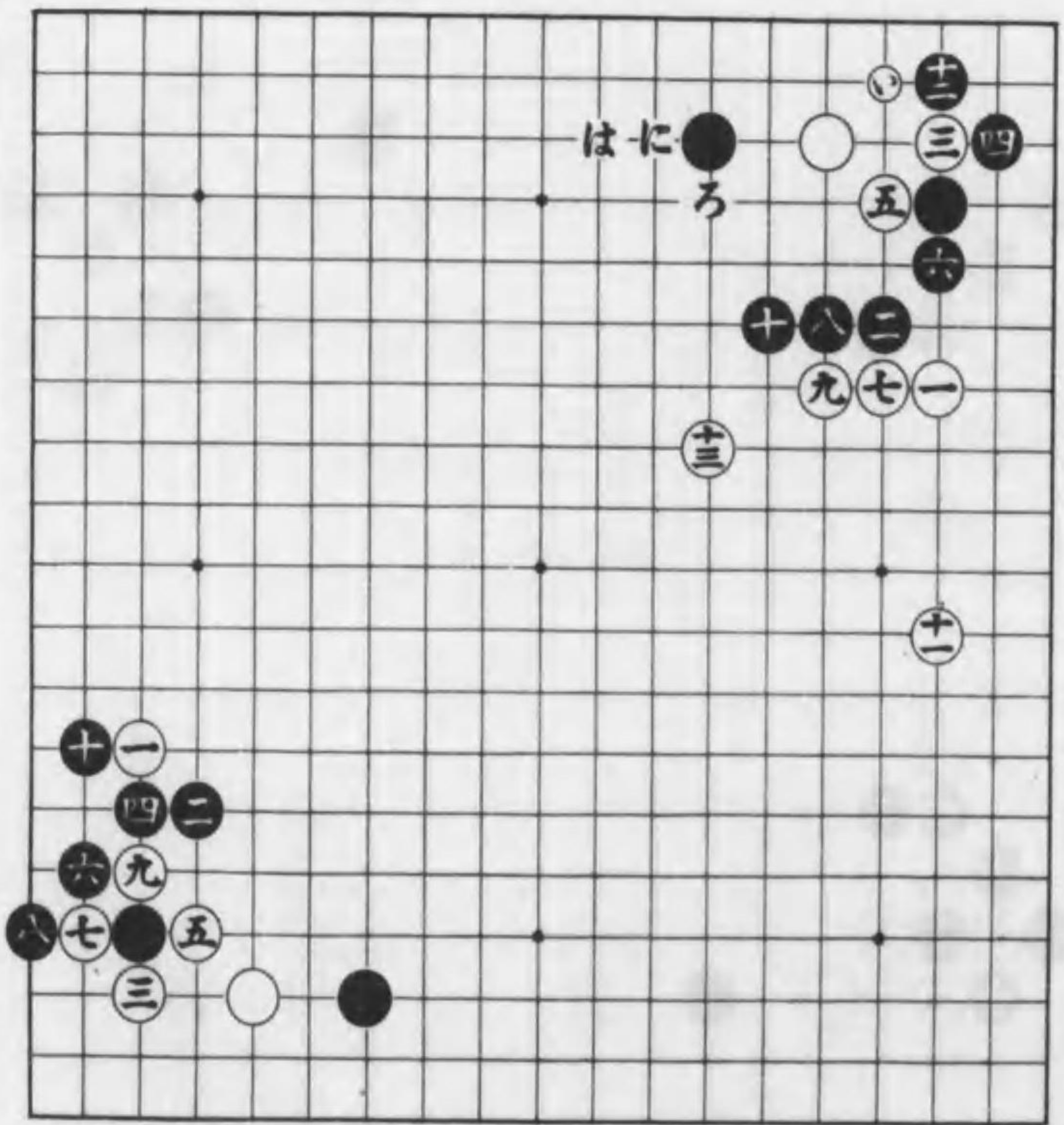
名人圍碁全集(六五)

(第六十六圖) 白三五と頂引く
 變化。一で直に頂引くと第七圖と
 なつて、一の點には黒から拓かれ
 る可能性が有るのを防いだ所が、
 白は働いてゐやうといふ意味で
 す。それだけに白稍無理の嫌ひは
 免れませんが、右下隅との配置關
 係に依ては三五は有力なる意匠
 たり得ます。
 白十一で一段落機を見て黒と
 迫り、迄の手順に依て自然に白
 の出路を塞ぐ含みが有ります。
 なほ左下隅黒と掛けて壓迫す
 る場合も有るべく、又黒に對し
 て白は常に殆ど絶對です。



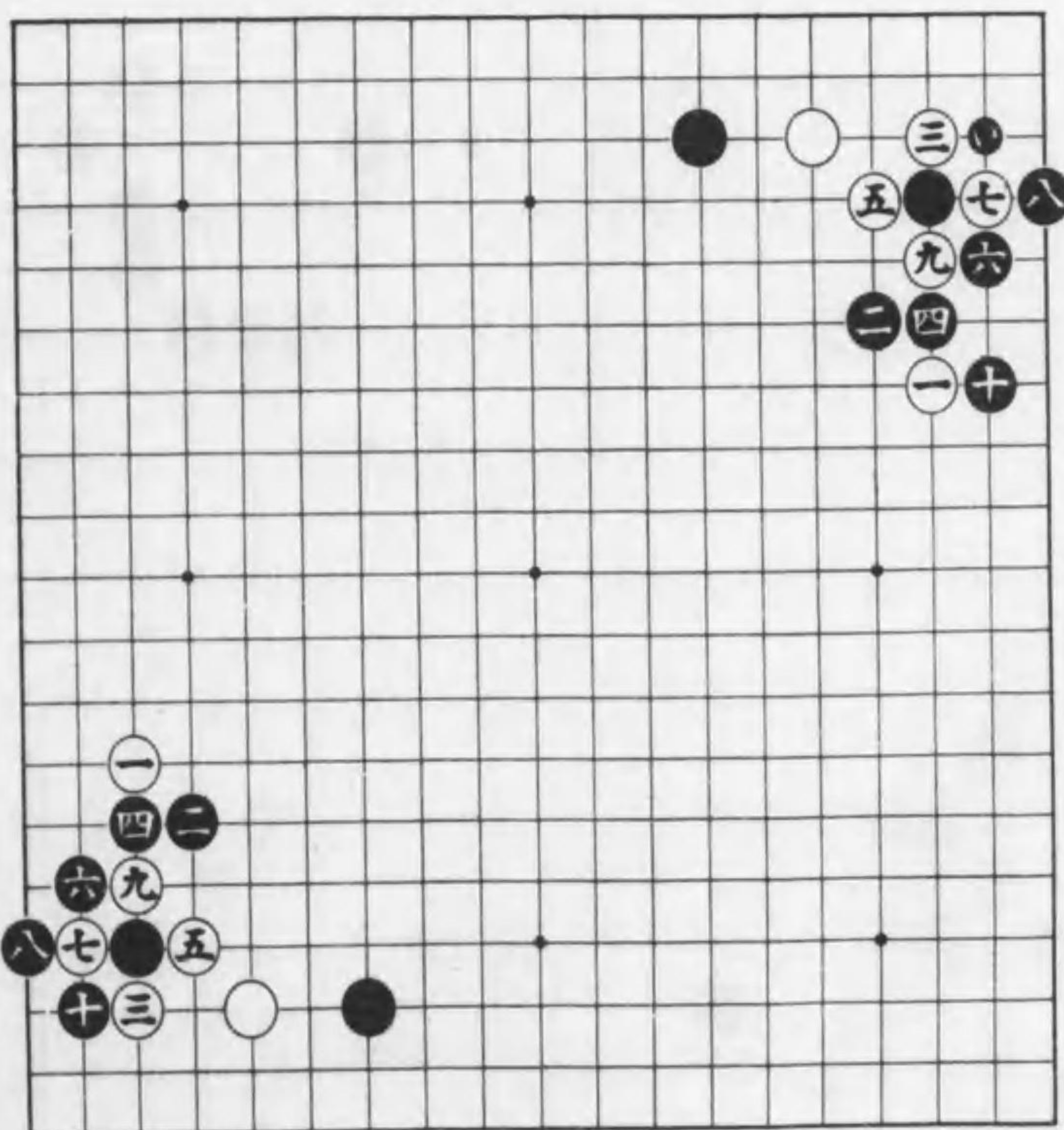
(第六十七圖) 黒二と斜走する
 型。前圖迄の堅實には一般に劣る
 ものと考へられる。

白三で直に七に押す變化に就て
 は順次述べますが、斯く三五と隅
 には味を残して七九と押し、十一
 と拓く迄、白は理想的の運びです。
 黒四の別法は左下隅に。
 黒十二と根據を奪つた時に、白十
 三は右邊を手厚くしつゝ、機を得
 てと約へる劫味を嚴しからし
 める意味。然る後に白は猶ろはに
 等より利かせる狙ひを持ちます。
 左下隅は黒四と約込み、六八が働
 いた手です。なほ次圖に續説。



(第六十八圖) 黒十迄となれば、前圖上隅に對比して、この方面に地域を開拓しやうとした白一の意匠が挫折に到つた形である。後に黒からは●と當て行く含みが残ります。白九を●に粘ぐ變化は次圖に示す。

左下隅黒十と直ちに當る烈しい手段も時には成立し得るのです。全局に於ける劫材の關係を豫め推究する事を要し、雙方共に恐い譯ですが、絶無とは言へぬ過激策。白は直接是に應ぜず、他に劫材を求めて趣向します。恐らく勝敗を左右する程の劫争となるでせう。



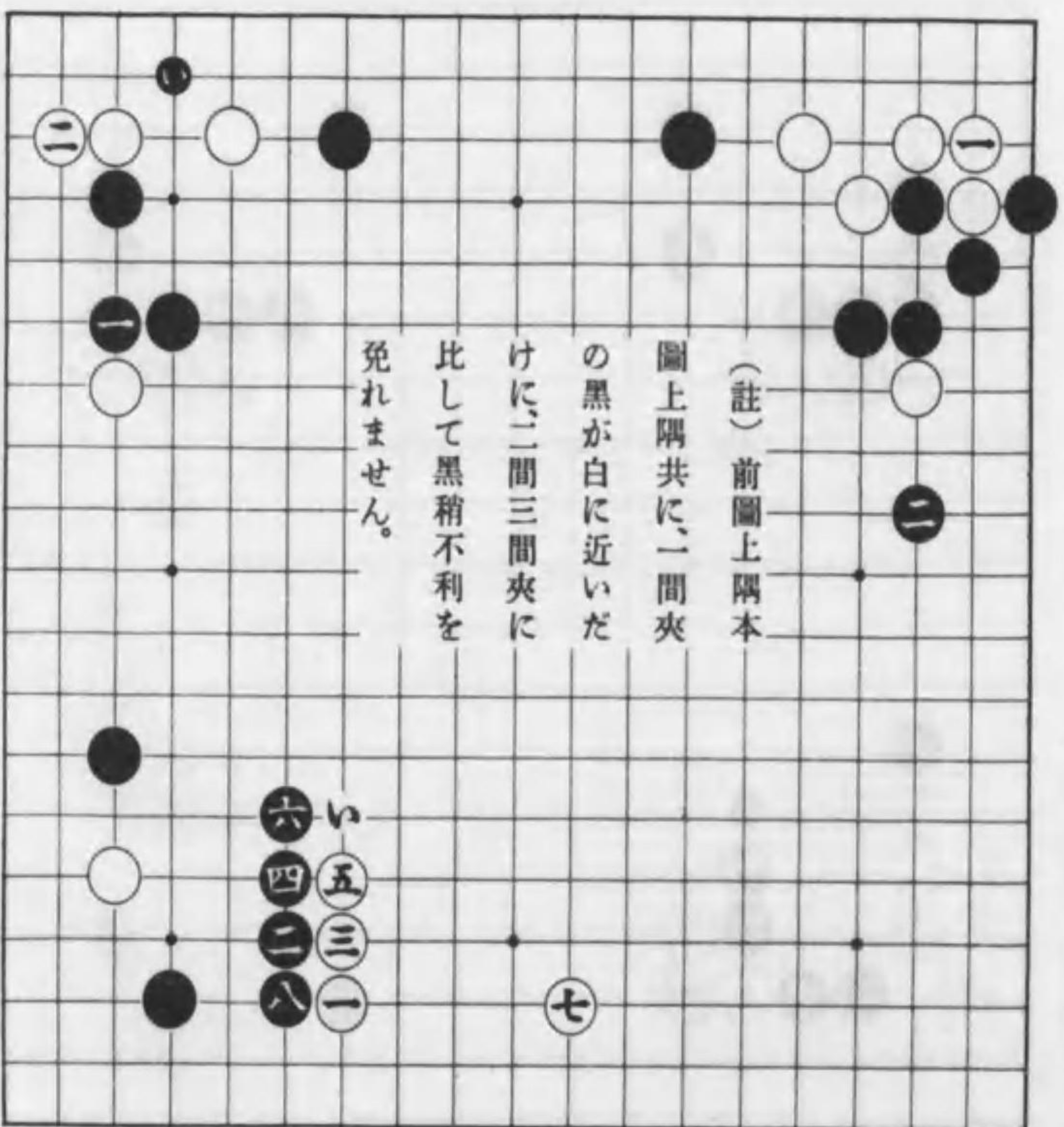
(第六十九圖) 前圖下隅白九の

變化ですが、白一と粘げば、黒も今度は二と夾みます。

左上隅、白二と下るのは斷然有りません。一間夾では、黒●の脅威が避けられぬからで、第六十二圖下隅に於けると全く等しい。

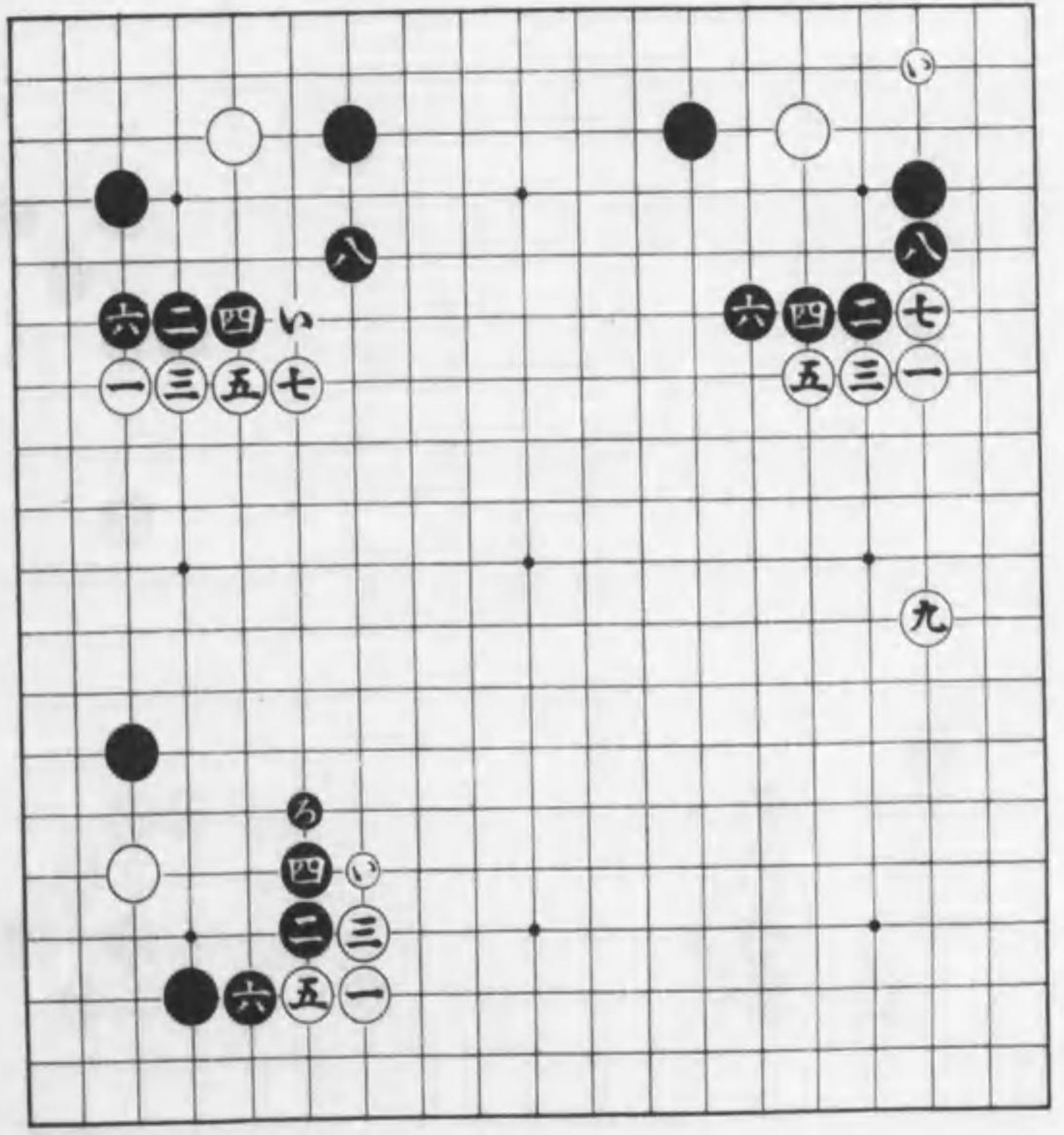
左下隅は白が三五の押しを先にして七と拓きました。

黒八が要點。これに依て隅の味は殆ど消滅したに近く、而も次に黒いと曲れば、一以下三子が虚路詰りの形ゆへ、頗る薄弱となる。然し白は五又七で八に曲る手順有り更に黒四の別策に就ては次々に。



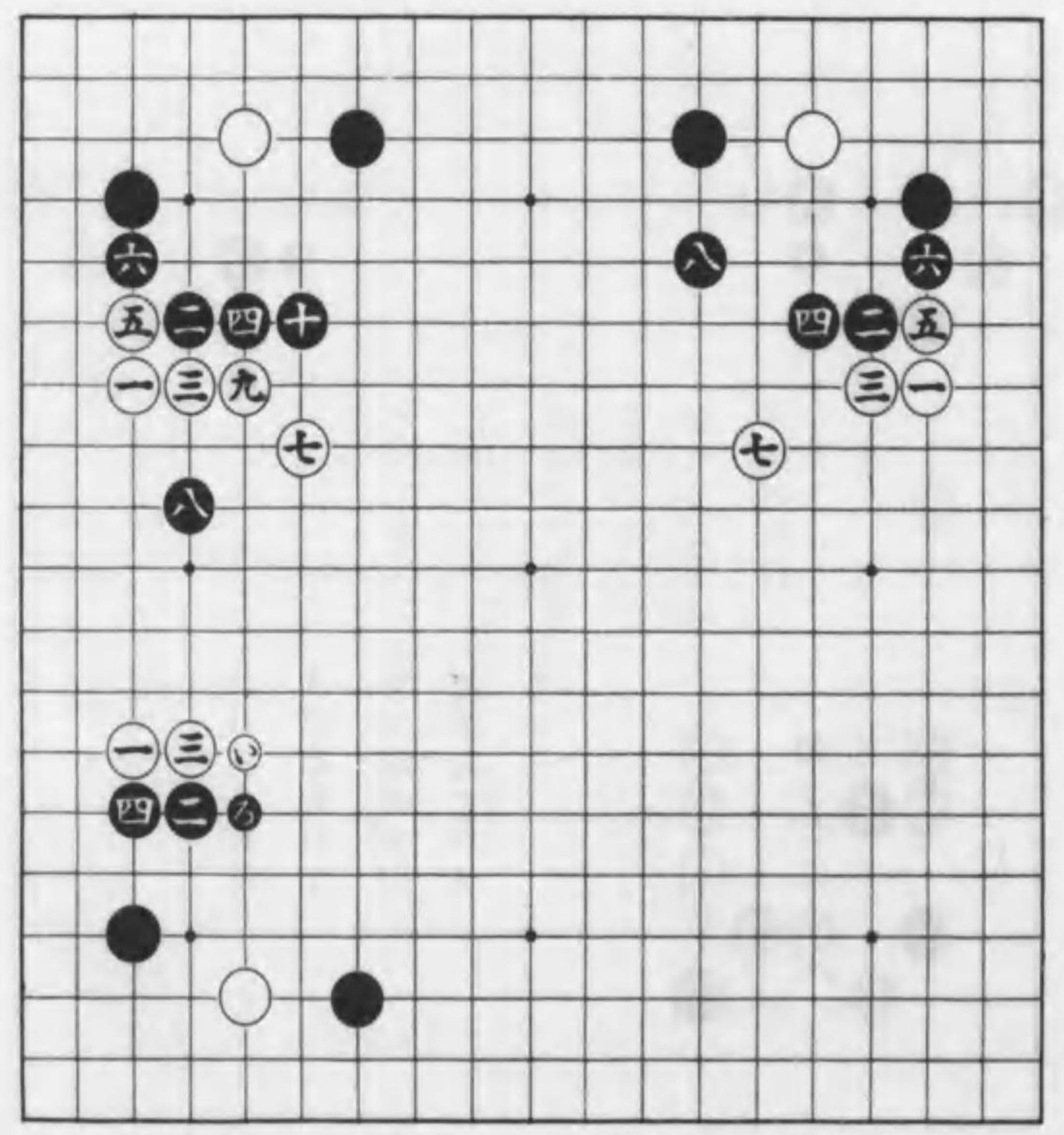
(註) 前圖上隅本の黒が白に近いだけに、二間三間夾に比して黒稍不利を免れません。

(第七十圖) 白七と先づ曲つてから九と拓きます。後に白⑩と走られても是を完全にする事は至難です。即ち七の要點なる所以である。然らば黒六を以て七に約込めば如何。左上隅黒六と先鞭し、白七と行る位のものですから、黒八と備へて隅を確保する。白七で若しいに綽ねたなら、黒七と烈しく切つて戦ひます。不利は絶対にない。然し乍ら左下隅白五と、こゝで曲られる虞れはなほ存する。黒六の次に白⑩、黒⑨で右上隅に歸します。結論を次に述べませう。

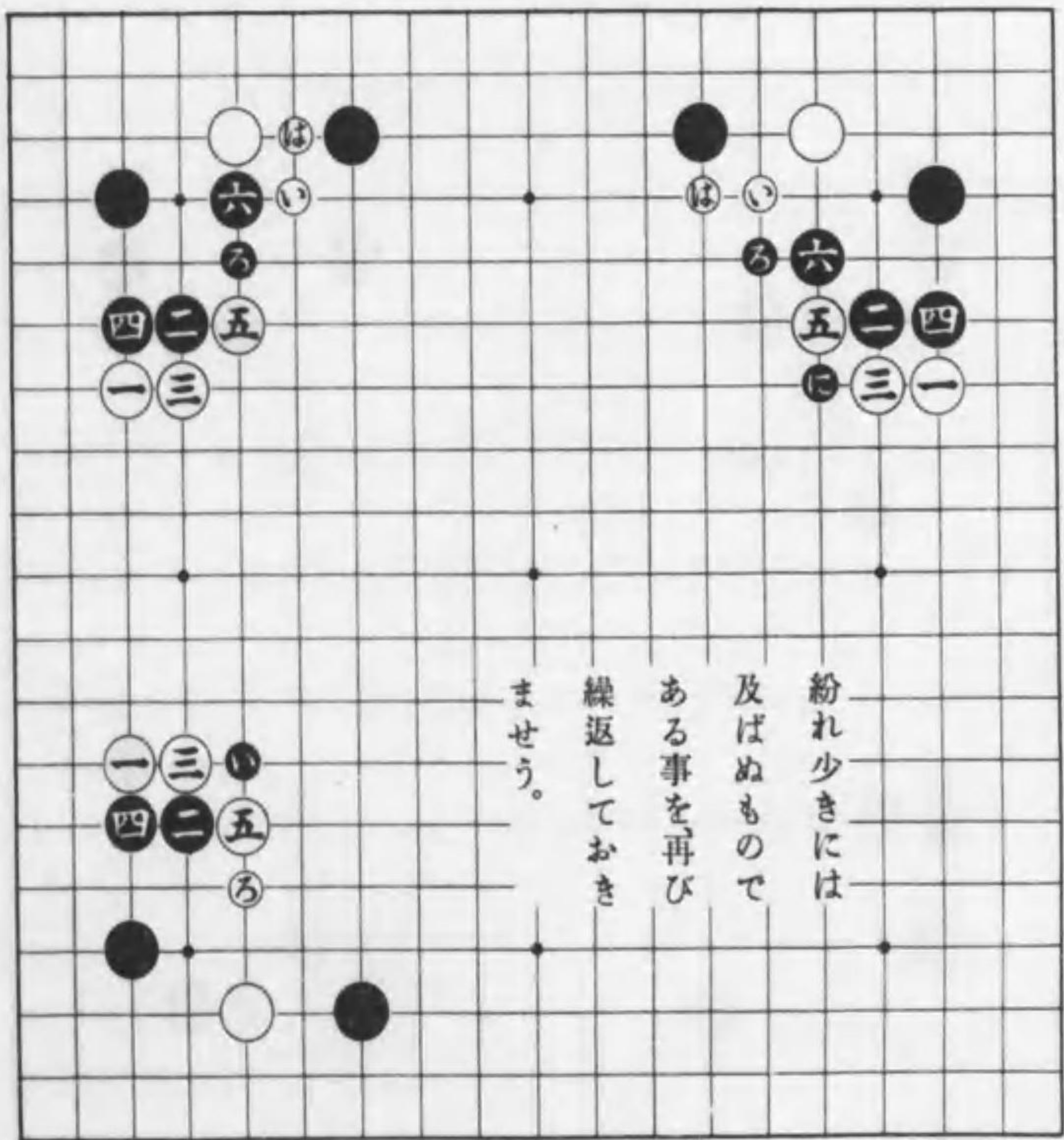


(第七十一圖) 白七と斜走する

ならば、黒八も有り、或は左上隅の如く應ずるも一法に相違無い。この後者の八及十の如きは、第六十圖と全然同意ですが、兩隅とも兎に角白に五の要點を占められてゐるだけに、殊には前圖左下隅となるの可能性も有り、従つて又前圖右上隅に言つた不利を免れません。黒として決して充分とは言へぬ形である。左下隅黒四と約へよ、これが結論なのです。四の次に白⑩ならば、黒⑨と押して直ちに前々圖左下隅に歸します。なほ次に。



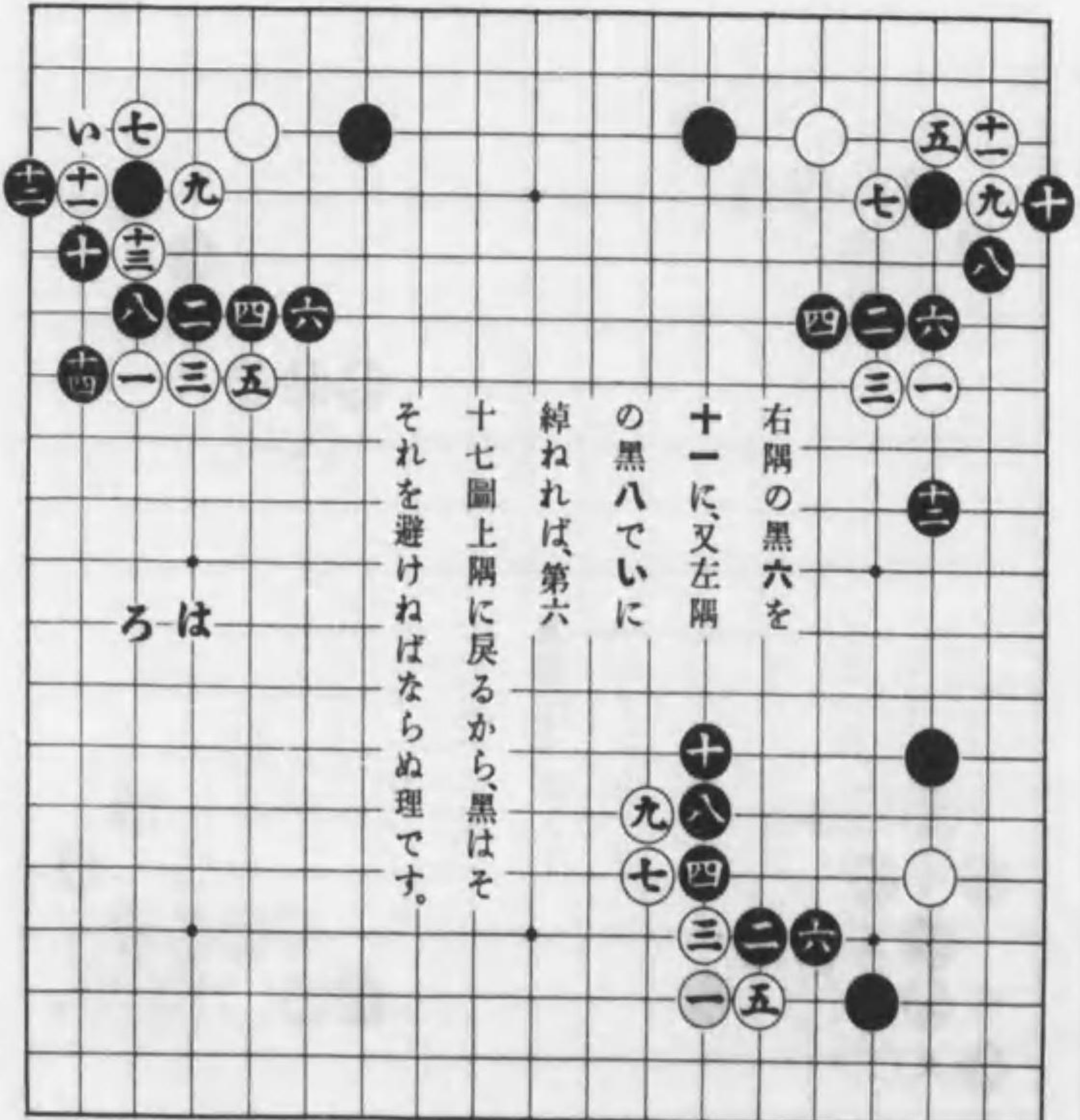
(第七十二圖) 白五と綽ねて来たならば黒六と應ずる。次に白(1)黒(2)と押出し、白(3)黒(4)と、五の子を取つてしまへば宜しい。左上隅黒六と頂けても悪くはない様なもの、白(5)迄の結果は、六で(6)に綽ね、白(7)黒六とこゝで當込んで白(8)となつたに等しい點、右隅に比し姑息の嫌ひが有る。本來は左下隅の如く、白五黒(1)と切つて戦ひたいのですが、白(2)と引かれては、少くとも部分的には黒有利と成し得ない。右上隅に従ふべきです。而して二と斜走する型は第六十六圖迄の堅實にして



紛れ少きには及ばぬものである事を再び繰返しておきませう。

(第七十三圖) 参考の爲に掲げるのですが、右上隅白五左上隅白七は共に不可、隅の三々に頂るならば、何れも三の手で赴かねばなりません。一三若しくは一三五と

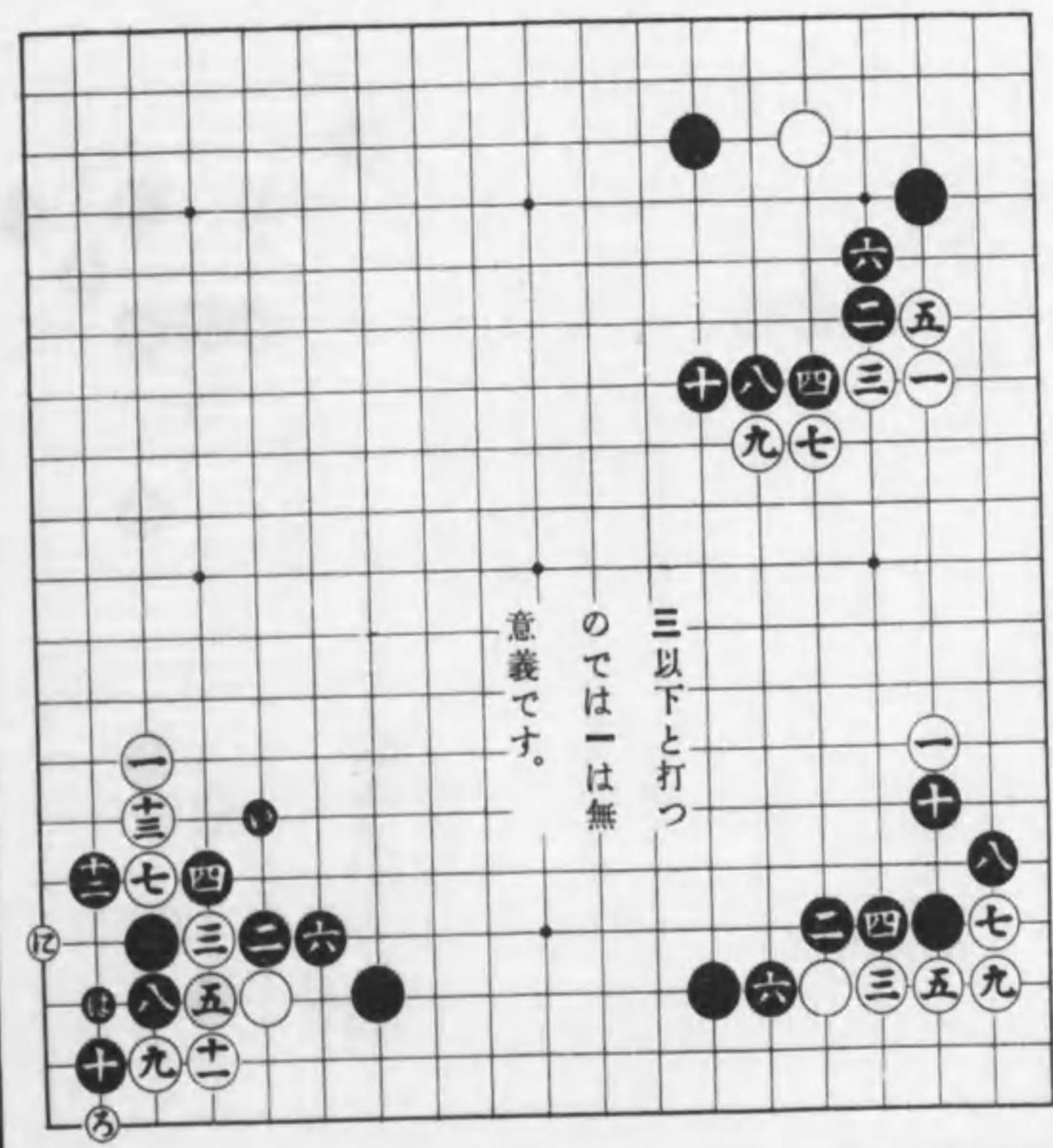
二子、三子と加はるだけ、重くなるから白が悪いのです。第六十九圖上隅と對比する事を要します。左上隅白十三をいに粘げば、黒はろ又はの邊から夾撃して宜しい。右下隅黒四は六十九圖下隅に於て、白の押さんとする點を奪ひ、激しく綽ねたのですが、白五の要處を占められ、十迄の結果は第六十二圖上隅に略等しい事が分る。



右隅の黒六を十一に、又左隅の黒八でいに綽ねれば、第六十七圖上隅に戻るから、黒はそれを避けねばならぬ理です。

(第七十四圖) 前圖の續説です。白五肝要。此手で七に綽返し、黒五と約込まれては前々圖に比して白一層の不利が明瞭でせう。十迄となつて、黒も打てぬ事はないが、四で五に約へるの明快には及びません。

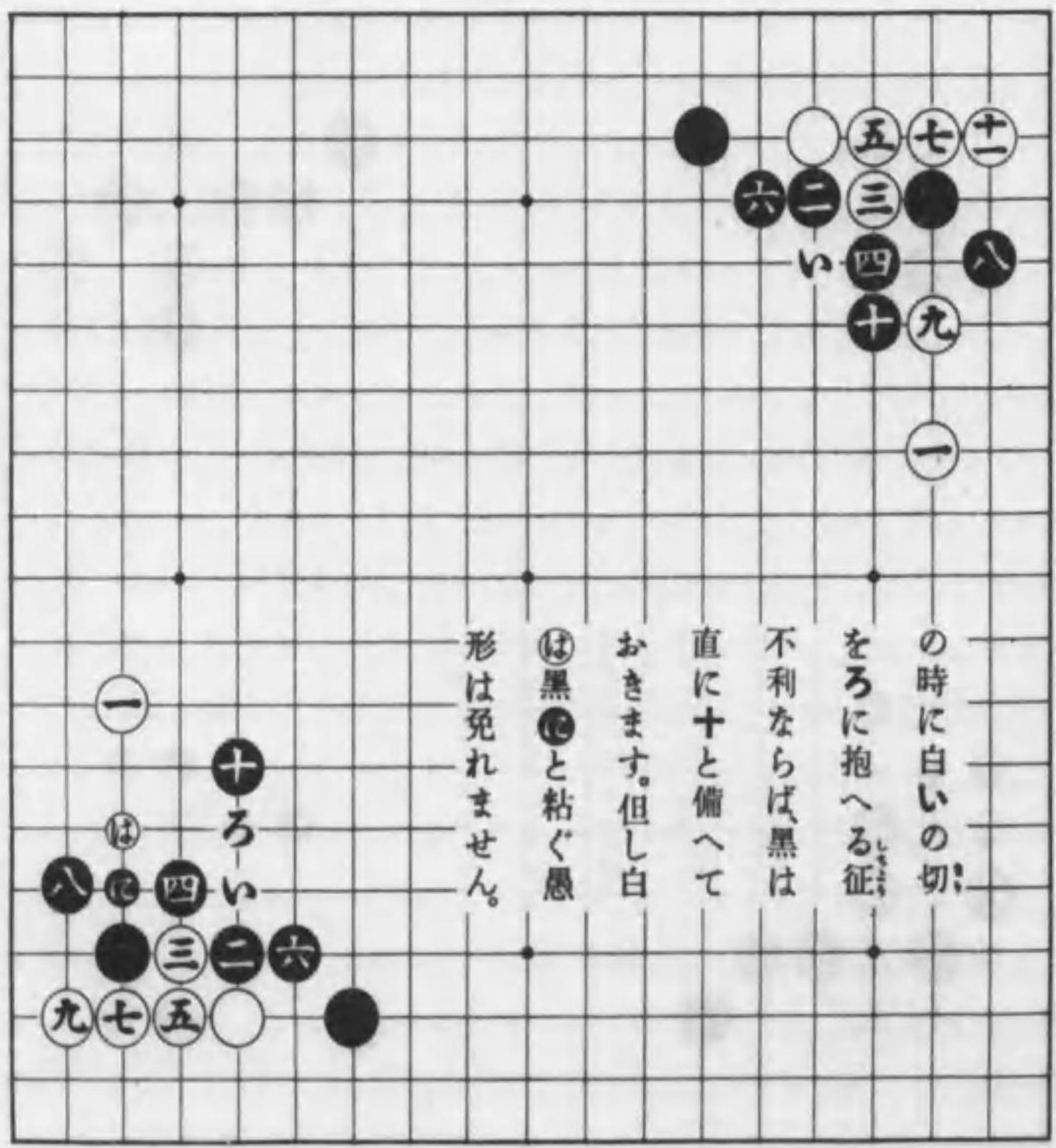
左下隅は白十三の次に黒以下白で黒潰滅に歸する。白三と綽込み得る際、即ち黒四を五から切り、白四黒八白六の征が白に有利とせば、黒は略けぬ理。是黒二の無謀を語る物であり、逆に此征關係不利ならば白一が成立しない。白三と綽込み得ずして右下隅白



三以下と打つ
のでは一は無
意義です。

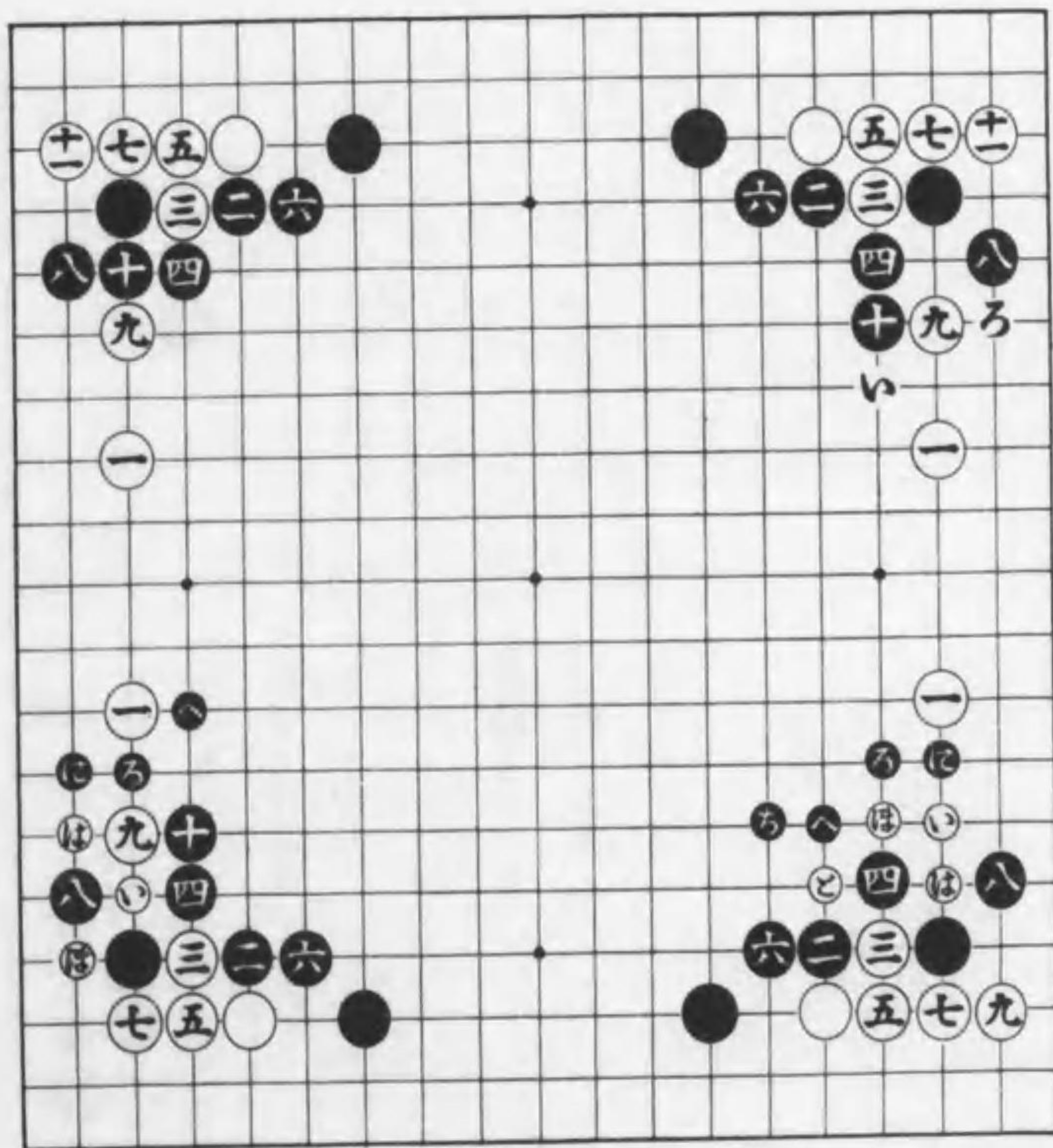
(第七十五圖) 白一の三間夾返。

二間夾返の場合と異なり、白三の綽込の成否に論無く、黒二が成立する。但し白にして見れば征關係から三と綽込む事を得ず、五に行ひ、黒三と密閉される不利は、一が二間夾返に比し黒の堅壁より一路遠い故を以ても免れぬ所。即ち白一に際してはこの點を見定める事を要します。而して黒八迄に就ては後の手抜定石参照。白九では單に十一に下つて、いの切を含む事可能なるは是亦手抜定石第百四圖以降に明かです。左下隅は則ち白九と下つた所ご



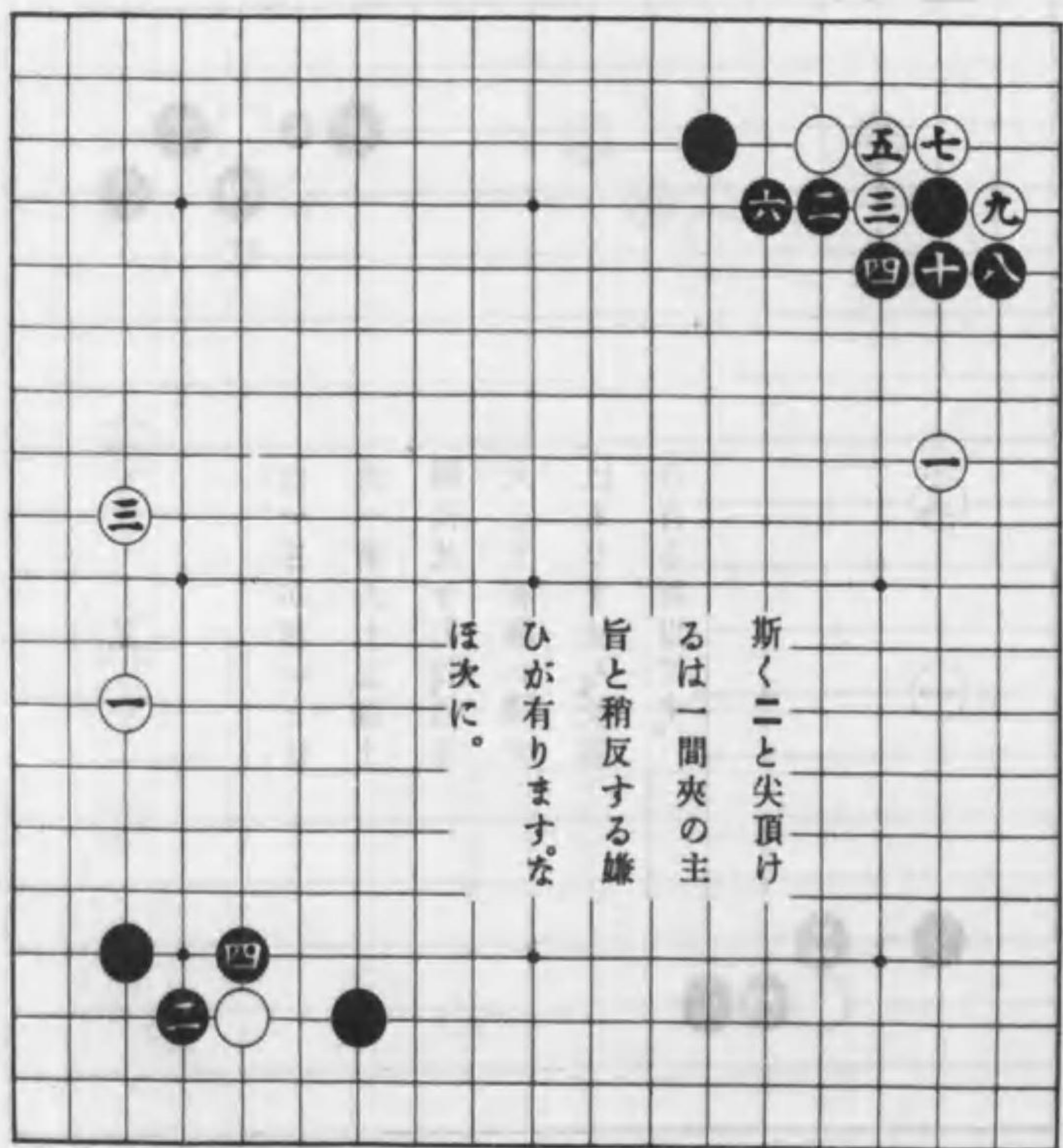
の時に白一の切
をろに抱へる征
不利ならば黒は
直に十と備へて
おきます。但し白
は黒と粘ぐ愚
形は免れません。

(第七十六圖) 更に前圖の續説。
 黒十で左上隅の如く粘いでしま
 つては、八の手が愚化する故必ず
 右上隅に從て十と押す著理です。
 白十一をいに打つても黒ろと泳
 がれると、矢張り十一に戻らざる
 を得ません。その位ならばいろの
 交換は勿論無きに如かずである。
 左下隅白(一)とこゝで切つて來た
 ならば、黒は(二)以下(三)迄と振替つ
 て宜しい。
 右下隅白九と單に下り、黒手抜の
 後に、白(四)に對しては黒(五)と覗返
 す著理。次で白(六)と若し切れれば、(七)
 以下と應じて黒は充分です。



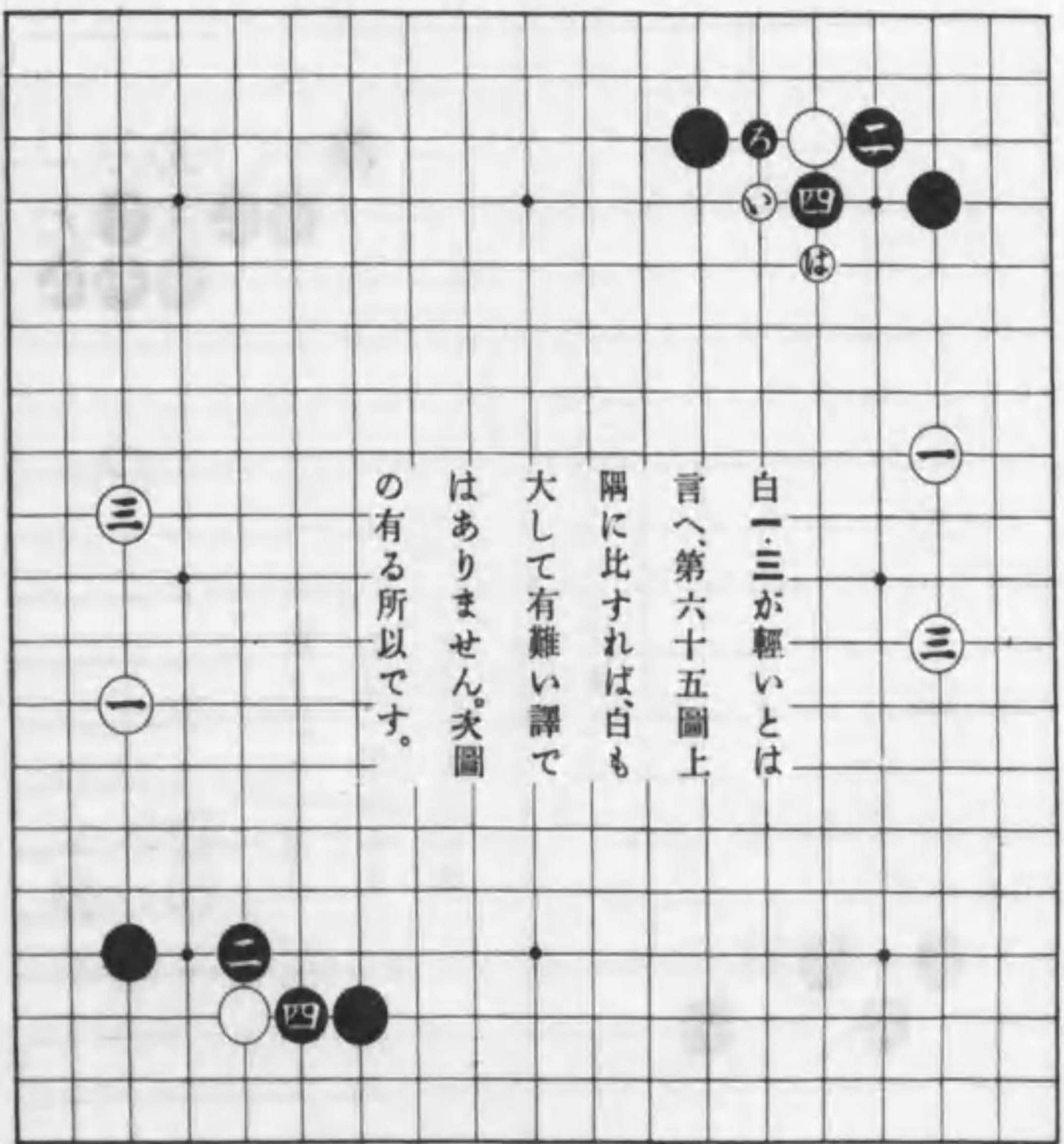
(第七十七圖) 白九と當てたま
 まで先手を取るのには手抜定石に
 も有る型ですが、第百四圖に比較
 し、白一が黒の堅きに接して用を
 成さぬ點に注意します。即ち九は
 不合理である。

左下隅は黒二と尖頂ける變化劈
 頭に述べた如く、一間夾は機有ら
 ば、又可能でさへあるならば、直ち
 に四に頂けて白を封鎖し、自らは
 外勢を張る事を以てその使命と
 するのであり、且つ三間夾返に在
 ては白三にて縛込の有無前々
 圖参照を論ぜず、二で四に頂け
 る手段が成立するのでしたから



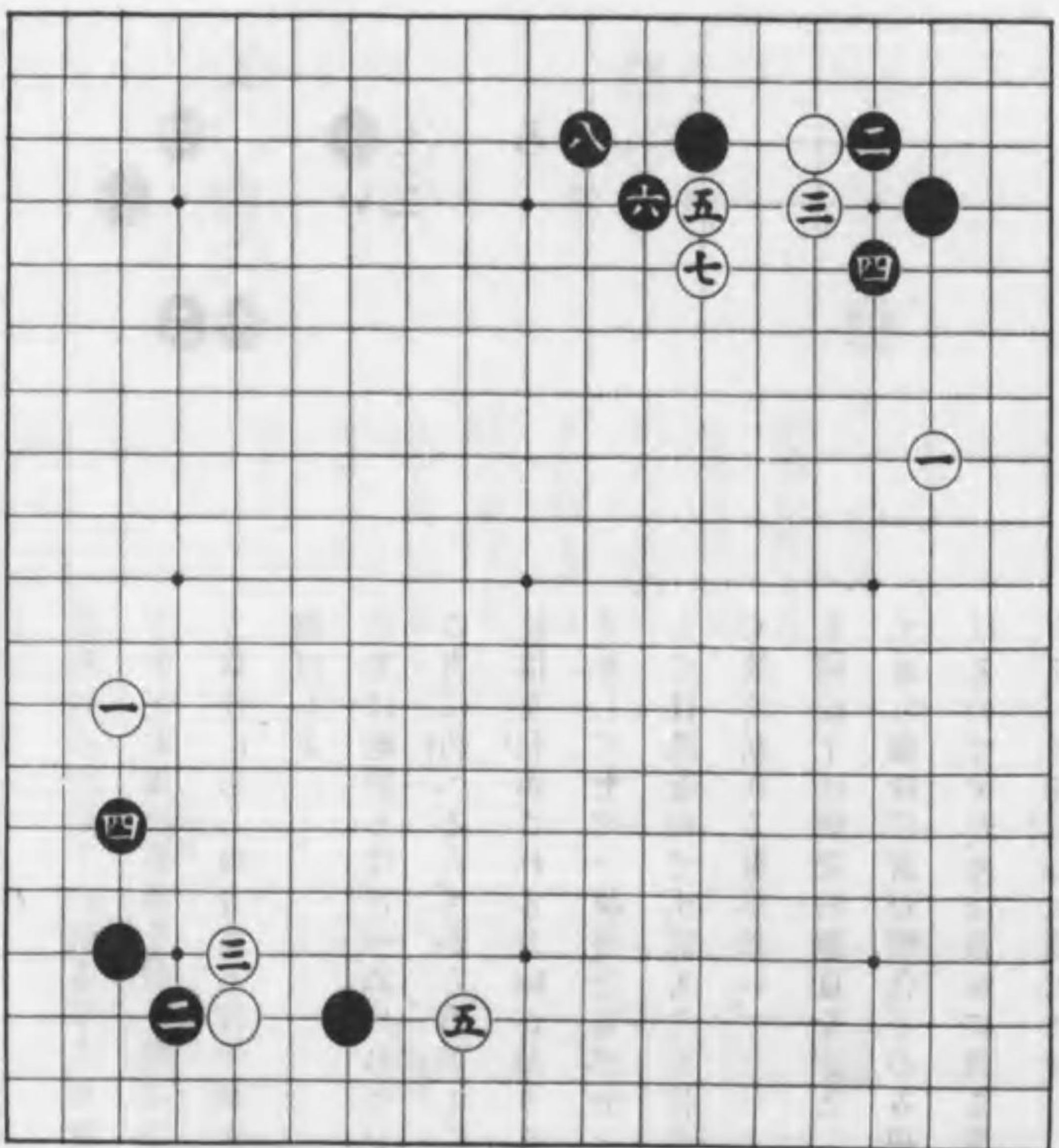
斯く二と尖頂け
 るは一間夾の主
 旨と稍反する嫌
 ひが有ります。な
 ほ次に。

(第七十八圖) 黒二が合理的でない點から、白三は四に立つて悪しからずとなるべきであり、又事實それに相違無いのですが、次圖に改めて説きます。斯く三と拓いて此方に地歩を占めたのは、是亦一に豫め含まれた意匠とも觀られ、四に立つに比し、輕快なる所を採る次第。四で一段落です。黒が二の尖頂から來た時には、四を許しても、他日なほ白(四)を利かせ得る餘地有るに反し、左下隅は完全に取切られて、白から殆ど何も利かぬ點、兩者の差違小さからざるに注意を要します。



白一三が輕いとは言へ、第六十五圖上隅に比すれば、白も大して有難い譯ではありません。次圖の有る所以です。

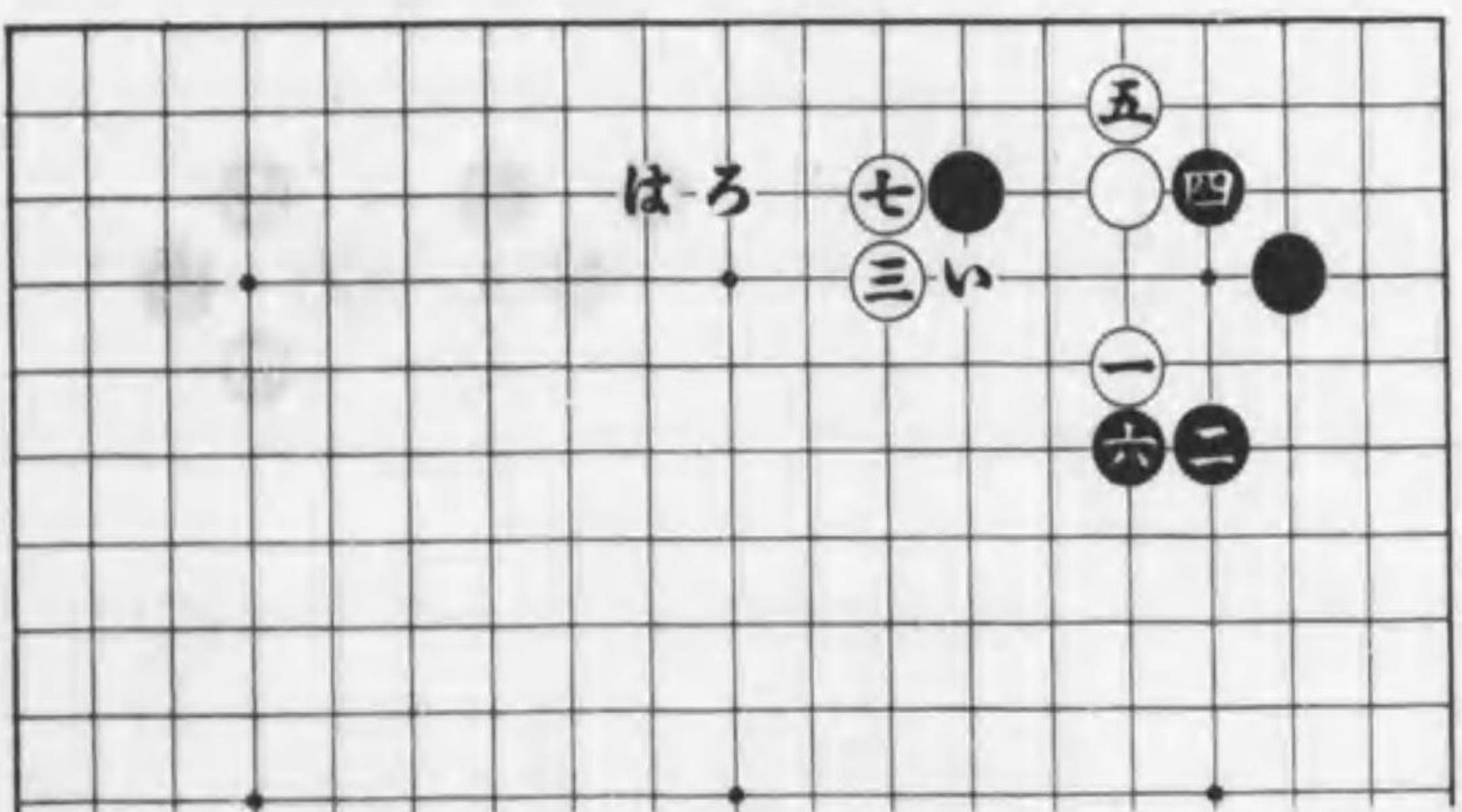
(第七十九圖) 黒としては單に四に尖むよりも二・三の交換を先にする方が白を重からしめてよい譯であり、従つて白三と立つのは確かに氣分の重い手ですが、他面、二間三間夾に比し、二間夾だけに黒が迫り過ぎてゐる事も否定出來ない。この意味からも、白三は成立する理です。黒八迄は普通です。但し白五では八から夾撃して上邊左方に形勢を張り、是に依て可なる場合もあり得ます。左下隅黒四と詰めたならば、白は五と迫つて打つなどが良い。



(第八十圖) 白一と飛ぶ型最近の定石で、場合に依り趣向として打たれるとのみ、その具體的條件を明確に示し難きを遺憾とします。

黒二は絶對。而して一・二の交換は明らかに白損なので、往時はこの見地から全然顧みられなかつたが、近く三以下の研究が積まれるに到つて、實戦にも數々用ゐられるのは、そこに進歩の跡が認められる譯なのです。

黒四の尖頂に應じて、白五と下らされるのも相當辛い形です。事實こゝ迄は、白不利の姿なる事、否定



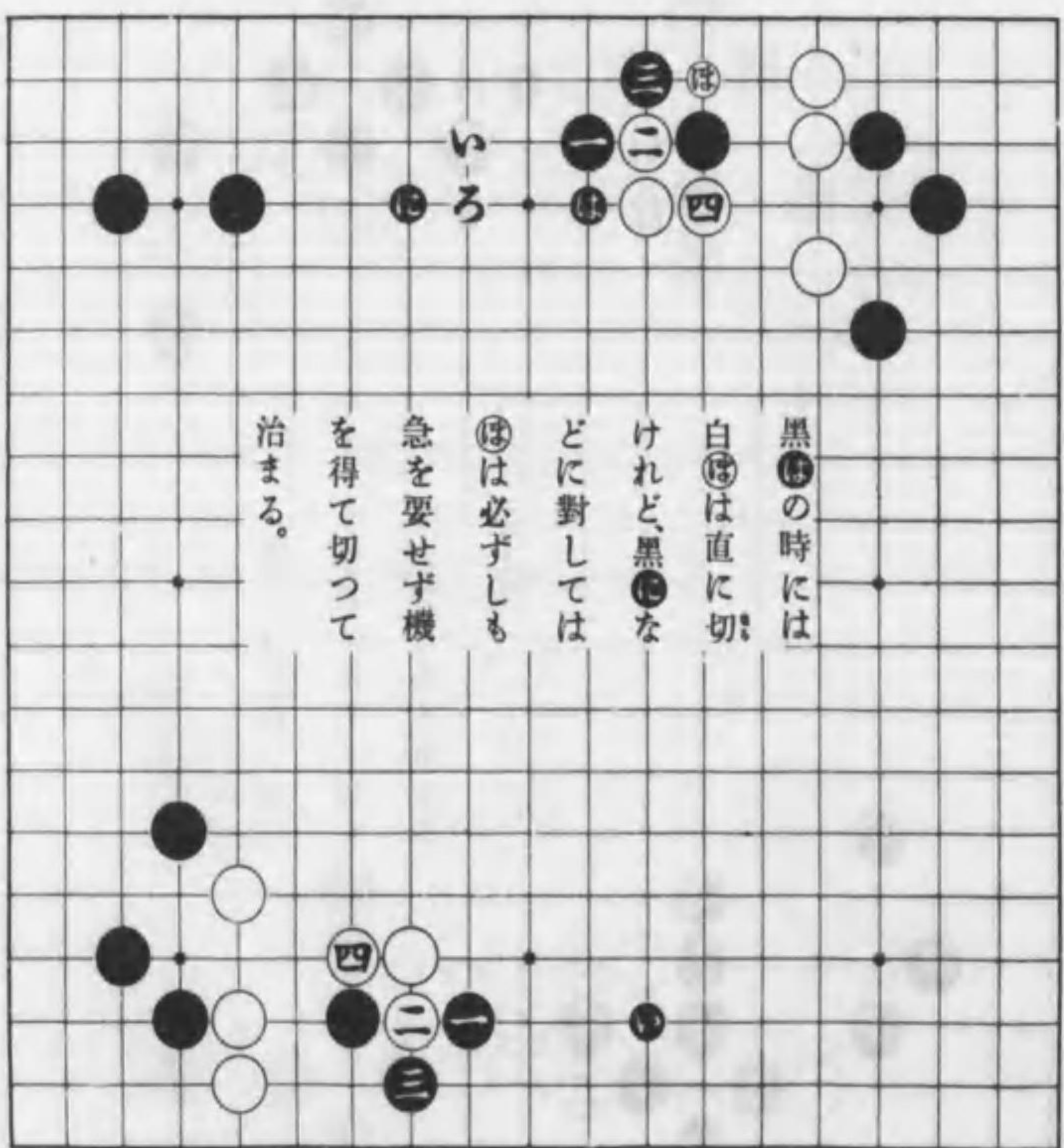
出來ません。黒六は次圖以下に依る事も可能ですが、右邊に形勢を張り得る如き條件にある場合六と押す型が選ばれる。白七は絶對とは言へぬけれど、いの方に約へると、黒から若しくははを利かされる意味が残ります。そして七で一段落。勿論部分としては黒有利です。而もこれは最も簡明、紛れる處が無い。次圖以下は研究的態度を主として、専ら滋味に富む變化をのみ掲げるのですが、なほ難解に沈る節有るべきを私に慮れます。

(第八十一圖) 黒一と飛ぶ型、變化が極めて多い。一を四に押出す方に就ては第九十四圖参照。

白二・四は先づ自己の根據を確保し、次にはい又ろの方面から迫る方針です。

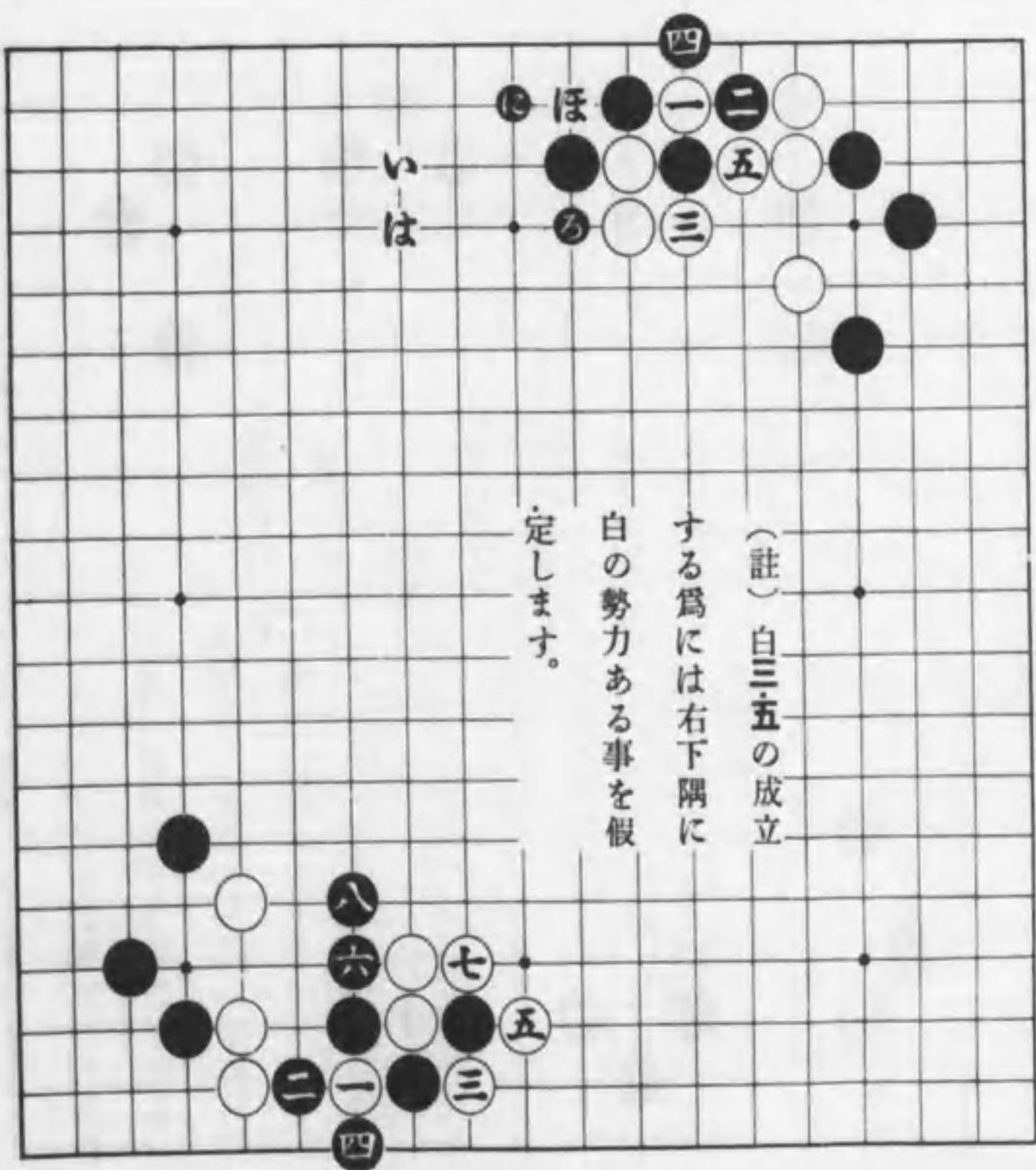
左上隅に圖の如き勢力有る場合ならば、四の次に黒は、執れかを選ぶ。共にに粘いて打つ心白は是に依て治まつたので、部分的には、省略出來ません。黒としては此結果は理想的です。

逆に右下隅に白の勢力有る際には、左下隅白四に次いで、黒は位に備へて軽く打つ事を要する。



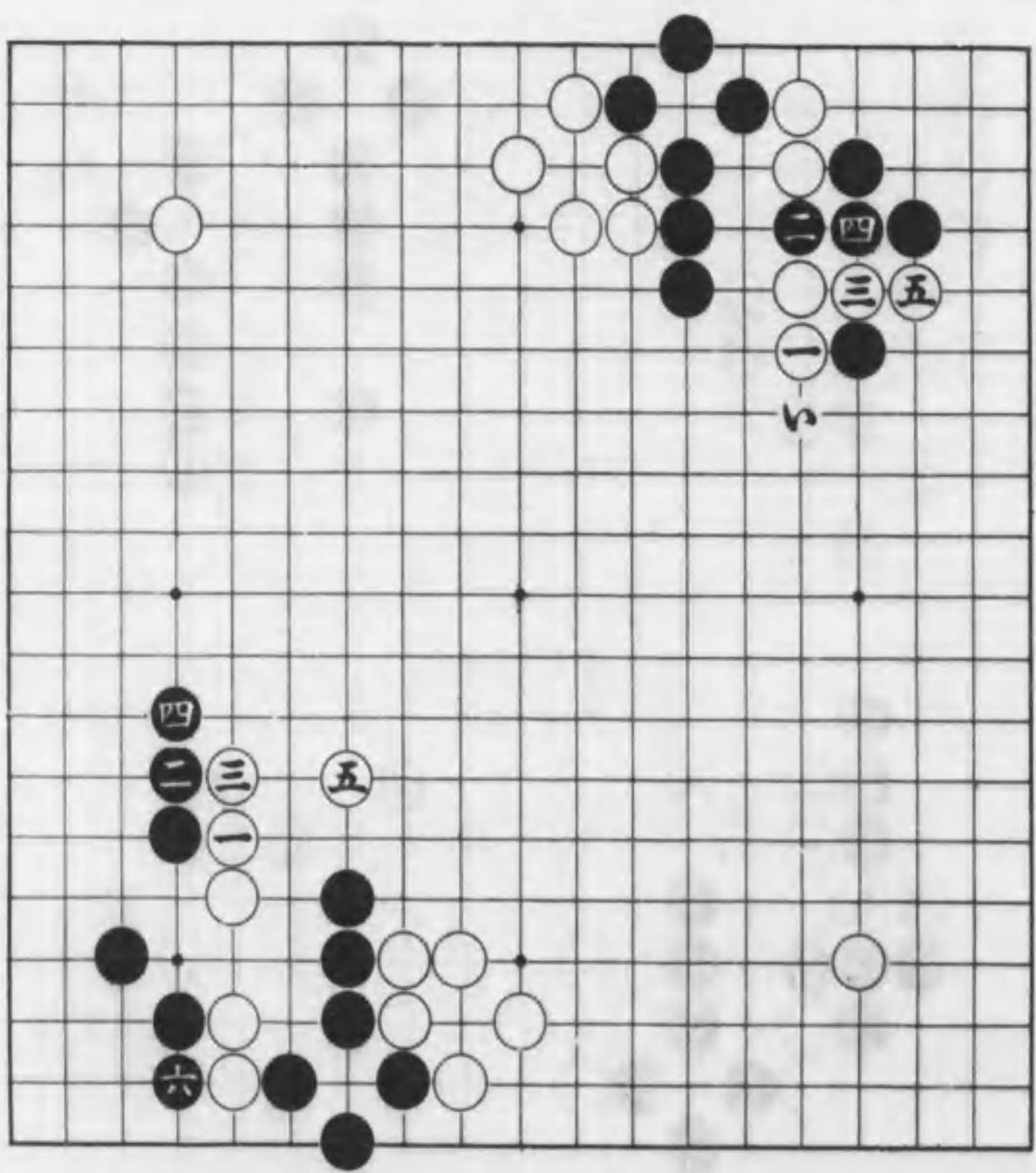
黒の時には白は直に切けれど、黒に對してはは必ずしも急を要せず機を得て切つて治まる。

(第八十二圖) 白一と切りを入
れる事も考へねばなりません。
白五と當てられた時に、黒がいに
拓くか^ろに押すか、又はに打つか
それ等の差は左上隅の條件に依
る事、前圖の通りですが、若し左上
隅に黒の締りでも有れば、^ろの押
しが有力である。そして白が劫を
提つても、黒^とと掛粘いで宜しい。
猶黒二でほに粘ぎ、白三と抱へら
れては、前圖に比して其姿勢が重
くなる。そこで二四と提るので、
左下隅は白三五と抱へる變化。勿
論この征の成立するを要します。
黒八迄は必然。以下次圖に言ふ。



(第八十三圖) 白一と押出すの

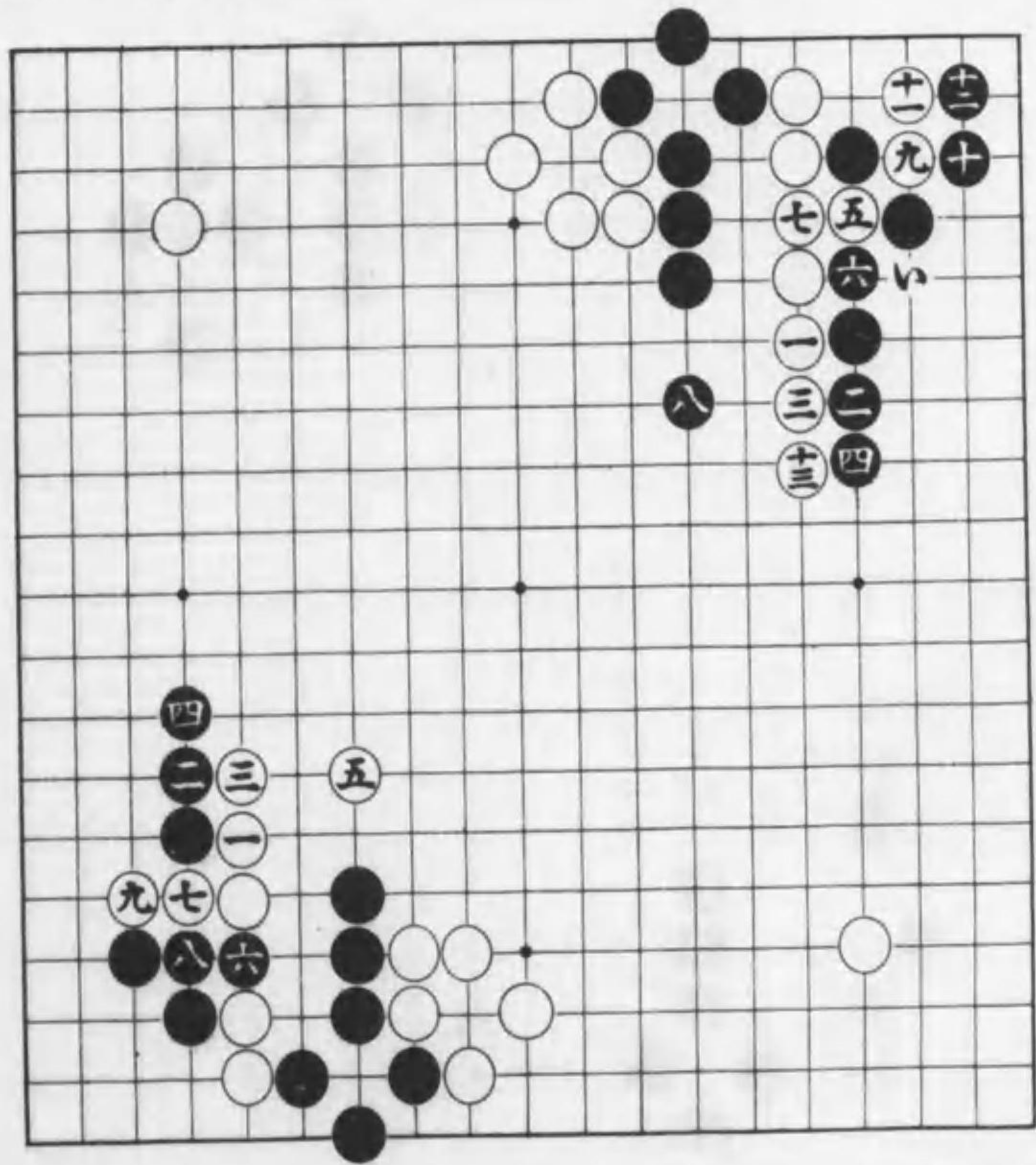
は疑問の餘地無しですが、この時
に黒は直に二と締込んで五迄の
振替りとなる事は出来ませぬ。隅に
は白から何も利かず、味の残らぬ
點を採る。但し二でいに締ねる變
化は第八十五圖以降に詳述。
左下隅黒二四と行ひるのは、重い
所弛む意味の有る所、何れからし
ても不十分です。
白五と平易に飛んで呉れば黒六
に依て盤りを求めるので、盤れば
黒も悪くはないけれど、白五では
次圖の如く打たれるから黒が困
ります。但し黒六は肝要。



(第八十四圖) 白五と當込まれる。黒六八は已むを得ません。白九十一と先手で一子を切取られ、同時に盤りが失はれたのは黒の辛い處。

白十三と押出されるに至つて、八の方に根據無く、且ついの斷點を控へてゐる事が黒の苦痛でなければならぬ。これ二の弛みが齎す不利である。

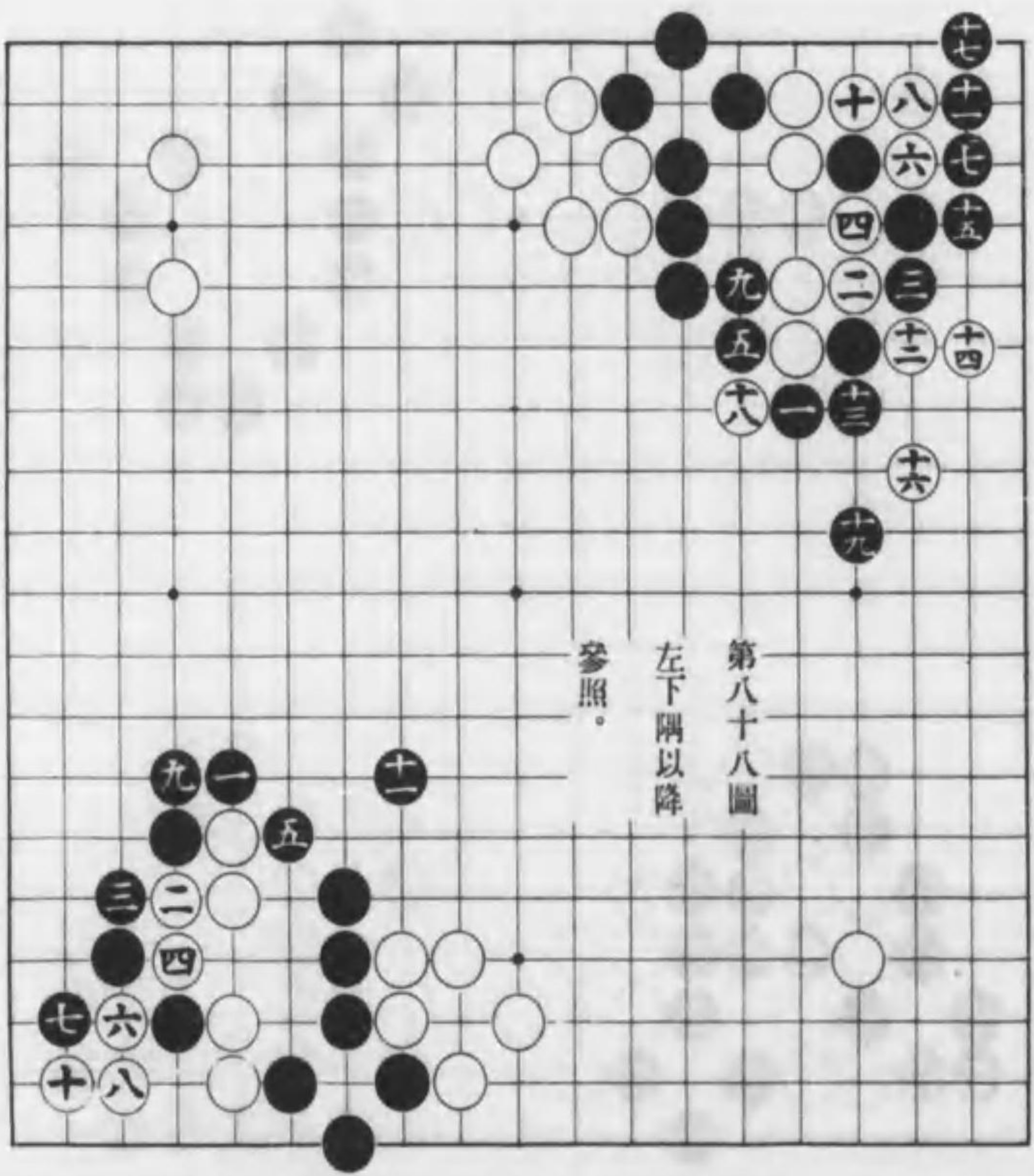
左下隅は前圖下隅の参考ですが、黒六とこゝで緯込むのは、白九迄となつて、前圖上隅に比し、四迄行ひた姿勢が重いだけに、黒不利は明瞭でせう。



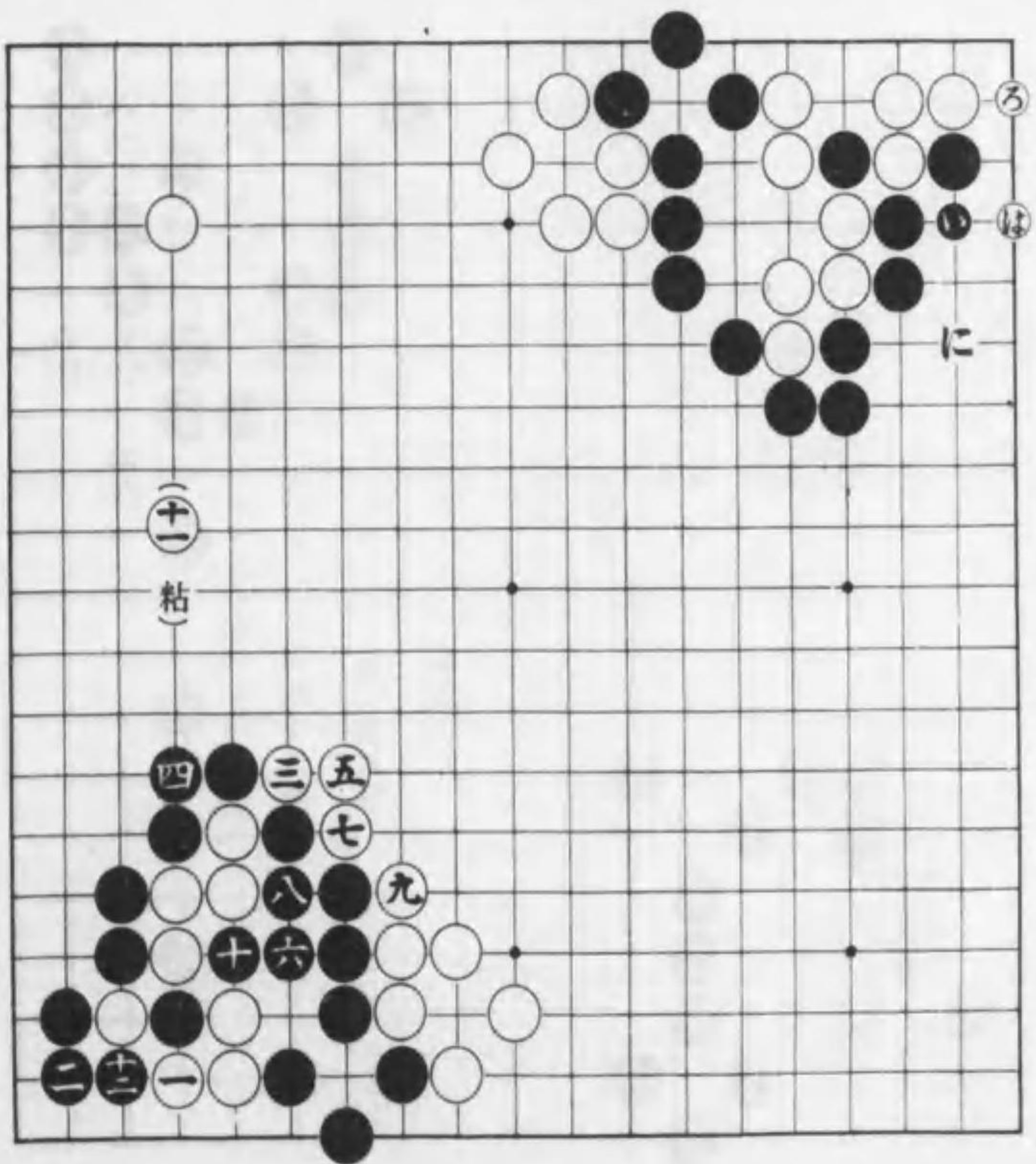
(第八十五圖) 黒一と緯上るのが厳しい手段です。

黒五を十八に弛めるは面白くない。又この手で十三に粘ぐ變化も有りますが、すべて順次詳説する所に觀られたい。

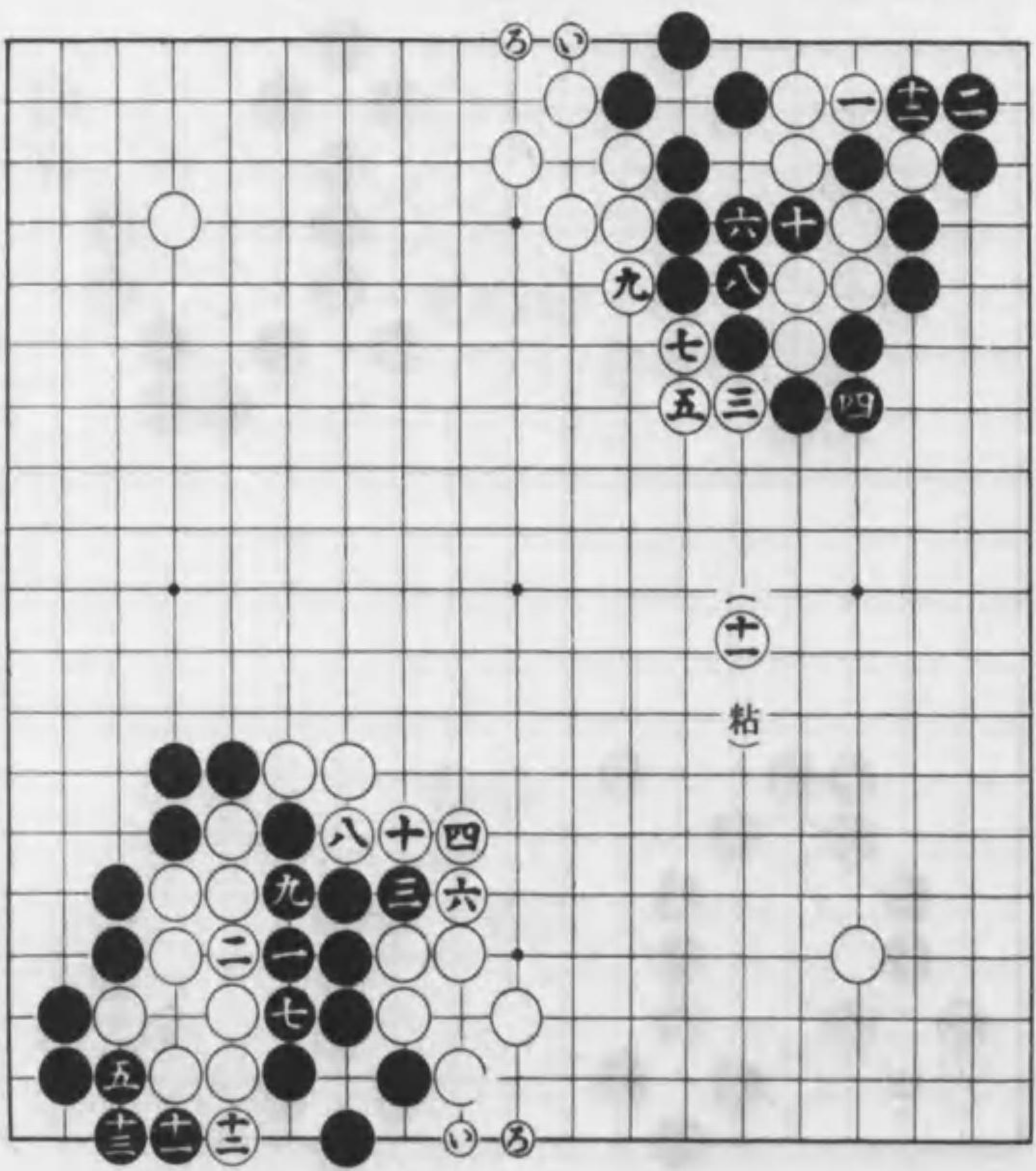
白八は單に十に打抜く方が概して優るのです。次圖下隅以降参照。黒九で十三に粘げば下隅となる。黒十九迄の結果、白絶望の形です。左下隅は黒九と手堅く粘ぎました。十一迄、後手ながら、黒は手厚い姿勢です。畢竟左邊方面の條件次第なので、これに依て形勢を張り得るならば黒は悪くありません。



(第八十六圖) 前圖下隅の後に黒●白○の交換は急いで打つを要しない。却つて將來白○の侵分を生じます。そして他日黒に等が加はつた時には●に粘いでなければ黒より○の點に綽ね、白●黒○と劫争に出る狙ひを持つといふのでなければなりません。白から●に切取る隙無き限り、黒は此處を打たずに置くのが味です。左下隅白一と打抜けば黒二は絶對二を略いて白に此處を約へられる事は忍び難いし、二で十二に當てるのは疑問である。白七以下に就ては次に續説。

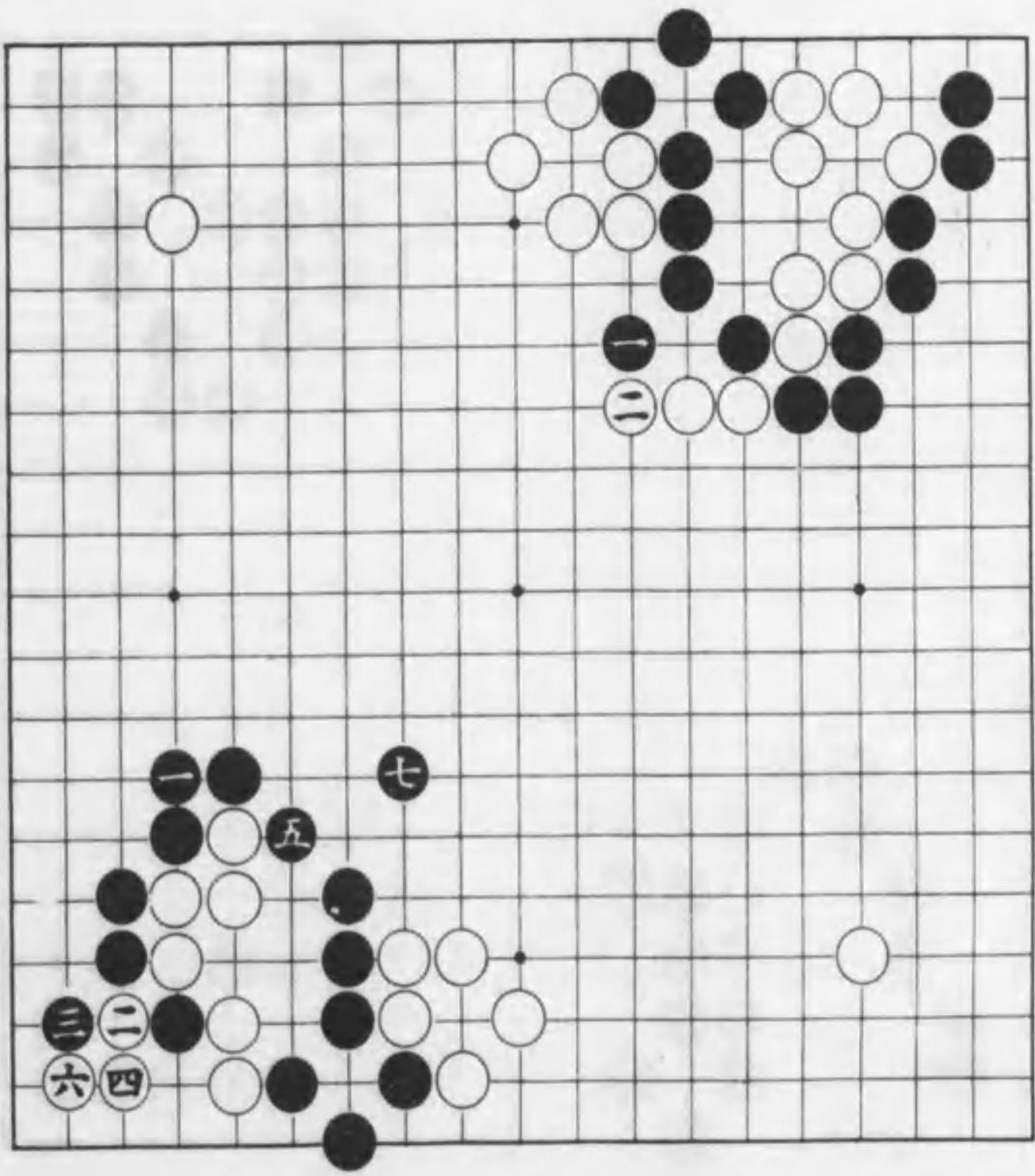


(第八十七圖) 白七で十に粘ぐ變化は左下隅に。黒十二はどの點に詰めても同じですが、白からは何時でも○又○が利いてゐるゆへ、左上隅方面への著手に際し、黒は甚しく牽制される理であります。換言すればそれだけ白が厚いといふ事になる。左下隅は白二と一旦粘ぎました。但し一と三とは前後しても、白が二と粘ぐからには等しい結果です。黒十三迄必然の勢。今度は白○は完全に利くけれど、○は半分より利きません。代りに外部の白は上隅に比して申分無き形です。



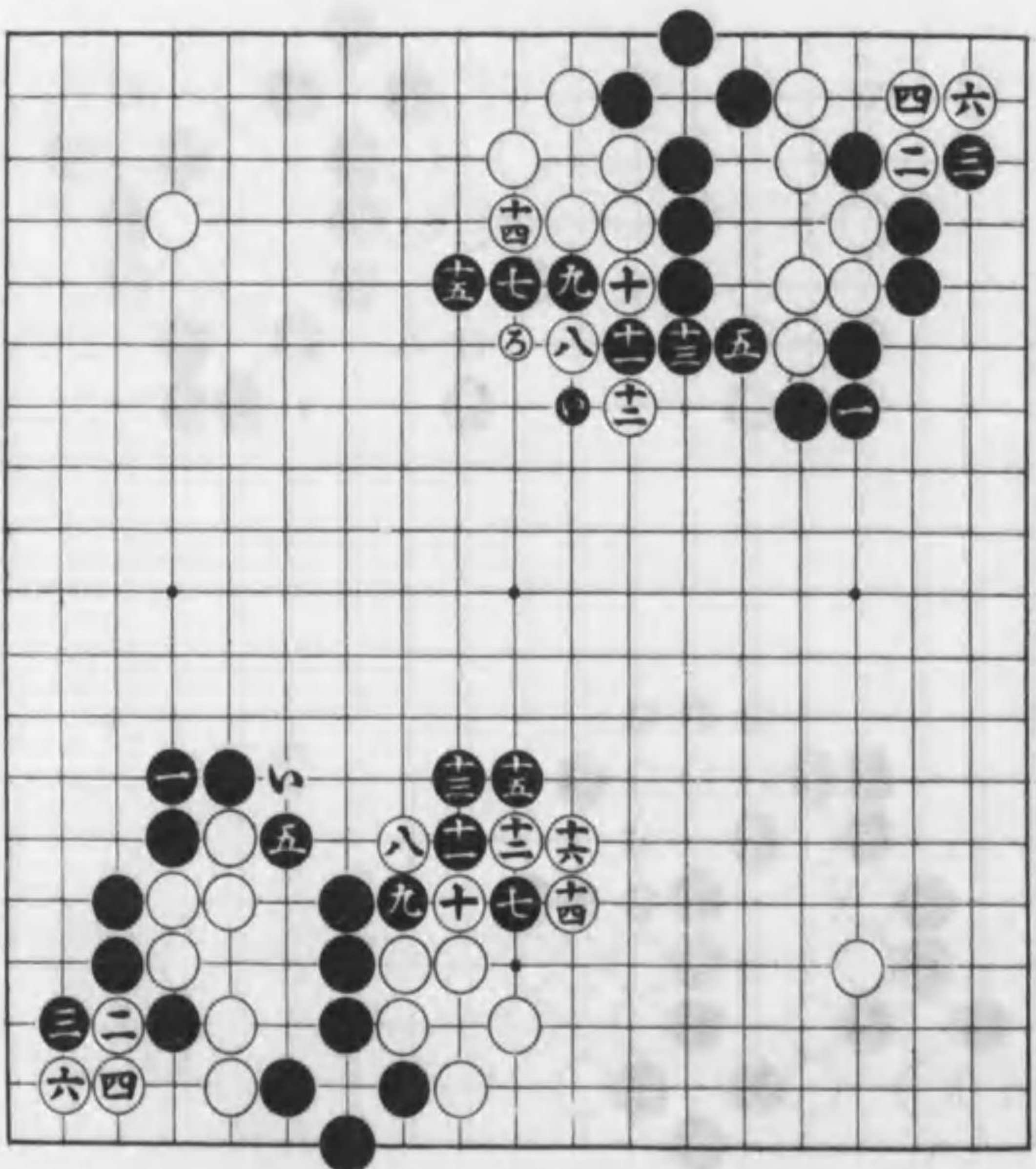
(第八十八圖) 黒一と尖出すのは、白二と押されて、後續の手段に窮します。

前圖が上下とも、黒も悪くはないけれど、兎に角白は非常に手厚いから、その厚味で打つて行かうといふので、白も充分に打てる形です。そこで左下隅黒一と、この粘きを先にして見たらばと考へる。白四では斯く下ると打抜くのと、兩方有る譯ですが、四と下つた時に、黒五と約へれば七迄は第八十五圖と全く等しい。黒五及び七に關する研究は更に述べます。



(第八十九圖) 白六に次いで、黒

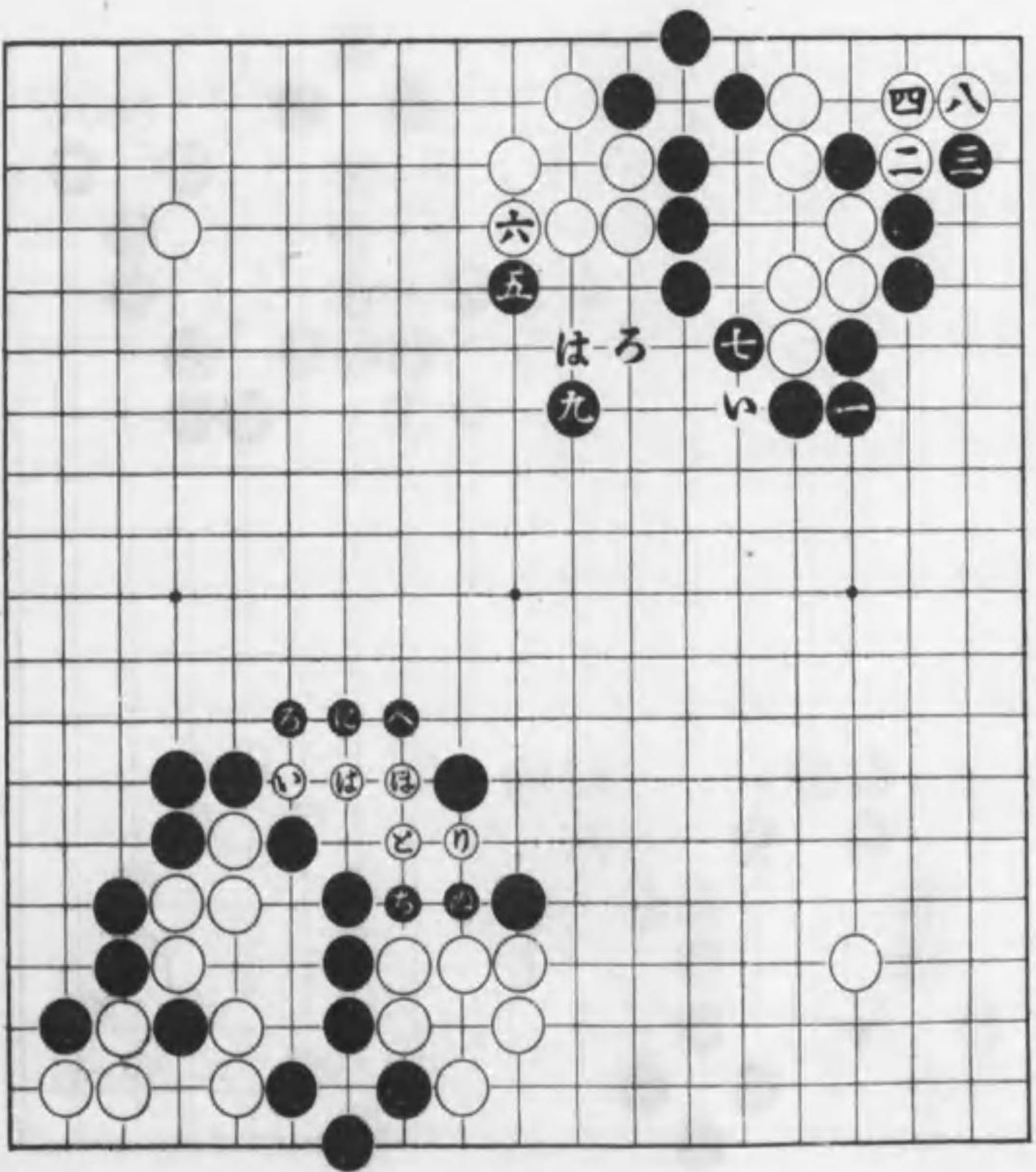
七は前圖下隅黒七従つて又第八十五圖黒十一の進歩したものと観られます。頗る嚴しい著理。これに對して白八と勢ひ飛出せば、以下必然十五迄となつて、黒は立派に打てる形です。黒十五で●に切り白○との交換を先にして十五と行びるのは寧ろ疑問に屬します。左下隅白八と此方に飛んでも黒は矢張り九十一と出切つて、七を犠牲に供し、中原の厚壯を期すると共に自然にいの斷點に備へる事が出来るのです。



(第九十圖) 黒七と約へるに先だつて五の著理に迫り、白六と受るを待つて七と約へ而して九に依ていの斷點に補ひつゝ形勢を張りました。五と六との交換は勿論黒に有利なる利かせです。要するに前圖黒七の著理を、より効果的ならしめたものである。

なほ白六にてろは孰れに飛出しても、黒は敢然これを出切るべき事、前圖に徴して自明でせう。

後に白若しいを切つて來れば、左下隅以下と應じて黒は宜しい。斯くては上隅黒一に限るやうです。が、白四の變化に就ては更に。



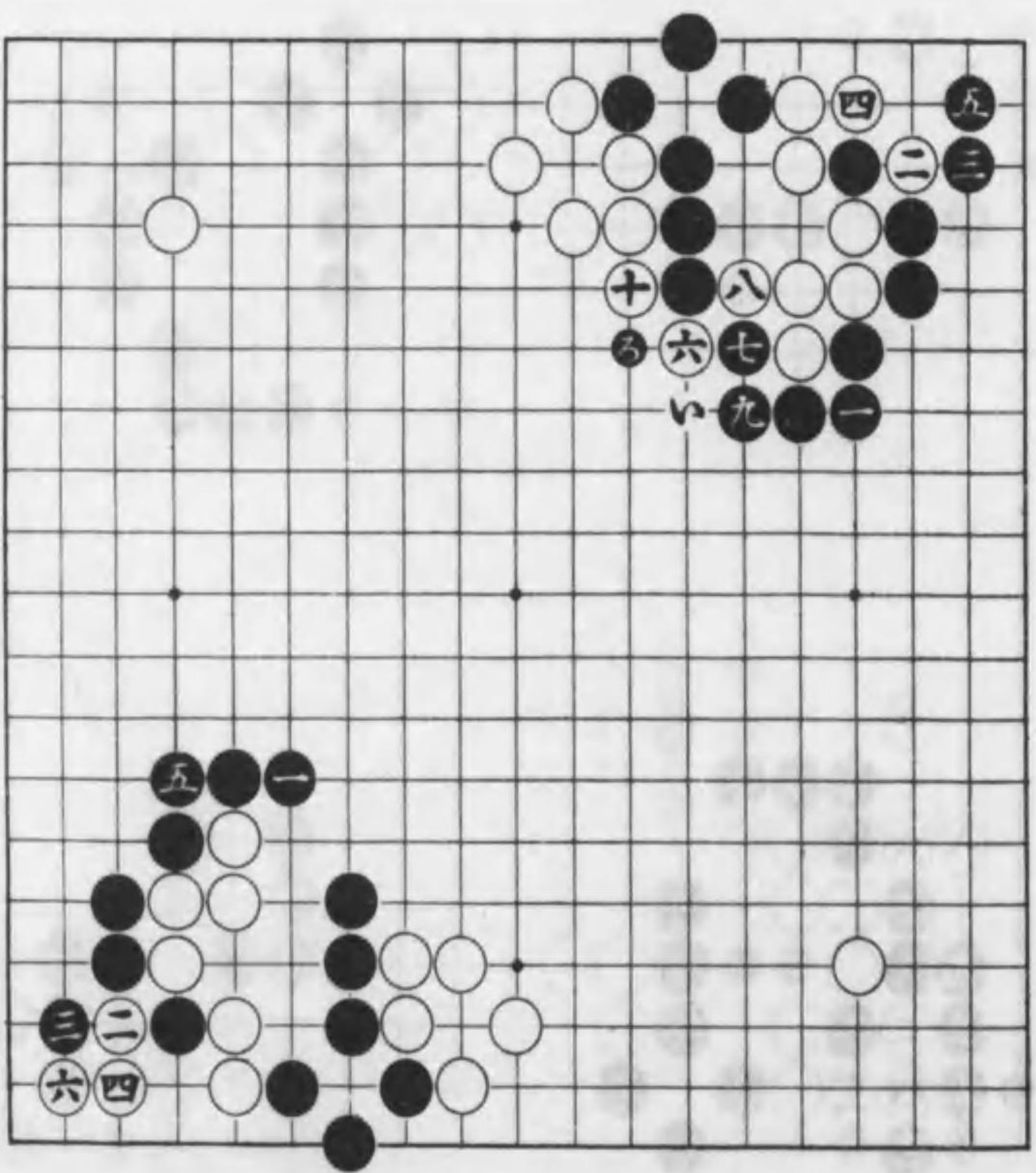
(第九十一圖) 白四と打抜きま

す。白は矢張りこの方が宜しい。黒五の絶對なる事は第八十六圖下隅にも言つた通りです。

白六は七に曲るも有るべく、又六で九に倅ね、黒七白いと行れば全然第八十七圖に歸著する。

白十迄となつて結局劫争ですが、黒六子は先づ取られたものと観ねばなりません。但黒は九の切斷を有する故、その含みを以て右邊から中央に厚壯は期し得る。畢竟黒一も餘り有力ではない様です。

左下隅黒一は第八十五圖黒五の變化。白六で一段落です。猶次に。

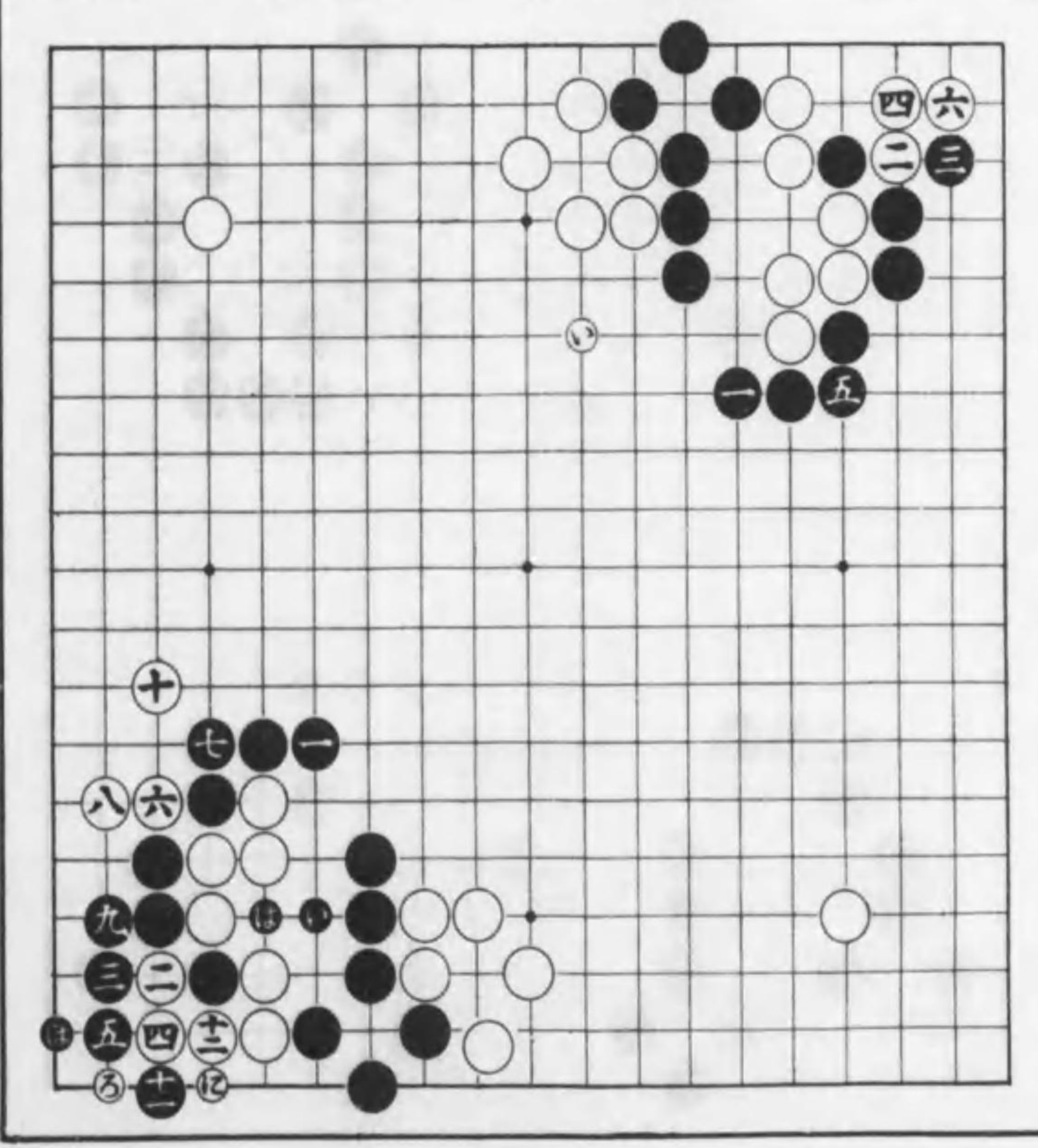


(第九十二圖) 白六のまゝ、黒は轉じて他を打つのですが、一が弛んでゐるだけに、黒姑息の形なるは否定出来ない。

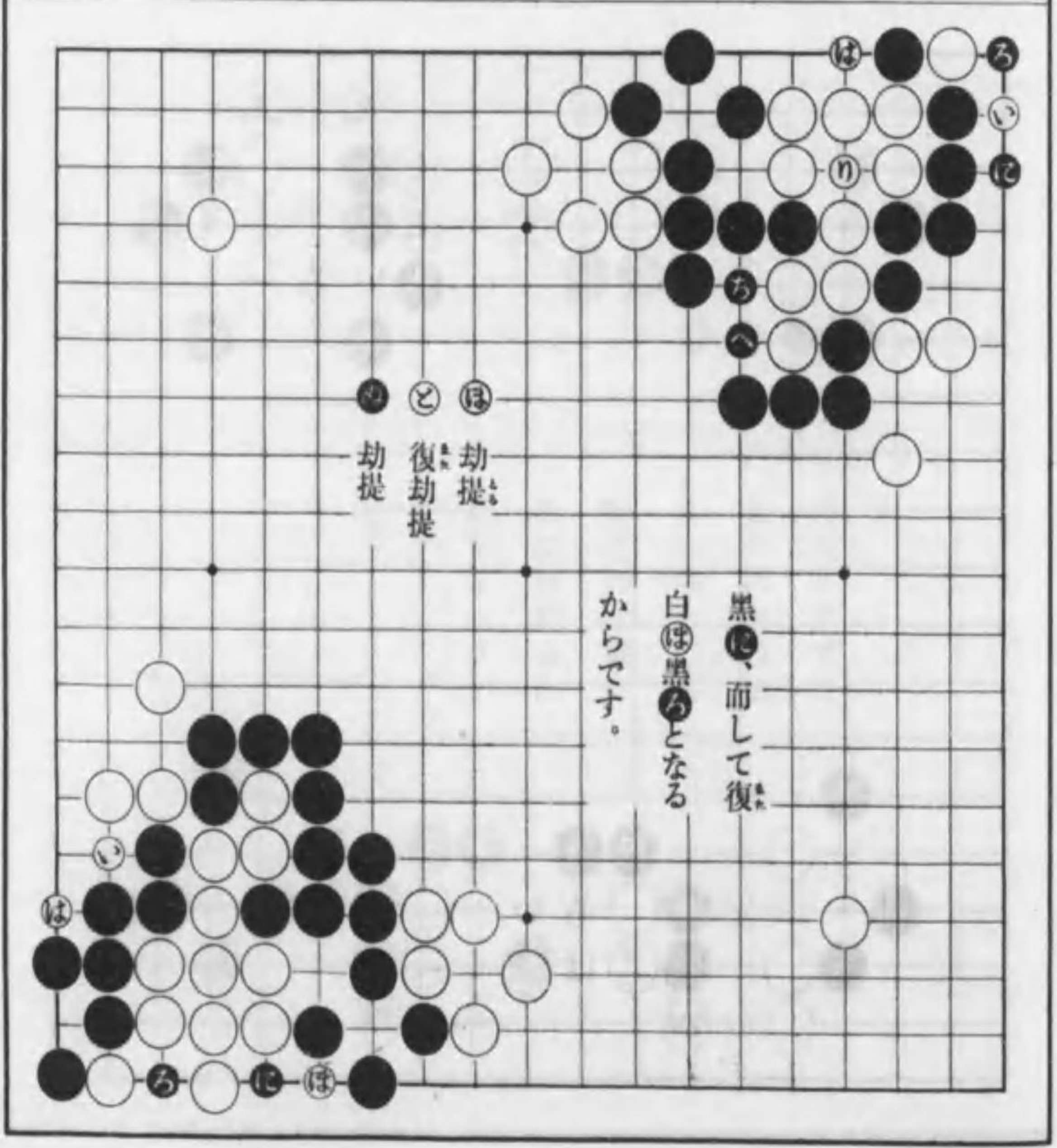
後には白⑤が好點となります。黒五で急に六に約へれば、白は透かさず左下隅六と切つて八十と運びます。これは黒頗る危険。

白十二に次ぐ黒⑧白⑨に次いで黒⑩は共に絶對です。

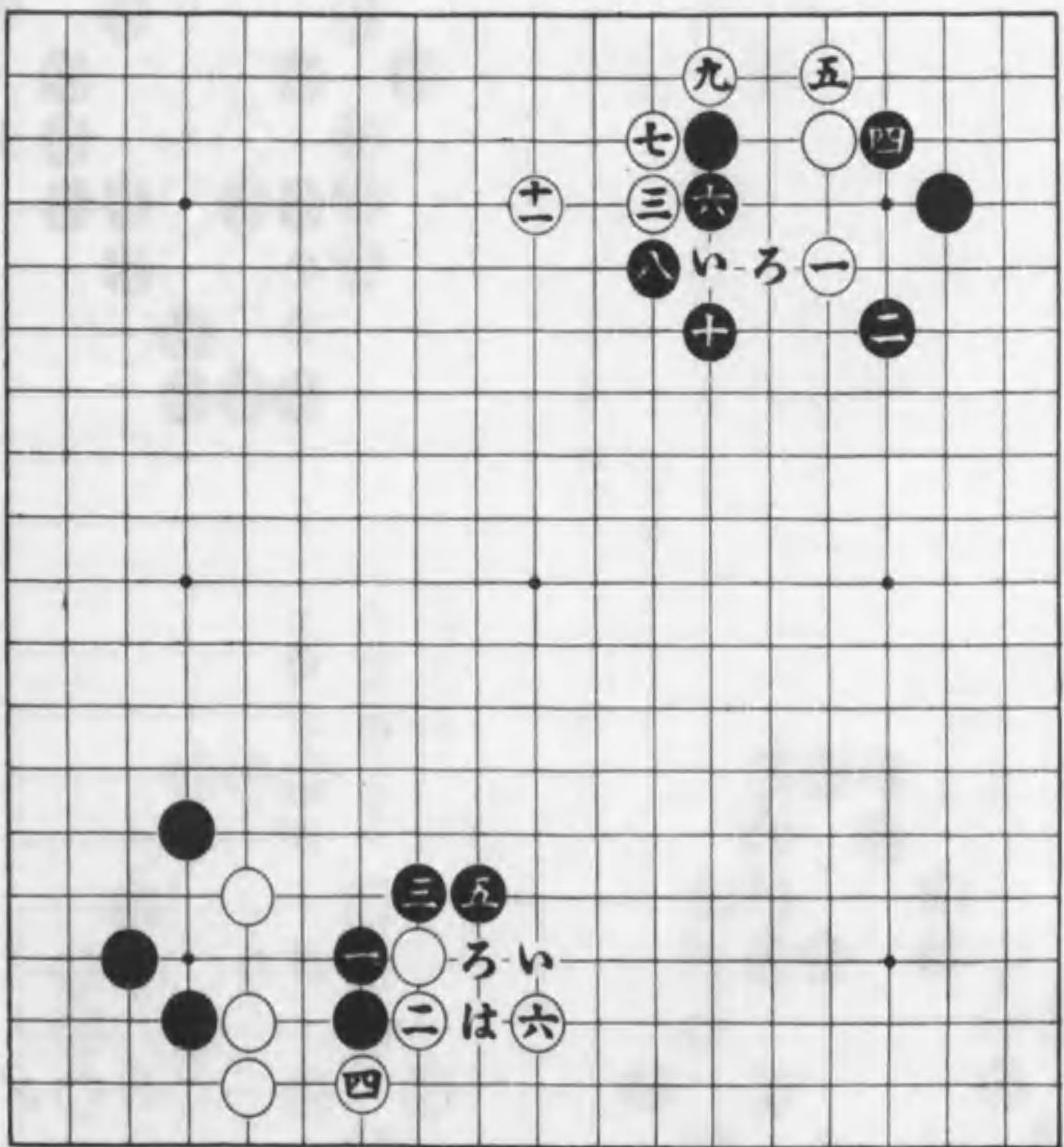
白⑫は次圖に従はねばなりません。白⑬が誤つて斯く⑭と提れば、黒⑮と曲られて、攻合白敗に終る。以下煩を懼れ圖を分つて續説する事とします。



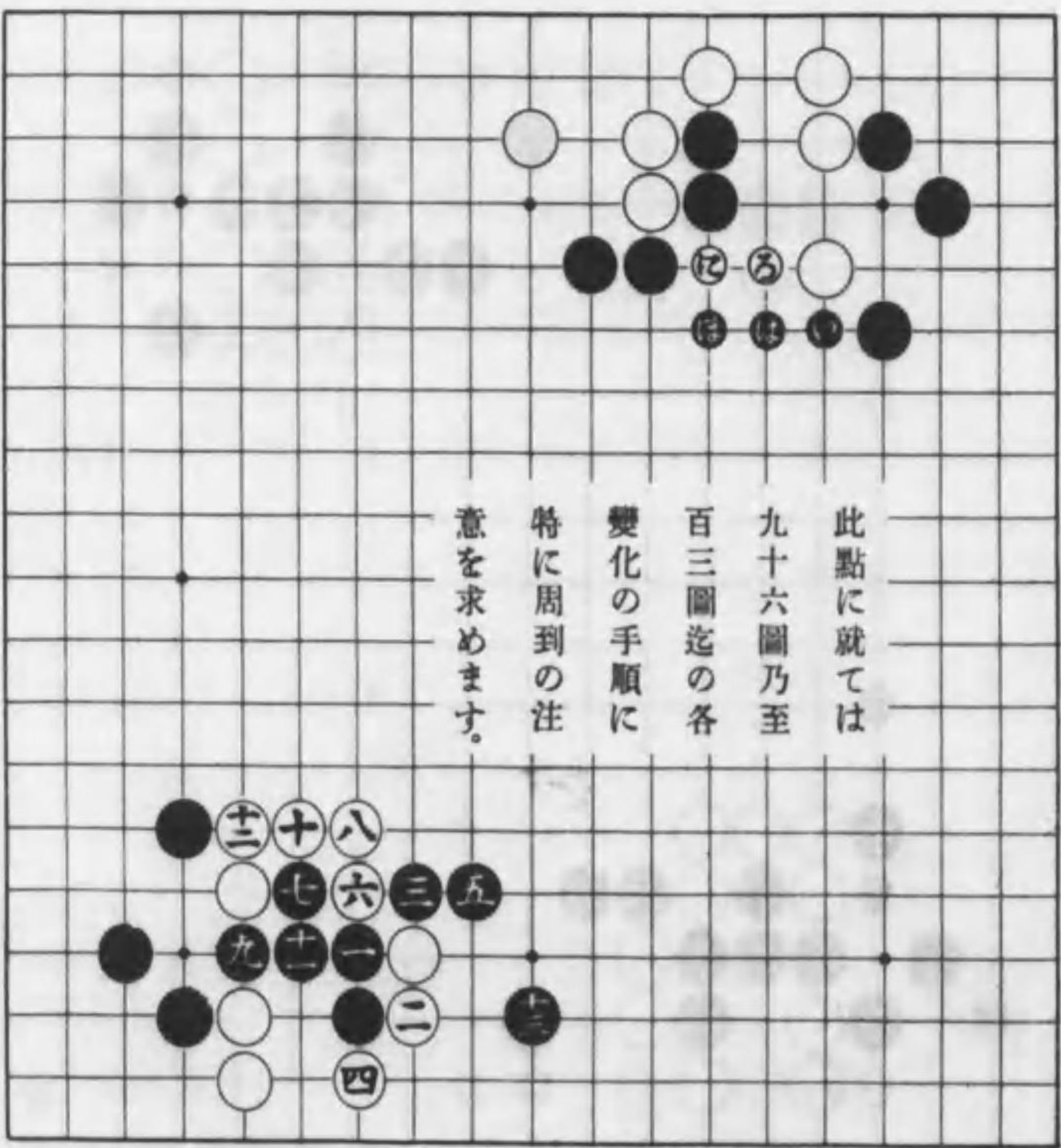
(第九十三圖) 白①と縛ねるが要點。黒②の劫提り迄となつた結果を改めて示せば則ち左下隅。下隅に移つて、白③と詰め黒④白⑤と打込み極力劫争を挑む。是が非でもと言ふなら、而して局部を以て論ずれば白は此劫争に勝つて隅の黒を屠る事も出来ませんが、夫よりも⑥の手で他の要處に轉じ、黒⑦の劫提り。但し此時には黒⑧の儘で白取られなる事に注意。白再び他を打つとなる方有利。殊に此隅に白が無限の劫材を有するは黒の劫を封ずる効果が大きい。無限の理は⑨を白が提り



(第九十四圖) 第八十圖に於る黒六の手より變化斯く押出す事も出來ます。
 白七にていに約へれば黒八と切るべく又白九にていに切る變化も有るのですが遂次示しませう。黒十と掛粘ぐのは白に十一と平易に應ぜられても後に白ろを利かされる工合は有り黒不利です。左下隅黒五と行る方が宜しい。白六をいに飛ぶと黒ろ白は黒六の出切が有ります六の儘一段落。但し次圖を参照せられたい。
 第八十圖に比し黒の勢力が中央に加はり厚壯を附してはゐます。

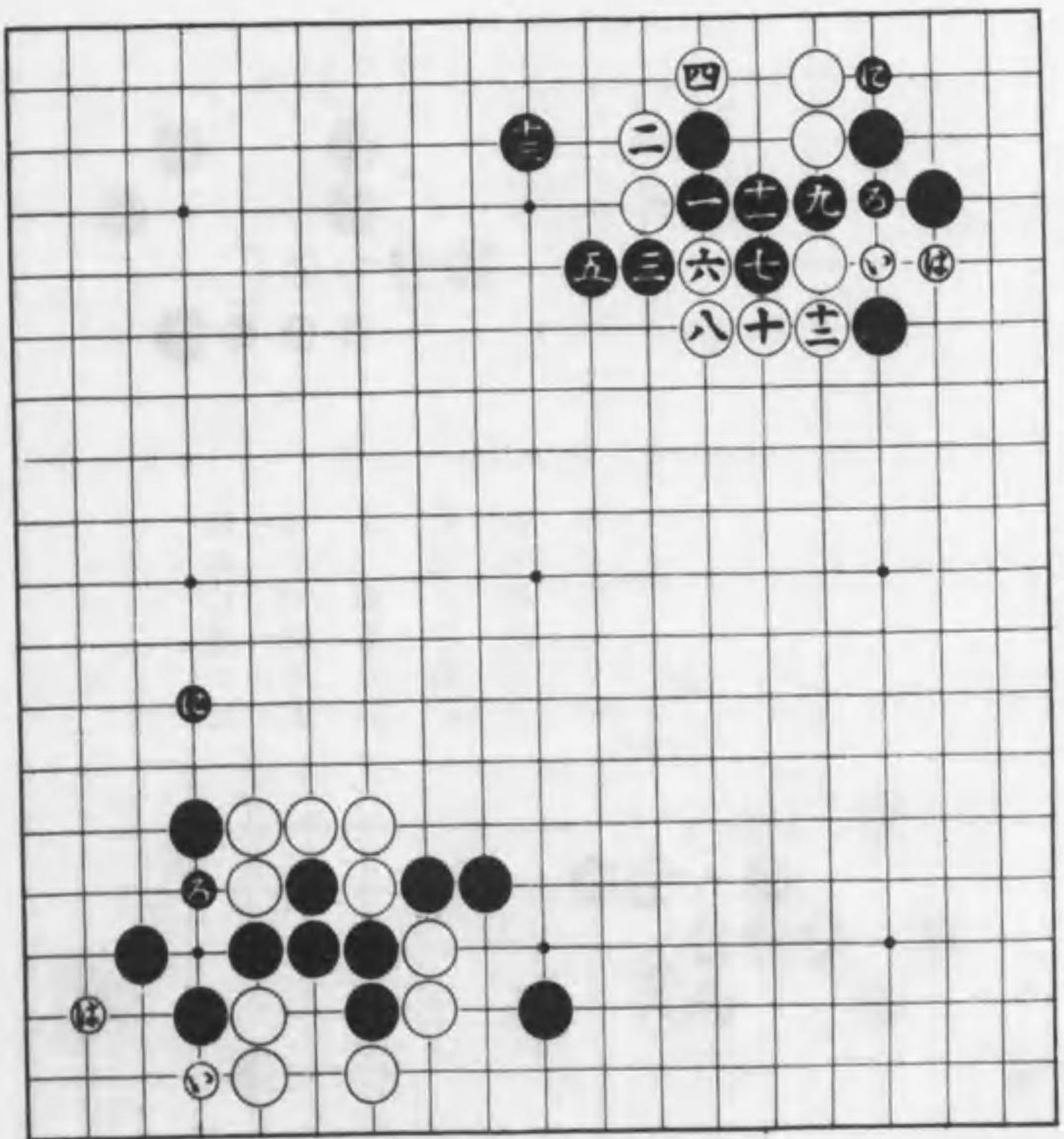


(第九十五圖) 前圖左下隅の後に黒以下迄を打つて終ふのは兎に角實利を白に與へます。これに依て右邊に餘程の優勢を占め得ざる限り黒としては疑問である又黒の手で粘れば勿論白にの點に出られるのですが是亦黒無理の形ですから畢竟がが悪いといふ事になります。
 左下隅は白六と茲で切りました。白二で六に約へ黒三白二黒五白四と成つたもの或は白四にて六に切り黒七白八黒九白十黒十一白四黒五と成る歸結何れも手順を異にして十一迄の處は等しい。



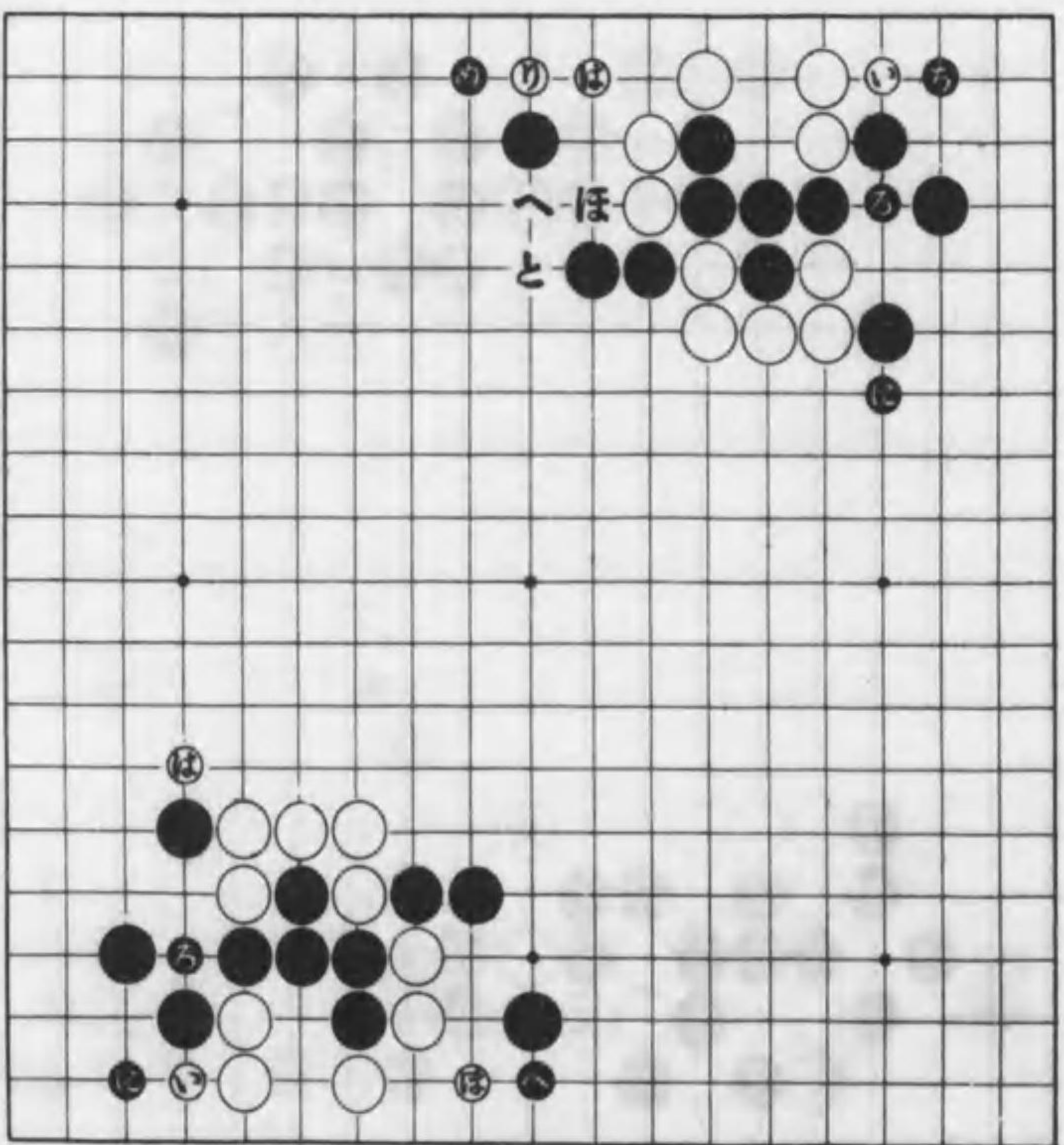
此點に就ては九十六圖乃至百三圖迄の各變化の手順に特に周到の注意を求めます。

(第九十六圖) 前圖の續説白十二を十三に打てば黒は勿論十二から切つて宜しい。
 黒十三で①の點に約へておけば無事ですが十三と封鎖するのは又厳しい手で今後白はどう打つても満足は期待されません。
 白②③と突出せば黒④⑤に依て完全に取切られるこれは明らかに黒有利です。
 左下隅は白⑥の曲りを先にしました黒⑦では次圖の變化も有るけれど斯く平易に⑧⑨と打つて白を限られた處に活かすも充分五子の收拾に白は窮します。

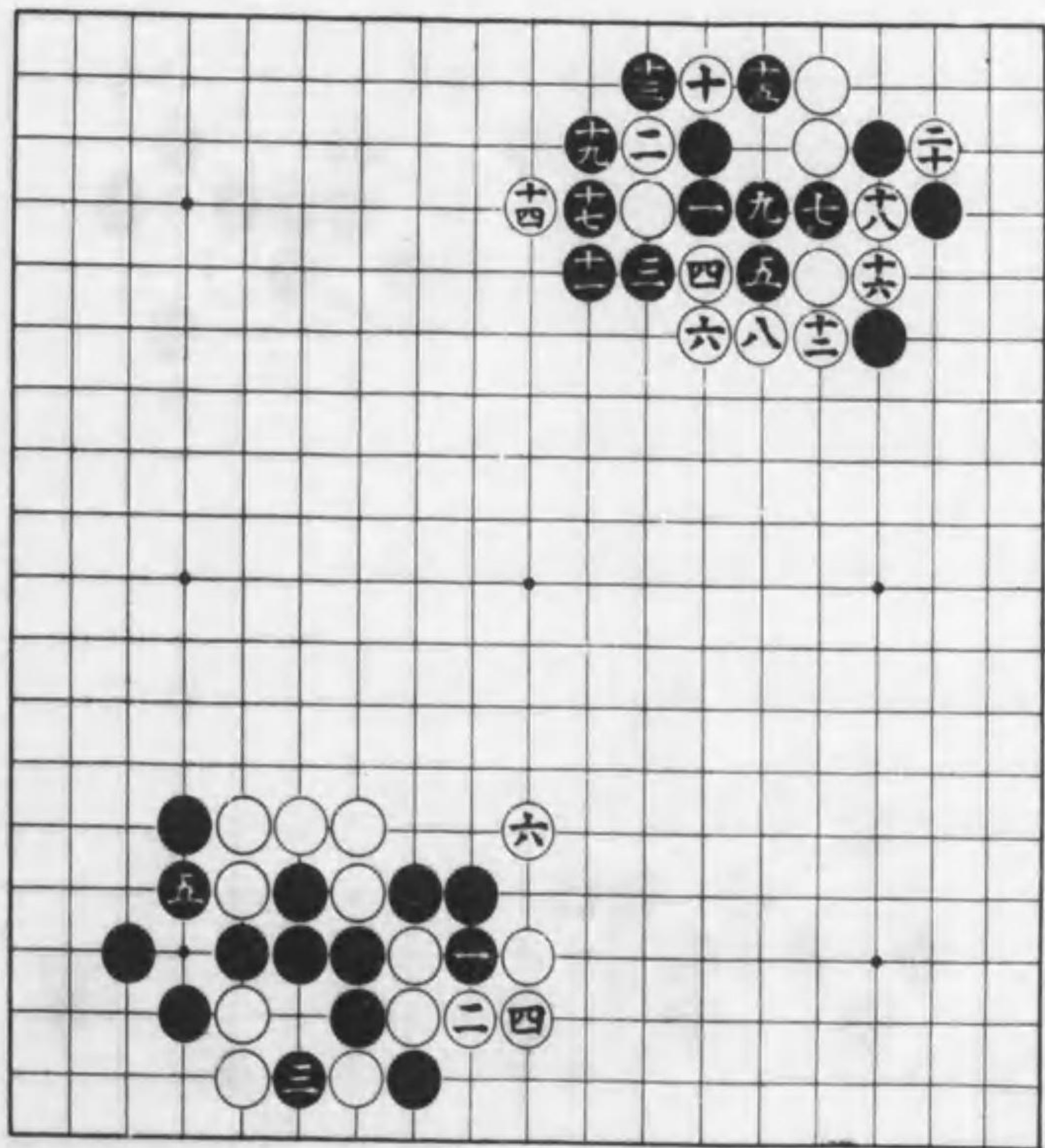


(第九十七圖) 黒は①と粘いで②に行切る事も出来ます。

白③に先立つて白は黒への交換をして置くといふのも打辛い圖の④の後に白ほと出れば黒はとに弛めて宜しいし今言つたほへの交換を先にして白⑤ならば黒と白⑥に約へ、黒⑦白⑧黒⑨となつて白は活き悪い形です。
 左下隅白⑩とこゝで約へるのは愈々無理である。白⑪黒⑫と成つてこの石に活路は先づ望まれません。右方に白の勢力が有つて其工合に依て横に活路を保つ事を萬一得るとしても白不利は當然。

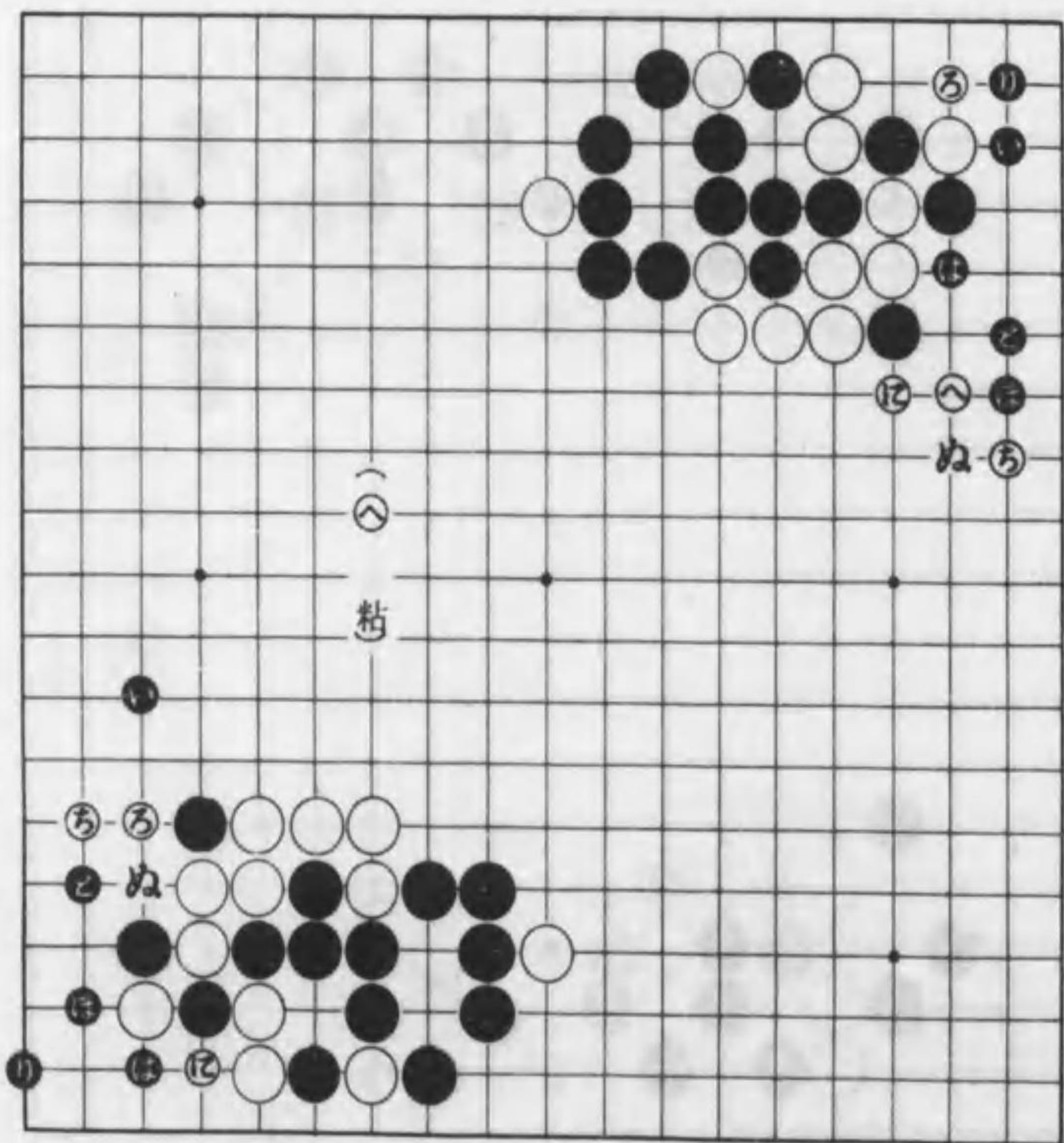


(第九十八圖) 白が四の切から先にした時に三を征に抱へられぬ場合ならば黒十一では十二に切つて充分ですが征の如何に拘らず十一と行び得るので十二迄前諸圖と同結果に達しました。そこで黒十三と切る變化白十四は著理なれど以下二十迄と成ても黒は打てる形である。但し左上隅に黒の配置有らば最も宜しい左下隅の如きも黒は悪くありません實利の大を占めます。右下隅に白の布石有つては然し是も黒は疑問です白八等の變化は順次に。



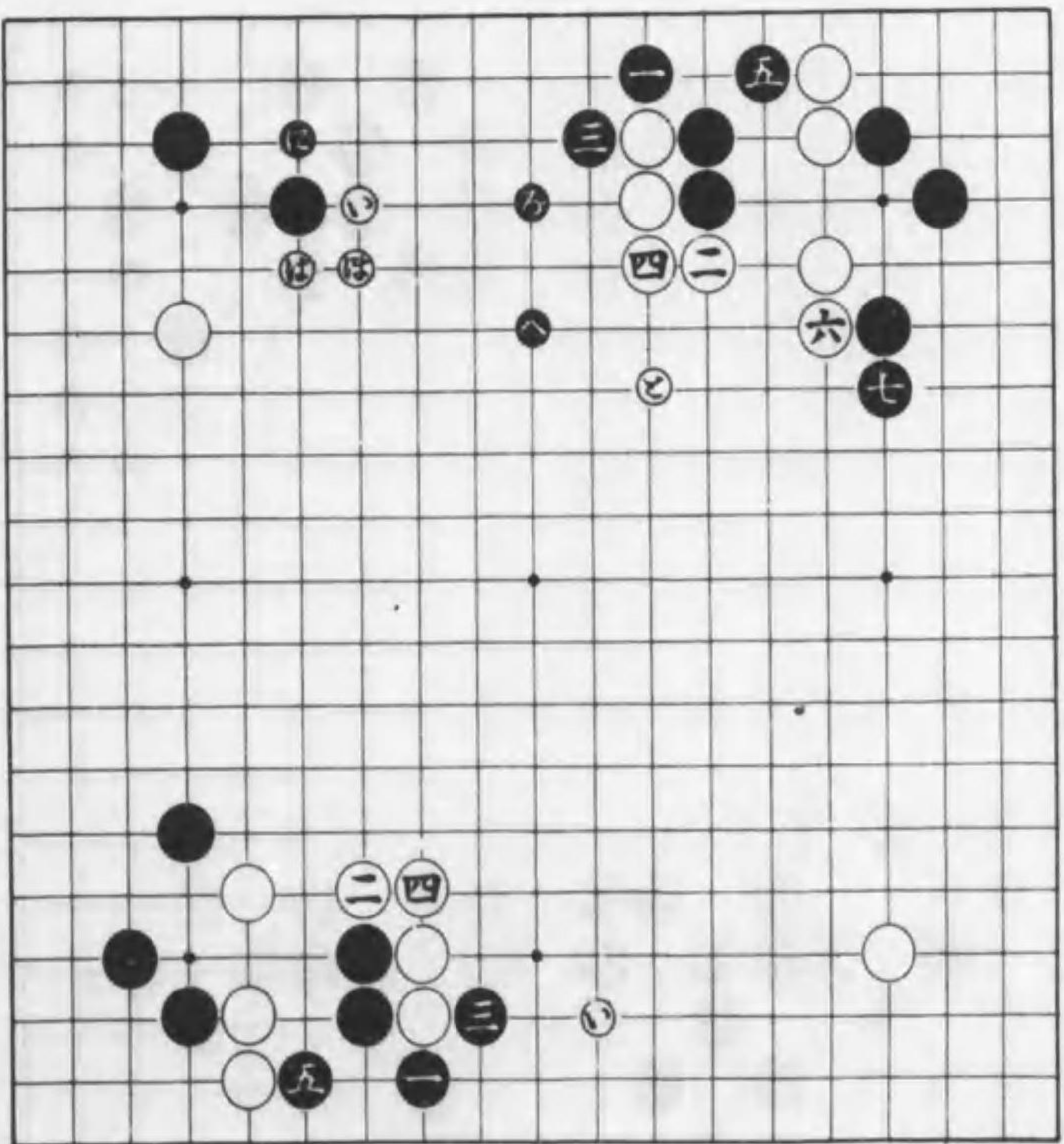
名人圍碁全集 (九八)

(第九十九圖) 前圖上隅の後に黒から狙はれる種々の味を示す。先づ一以下七迄に依つて活きます是は極めて明白でせう。黒八が肝要の著理です白九を十から打つても黒は十一と頂る。白十二にて若し十三に頂るならば黒は十四に引いて活きやうとぬに繰出して白十五を抱へて振換らうと随意です。左下隅黒十六と此方から迫つて様子を窺ふも可白十七と應ずれば機を見て更に黒十八以下の手段が残るし十九をぬに受けければそれだけでも黒は充分に利かせ得ました。



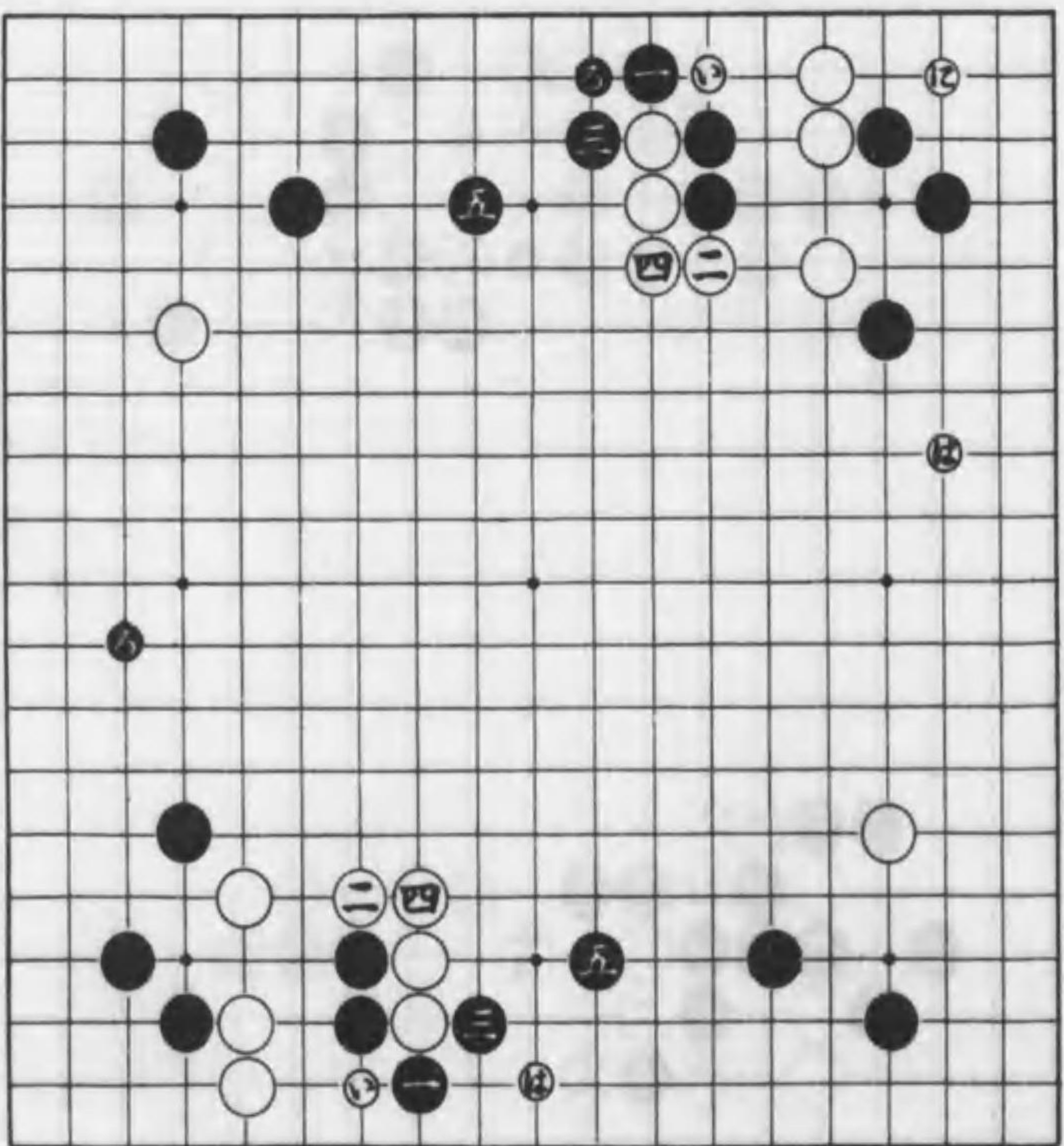
名人圍碁全集 (九九)

(第百圖) 第九十四圖黑八又前
 前圖黑三の手の變化に相當する
 一と綽る手段但し左上隅には圖
 の如き配置等有るを便とし、逆に
 白の勢力有つては不合理です。
 白二は絶對黑三にて四に切る變
 化は次に示しますが三と綽上げ
 られては白四は止むを得ません。
 黑五の意は白六を促して七と行
 び此方で有利に就くにあれど白
 以下等種々趣向されて混戦に
 陥る事は覺悟せねばならぬ。
 右下隅に白の布置有つて左下隅
 五の次に①と迫られるが如きは
 黒一乃至五の不當を語る物です。



(第百一圖) 黒五と備へて置け

ば此方は穩當なる代りに白①黒
 ②白③と迫られる懸念が有りま
 す白④の飛込みは有り黒も安心
 は出来ない畢竟左右の形勢を深
 察した上でなくば黒一は容易に
 は打てぬ。尚第八十一圖と對比せ
 ば黒五の意味は一層明瞭でせう。
 左下隅は白⑤に對し手を抜いて
 ⑥と拓きました此方の不安が一
 掃されると同時に白⑦と置かれ
 るやうな手段を生ずる更に白は
 ⑧の手で直ちに右上隅⑨に迫る
 事も可能なので黒一・三に關して
 は大いに推校を要する理です。

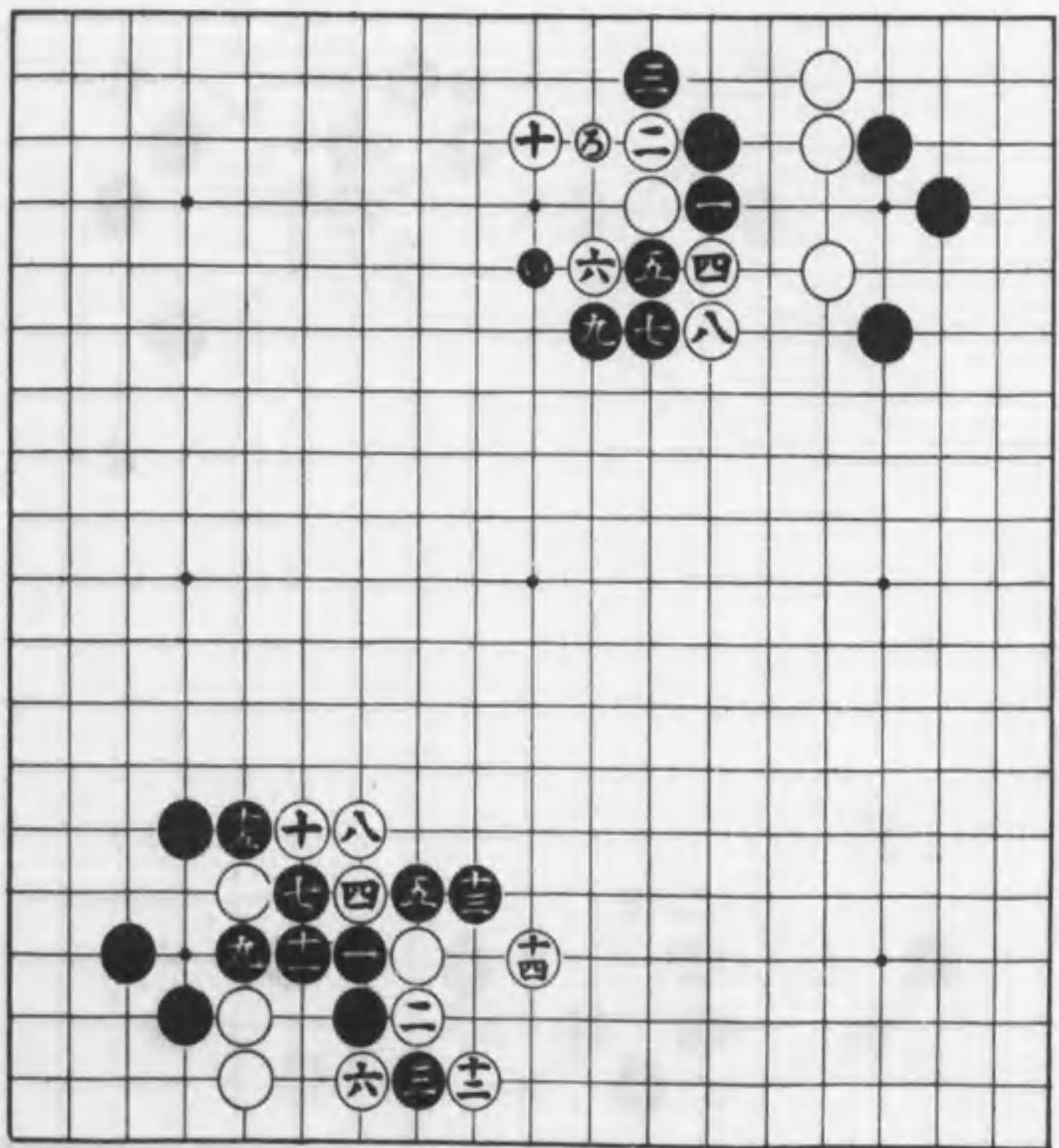


(第百二圖) 黒五と切る手段を考へて見ます。

黒九を他に打つて五七の二子を征に抱へられる場合には黒九と曲らざるを得ませんから、そこで白十と飛ばれて黒不利明瞭と綽ねても白〇で萬事休する。

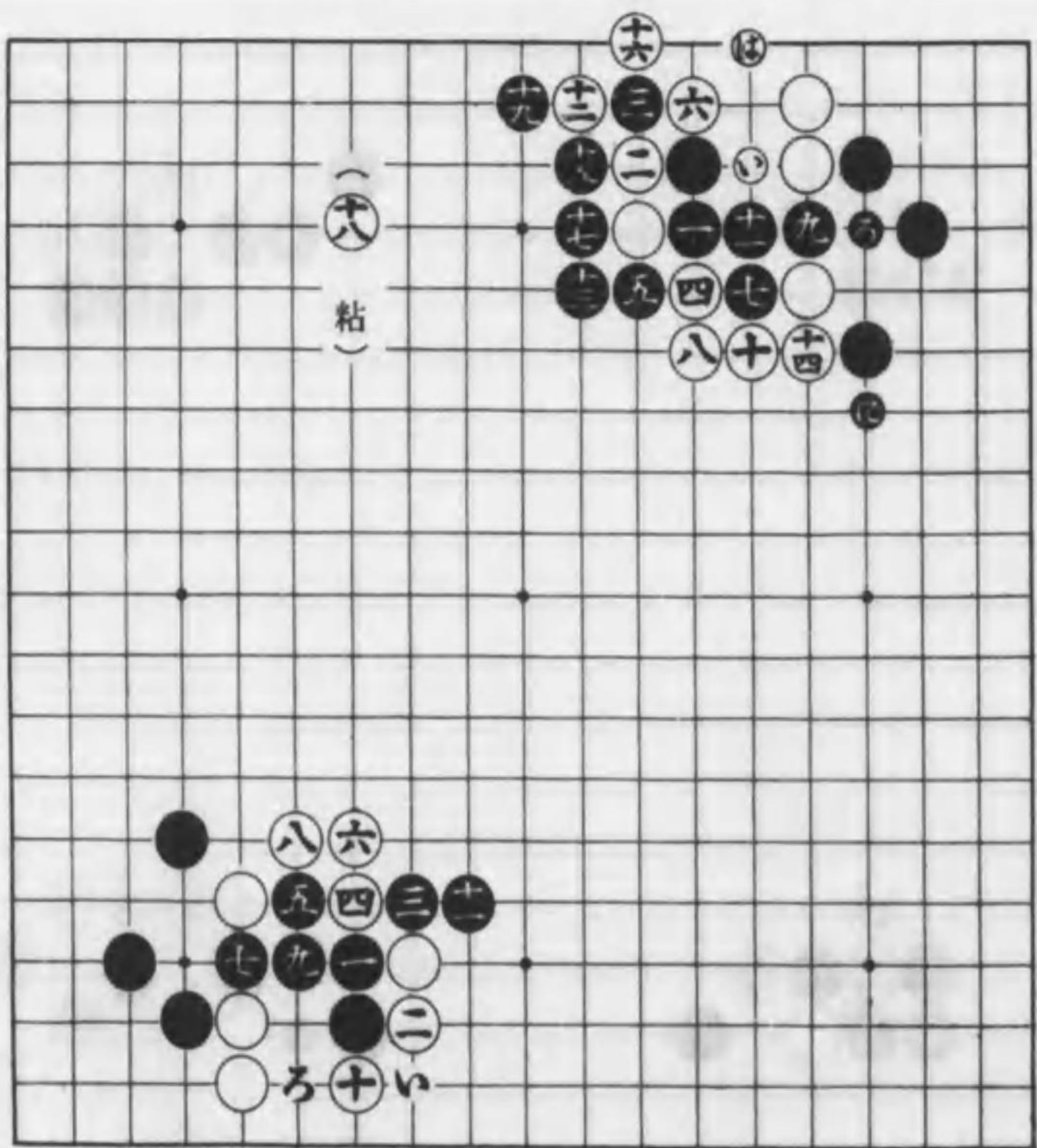
征關係の黒に有利なる際は左下隅白六と切る外無い。

白十四にて十五に粘ぐ變化はありますが十四と飛んで黒十五となれば黒の優勢はさるものとして三と十二との交換有る點は黒が大いに拙い。第九十六圖白十二に就ての注意を参照せば自明。

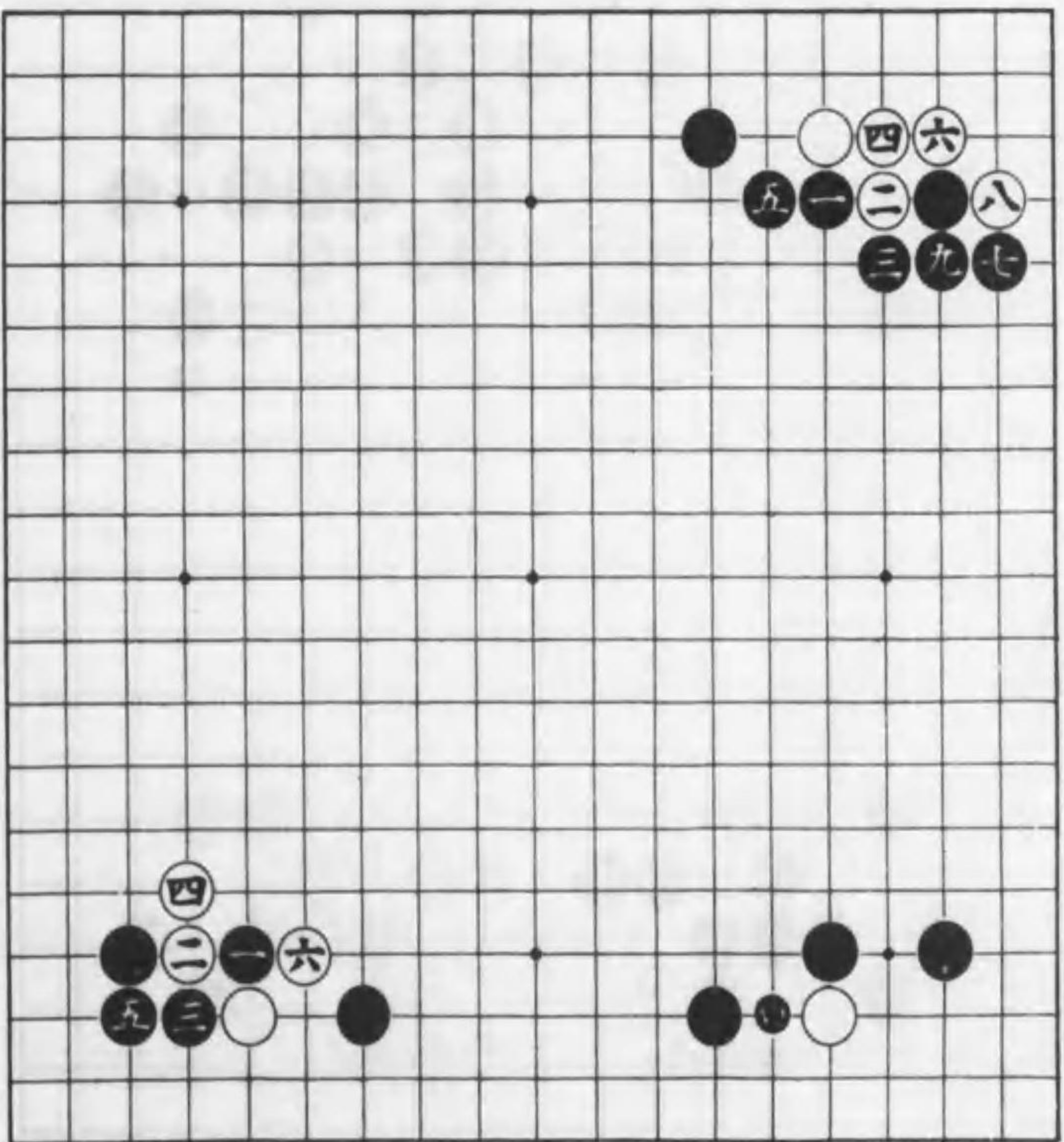


(第百三圖) 白十四と若し粘ぐならば、黒は十五十七と絞つて十九と約へる天で白は〇と活さねばなりませんから黒乃ち〇と行びて大いに有利です。

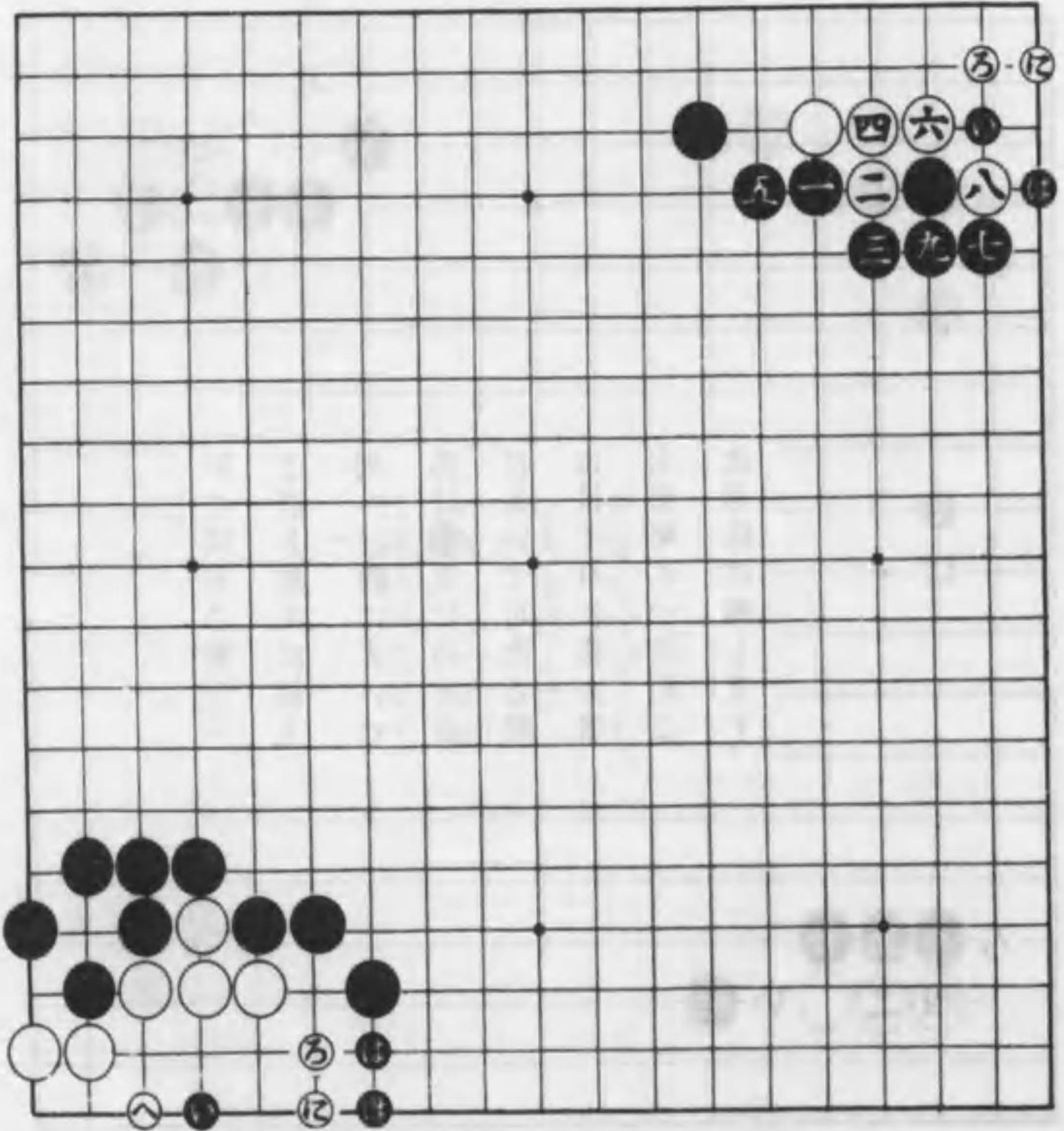
左下隅は第九十四圖白九の手からの變化ですが斯く四と切つて以下十迄となつた時に三の石を征に抱へられると否とは別問題としても十一の手でいに切を入れる理は無い必ず十一と行びて第九十五圖以下に歸する。但十一にていに切り白十一に抱へ、黒ろとなつても局部としては分り易いので黒が悪いとは言へません。



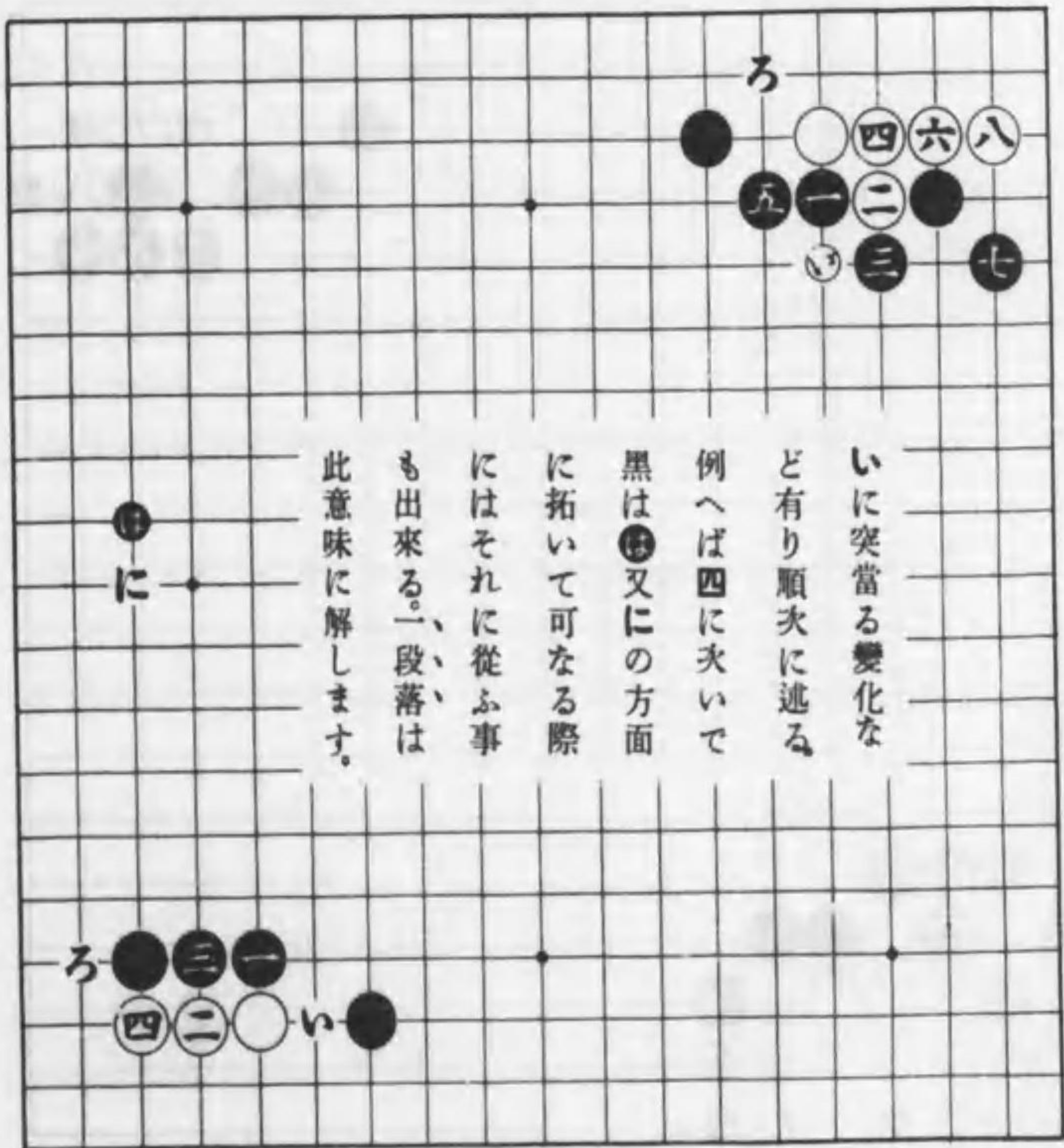
(第百四圖) 從來數次關說した所の手拔定石即ち一間夾に於て白が手を抜いた時黒から打つ型。黒一は一間夾本來の使命なる事も當初以來再三繰返して言ひました。但し一を五に尖むべき場合無きに非ず、第百十二圖参照。黒一に對して白は更に手拔する事も有るが右下隅黒●と完全に取切られる嚴しさは絶大です。然し乍ら二と綽込み得るや否やは又この手拔定石に於る一大要點。左下隅白六と抱へる征の成立しない際には、白二の綽込みが抑々無謀の理である。なほ次に。



(第百五圖) 征關係が白に有利として二と綽込めば七迄は絶對白八と當て終ふのは先手を取つて他の大場に轉ずる意向ですが、次いで早晚黒●以下白⑫となる。黒七で堅く九に粘ぎぞして矢張り黒●から白⑫迄となるに比し、白八黒七の交換が黒に有利なる點は即ち七の掛粘が著理の所以。白⑫の後に左下隅黒●と置く筋が有つて隅を活きる爲には黒●の下り迄利かされる意味が残る。右上隅白八は先手なる代りに斯く黒の外勢を強壯ならしめます。是を不利とせば白は次圖に従ふ。



(第百六圖) 白八と單に下つて置くのです後に①の切を狙ひます黒からはろの尖みより利きません前圖下隅黒●迄利かされて此方面の白の打方を著しく制限される不利は免れるその代りにハが後手ゆへ黒に他の好點を奪はれます而してこれ等は一問夾に白が手を抜いたからの當然の歸結とせねばなりません。左下隅は前に示した征關係の不利なるが故に緯込み得ずして二と行出す型白四迄で一段落です。が次いで黒から打つにはいの突張りとの下り又白からは四で



いに突當る變化など有り順次に逃る例へば四に次いで黒は●又この方面に拓いて可なる際にはそれに従ふ事も出来る。一段落は此意味に解します。

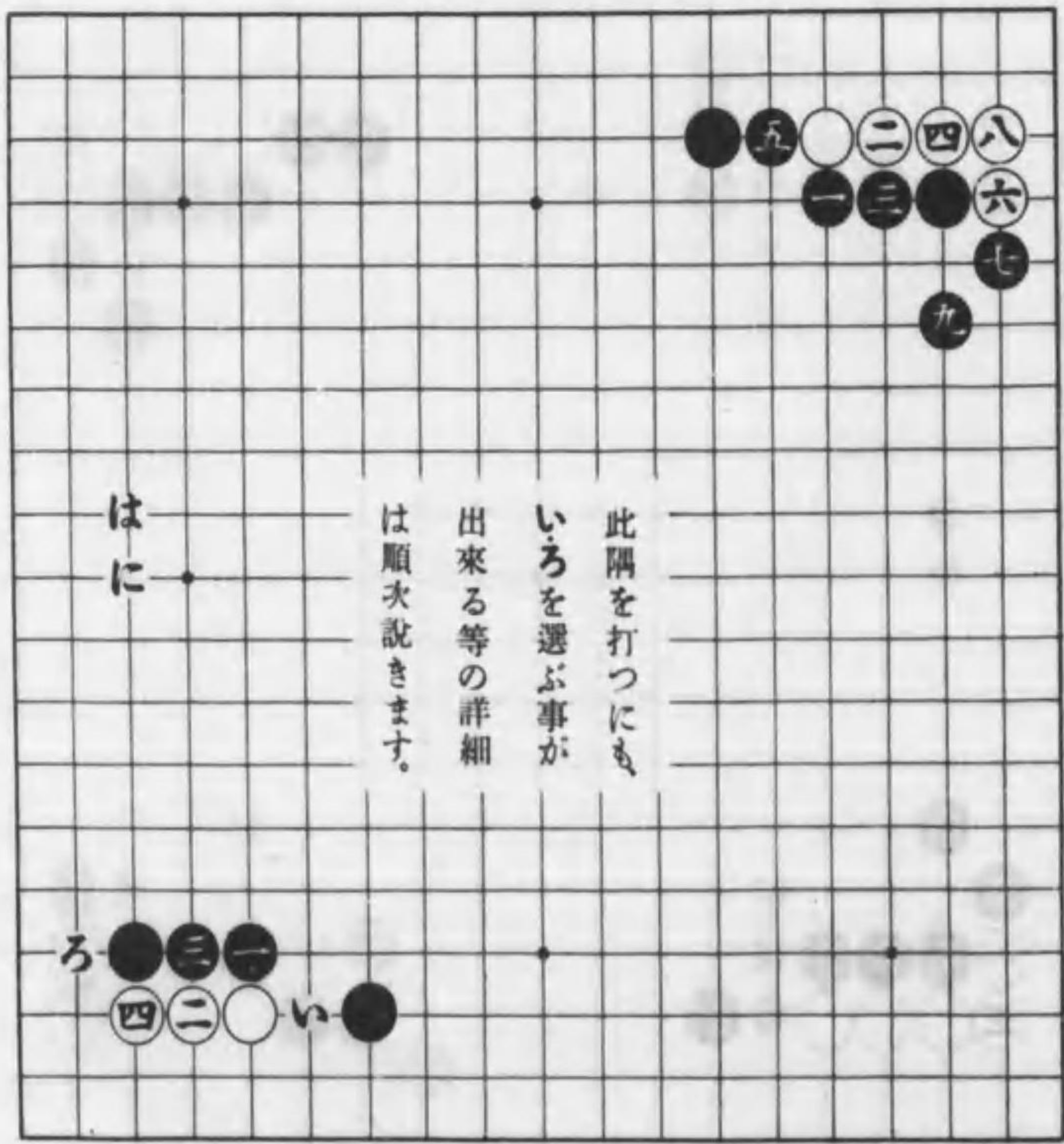
●に



(第百七圖) 黒五は必ずしも直ちに又斯く突張るべきものとは限りませんが著手の順序として示すのです。

九迄の結果黒の外部に瑕瑾無く厚壯を致した所は白二で三に緯込み得た前掲の定石に比して黒の一層有利とされる所以である。左下隅白迄が第三四兩圖の黒四迄と等しい事に注意する。

黒は五の手で右上隅の如く直ちにいに突張るか又第百九圖の様には下に下るか或ははに其他に轉じて後にい若しくはろに打つか更に黒が他に轉じた時に白から



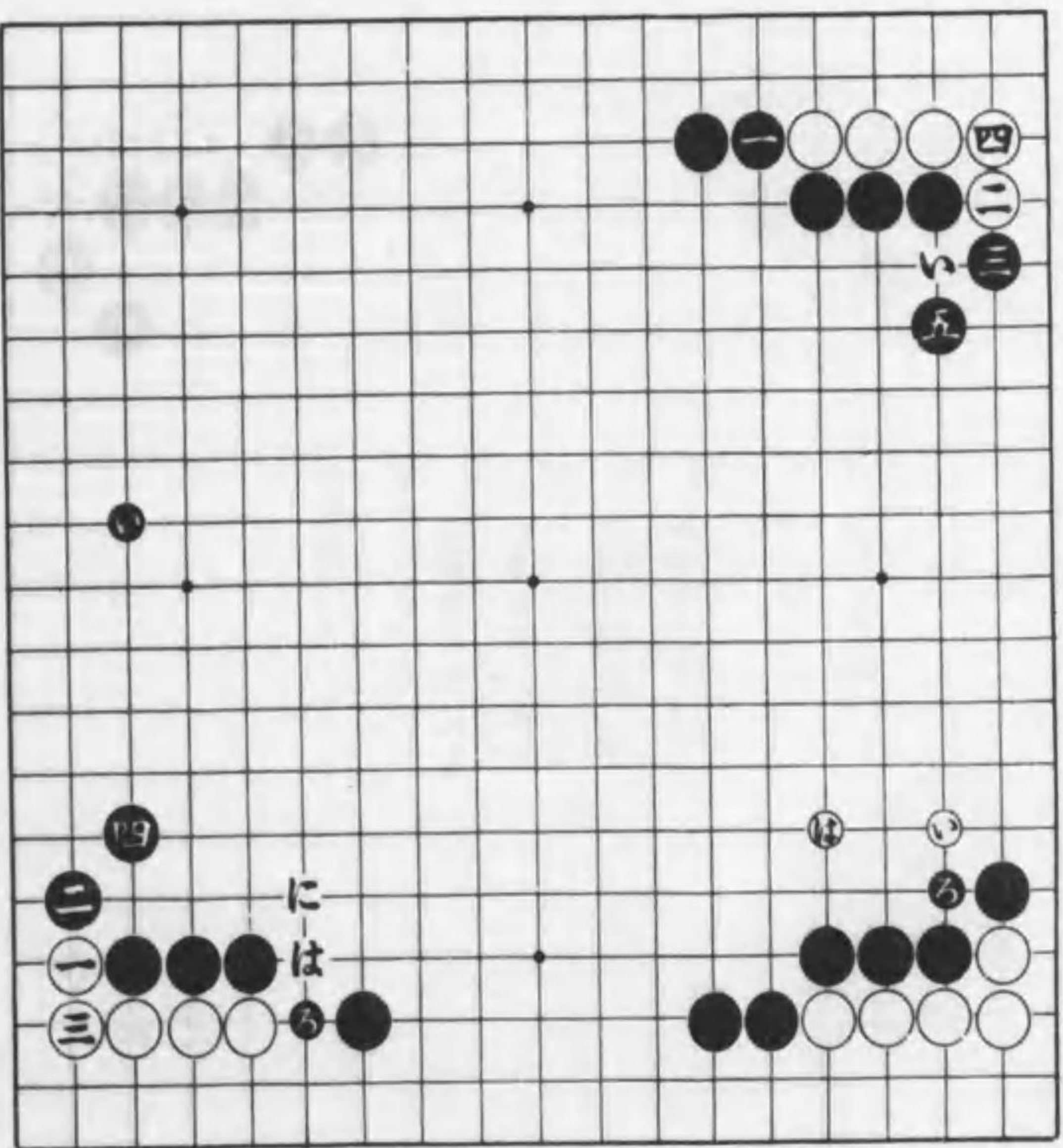
此隅を打つにもいろを選ぶ事が出来る等の詳細は順次説きます。

はに



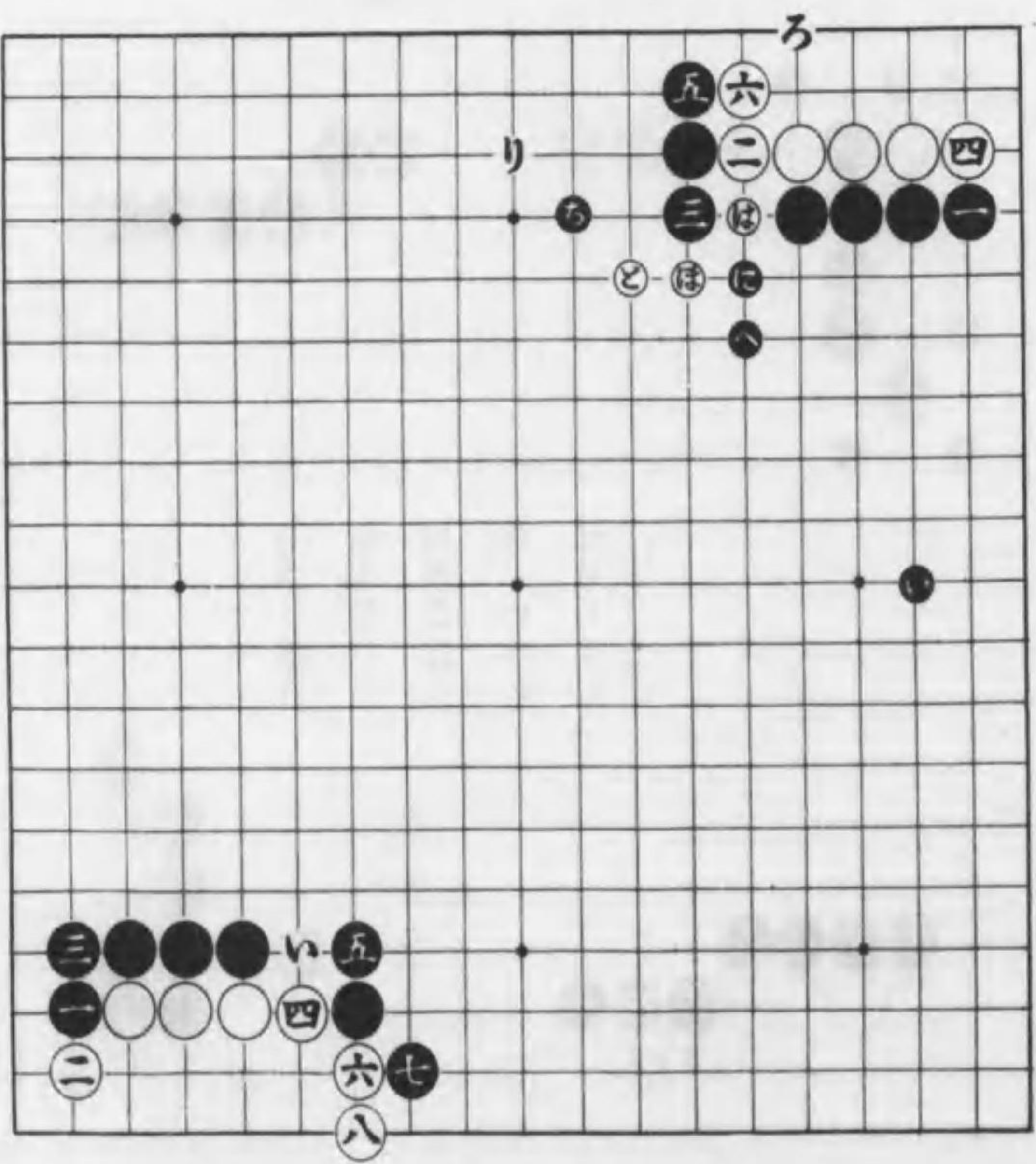
(第百八圖) 機を見て黒から一と約へれば勿論白四迄は絶対黒五即ち前圖上隅の黒九も直接斯く備へるものとのみは限らぬのですが怠れば白いの切は有り又白から五に覗かれ右下隅の置碁大斜走三々打込定石に歸しても互先定石としては黒の姿勢の整はぬ不利を免れません。

左下隅白から一三と綽粘げ此時には黒の拓き等の既著を假定(前圖中一段落の意味に關する註参照)したいば黒は四の後に機を得てと突張ります。を怠ると白は黒白に有る。

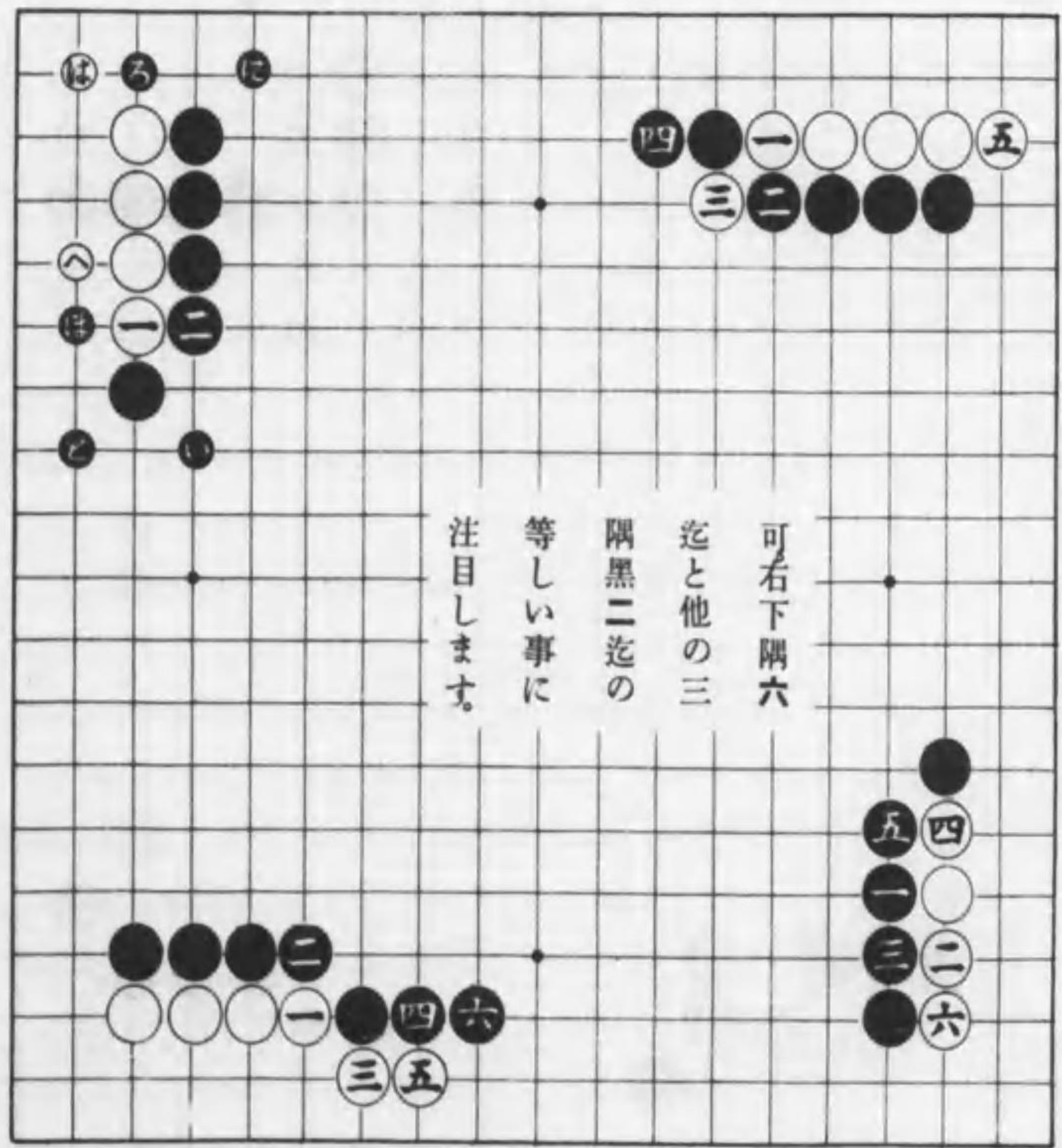


(第百九圖) 前圖右上隅黒五が結局省略出来ぬものとすれば後手の意味有り且つ黒としては次圖右上隅白一三の惧れ有る際に本圖黒一は先手を取り白六の次に方面に發展する方針です。

白六を怠ると黒ろで白死第四圖下隅との差に心せねばならぬ。後には白と出切り黒白若くはり以下となる含みは有る故黒はこの出切に對しては常に成案有る事を要します左下隅黒一三と粘綽ぐのは白八迄の結果いの關點が痛切ですから黒不利右上隅一が肝要。



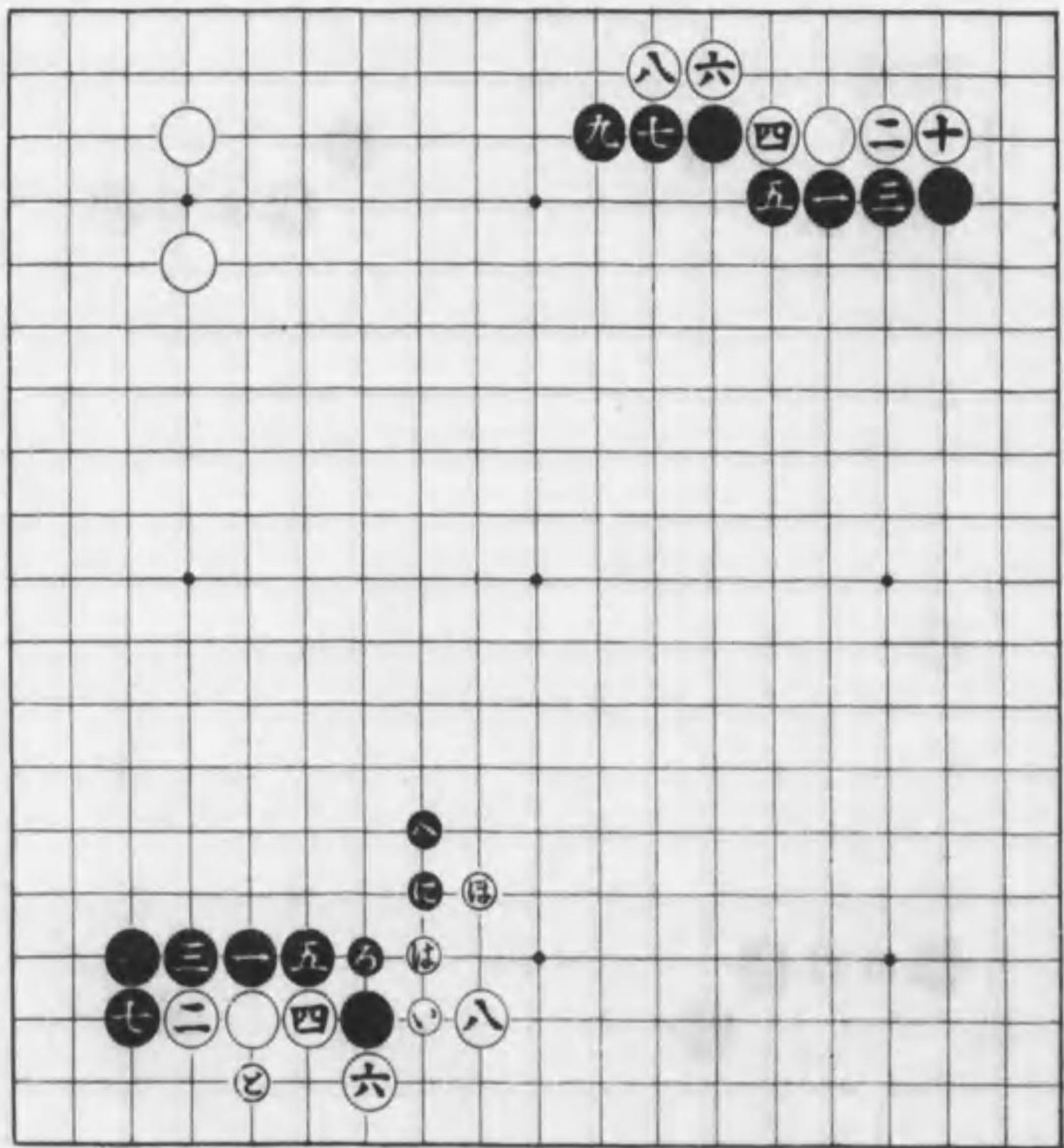
(第百十圖) また白から打つ時に、一と突當つて黒二となれば第四圖黒六迄に等しいので従つて三と切を入れて置いて五と下る事も出来ませんが左上隅の如く二のまゝ他に轉じて切を含んで打つ事も可能なる理然る際には黒の備へは怠れませんが而してに依て黒は厚壯を極めます他日黒の白は黒或は黒の白は黒孰れかを利かせる含み従つて黒若しくはを働かしめる筋を見て黒は打つのが有力である左下隅白三五と直に打つのは黒の外勢を厚からしめるのみで不



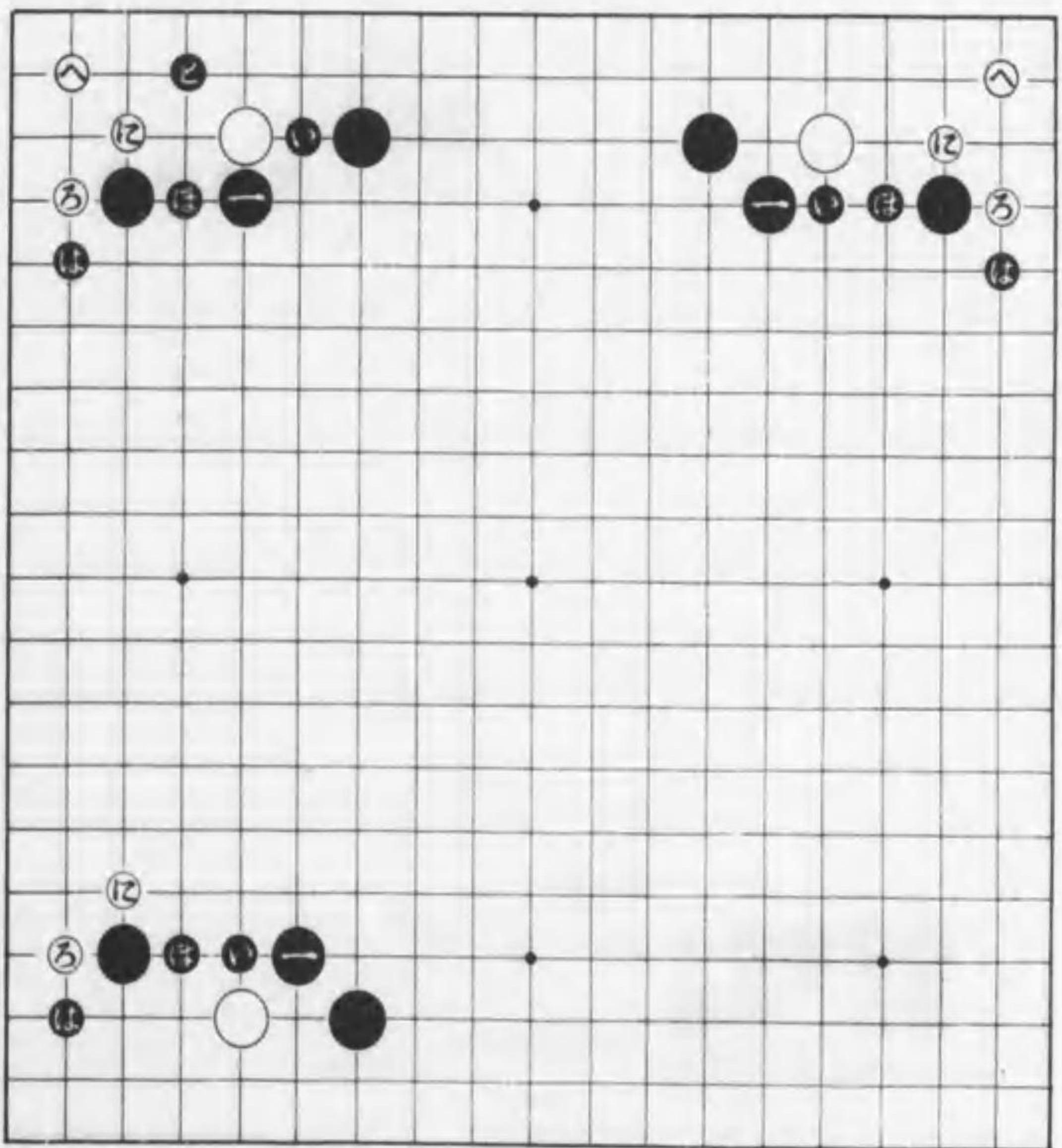
可右下隅六迄と他の三隅黒二迄の等しい事に注目します

(第百十一圖) 白六とこゝで綽

る事も考へねばなりません。左上隅方面に圖のやうな白の配置有る場合を假定すれば黒七と行びて白地の擴大を妨げる。結局十の要處に手が戻るので白は六にて單に十に備へるには及ばぬ事を知ります。左下隅は黒七と隅から約へました。上隅との差は右方次第です。白八は著理是をに當て黒の白は黒の白は黒と左邊に形勢を張られ且つ諸處の斷點を残すが如きは最も拙です。八の後に萬一黒ならは白と守ります。

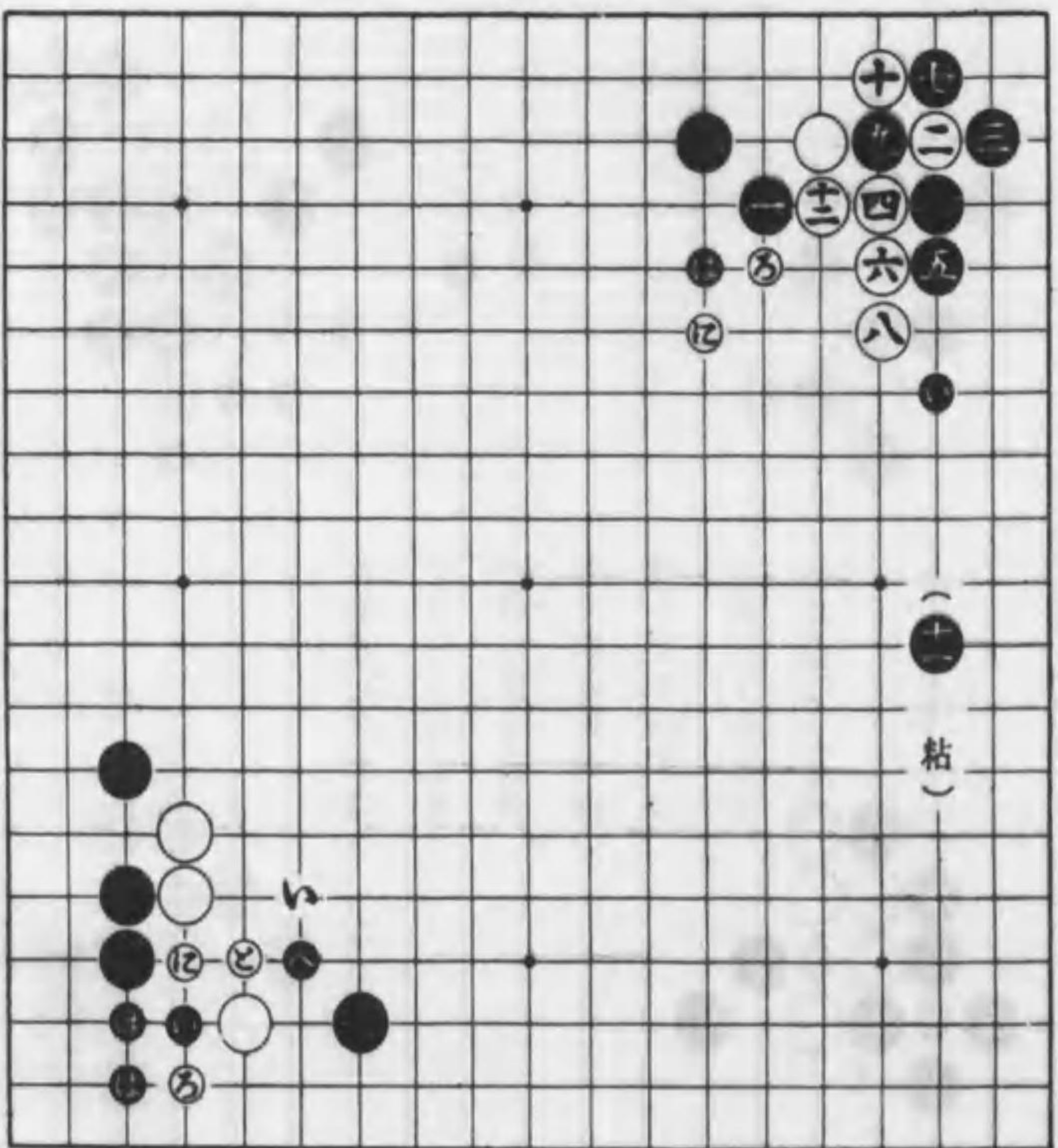


(第百十二圖) 黒一と尖む事が稀には有るけれど●に頂る前圖迄に比して弛んでゐる點が著しい。一に對して白が更に手を抜き黒●と約へた後にも白○と頂られる味有り黒●と外から約へれば白△迄無償では取られません。左上隅黒一に次いで●と突張れば完全に取切れてゐるその差は右上隅黒一の弛んだ證據而して左上隅は白○以下黒●で白に活路の無い事を示した迄です。左下隅黒●●と應じて白○●●を利かされた形である。一に對する白の直接行動は次々に言ます。



名人圍碁全集 (二二二)

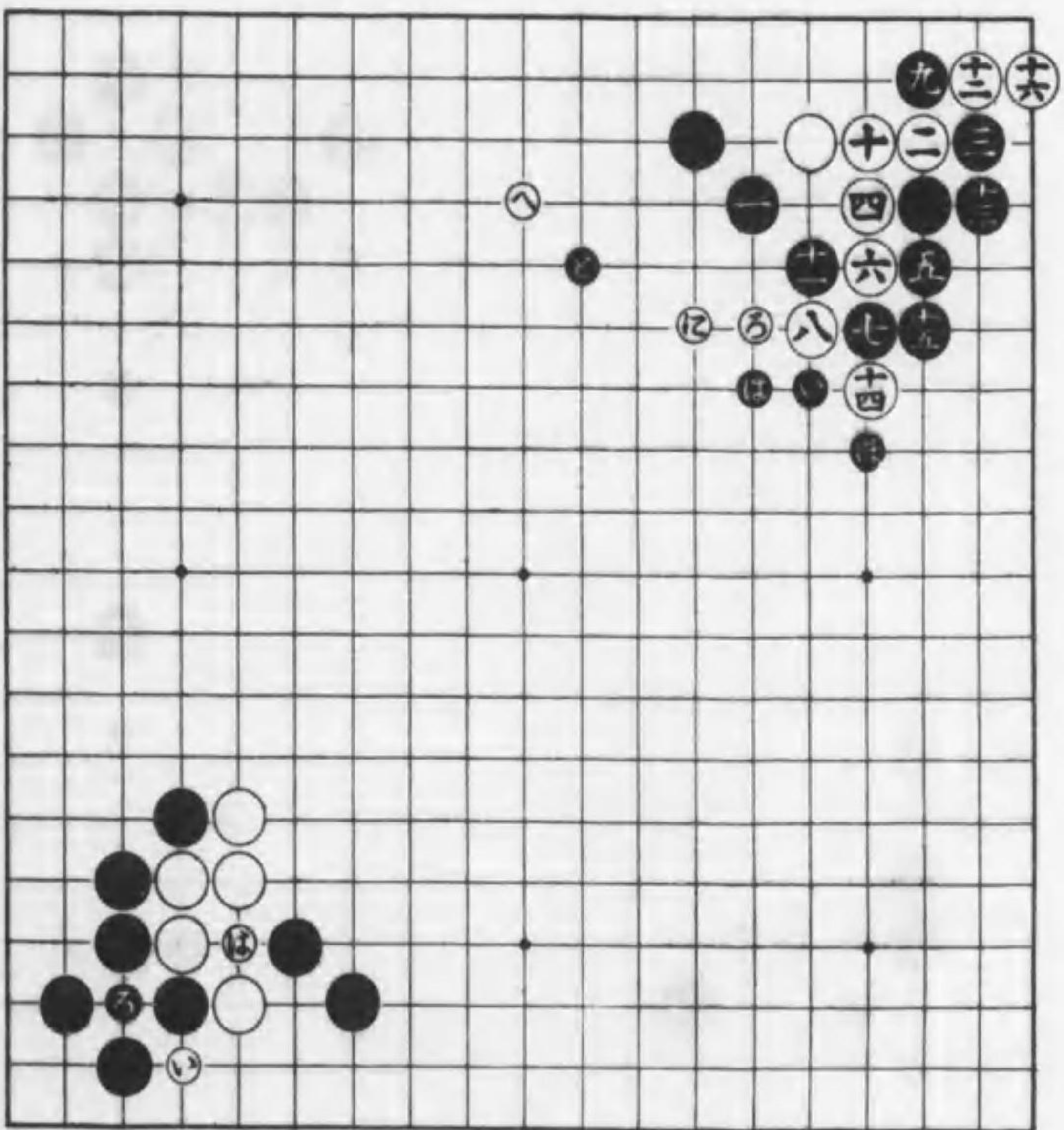
(第百十三圖) 白二は十二の押出から打つ型も有る第百十七圖に示します。白八は著理黒十一の粘は不得止。白十二に次いで黒●を假定せば白○黒●白○と二段に掉ねて行く等ですが少くともこの●迄の結果は左下隅白○迄と手順を異にして全然等しい所に注意する。但し白二黒三は相殺されます。下隅は小斜走掛の定石に於ていに斜走して覗くべきを●と尖頂け、黒●の次に白に手を抜かれ然る後にもなほいに覗くべき筋なるを●と覗いて白○なつた形。



名人圍碁全集 (二二三)

(第百十四圖) 黒七は白から茲に行切られる著理を嫌ひました。黒九にて十一に切り白十二黒九白十黒十三となつても圖の十三迄と等しいけれど十一の切を先にした時には黒九白十の交換は實は疑問です。

白十肝要是を十一に粘ぎ黒十と提られては左下隅の愚形に陥り黒一の緩著は有力と化して終ふ白十四で單に十六に下れば黒は十四に行びて宜しい白十六に次で黒以下迄が想定されますが其時白△と迫つて來たならば黒●と角を衝いて出ます猶次に

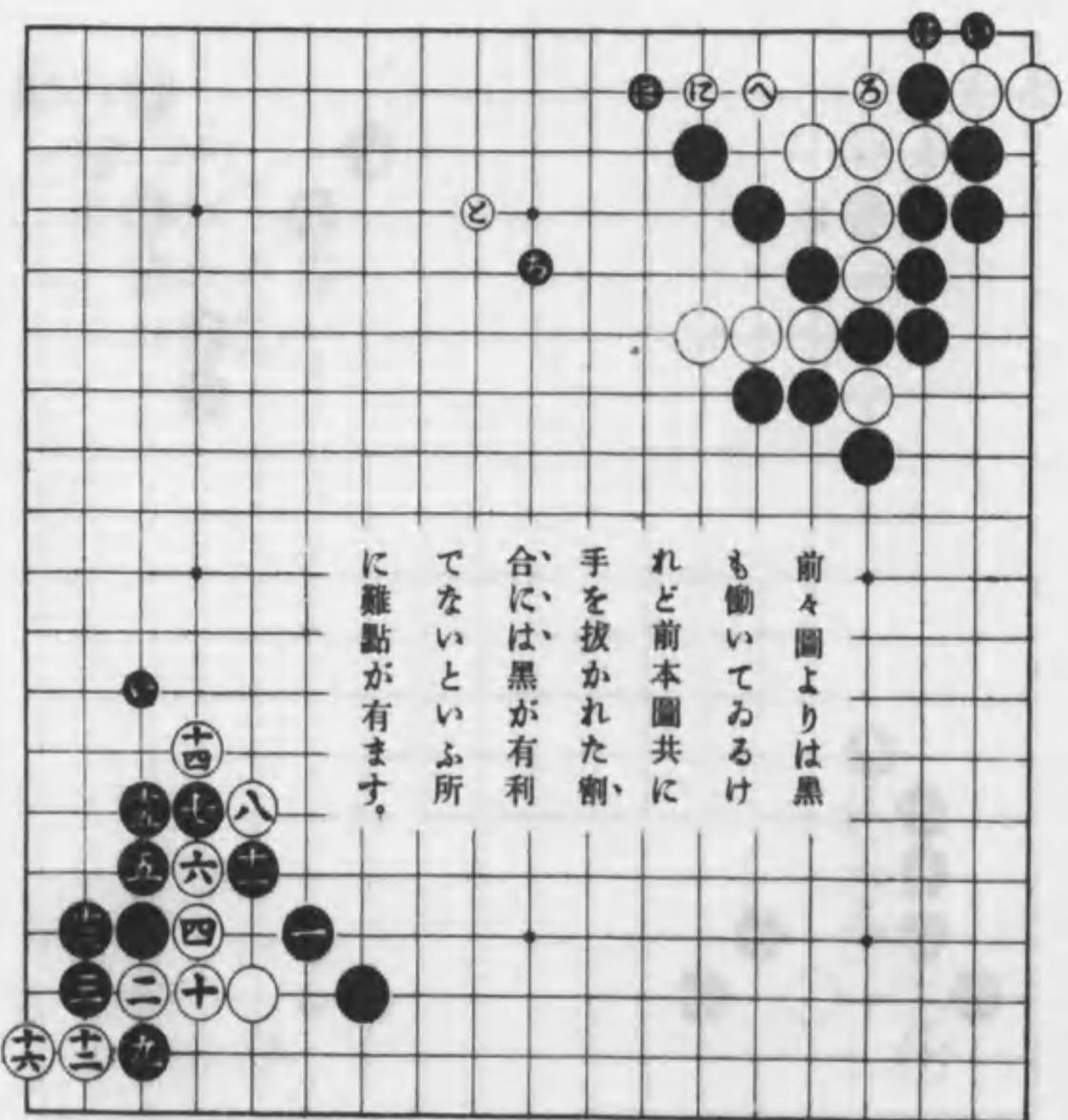


(第百十五圖) 前圖の後に黒●

●に依て白が二子を惜しめば隅全體の眼形の失はれる惧れは有ります。但し白△の頂引が利く限りは急の事ではないけれど雙方共に此點は注意を要する参考迄に加へて置きます。

なほ前圖白△を斯く△と打つて來ても黒は矢張り●の角を衝いて出る事になる。

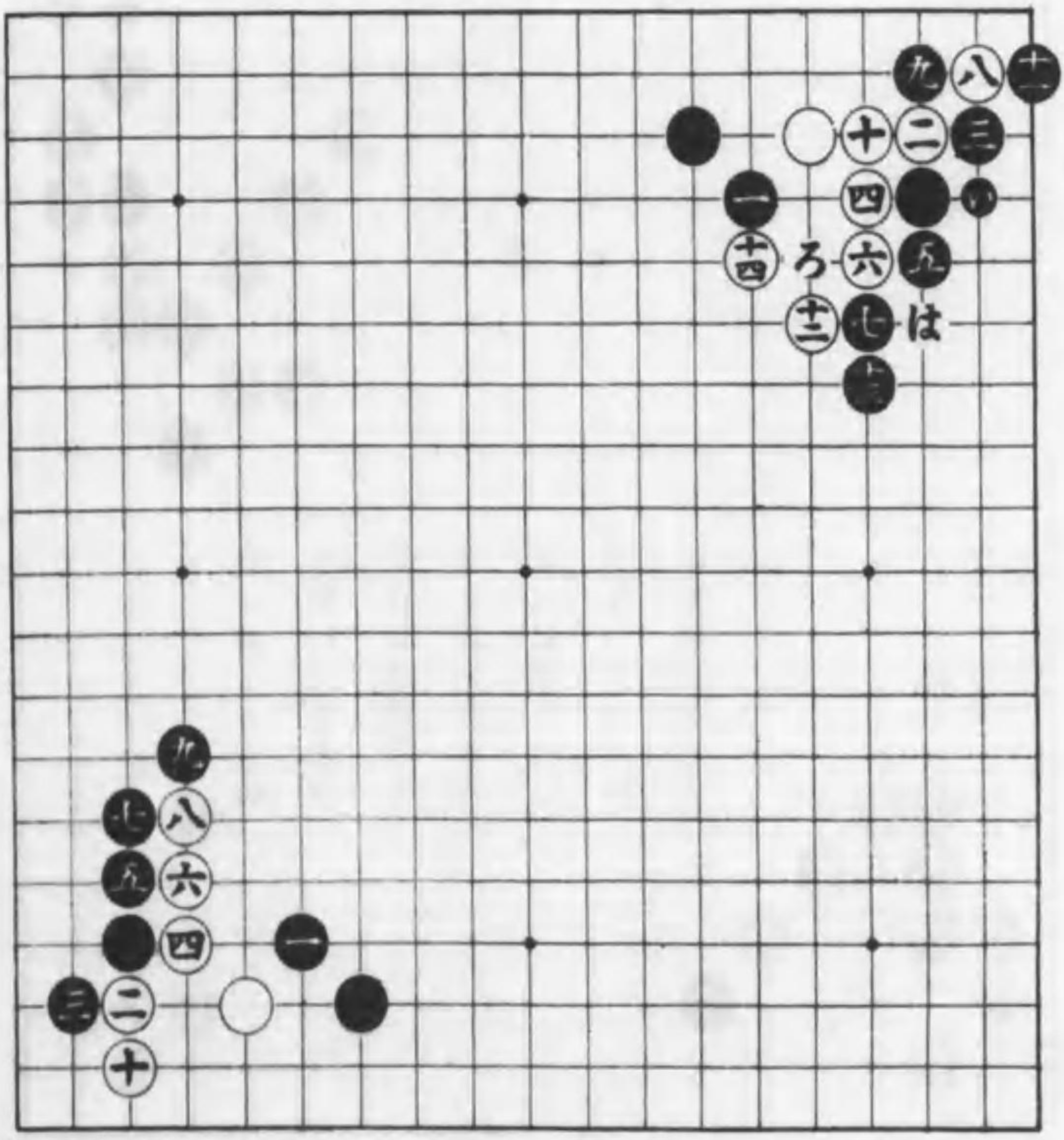
左下隅は白十六に次いで黒●と單に飛んだのですが前圖上隅との取捨は局勢に依るの外無い而して部分的に黒の優勢を獲るは手拔定石として當然であり且つ



前々圖よりは黒も働いてゐるけれど前本圖共に手を抜かれた割合には黒が有利でないといふ所に難點が有ます。

(第百十六圖) 黒十一と抱へる變化この手で●に粘れば白十二黒ろ白十三黒は白十一となつて前掲の型に戻るのですが斯く抱へて白十四と治まられて見ると黒は●は二箇處の斷點が脛に傷持つ形で充分に行動する事が出來ない而して黒一と白十四との交換は明らかに黒に不利の形と化してゐる。

左下隅黒七と行ひれば白も十迄治まつて極めて無事の別れと言へます然し無事といふことはやがて白の手拔に黒一と先著して効果の薄い事を語るものです。

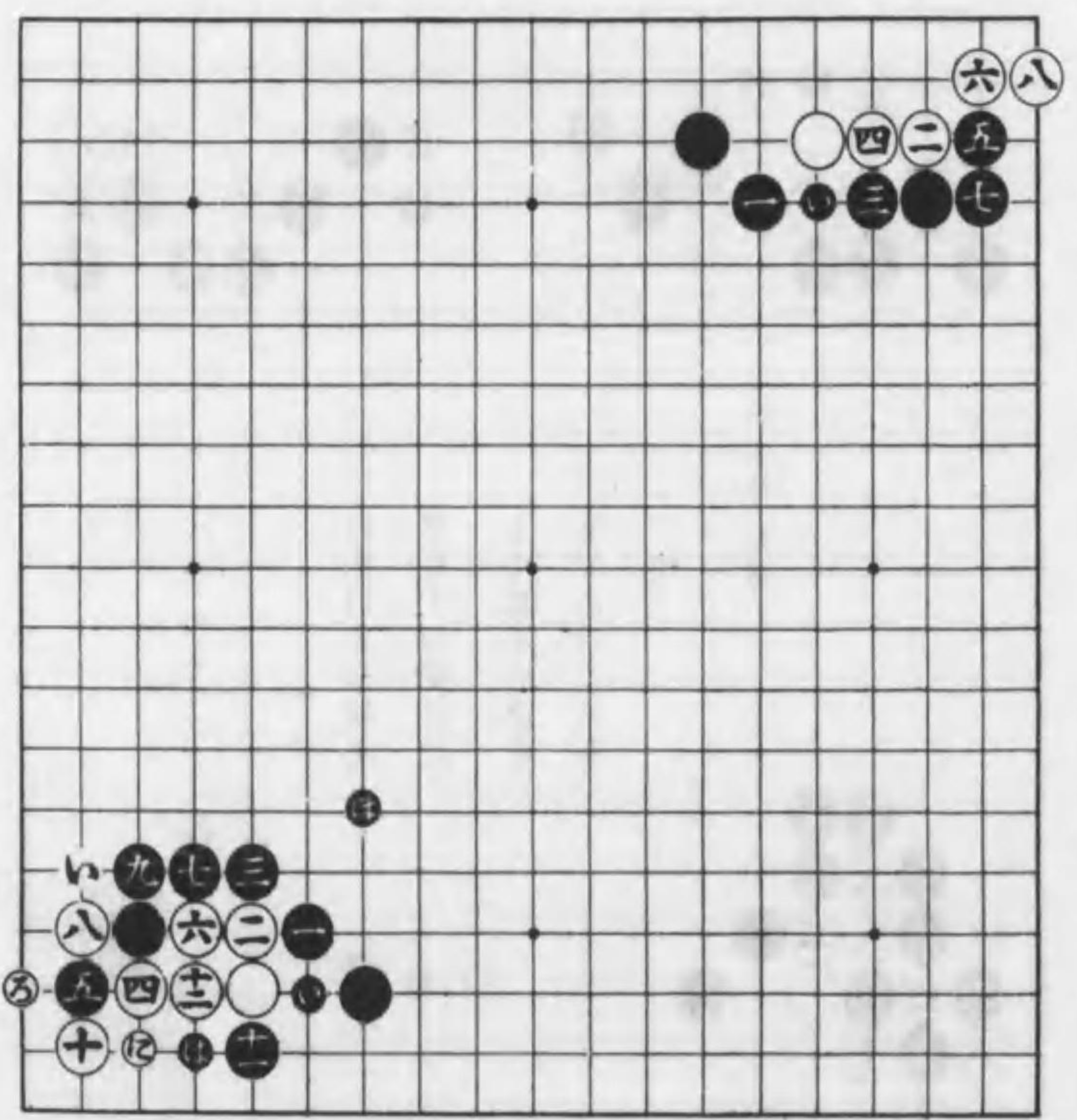


(第百十七圖) 黒三と行るのでは白四と粘がれて最も宜しくない第百五圖と比せば自明でせう更に若し黒●と補つてこの關點に備へざるを得ぬが如き一の弛んだ失當は愈々顯著である。

左下隅は白二と押出す型。

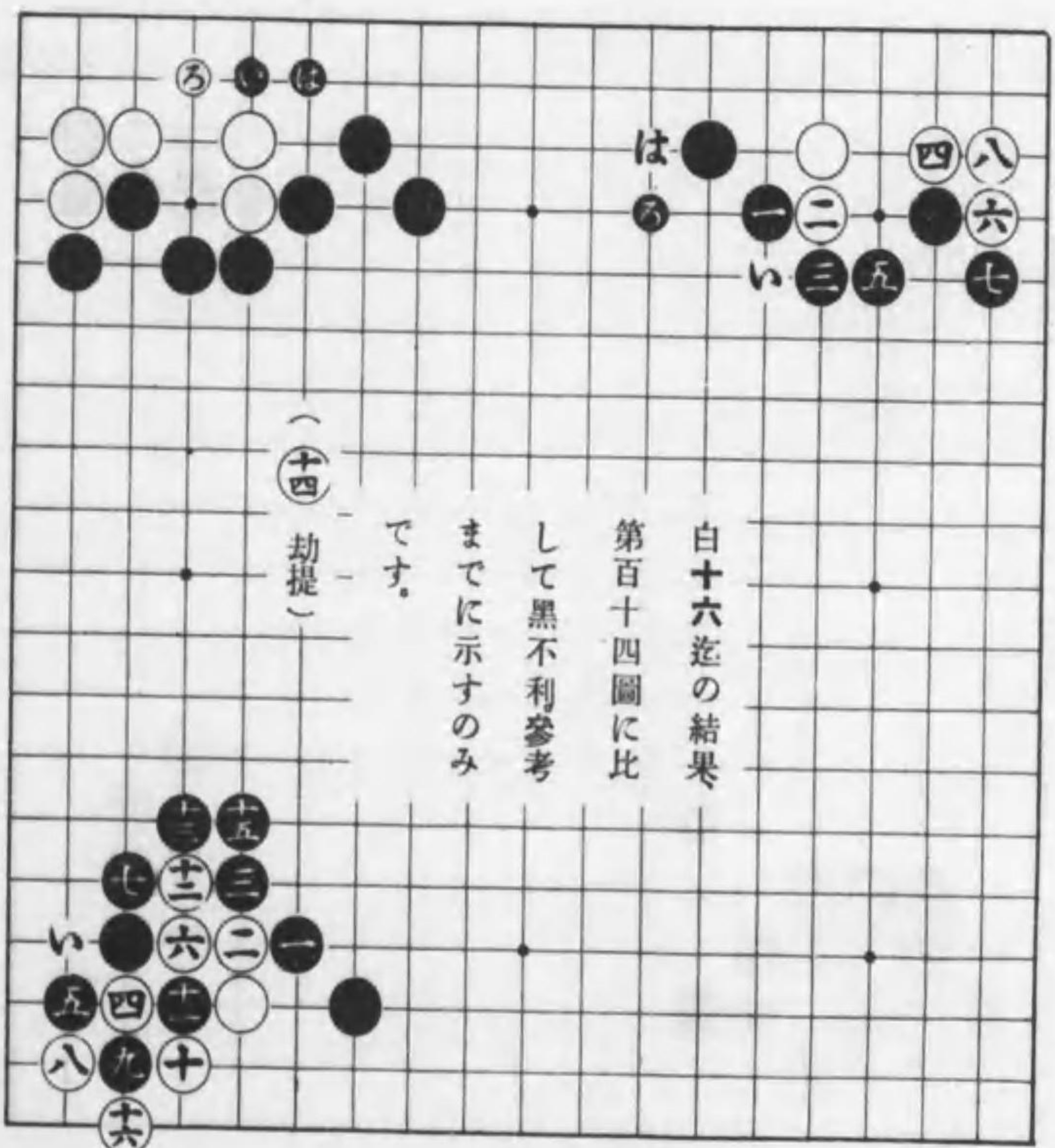
黒五を單に七に引く變化は次に示しますが五と綽れば十二迄は決定的です但し黒十一は著理。

白十二に次いで黒●以下●迄となる位のもので●にていに約へ白●黒●と備へるも有りませうが孰れにせよ黒の充分なる形とは考へられません。



(第百十八圖) 黒五と引けば白は六八と綽粘いで治まります。いの断點を残す事は矢張り黒の弱味である。

但し他日黒が●若しくははに加はつた暁には左上隅●と頂る著理が有るので白○●●と利かされて隅に手の略けぬ所は白も辛い形○で誤つて●に綽出すと黒に○の點に行られて夫迄です。左下隅は黒七と弛める變化黒九で十二を塞げば前圖下隅となる。白十を十一に粘ぐと黒いと粘がれて白不充分勢ひ劫争は雙方覺悟せねばなりません。

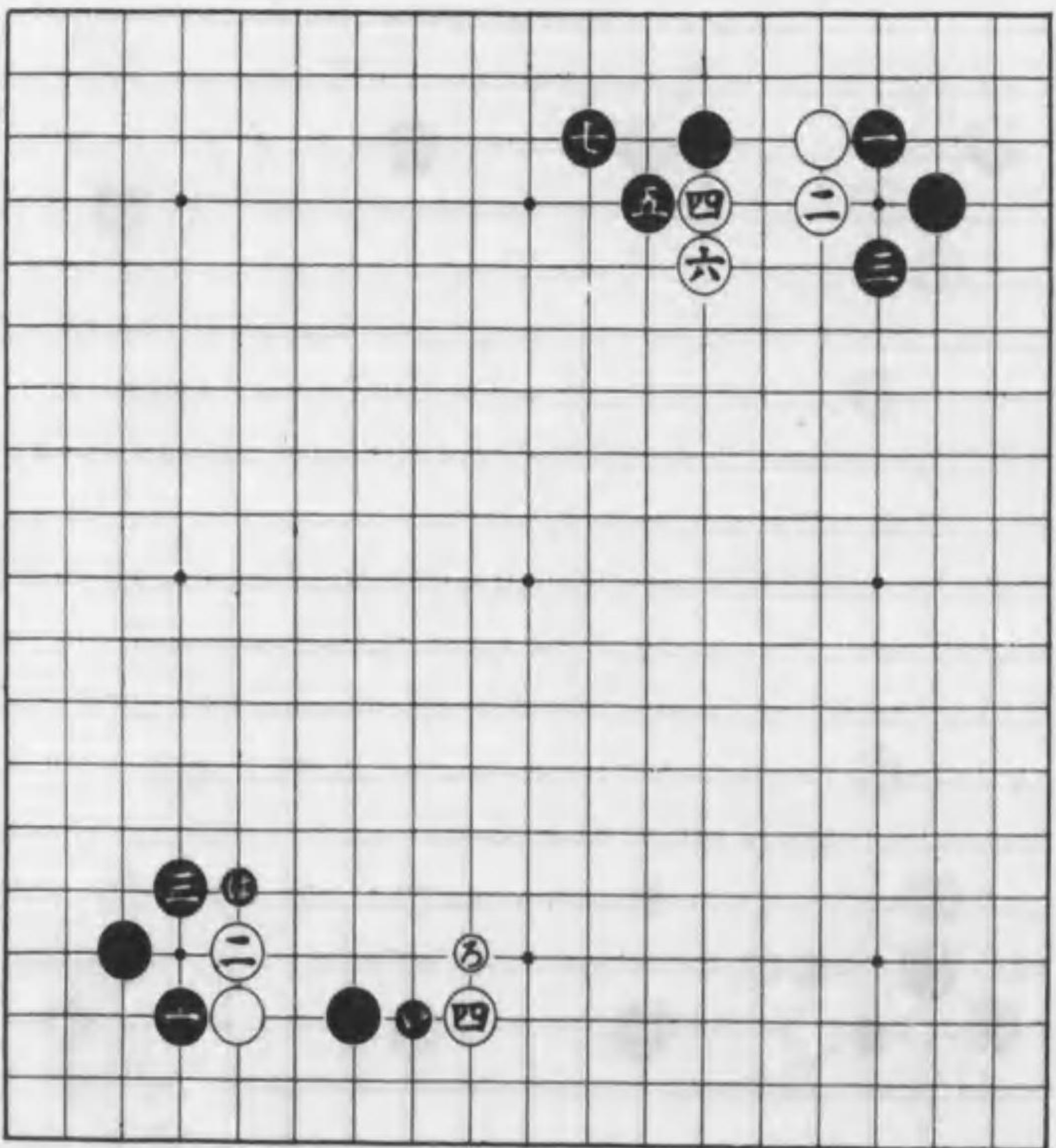


白十六迄の結果
第百十四圖に比
して黒不利参考
までに示すのみ
です。

(十四) 劫提

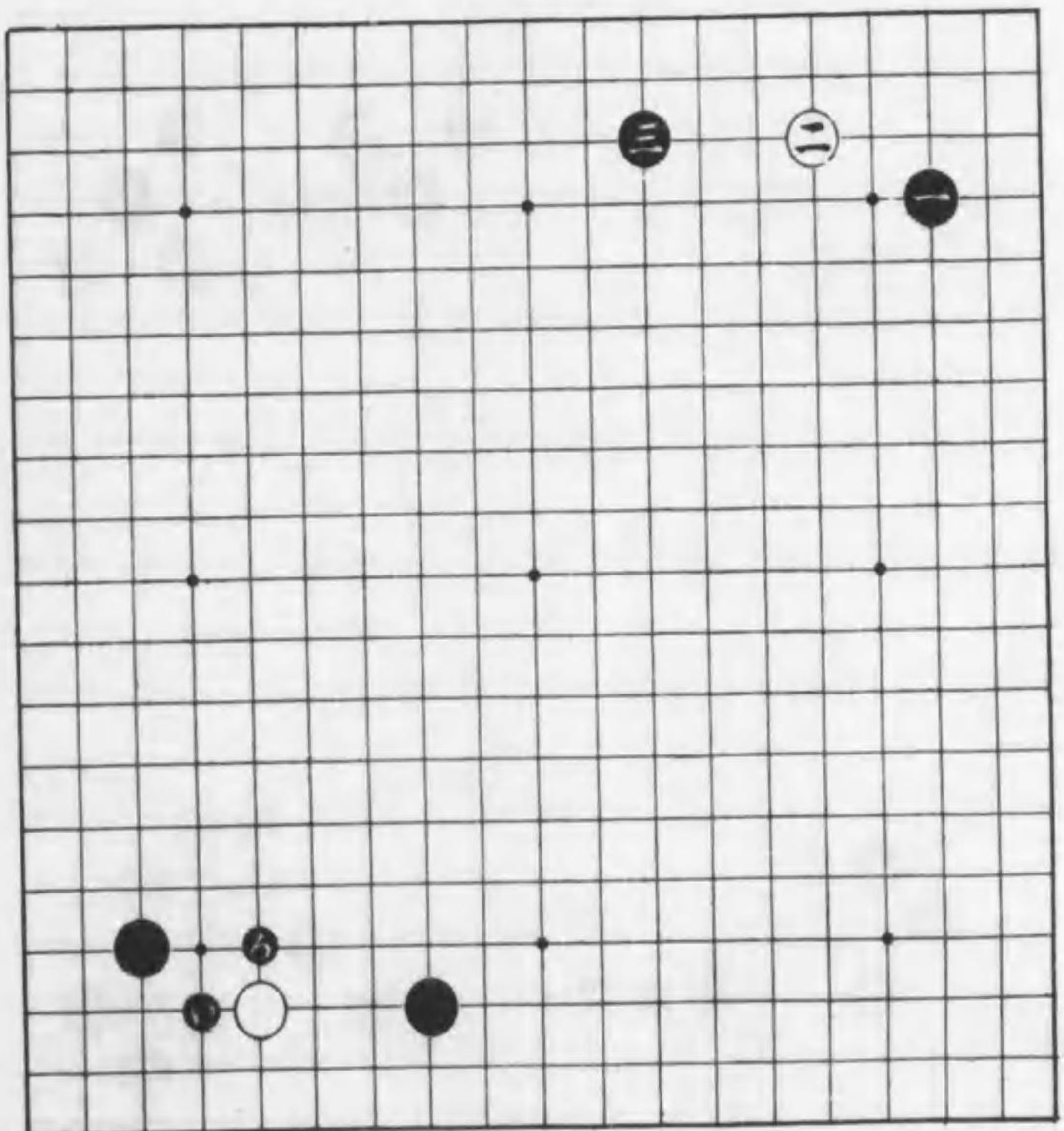
(第百十九圖) 黒一と尖頂ける

のが一間夾の趣旨と反するものである事白二は必ずしも斯く立つを要せざる事、白四は左下隅に依るも可能なる事等は第七十七圖三間夾返しの定石に於て説きました。夾返の有無は局部としてはさしたる異動を齎しません。左下隅は右方の條件次第で白四と迫り二子は捨てても右方に形勢を張る方針、四に次いで●●の交換の後に●と押すか單に押すか孰れも白は直ちに此處に應ぜずとも宜しい。以上通計百十九圖是を以て一夾定石を完結します。



二間夾定石

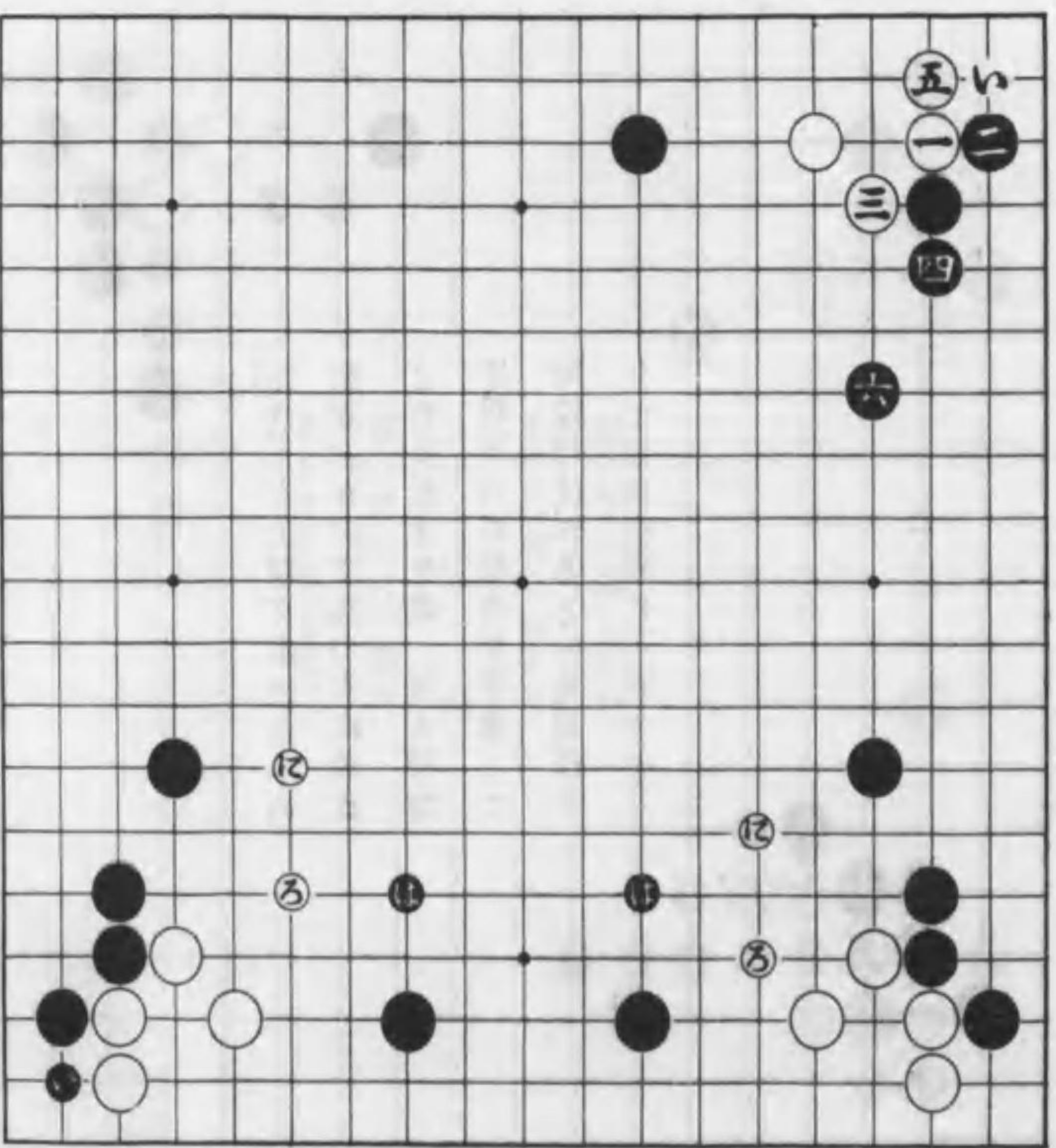
(第一圖) 黒一の小目、白二の小斜走掛りに於る黒三を二間夾と呼び是に對する白四以後雙互の正しき應接を總稱して二間夾定石となす事、二間夾定石に倣ふ。二間夾も夾む意味に於ては一間夾と大差無く唯彼に比して急激でない相違が有るのです。二間夾は白が手を抜けば左下隅の尖頂又の頂を行はうとする白の應手は從つて夫を牽制し緩和する所から出發します。



名人圍碁全集 (二二〇)

(第二圖) 白一の三々頂、黒二を三に行びる事が出来ない所にも二間夾の弛むといふ意味は現れてゐる。二間夾第三圖参照、黒六迄の定型に就ては再び茲に繰返しません。

一間夾に比し、いふ點が孰れから打つも急を要せぬ程度の著しい事は、いふ好點だといふ事とは別に、推して明瞭でせう。左下隅、黒に對しては白と應じ更に黒となるか、若しくは右下隅、白以下を普通とする。然し黒はから約へるのみとは限らず、次圖に従ふ事も出来ず。

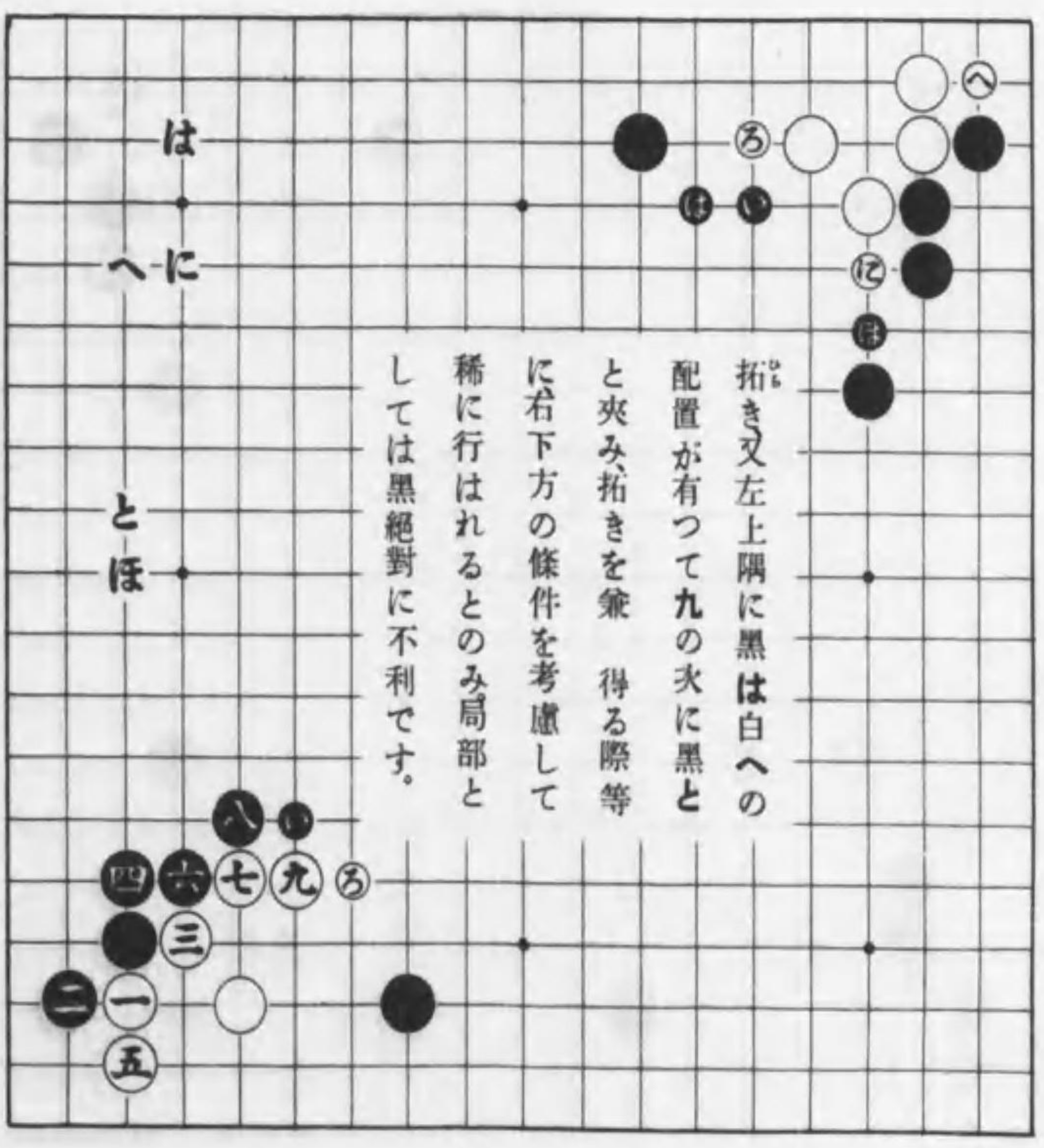


名人圍碁全集 (二二一)

(第三圖) 黒●と後に機を見て

この方から迫る。
 白は⑤以下⑨迄治まる外有りませんが白は是で此處に封鎖されてある。つまり黒はこの⑩以下と⑪の點から約へる前圖下隅と孰れかを見合ふのです。夫を含んで他を打つのです。

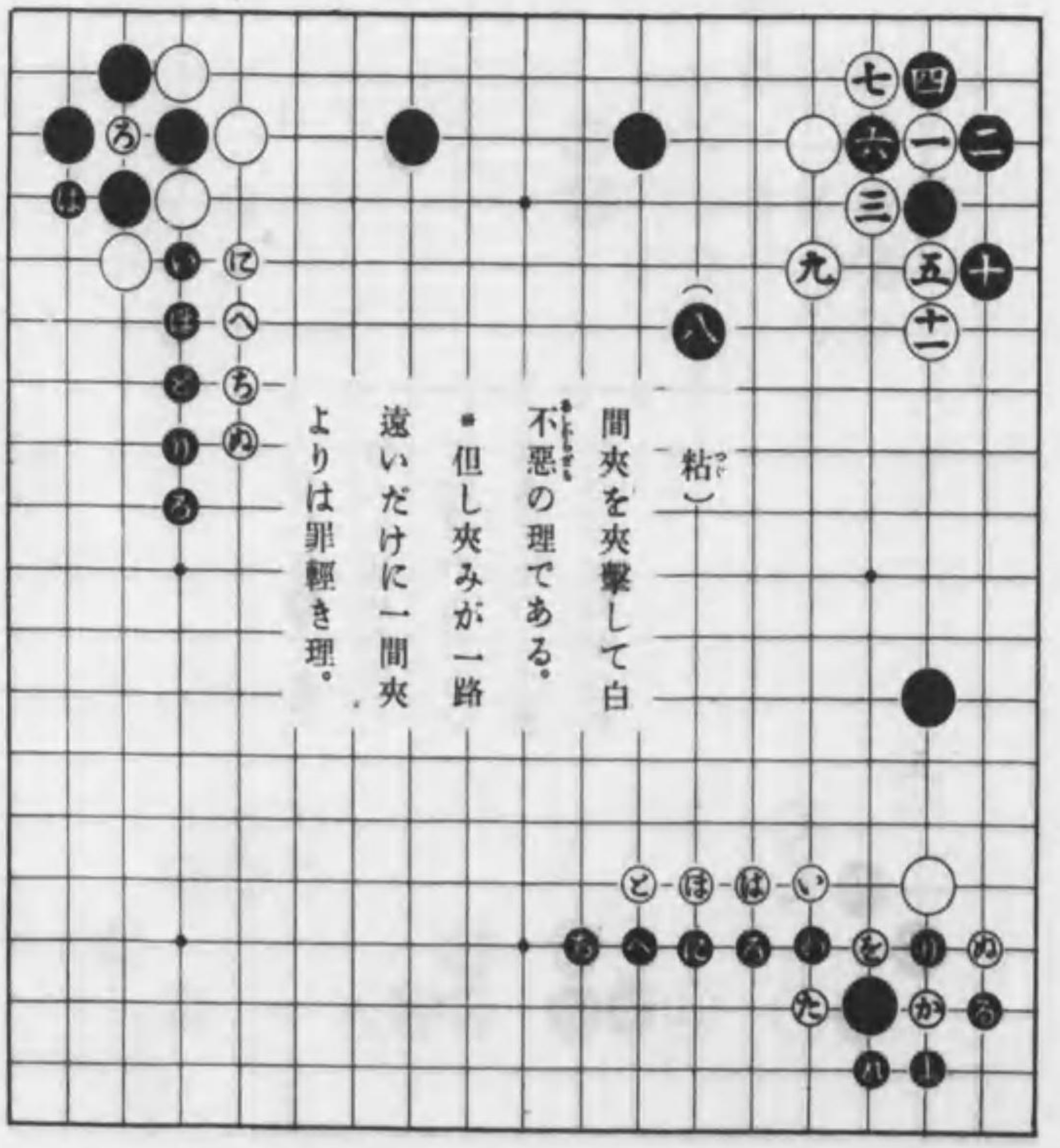
左下隅黒六・八は白七九に依て二間夾の石を弱める弱める程度が一間夾の時よりは小なるの故を以つても許されません。九に次で黒●白○と打つ程夾んである石に響く事は明瞭。左上隅に黒はにの締りが有つて九の次に黒ほと



拓き又左上隅に黒は白への配置が有つて九の次に黒とと夾み拓きを兼 得る際等に右下方の條件を考慮して稀に行はれるとのみ局部としては黒絶對に不利です。

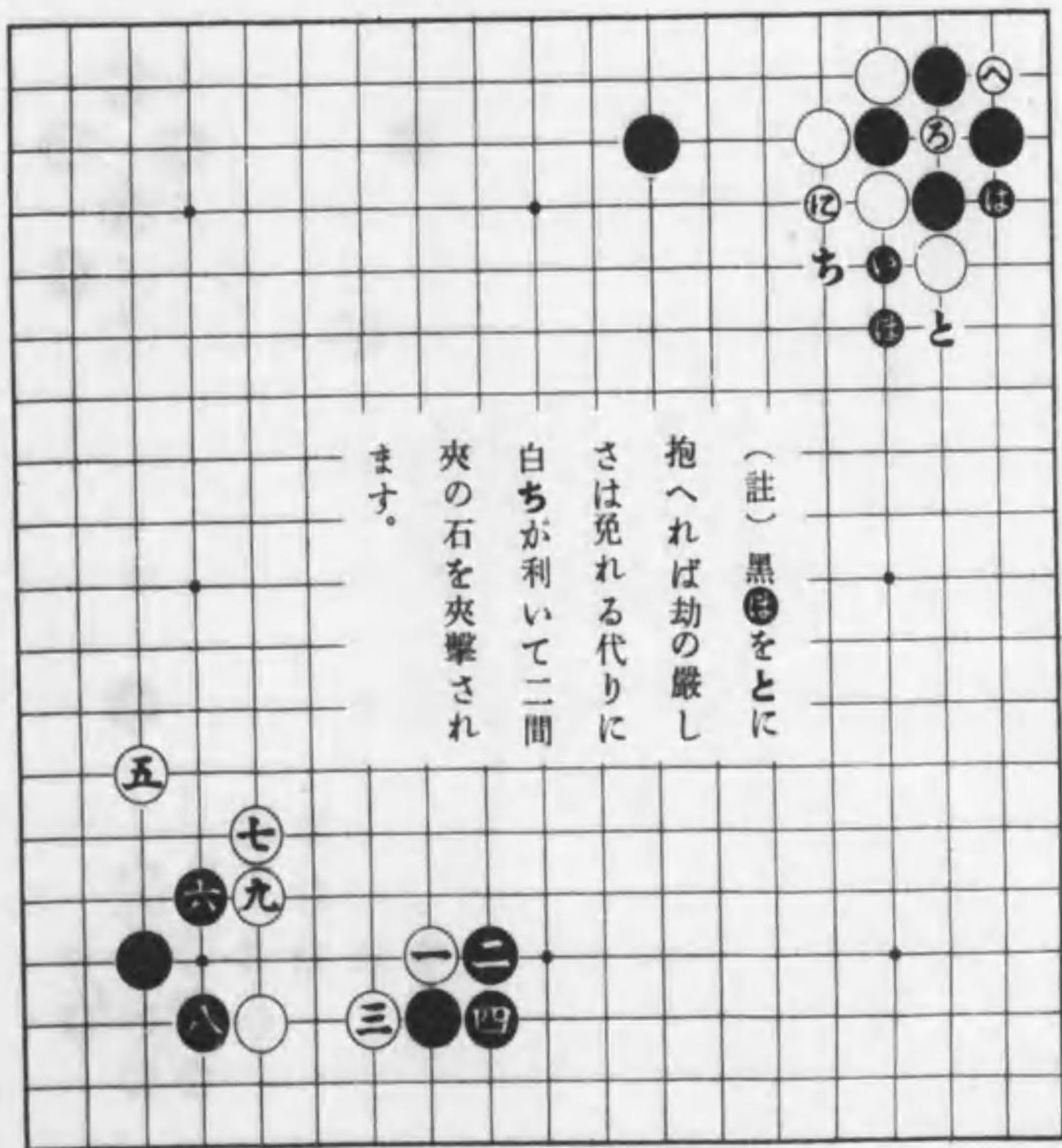
(第四圖) 黒四と綽捲つて白十

一迄となるの不當なる理等に就ては一問夾第六圖に於ても述べて置きました。八の手で粘がずに左上隅黒●と切るのは無理です。白○黒●の時に白は他にも打方は有るけれど假りに⑫以下⑭迄平易に打つて黒●の次に二間夾の石を右方より夾撃するとしても少くとも黒有利とは言へない。此手割は右下隅白○以下黒●迄と全然等しく初め⑮迄の交換は白不利ですが、茲で白は手抜して他を打つてゐる而して黒●以下⑯迄の交換は黒が損です。次に二



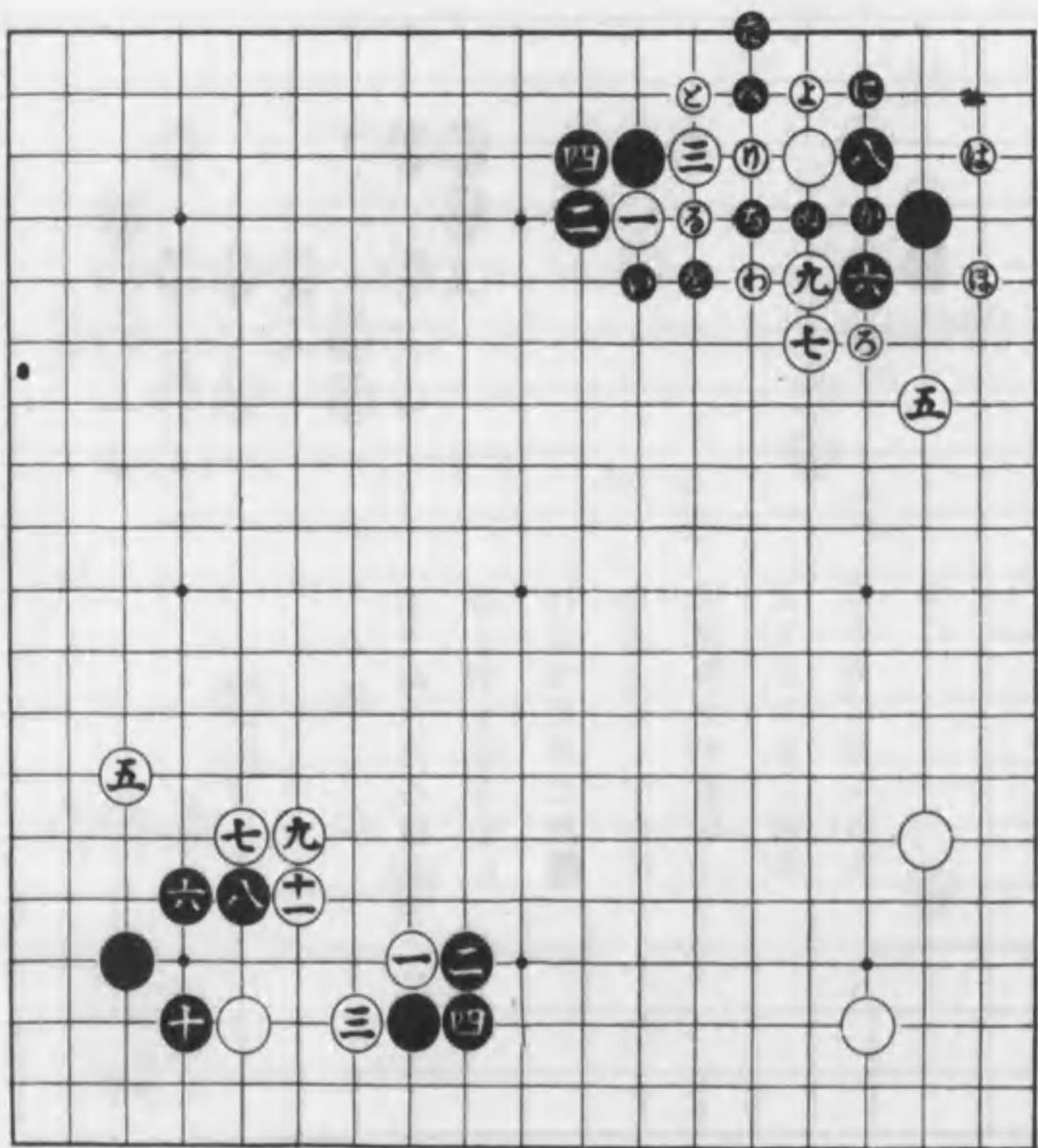
粘?
 間夾を夾撃して白不悪の理である。
 ・但し夾みが一路遠いだけに一間夾よりは罪輕き理。

(第五圖) 白(は)とぐ(ぐ)ず(ず)む(む)も著(てき)理(り)の一種です。黒(くろ)と引(ひ)けば、白(は)は(へ)と切(き)つて争(まが)ふ劫(けつ)の烈(れつ)しさを含(こ)んで、他に轉(ま)じ機(き)を窺(うかが)ふも時(とき)に一策(いちさく)たり得(え)る何(なに)れにせよ前(まへ)圖(ず)左上(じやうさ)隅(ぐみ)黒(くろ)四(よ)は穩(ま)當(たう)ではありませぬ。
 左下(さげ)隅(ぐみ)は白(は)一(いつ)と頂(たか)る型(かたち)。茲(こゝ)に勢(せい)力(りき)を加(く)へて置(お)いて五(ご)の方(かた)から迫(お)る。
 黒(くろ)二(に)では他(た)に三(さん)の上(うへ)に掉(は)り出(で)す、四(よ)に引(ひ)く三(さん)に出(い)る等(たう)有(あ)り、遂(つい)次(じ)示(し)す。
 二(に)四(よ)はこの方(かた)に勢(せい)力(りき)を築(た)いて發(は)展(てん)の素(もと)地(ぢ)を作(つく)り、隅(ぐみ)は活(か)路(ろ)を保(たも)てば可(よ)かりと先(ま)著(てき)の效(こう)果(くわ)を頼(たの)んで八(は)迄(いた)り、白(は)の命(いのち)に維(まも)つひました。
 白(は)五(ご)七(しち)は一(いつ)三(さん)本(ほん)來(らい)の使(し)命(めい)猶(なほ)次(じ)に、

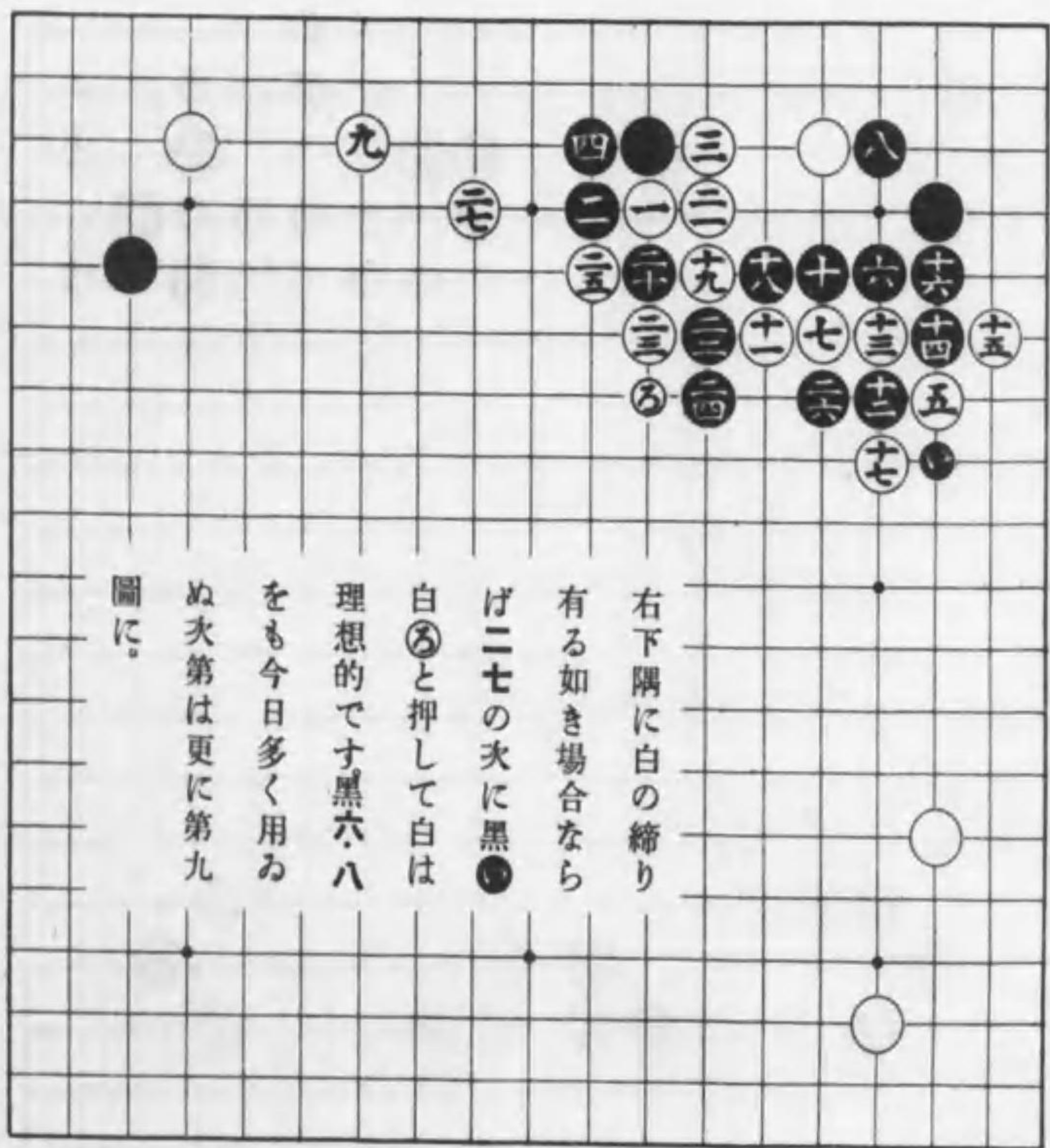


(註) 黒(くろ)を(と)に抱(か)へれば劫(けつ)の嚴(げん)しさは免(ま)れる代(しろ)りに白(は)ちが利(き)いて二(に)間(ま)夾(はさ)の石(いし)を夾(はさ)撃(げき)されま(す)。

(第六圖) 黒(くろ)八(はち)は活(か)路(ろ)を確(た)める所以(ゆゑ)而(して)白(は)九(きゅう)と封(ふう)鎖(さ)して厚(あ)壯(じやう)を期(き)しました。これにて一段(いちだん)落(らく)。
 他(た)日(にち)黒(くろ)九(きゅう)が加(く)はつた時(とき)には白(は)一(いつ)と備(たも)へるは勿(な)論(ろん)單(たん)獨(どく)にも機(き)を見(み)てすれば、二(に)は手(て)厚(あ)い著(てき)點(てん)です。
 三(さん)の後(のち)に白(は)四(よ)の狙(ねら)ひは有(あ)るけれど、直接(じきやく)には黒(くろ)五(ご)以下(いげ)に依(よ)て凌(りやう)ぎ得(え)る。要(よ)するに九(きゅう)迄(いた)りの定(ぢやう)石(いし)は、右(みぎ)下(げ)隅(ぐみ)に圖(ず)のやうな締(ぢ)りでも有(あ)る場(ば)合(あ)ひ、白(は)としては理(り)想(きやう)的(てき)である。
 左下(さげ)隅(ぐみ)黒(くろ)八(はち)白(は)九(きゅう)の交(か)換(かん)は結(けつ)局(きよく)白(は)十(じゅう)一(いつ)と約(やく)へられると、右(みぎ)上(じやう)隅(ぐみ)に比(ひ)して白(は)の厚(あ)壯(じやう)が加(く)はるだけ、黒(くろ)不(ふ)利(り)舌(じつ)風(ふう)として採(と)りませぬ。

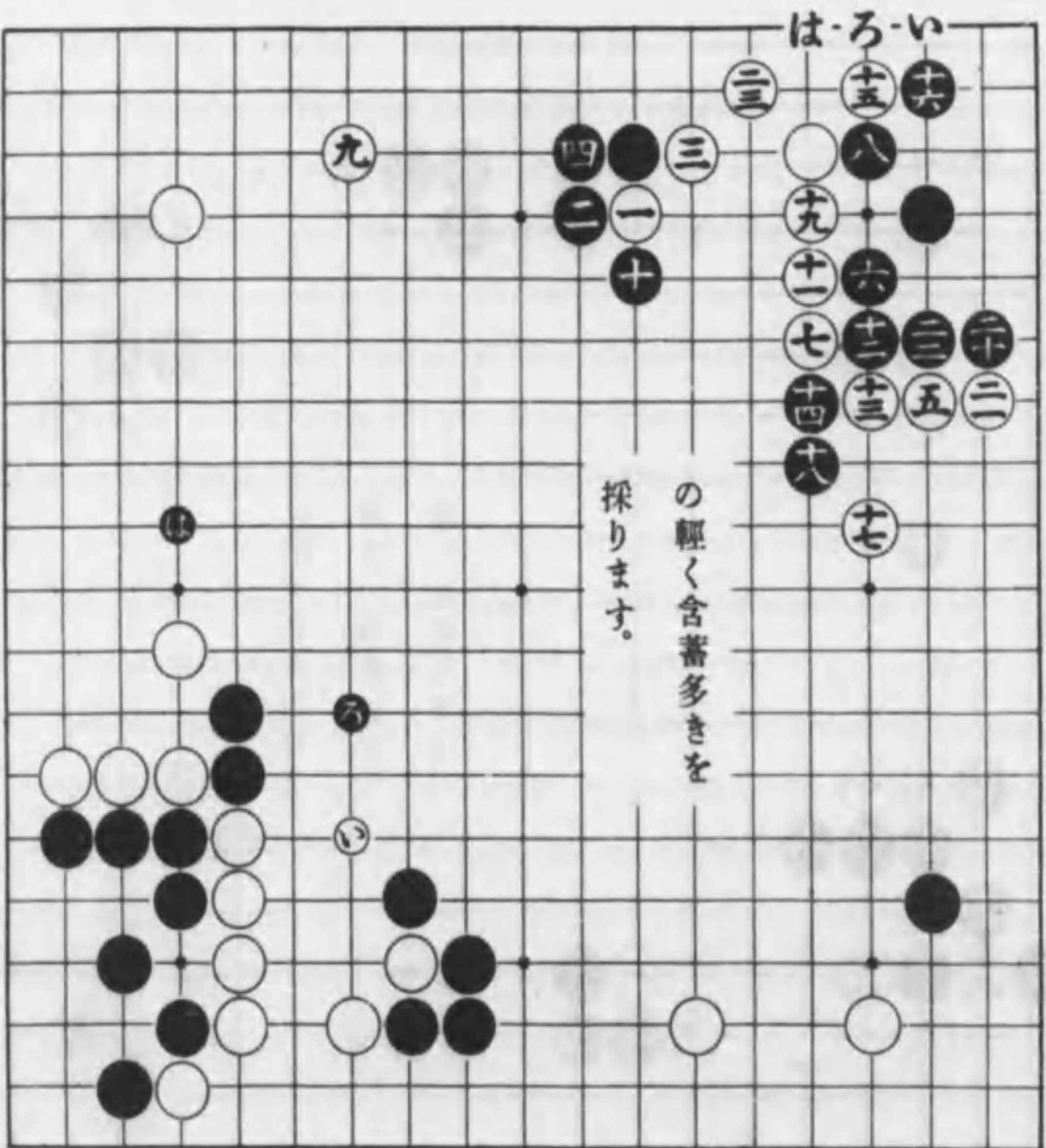


(第七圖) 白九の變化は左上隅に圖の如き配置有らば必ずしも前圖に従ふものとは限らず、白九で十に約へて此方の厚壯は得ても黒から九又その左に詰められる事は頗る厳しい。一面九と拓いて二以下三子に迫るのはこれを重くして攻立る所以でもあります。黒十以下は白の弱點を衝いたので部分的には當然の著理とは言へ、白二七迄となつてはその術中に黒の陥つた跡が著しい而して黒十の變化は次圖に示します。黒二十で單に二二に切ると白二三黒二四白二六で黒失敗。

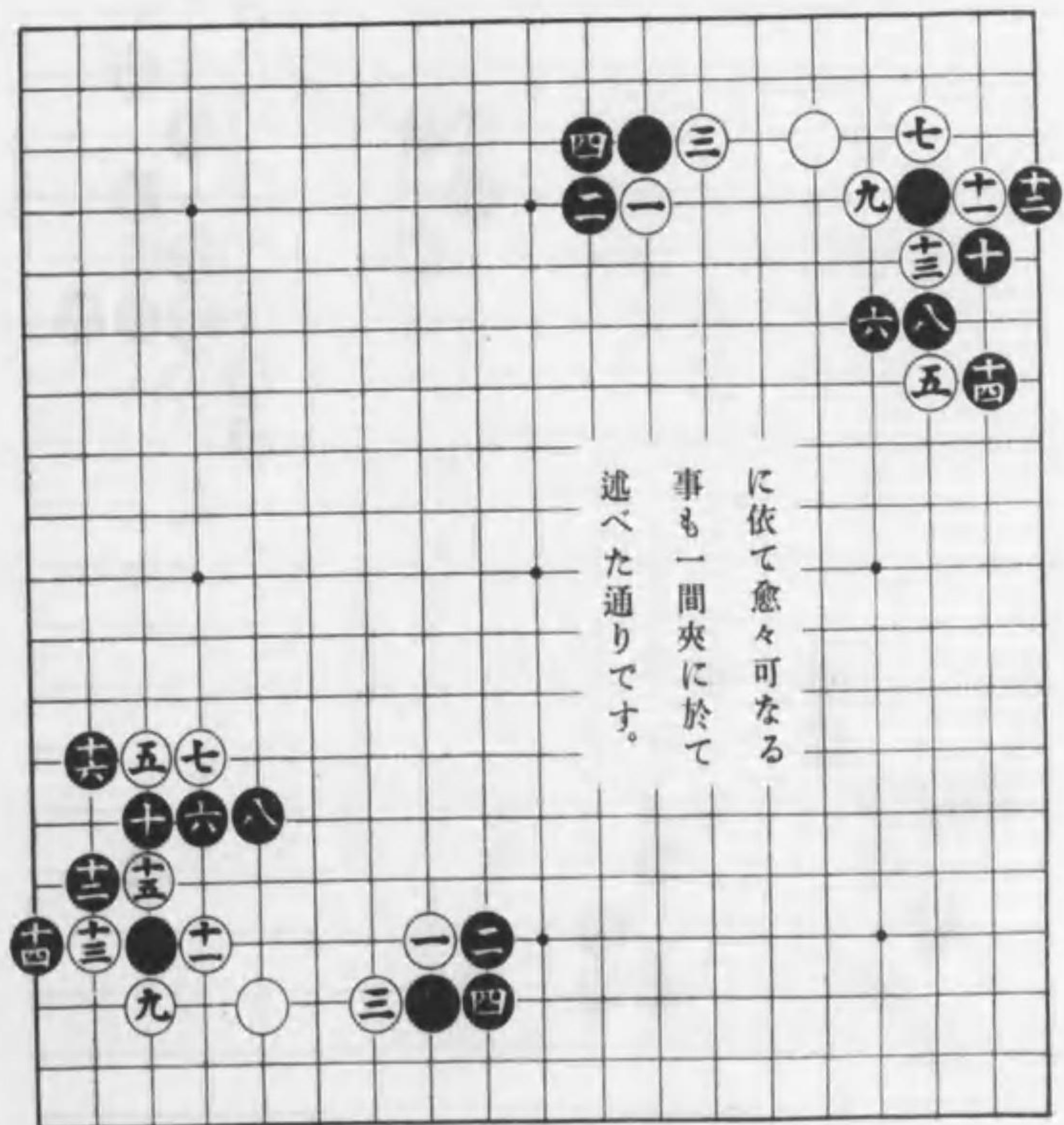


右下隅に白の締り有る如き場合ならば二七の次に黒九と押して白は理想的です。黒六八をも今日多く用ゐぬ次第は更に第九圖に。

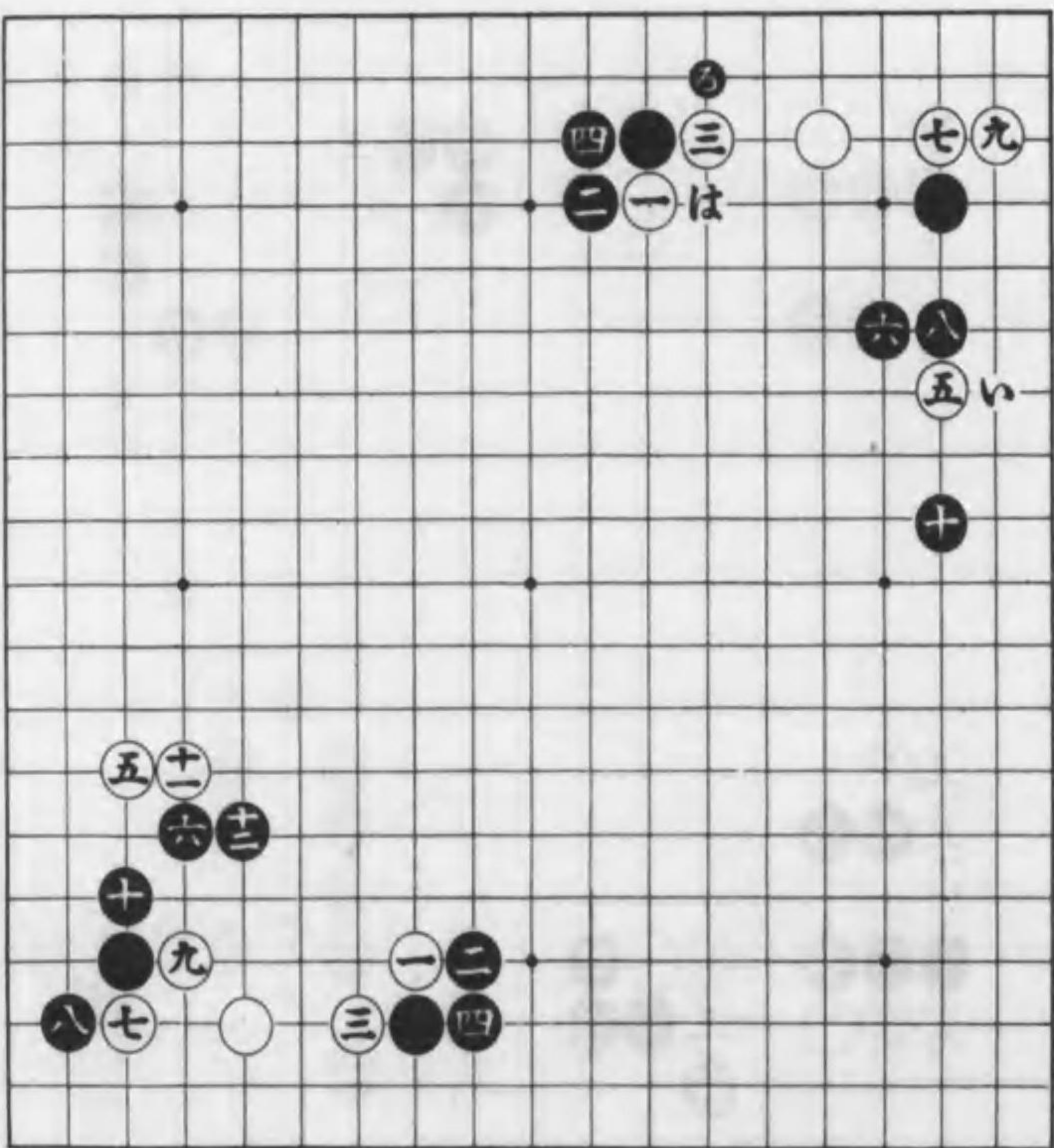
(第八圖) 本圖の如きも亦白九の成立する一つの場合である。黒十と縛るが厳しい。白十一は當然而して黒十二十四と出切ります。白十五以下は雙方正統の手順。白二三に依て次にはいに縛粘がうと含み、又黒からろに縛ねて來れば白はと劫争に應ずる味を見ます。二三迄白が良いといふのではなく部分的には如何にも窮屈な形ですが、一方九の好點を占めてゐる黒六八の考ふべき所以。左下隅白①と玆で飛ぶのは黒②にて更に黒③を生じ、④の方の進出も却つて不自由です。上隅二三



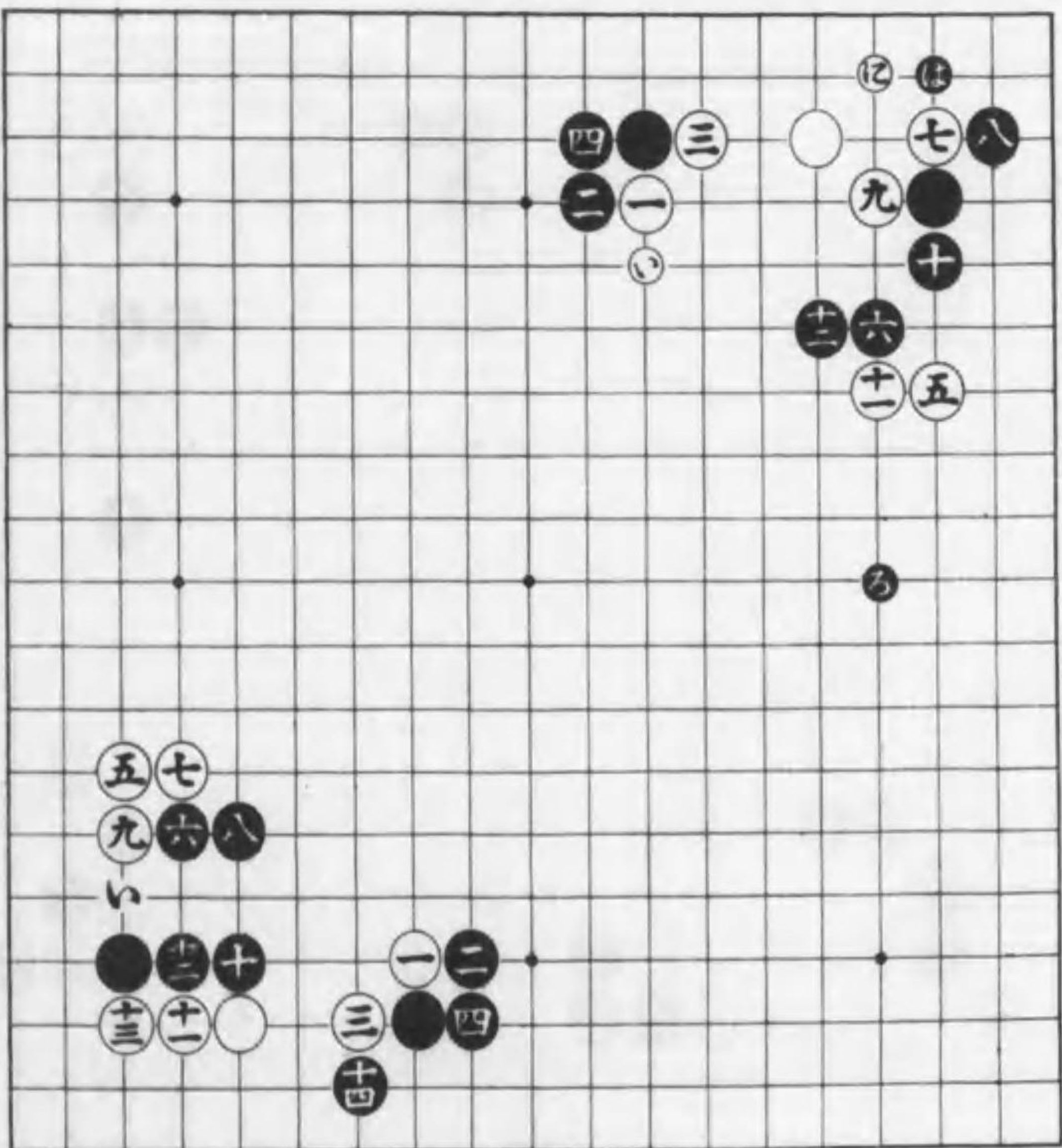
(第九圖) 黒六と斜走する型は
 一間夾第六十八圖にも示しまし
 たが今日では是が多く用ゐられ
 る黒十四迄の結果一乃至四の交
 換が白は重複し黒は勢力を加へ
 てゐる意味からこの交換有る際
 は黒六に限るとされてゐます。
 白十三の變化等詳細は一間夾に
 於て述べましたから茲には省略
 します就て参照せられたい。
 第六圖の下隅の不合理は勿論第
 五圖下隅を以てすら黒は考へね
 ばならぬ事前兩圖にて明かです。
 左下隅白七と押し黒八との交換
 の後に九と頂るならば黒十六迄



(第十圖) 白九は前圖が黒に好
 調を附する事を嫌つて斯く下り、
 徐に黒の根據を窺つたのですが
 黒は十と夾んで毫も仔細有りま
 せん十でいに綽るが如きは著點
 の低きを忌みます。
 後に白いと下る味は多少有るけ
 れどいに依て九の方への盤りを
 求める様な事ならば黒は敢て意
 としない。他日黒はと綽ね又は
 を切るか孰れかを狙ひます。
 下隅黒八は前圖以來の約込に及
 びませんが全然排斥すべきでも
 ない。一より四迄の交換が勢力重
 複の意味に於て白不利。

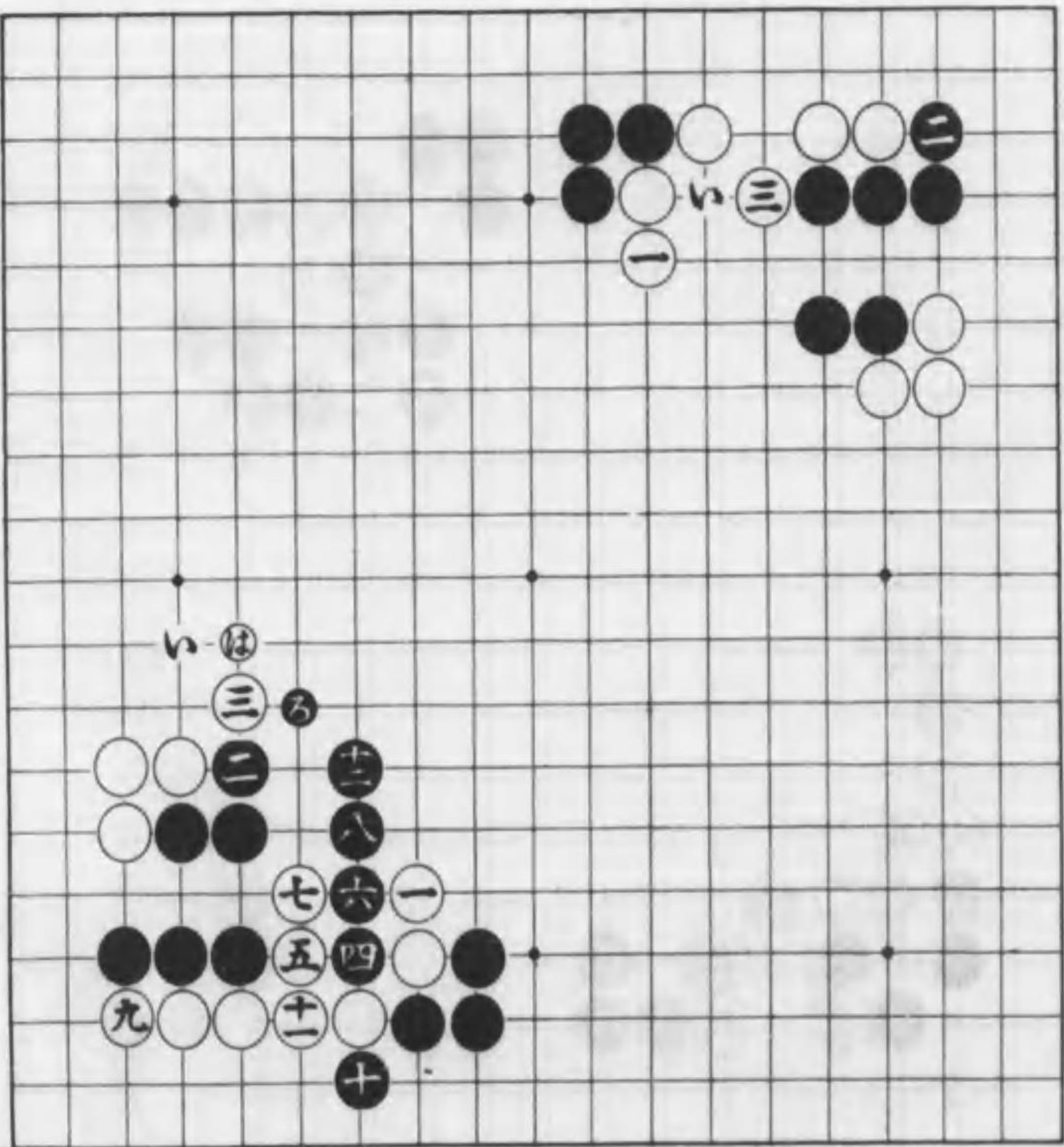


(第十一圖) 黒十二の次に白は
 ①と行る位のものですが黒は右
 下隅方面の配置如何に依ては烈
 しく②と迫るべく或は單に隅を
 ③と綽ねて置くも宜しい但し④
 に對しては後に白⑤と約へられ
 る劫争の含み有るを免れません
 が白とても機を見てせねばなら
 ぬので容易には打てない處です
 左下隅は前々圖下隅白九の變化
 黒から約込まれる事を嫌つてこ
 の要點に先鞭したのは一工夫と
 謂ふべきですが黒十四と掬はれ
 て應手に窮しました黒十でいに
 突張るは味悪しく且不安です。



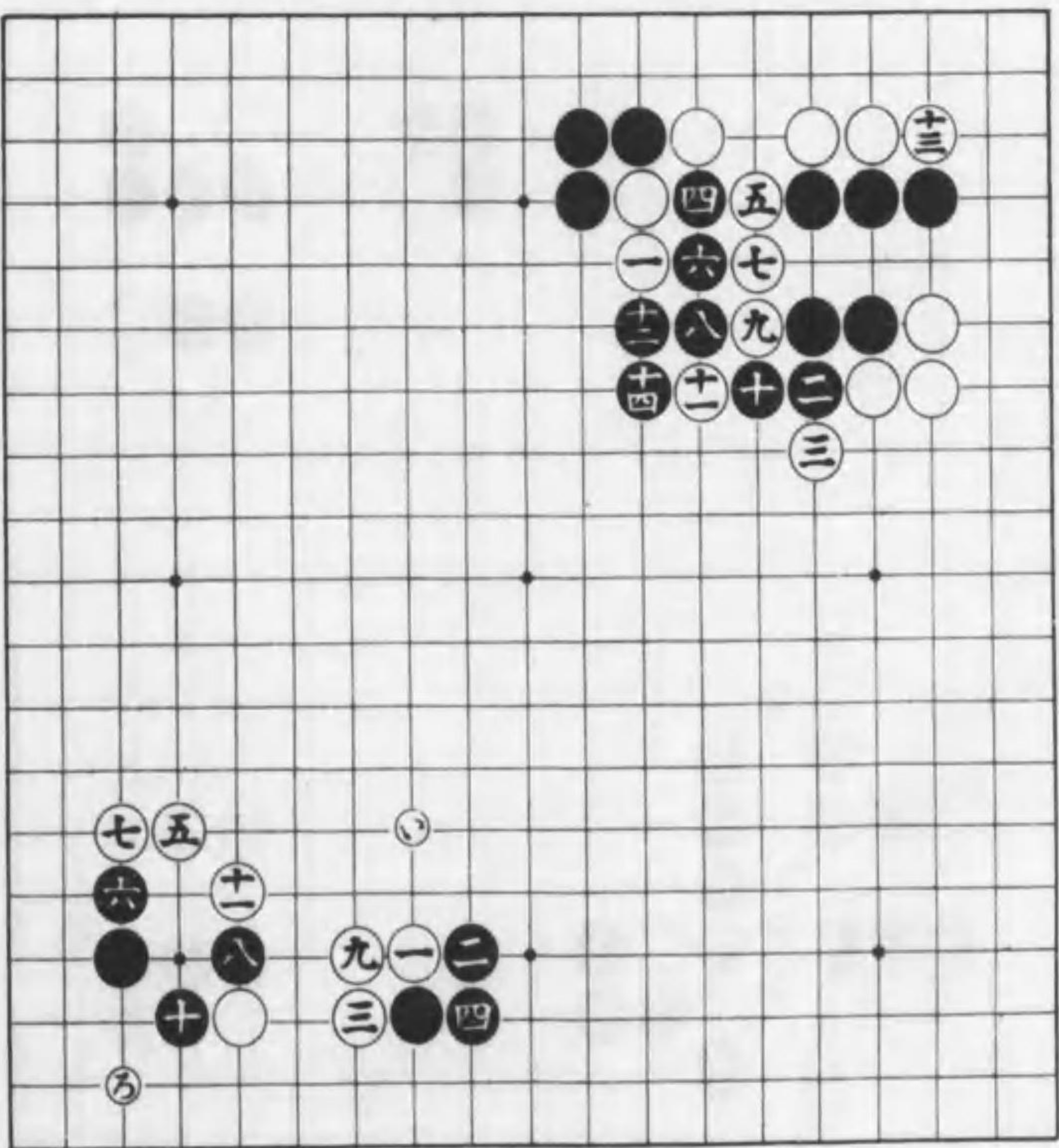
(第十二圖) 白一と行る變化。

黒二は隅の要點を占めたので無
 事ですが白も三と打つて姿勢が
 整ひます左の條件にも依るけ
 れど黒二は下隅の激しきを探り
 たい處である。
 白一でいに粘ぐのは矢張り黒二
 と約込まれて眼形を失ふだけに
 白の感服しない姿です。
 左下隅黒二と曲るのが手嚴しい。
 白三にて五に打てば黒は勿論い
 と掛けます十二迄黒の有利は疑
 ひ無い黒四にて③に白④との交
 換の後に四以下十一と成ると十
 二の著點を求めると苦しみます。



(第十三圖) 前圖下隅黒十二の著理の有力なるを嫌つて白九十一と若し出切つて後に十三と治まるならば黒は十四迄と應じて宜しい白は收拾できない形です。左下隅は白五と大斜走に掛けました。これ亦一三に含まれたる意匠の一つである。

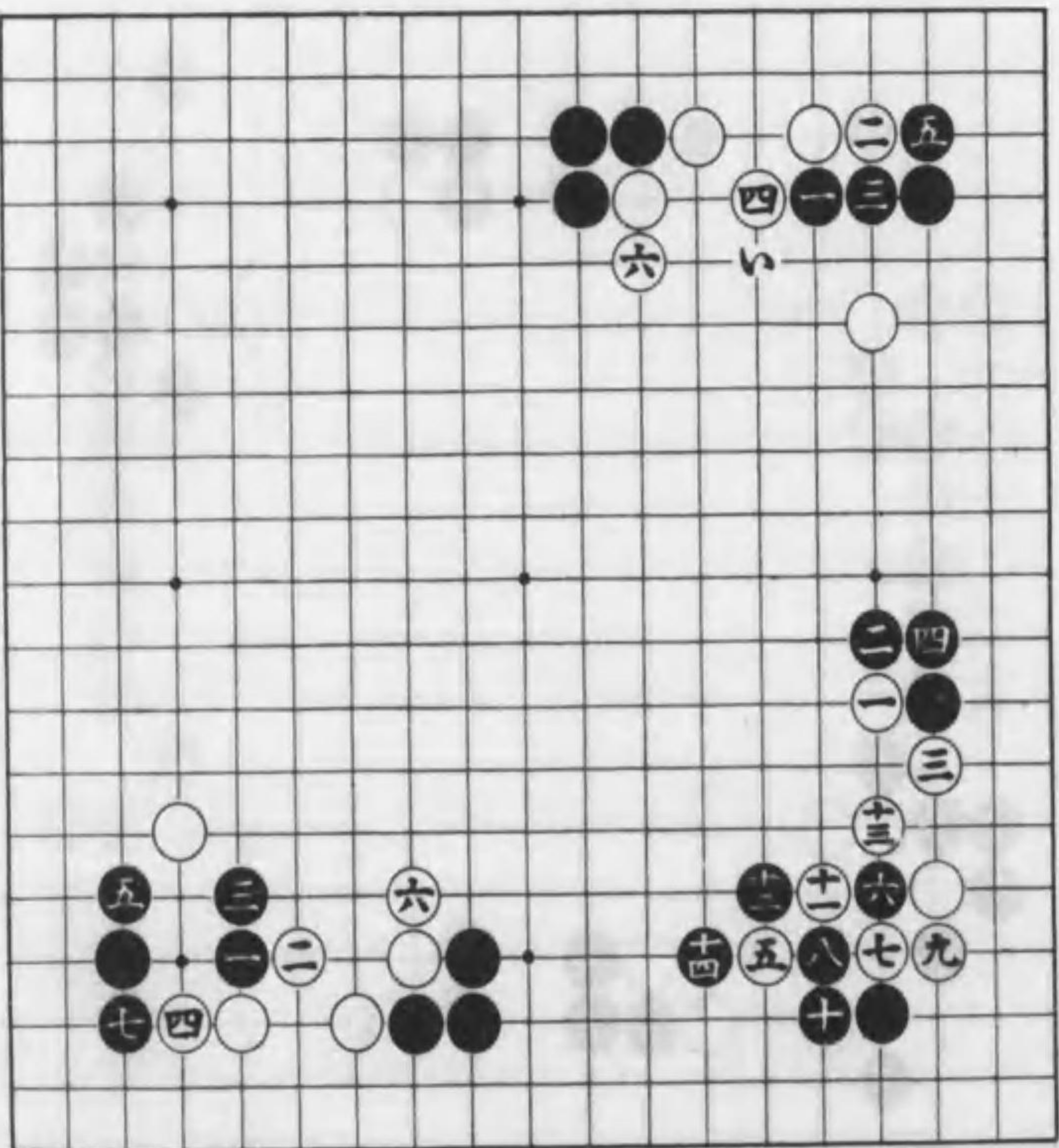
黒六の別法に就ては順次に示しますが斯く竝ぶのは姑息の誘りを免れず白十一迄好手順に運ばれて封鎖を被つては黒が面白くありません。
 黒十にて十一に竝ぶと白㊦に依て更に㊧の走りを窺はれます。



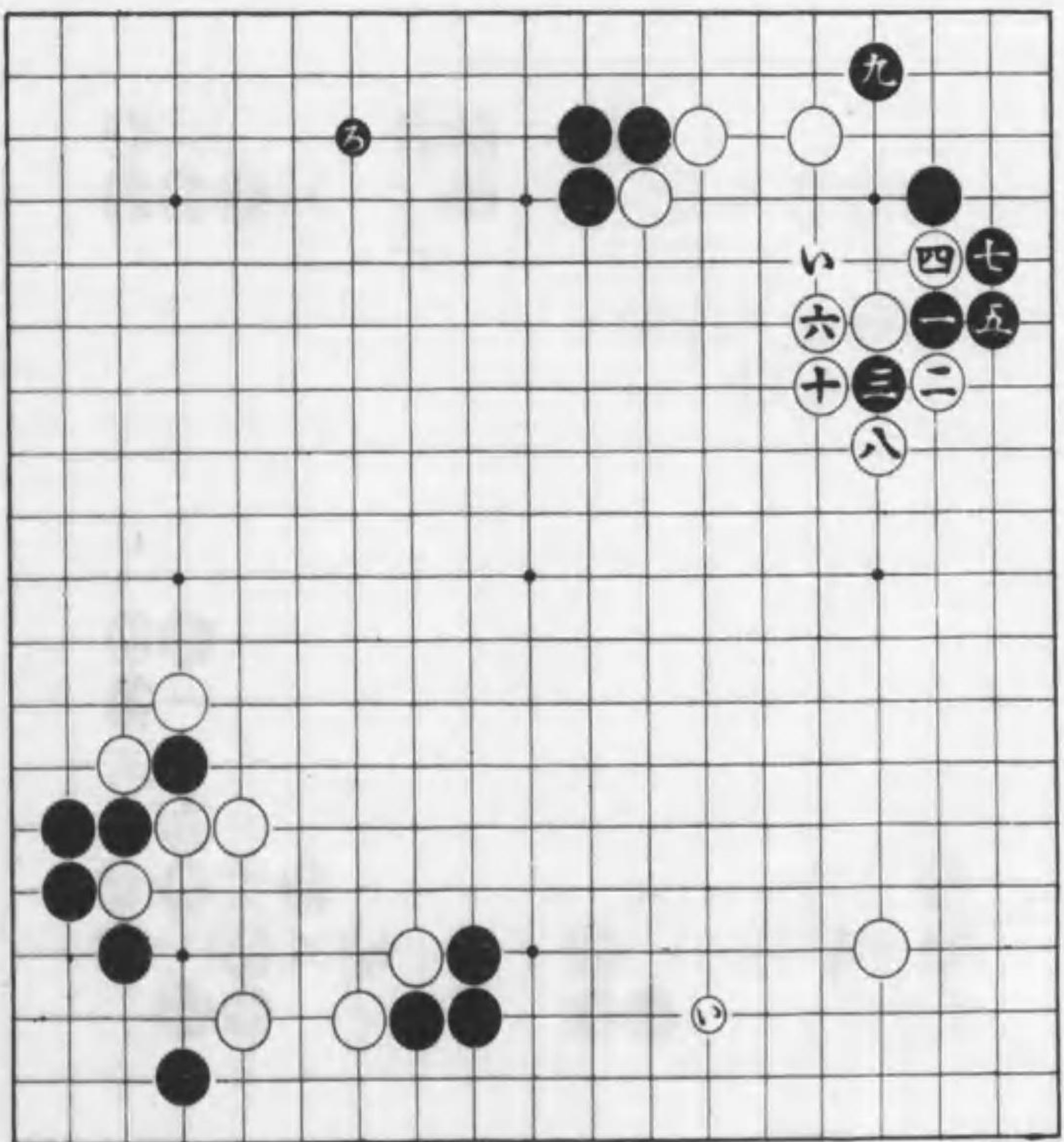
(第十四圖) 黒一と飛頂けるのは白二と行出され六迄の結果は

前々圖上隅に比しても黒の不利を容易に推斷し得られるでせう。黒五で若し六に緯れば白はいに行るか五から約込むか何れを選んでも良い。一以下三子の始末に黒が窮する。

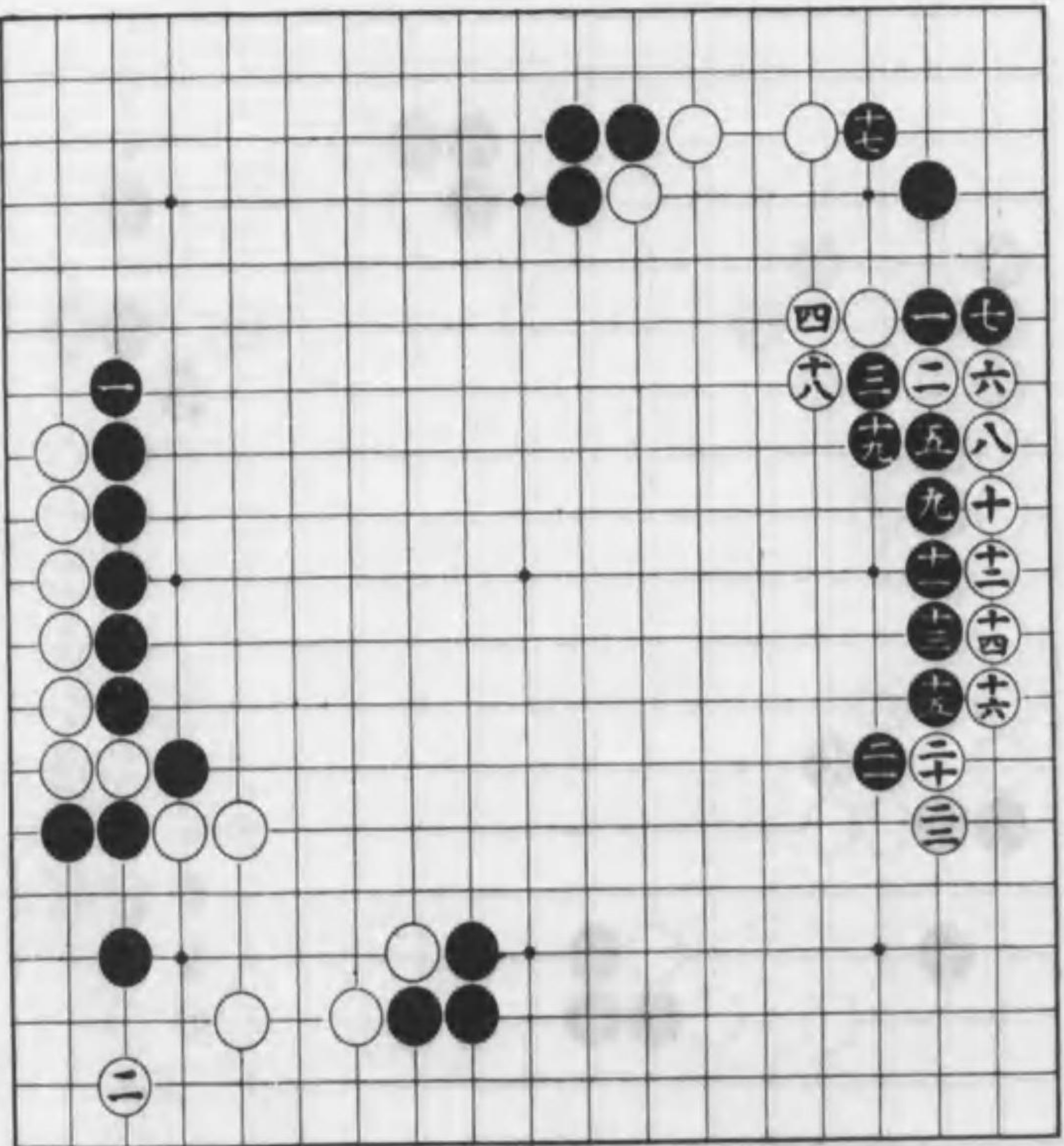
左下隅白二は黒七迄となり今度は白の拙い形です。大斜走に掛けた石も働かぬ姿と化しました。右下隅白七は通法に似て茲では不適切十四迄の歸結に於て當初一以下四の交換は依然著子重複の愚に陥つてゐます。



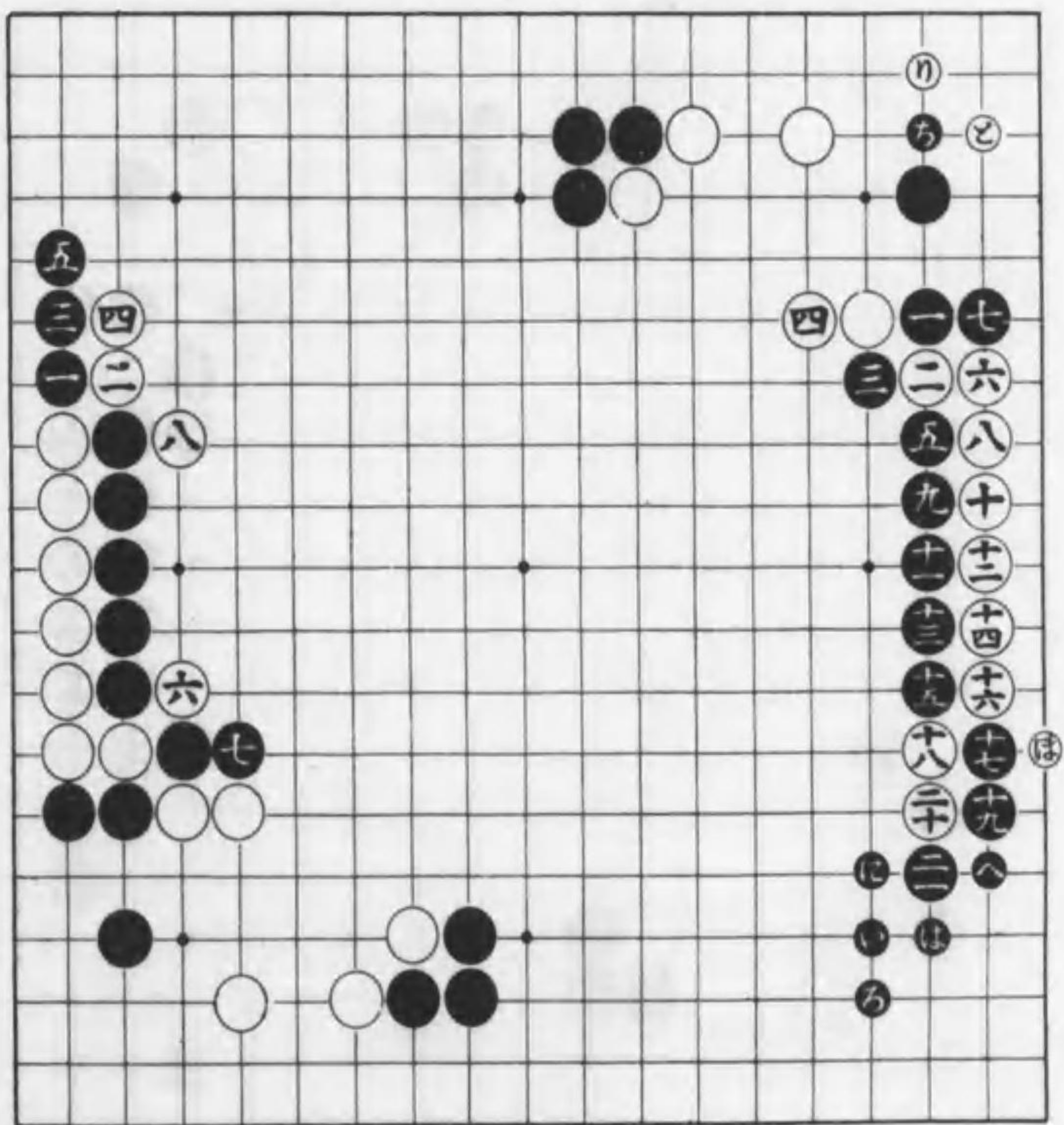
(第十五圖) 黒一と飛頂る別法。白二と約へ黒三と切る常用の手段で、但し順次説く所の征關係その他を豫め窮める事を要する。白四を單に六に引き、若しくはいに打つ型に就ては次第に明らかで、すが斯く四の縛込を先にして六と引く爲には、白八と抱へる征の成立を條件とする事勿論、白十は征の當りを打たれぬ、今に於て略けず、十に次で●の方に拓き、白の夾撃に備へて、黒は充分の形。右下隅に白の配置有らば、上隅十の手で白○と先鞭する場合もあるべく、双方深察を要します。



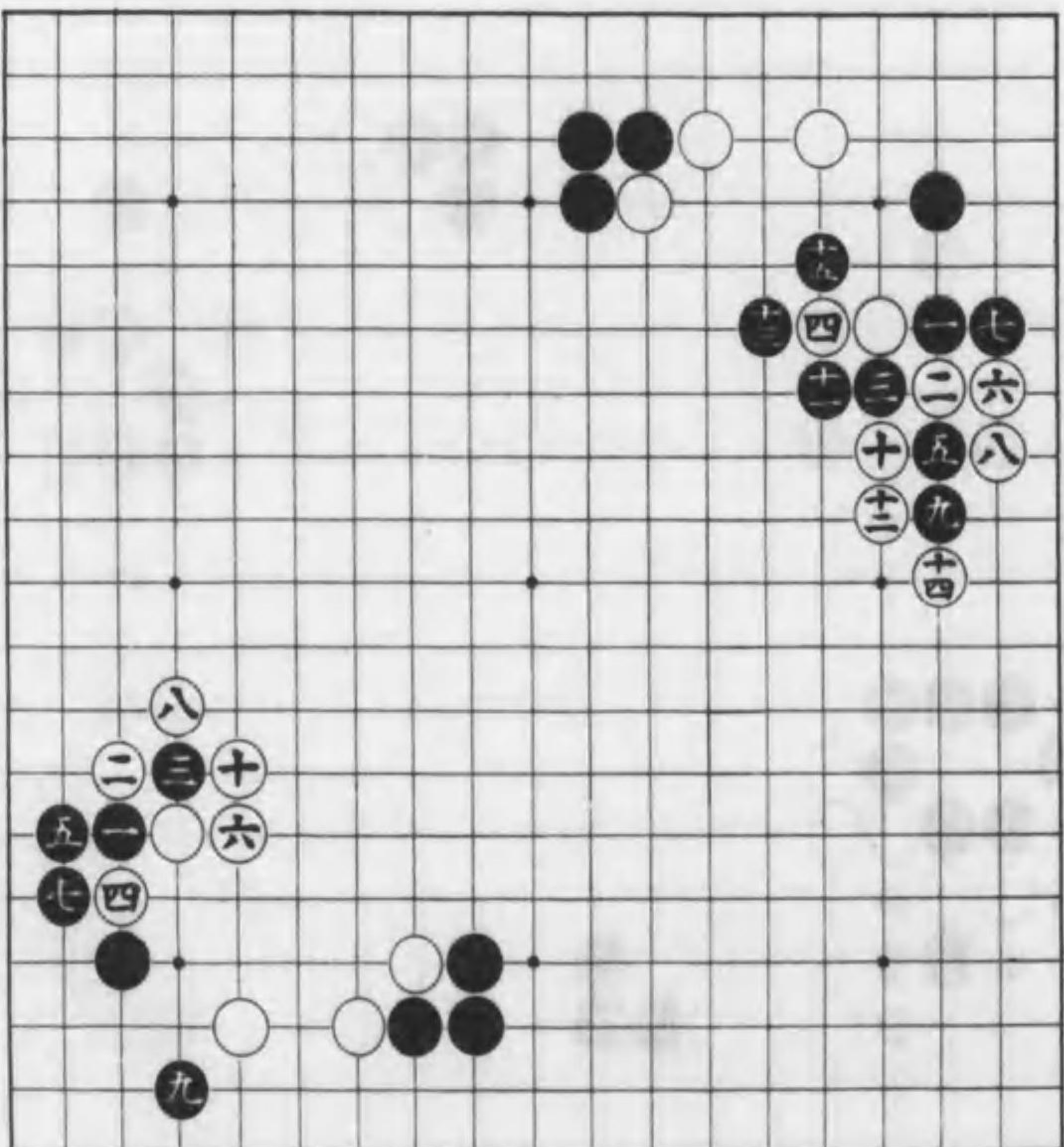
(第十六圖) 白四と單に引くのは一般には前圖の如く、黒三を征に抱へる事の不可能なる際、すが、その征關係の如何に拘らず、四と引く事も有る、次々に述べる様、な右下隅方面の條件次第で、征關係の白に良い時でも、斯く四と引く趣向は成立するのです。黒七にて八から約へる事も出来、ますが七と約へれば、十六迄必然、黒十七は止むを得ぬので、二十に行くと、左下隅白二で攻合、黒敗。右下隅方面に何れの布石も無く、又は白のみの配置有る場合は、二迄となり、絶對の利害は言へぬ。



(第十七圖) 黒十七と約へるは頗る危険先づ右下隅に白の配石有つては勿論雙方の勢力無き際にも白十八と切られて窮します。黒の布置有りとしても、**①**、**②**、**③**、**④**等の中で何はれも不可白**⑤**の利く限り白**⑥**以下で攻合は黒の敗に終ります。③が利かぬ爲には即ち初めに黒の配置が二一の點に在る場合にのみ十七と約へ得るのですが然る際には白も最初からこの趣向は採用せぬ事となる。黒二一にて**⑦**の點に弛めると左邊白六及び八に依て黒は潰滅に歸します。

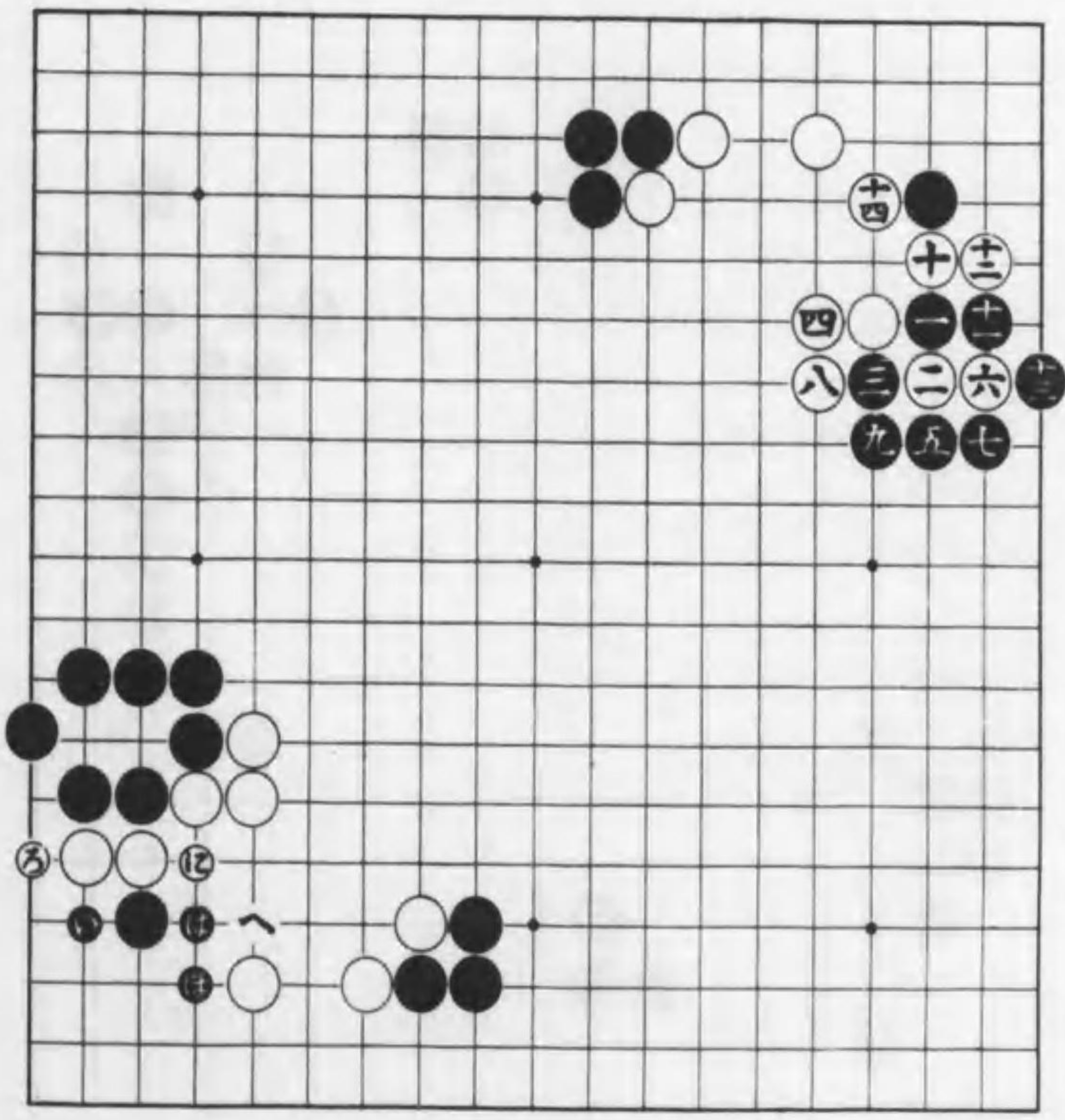


(第十八圖) 右下隅の條件悪しとて前圖に従ふを避けるべく白十と茲で切る變化は有るけれど、是は必然十五迄の振換りとなる。白十二は黒三十一を征に抱へ得る場合たる事勿論ですが斯く振換つては明らかに黒有利だと曲つた以上は前々圖の歸結を期すべく、然らずば第十五圖に依る。夫も亦面白からずとせば當初の趣向に遡つて考へねばならぬ。下隅は第十五圖定石此征の有利なる時にも右上隅白四は成立すると言ひましたが、上隅三十一を追ふ征と軌を一つにする點に注意。



(第十九圖) 黒七にて十一より約へるを芳しからずとする場合。但し次圖上隅の注意を要します。白十四を忘ると左下隅に示すやうな手段が有るので省略出来ぬものと観ます。

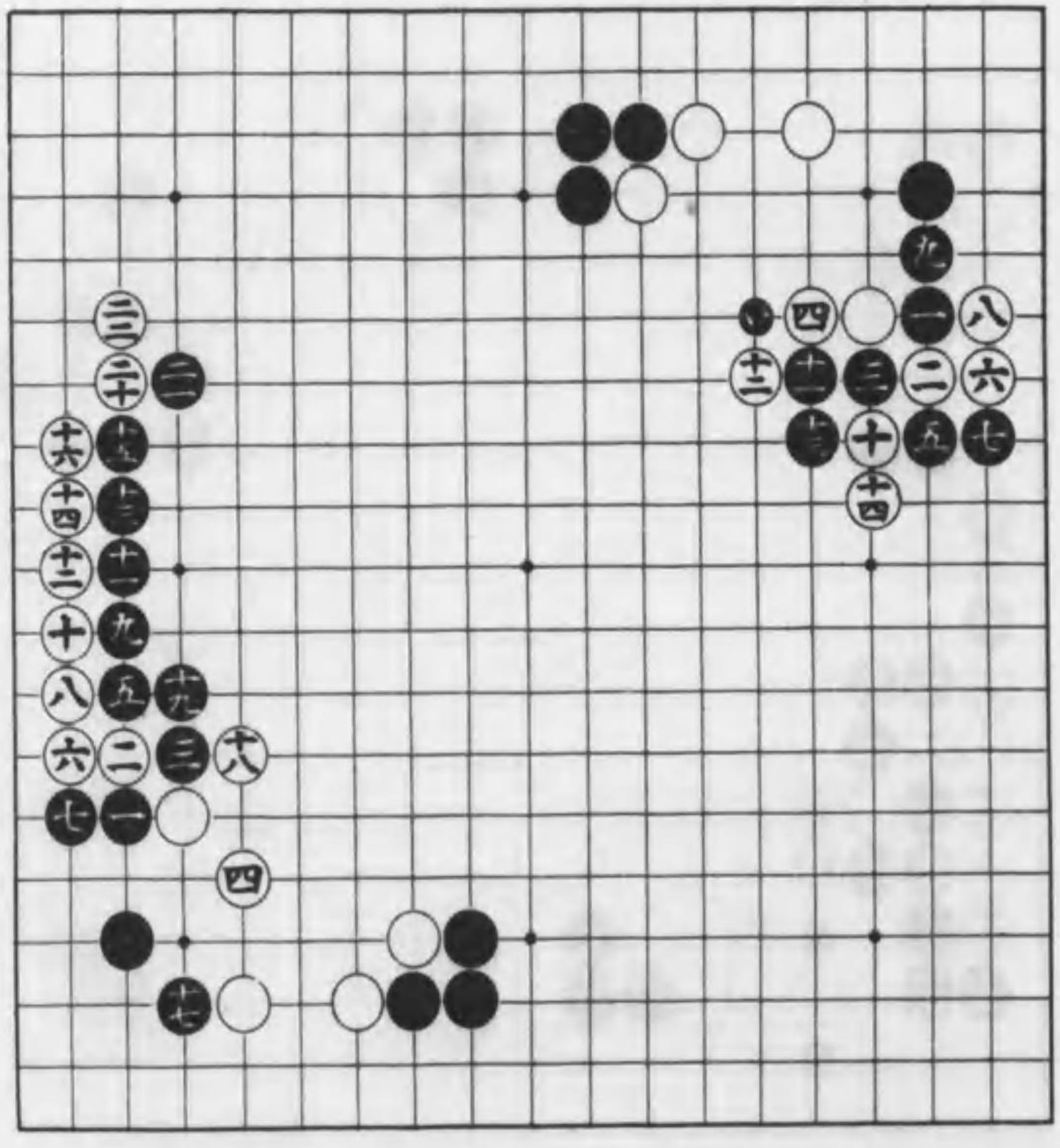
この結果は局部として黒有利とは言へませんが第九十四圖等でも指摘した如く左方の交換有るだけ白は勢力の過重に陥つてゐる故其意味に於て黒も打てる。理左下隅は黒●白○の次に●○以下と打つもまた●○にて●○に尖頂るも或は●○にてへに頂けるも何れ問題の生ずるは止むを得ない。



(第二十圖) 第十六圖でも言つ

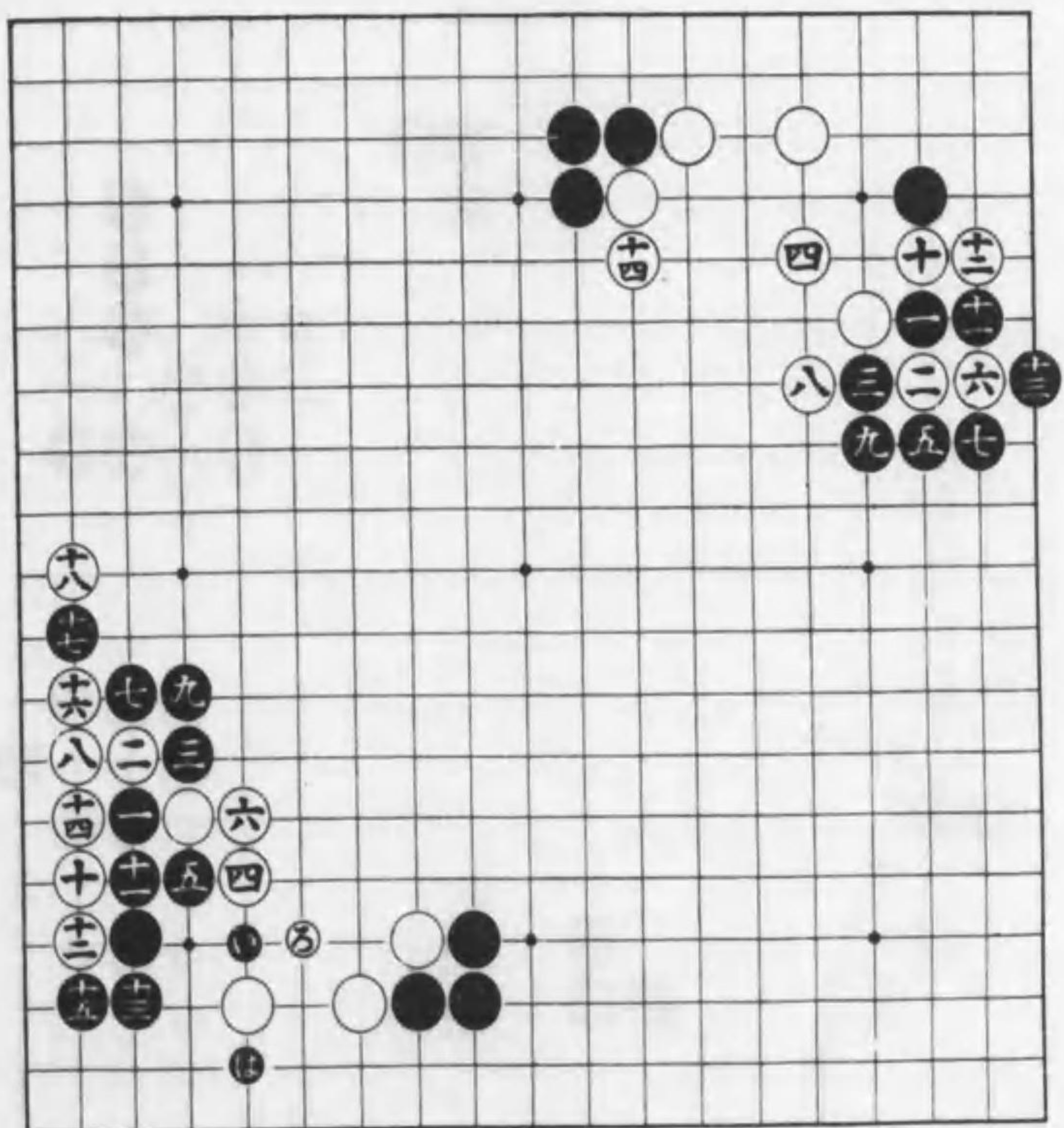
たやうに征關係の白に有利なる際に趣向として單に四と引いた場合黒七と約へる事は出来ない。約へて白十四迄となつては黒が窮します。征關係もし黒に有利ならば十四の次に黒●と切つて是は問題無しですが黒七に際しては、従つて又初め一三の時に黒は此點を見定めねばなりません。左下隅は白四と尖む型主として趣向から用ゐられます。

黒五七と打てば二二迄は第十六圖と等しく左上隅方面の條件に關しては總て同様の注意が要る。

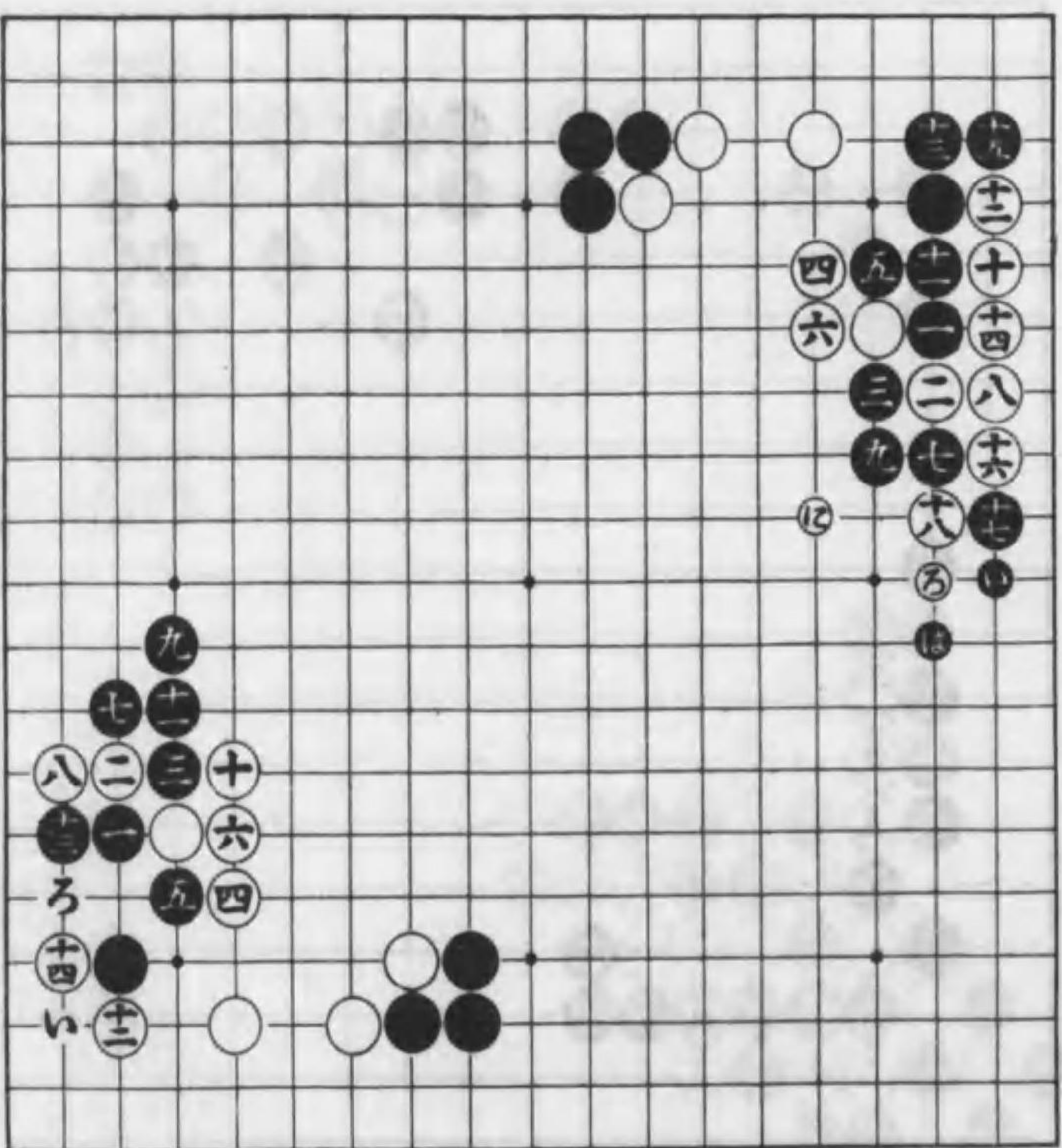


(第廿一圖) 前圖下隅に從ふ事の不可能なる時には黒七と約へて十三迄となります。

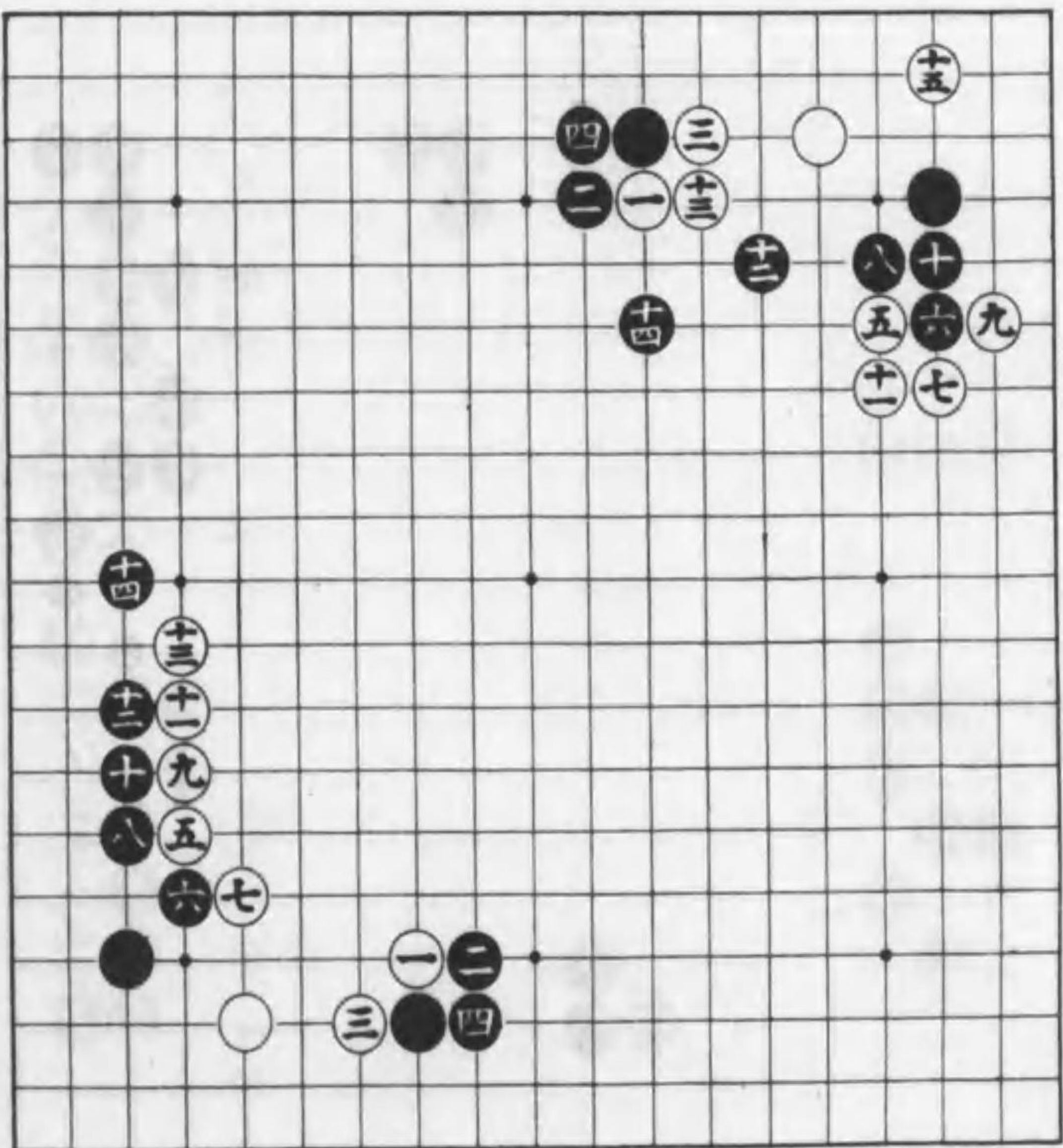
隅には味は残るけれど第十九圖に於る程緊切ならず白十四と行び得る點同圖に比して白稍優る。左下隅黒五と當てるのは常に悪手參考迄に示すのですが結局白十八と夾まれて盤られる事になると左上隅方面の條件も加はつて來て隅は●以下に依て無償では死なぬとしても煩はしい。黒十三を十四に白十三黒十六と取るのでは隅だけの黒の不利が忍びません。なほ次に。



(第廿二圖) 白十八と急に切られて是を征に抱へ得ず●と引いて白⑫と門せられるに至つては問題外これに備へる爲には左下隅九と尖むより有りません。下隅は十三迄に依て二子を取る事は出來ましたが矢張り隅の損失が大きいので黒の感服せぬ結果です但し黒十三でいに緯れば白ろと置かれて窮する而して黒九の一著が愚形に歸してゐる事は愈々黒の不利早晚白ろに依て二子を先手で取られもするけれどそれよりも十二・十四と緯られてゐるだけで黒が悪いのです。

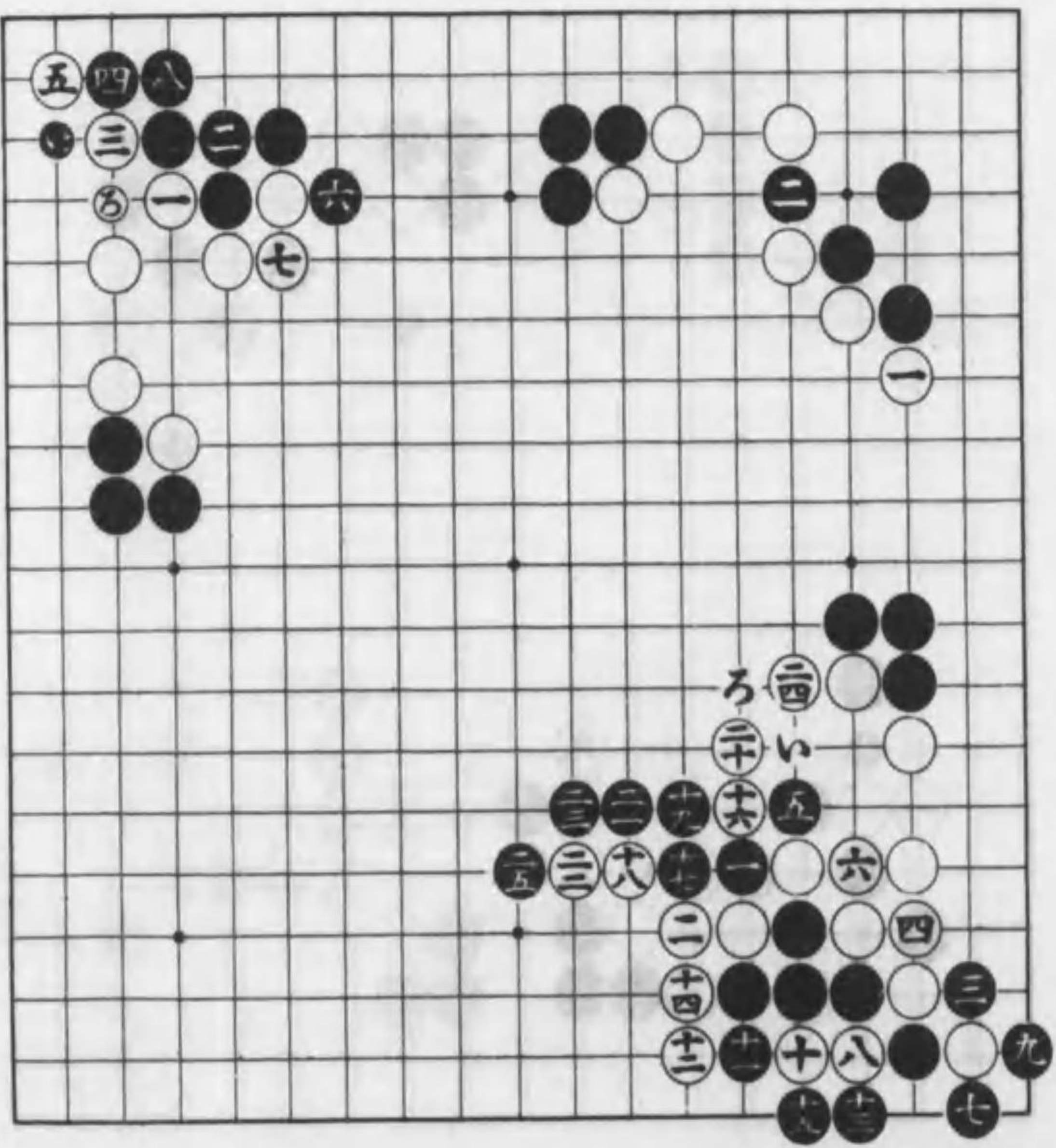


(第廿三圖) 黒八と脹れるのは前圖迄の諸型が孰れも征關係其他から芳しからずと觀た際で十四迄封鎖したやうでも白十五と走られて十四の處の不備に黒は困る形である不完全です。黒六の飛頂が手順の當を得ない所以第十五圖黒一・三と切る事を避けたい場合には、下隅の如く六の尖頂から先にします。下隅白七と約へて平易に十四迄となつては、以下四の交換有るだけに白の不利は否定出來ない。此交換は黒の姿を重くはしてゐるものゝ他面白の著子重複です。



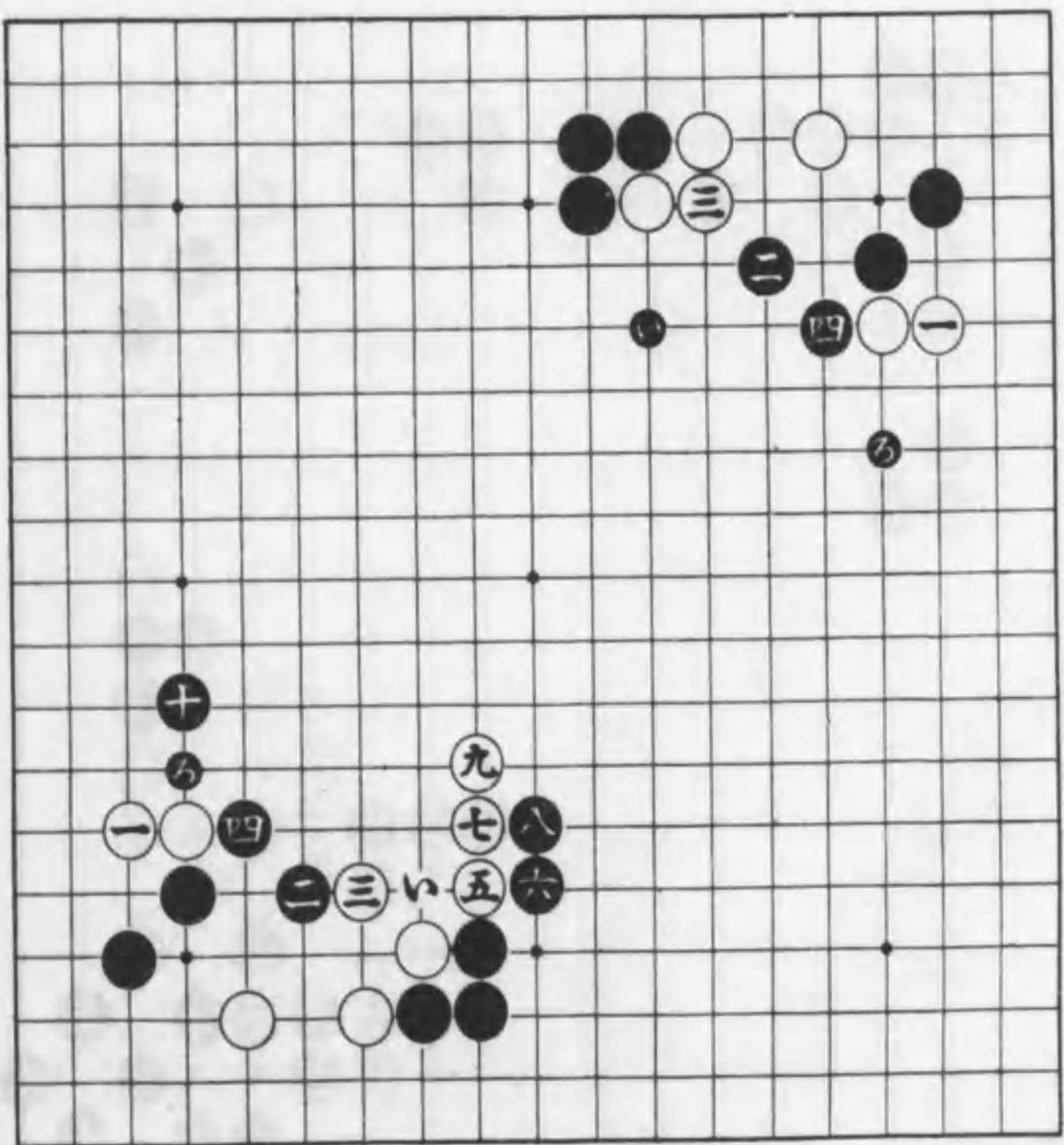
(第廿四圖) 白一の二段約へに對しては黒二の綽込が著理です。白は應手に窮する。

左上隅白一と當て三・五と二段に約へるのは有力なる著理。黒六若しくは八にて●に切り白●との交換は可否を言へません。黒八と粘いだ所で白は手抜して他に轉ずるのですが無事には相違無いけれど黒六の緩漫は蔽ひ難い白の働いた形。右下隅黒一と切つて三以下が烈しい但し白八・十は手筋です。白二四は黒いろの征に備へた所。黒二五迄、其有利は自明でせう。



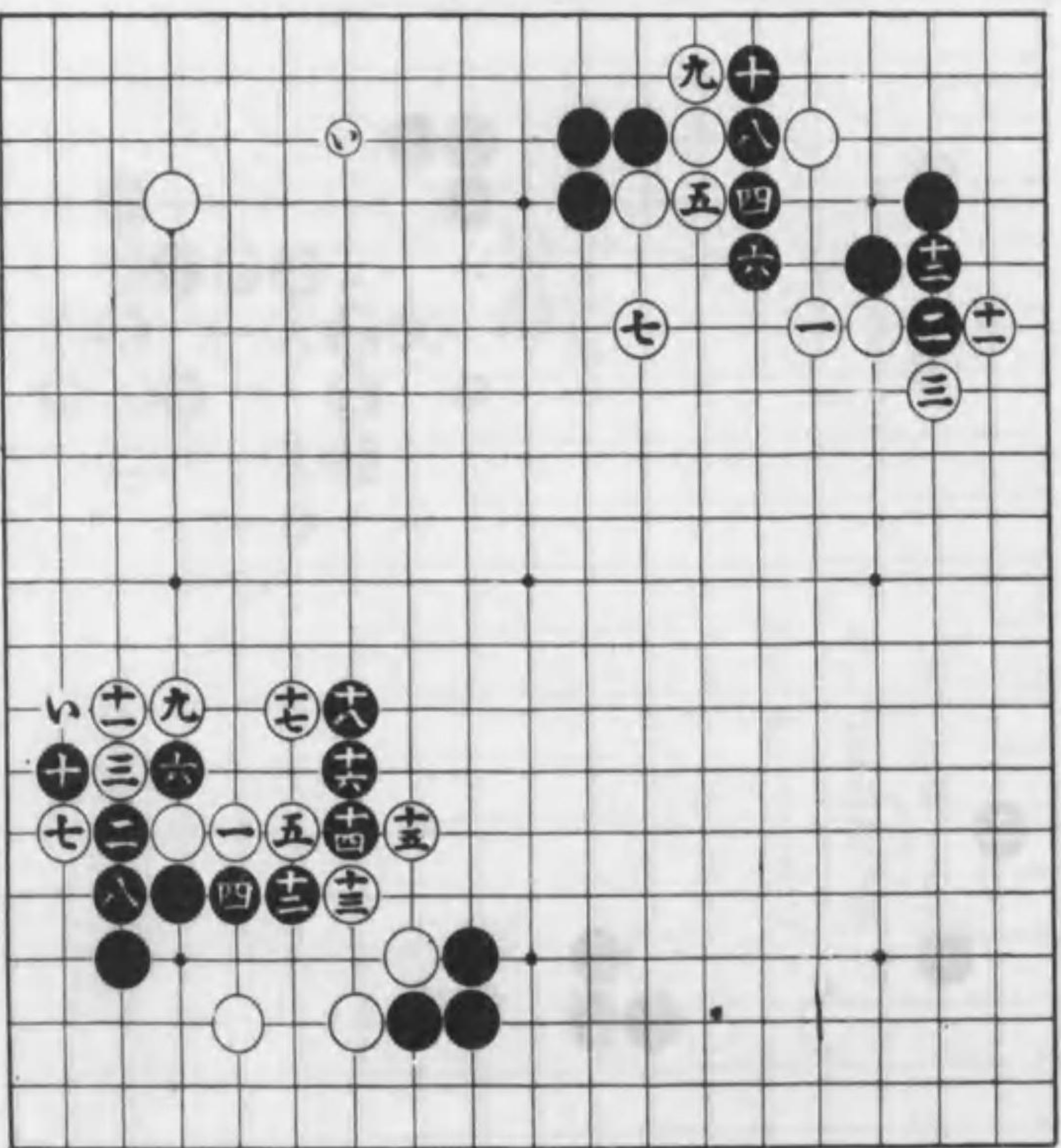
(第廿五圖) 白一と下る變化。黒二と飛び而して四と脹れるのが有力です。是に於て次に六の封鎖と七の掛とを見合つて何れか一方を打つ事が出来ませぬ黒の優勢は疑ひ無い。

左下隅は白三と尖頂けたのですが黒は矢張り四と打つて宜しい。白五で若し左方へ備へれば黒はいに當る手段が有ります。黒十を六と密接して打つ事も可能孰れにせよ、その有利は明らかでせう。茲に於て白に残されたる唯一策、一にて四に引く變化は次に示します。



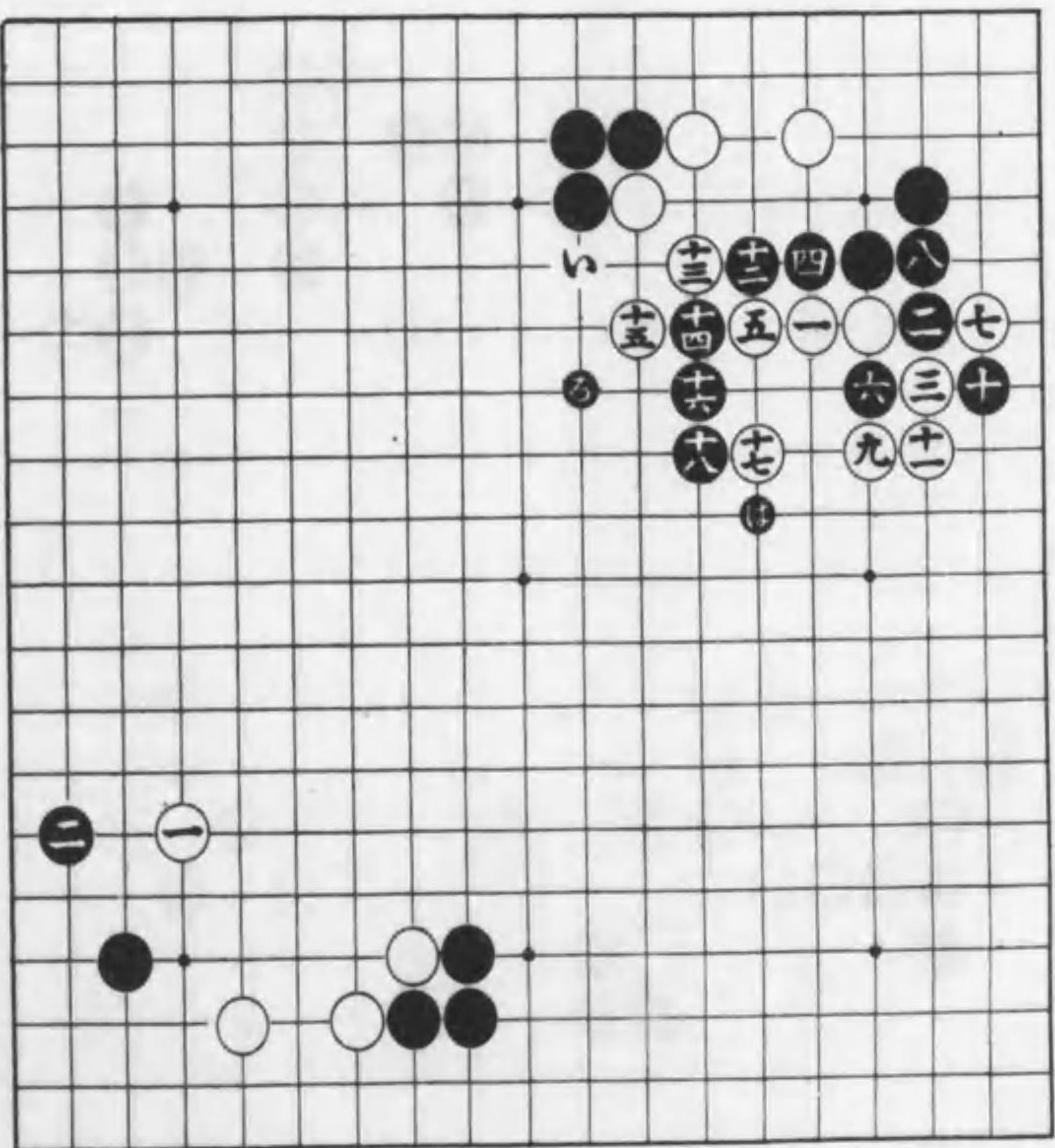
(第廿六圖) 白一と引けば黒二以下は先づ順當の應酬と觀られる。就中白九は止むを得ませぬ。この結果局部としては黒は實利を收めてゐる故悪くないけれど左上隅に白の布置有つて七と迫られる事にでもなつては黒不利豫め考慮すべきです。

左下隅は第七圖に類似の變化四と押して後に六と切るが激しい。黒十は手順白十一にて六を打抜けば黒はいに行出して宜しい。而して十と十一との交換を先にしたのは、次で十四と單に切る爲の前提でもあります。なほ次に。

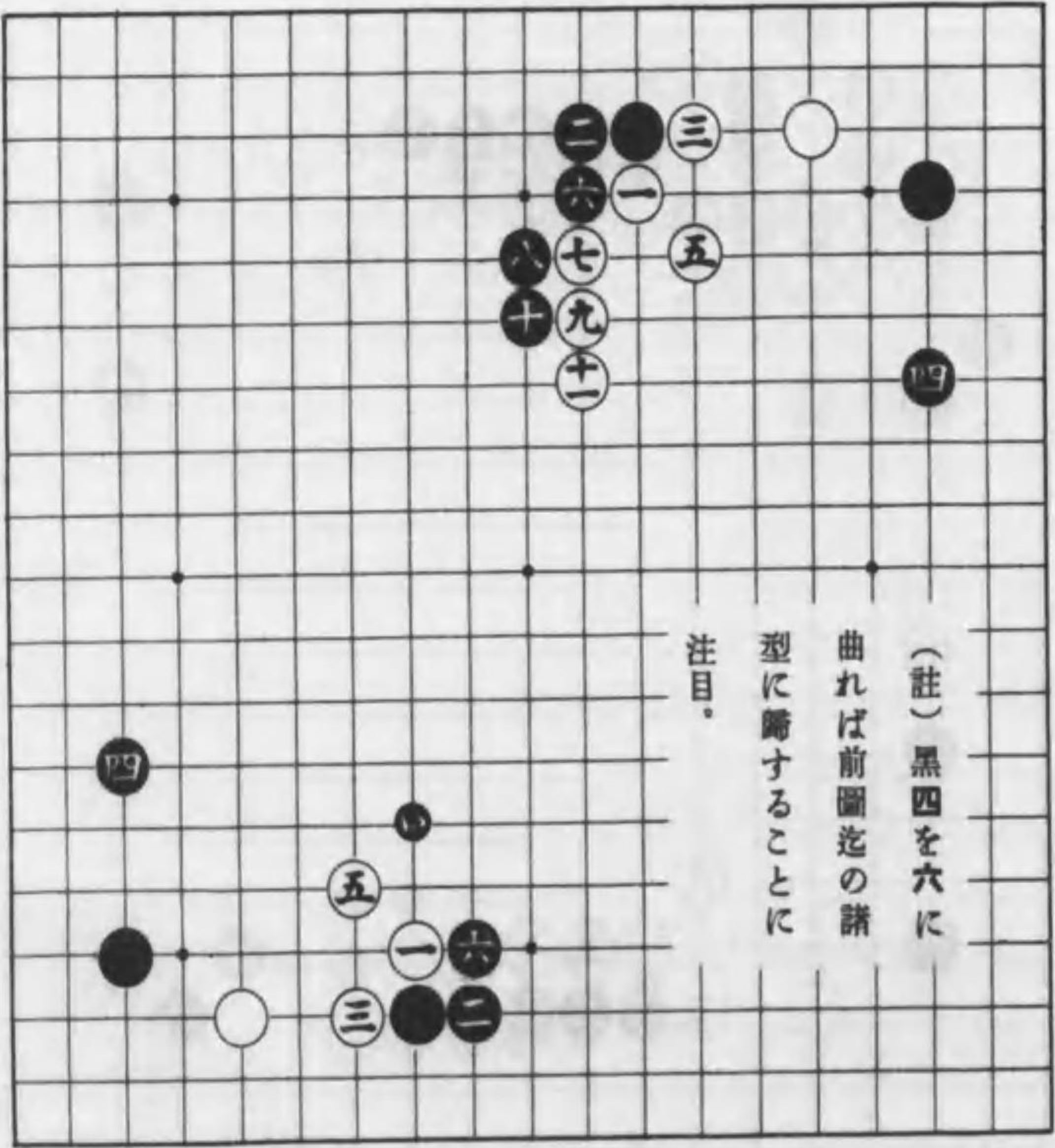


(第廿七圖) 白十七にていに打つ事は出来ない。第七圖との差違に心せねばなりません。又この手で六の一子を打抜いては十一の粘が愚化する事明瞭。黒十の手順なる所以です。

十八と押すに至つて黒有利であり場合にも依りますが左右共に白の姿勢は好ましくない。黒の封鎖若しくは黒の痛撃執れも白は堪へられぬでせう。而して隅の黒は何等顧慮を要しない形。下隅白一に對し黒二と走るも著位は低けれど簡明です。雙方この條にて一段落。



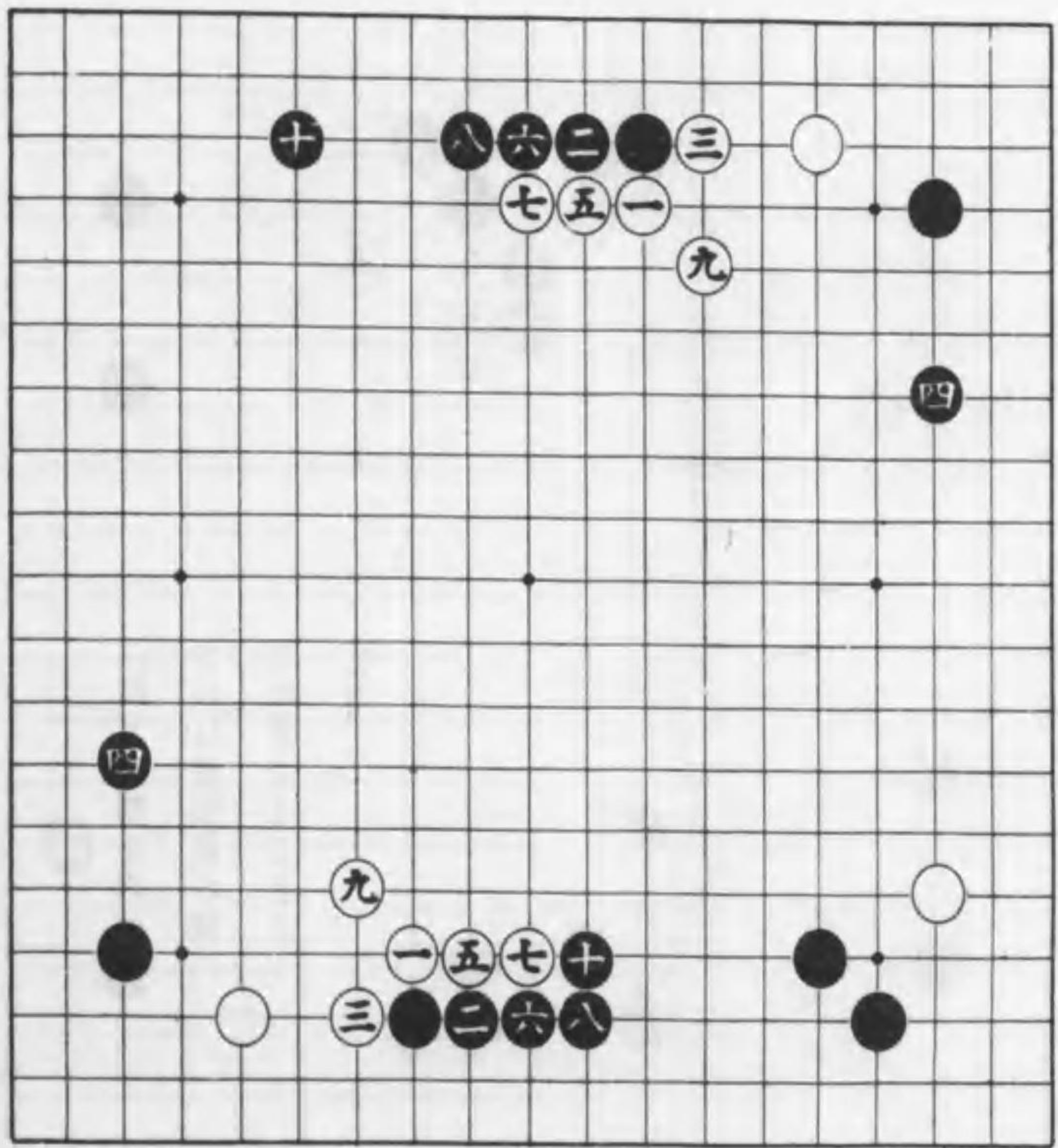
(第廿八圖) 黒二と引く型。これは白三の次に四と拓いて従來示した此方面よりの白の迫撃を避ける意匠です。天圖にも言ふ如く左上隅の配置關係にも依るので素りに打つ事は容るされません。白五は古風にして緩漫宜しく天圖に従つて六に押すべきです。黒六と曲られ十一迄となつては左右共に黒に打たれた形であり二の意志を貫徹せしめました。斯く黒八十と勢力を築かれるを嫌へばとて七を怠つて下隅黒と掛けられる嚴しさは是亦忍びない姿である。



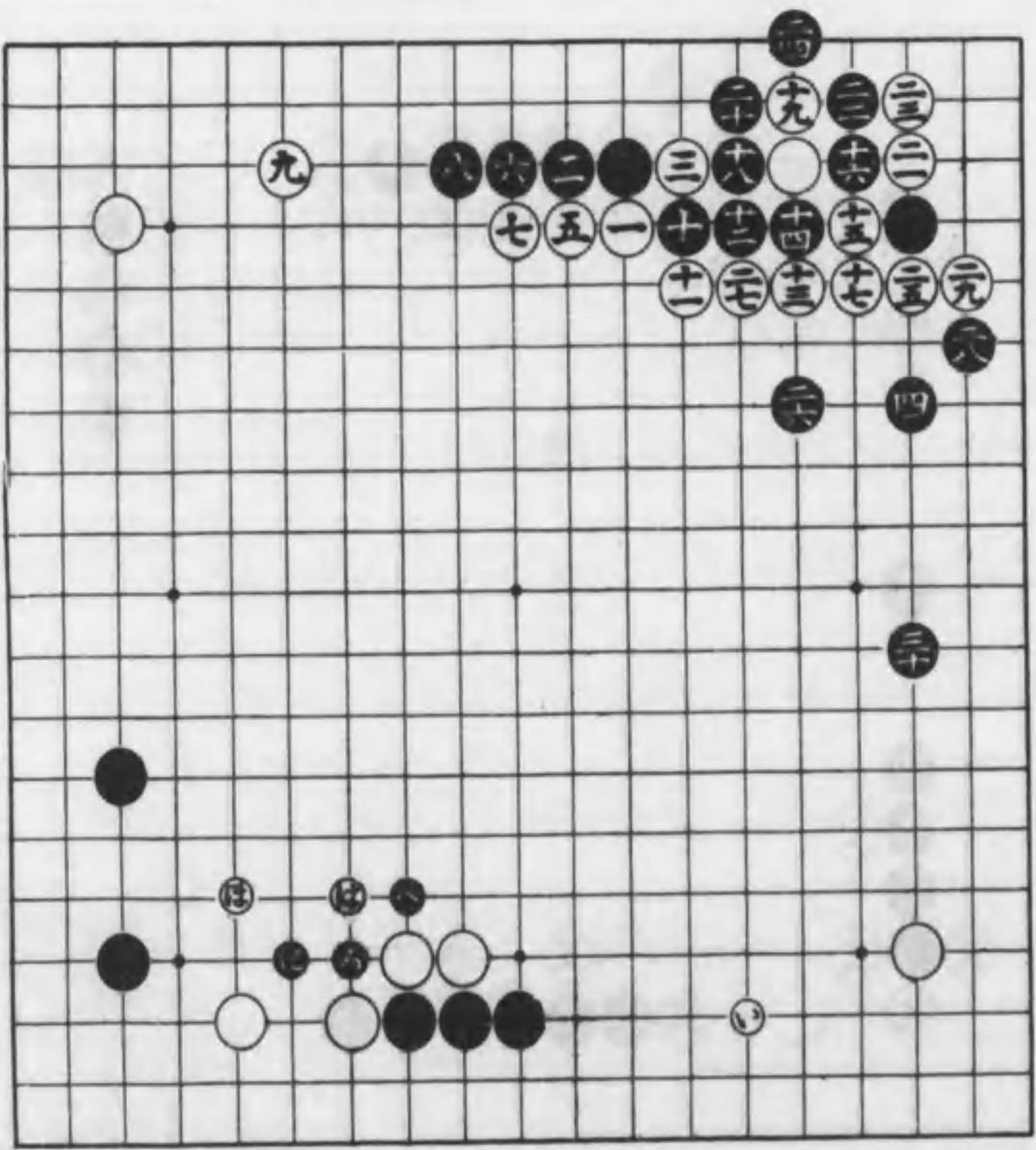
(註) 黒四を六に曲れば前圖迄の諸型に歸することに注目。

(第廿九圖) 白は五七と押すが
宜しい。但し左上隅に白の勢力有
る場合に七若しくは九にて左方
より迫る變化は次圖に示します。
黒十は今度この方面から白に迫
られては不利ゆへ當然。

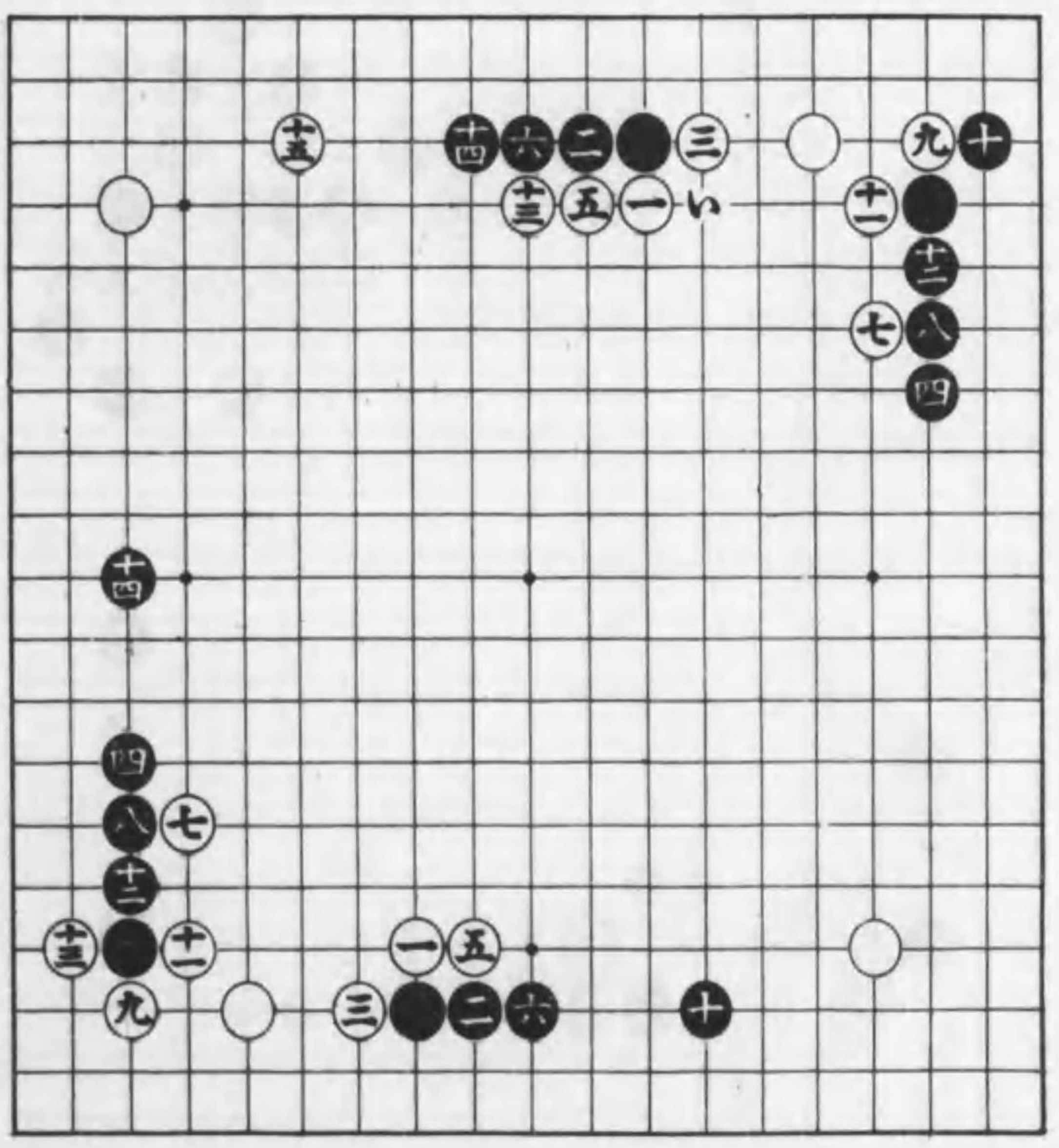
下隅は右下隅に圖の如き配置有
る事を假定したのですが斯る際
には黒も十と曲ります。而して此
時にも白五七の押しは有力であ
る。七迄押せば勿論五に留めて七
の點に黒から曲られても前圖下
隅黒●と掛けられる嚴しさは既
に無い點に注意します。即ち五以
下の交換は白の方が働いた理。



(第卅圖) 左上隅に白の布石有
らば九と詰寄るは勢の必然。黒十
一の切から三十迄餘儀無い手順
です。而して此結果の白に芳しか
らずとされるのは七迄三本押し
てある點にある。但し左下隅参照
本圖は白十三乃至二五又黒三十
迄の著理を示したのですが就中
黒は十六の手で十七より切るも
可能。こゝに於て白は次圖に従ふ。
下隅の如く押しを二本に留めて
①と迫ると黒●と切を入れられ
て白二子の征關係を生じます。か
ら上隅七迄押しして置くのは此點
に備へた譯です。

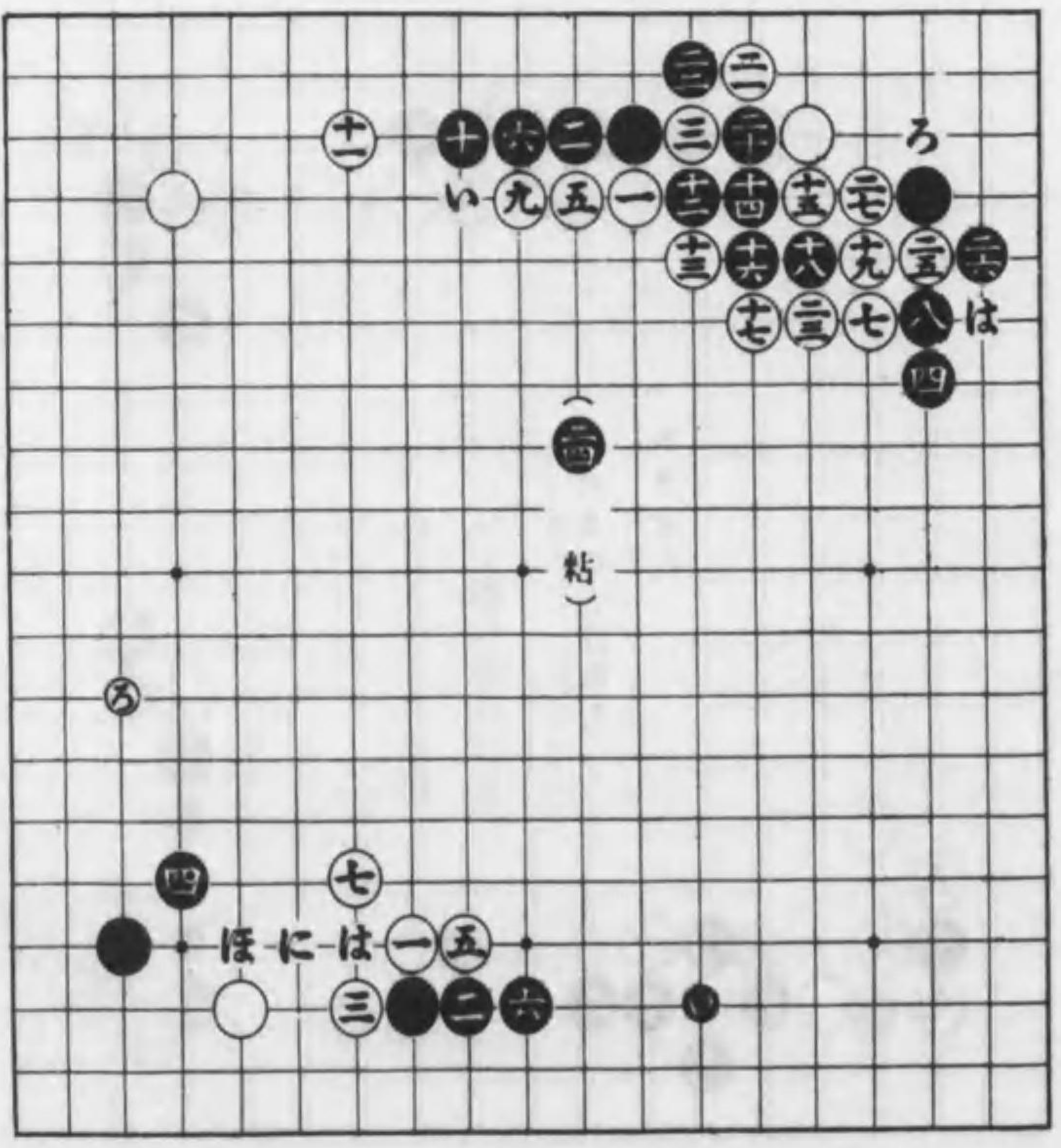


(第卅一圖) 押を二本に留め、而もいの切を防いで十五と詰る爲には先づ七以下の交換を打つて置きます此交換それ自身は白が損ですし、一三五の勢力と重複の姿でもあるが止むを得ません。黒十二迄應じた時に十三と押し十五と詰るいの切が無いので白は充分の形となりました。十二迄の交換が損といふ所から九の手で十五と詰る事は可能左下隅黒十と拓く事は出来ませぬの代りに隅では白に利益を収められる然しそれを以て十四迄の結果が黒不利とは言へません。



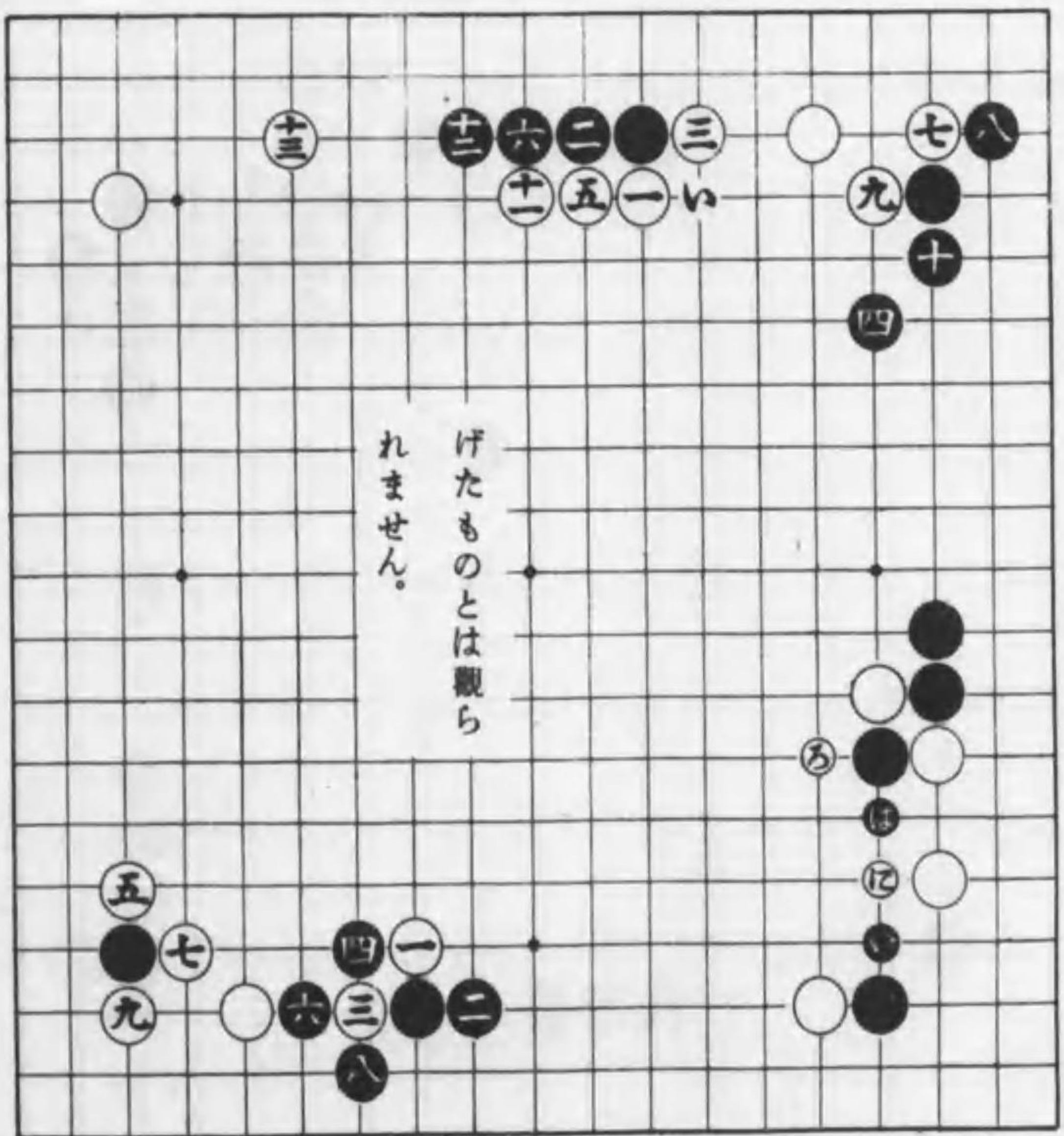
名人圍碁全集(二五〇)

(第卅二圖) 白九は單に十一に詰るも可黒十二と切れれば以下白二七迄となる著理に依て白有利。次には白いが厳しいし隅は黒ろに行るも白はと切られる工合が有つてまづいのです。左下隅黒四は攻守何れの意にも適はず不得要領七の次に黒が●とても拓けば更に白ろと迫られます。また白は右下隅星にその配置有る場合などには七の手で直に●の點に詰ることも出来る。黒はに切らば白七黒に白ほと押出すのです。要するに四の尖みに比すれば次圖の斜走の方が優る。



名人圍碁全集(二五一)

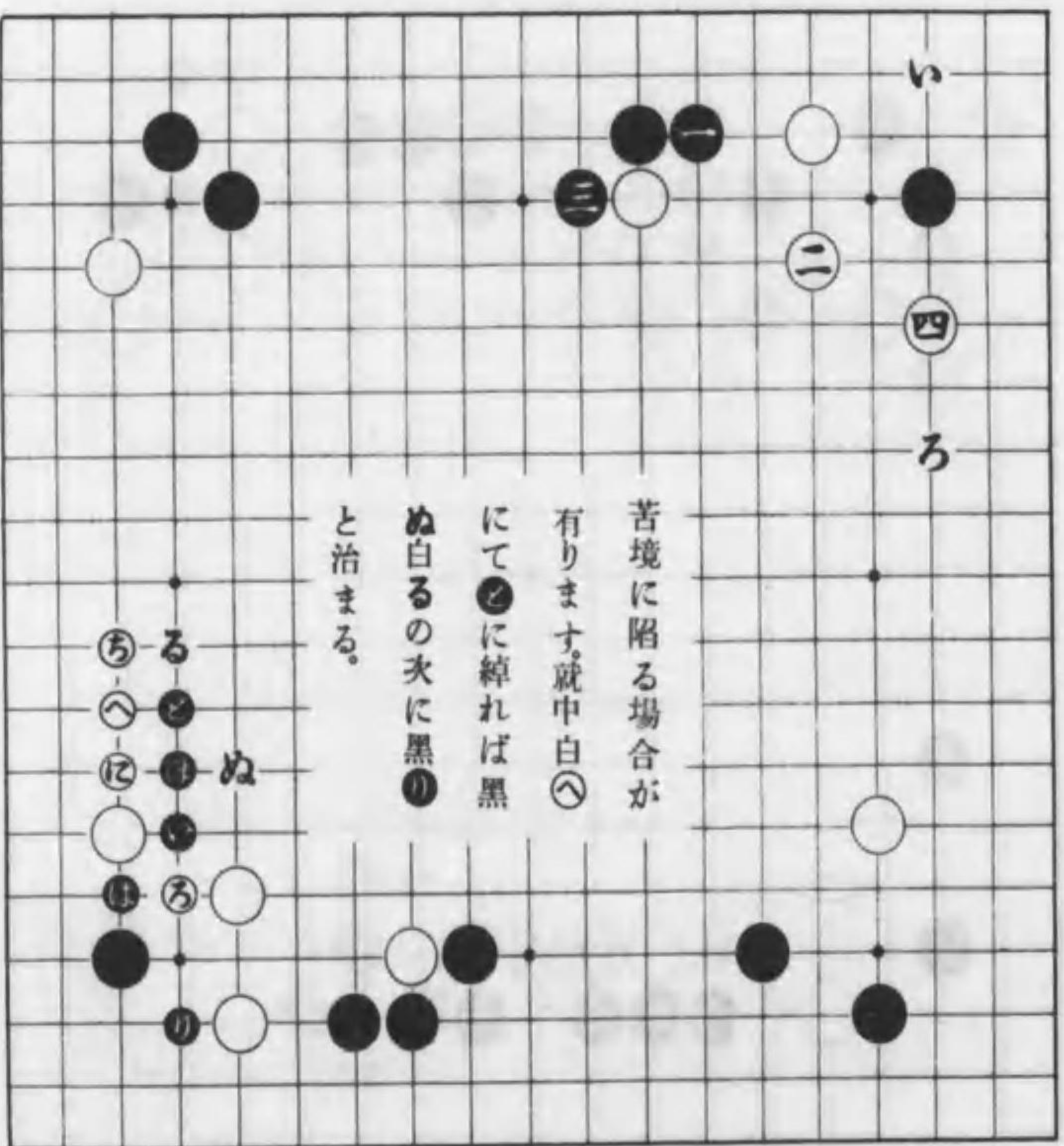
(第卅三圖) 黒四の斜走は結局白七九に依ていの切を失ふ。左上隅に白の配置有つて十三と詰められる事になつては矢張り黒不利と観ます。左上隅の配置が星ならば白は十一の手で星から大斜走に詰めて宜しい。第卅一圖下隅をも考慮に入れて、四は前圖迄の二間拓に及ばぬ事を知るでせう。下隅黒四と直ちに切つた時に白五は著理、黒六にて七に出ると右下隅白②の次に黒は孰れかの二子を捨てざるを得ない。白九迄の歸結は局部として互角ですが先著の黒がその効果を擧



けたものとは觀られませんが

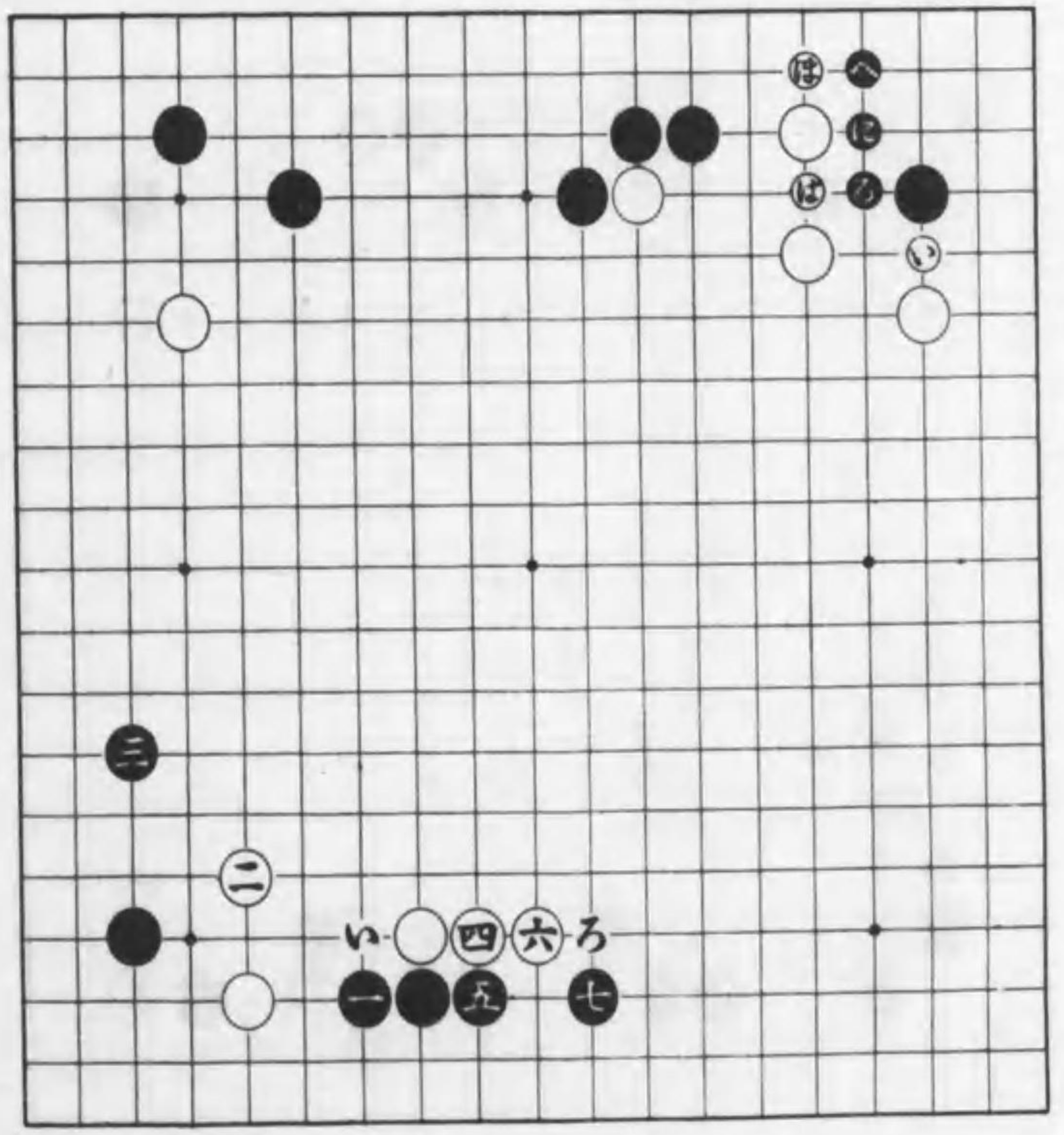
(第卅四圖) 黒一と行出す型。是

は白から此點に約へられるを嫌ひ且つ白の根據を奪ふ意味です。白二は左右に利かせました。黒三と綽上る爲には左上隅に圖の如き配置有る事を要します。白四と封鎖して一段落後に黒いと飛んで活路を存する故この隅を確保する爲には機を見て白もいに走つて置かねばなりません。然る後にも黒にろの方面より利かされる虞れが有る。更に左下隅黒⑤と頂越されて是を征に抱へ得ぬ際には白⑥迄應じた時に黒⑦と活きられて白の



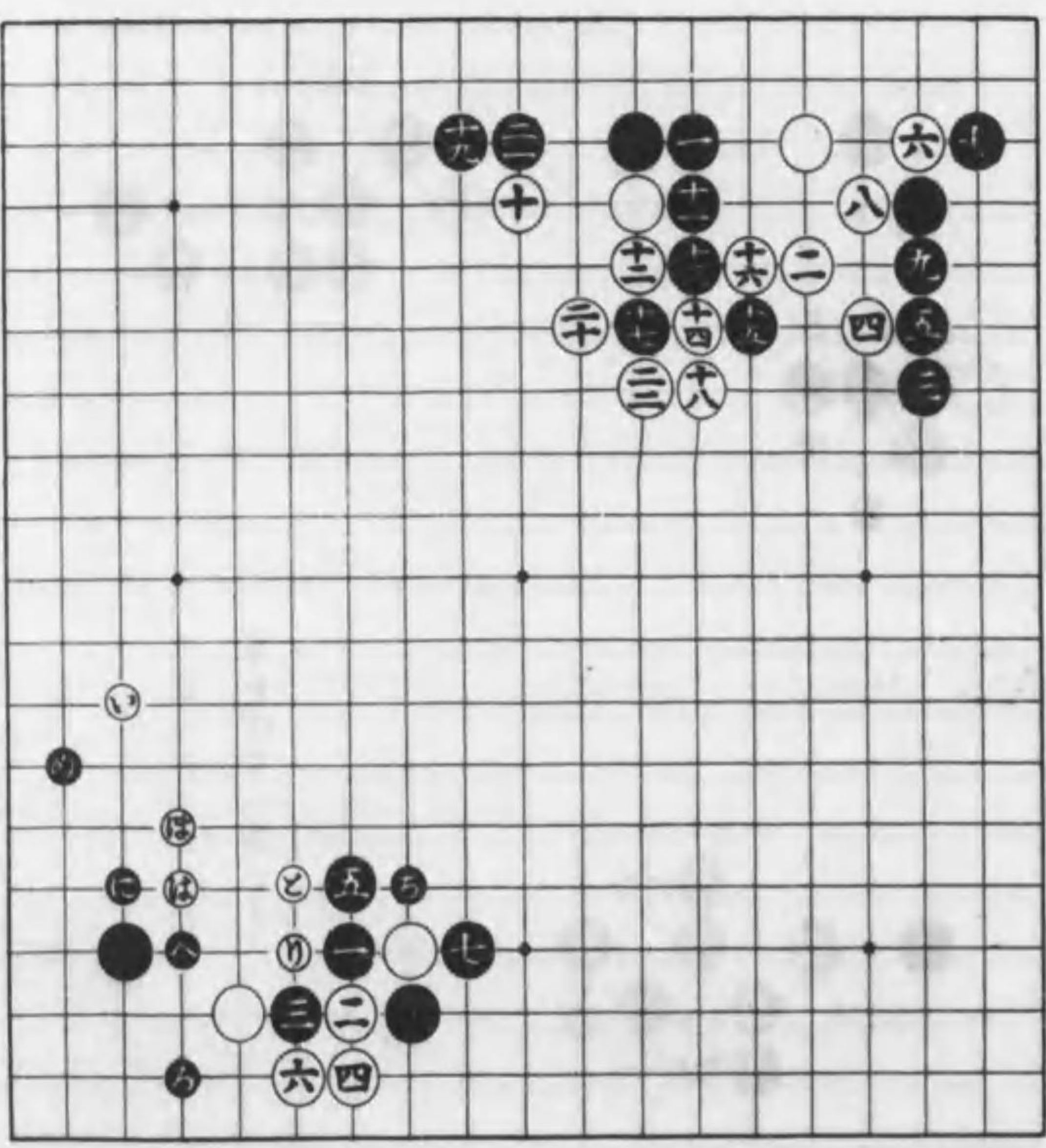
苦境に陥る場合が有りませす。就中白⑤にて⑥に綽れば黒ぬ白の次に黒⑦と治まる。

(第卅五圖) 前圖下隅の頂越しに備へる爲には白①の突當りを要し然る後にも黒②以下に依て活路を有するので③に加ふるに白④の約へを以てせねば此隅を完全に領する事は出来ません。下隅黒③と拓くのは前圖上隅白④に依て隅の問題よりも左邊に形勢を張られるを厭ふ場合です。白④⑥の壓迫を被るのは止むを得ない。従て右下隅方面の配置如何をも見定めなければ③の拓きは打てぬ理。七の次に白いに約へは打てぬ。黒はろと押す位のもですが局部として黒に不利は考へられぬ。

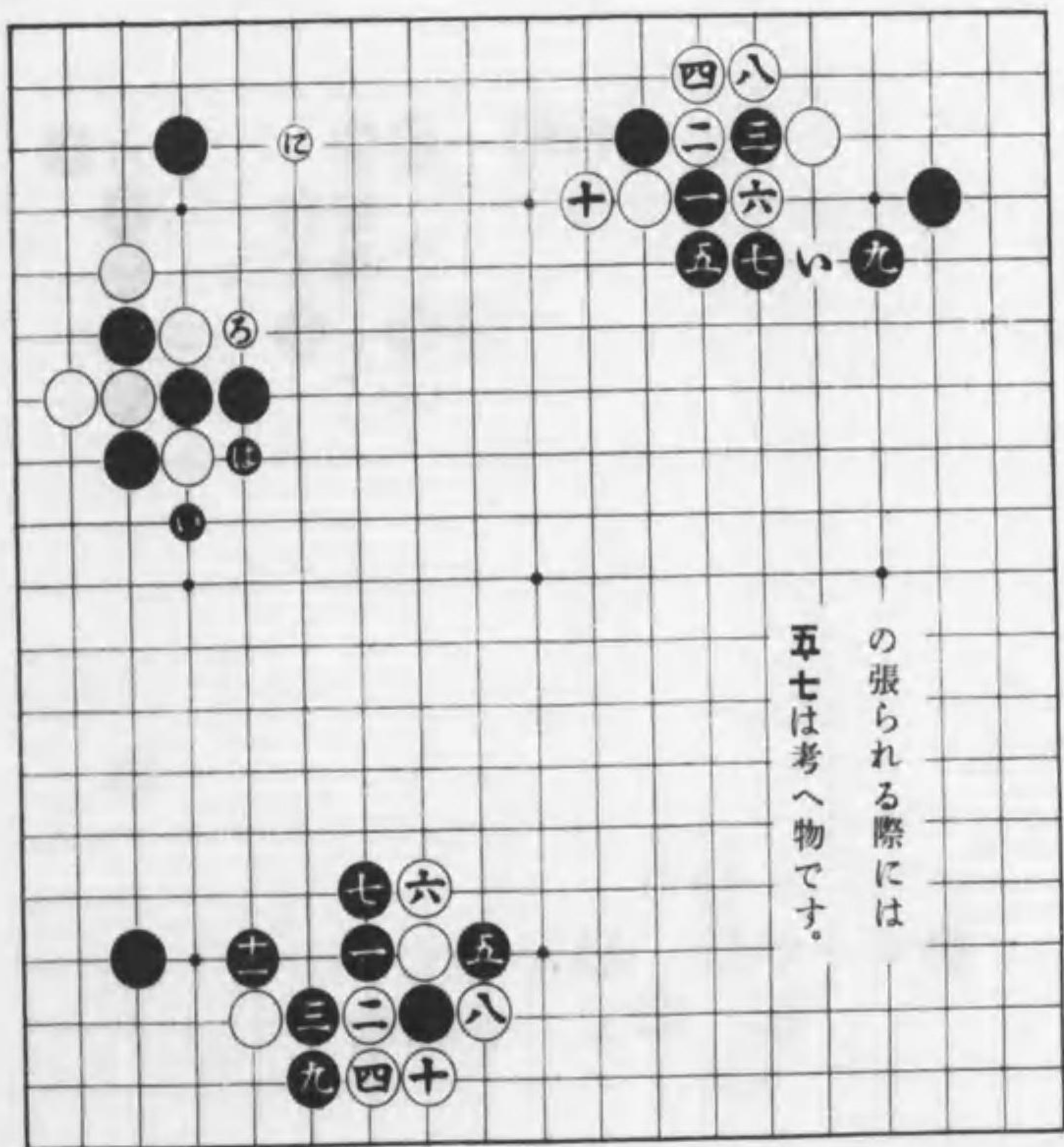


(第卅六圖) 白④から變化。八迄勢力を築いて置いて十と飛んで攻る。黒十一以下部分的には斯く打つ位のものです。

黒十九は著理。然し乍ら二十二十三と打抜いて白も厚壯を得ました。左上隅に白の配石が有つて夫から十九の方へ詰らる場合には黒三又七の時に考慮を要する。左下隅は黒一と繰出す型。白二に對し黒三・五は常用の著理。但し七と抱へる征の成立する事を條件とし、然らずば一の手が不當となる。白八にて⑤に夾返し以下⑥となる等は黒の洒落た形。



(第卅七圖) 白六と上から切るの
 のは一子を征に取られまいとす
 る心従つて黒七にて十に抱へ左
 上隅白⑫となつては黒不利です。
 黒九に至り十に抱へて白いと綽
 出されては是亦黒が悪い。
 白十は當然ですが黒が右邊に於
 て張り得る形勢次第でこの歸結
 の優劣は定まります。
 下隅は征關係の黒に有利なる時
 黒五七は著理を重用しました。
 白八はこの一手十一迄の結果五
 と六との交換有るを以て白も打
 てる形で部分的には先づ互角
 右下隅方面にかけて廣い白模様

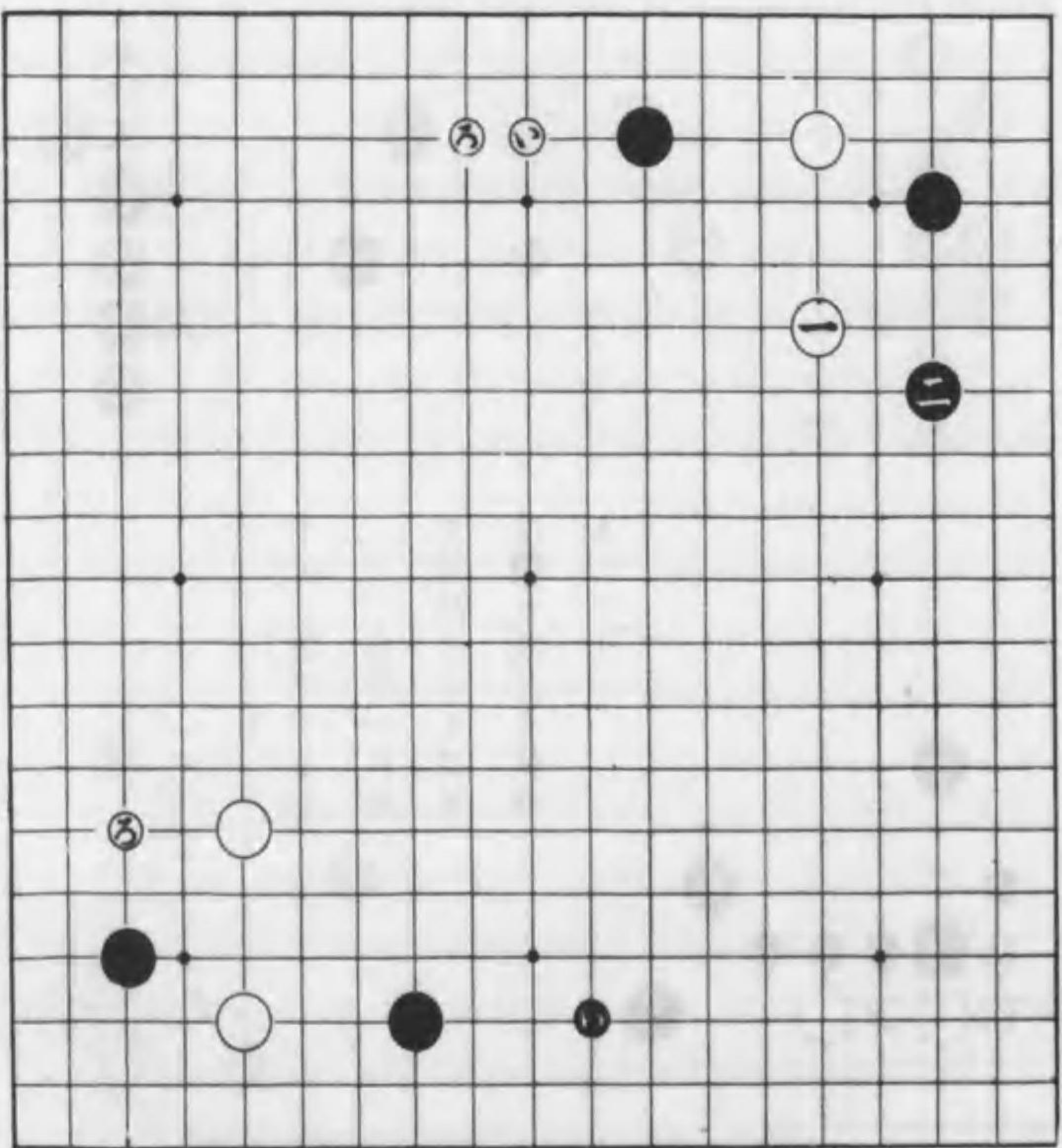


の張られる際には
 五七は考へ物です。

(第卅八圖) 白一の二間飛は直

接には第一圖で指摘した黒②を
 防ぎ又黒③を緩和し更に④若し
 くは⑤と此方から迫つて左上隅
 方面に形勢を張る意匠である後
 に掲げる小斜走掛に比して軽い
 差違は有ります。

黒二は普通他の受方は第四十七
 及び第四十八圖以下に説きます。
 二を省略し或は⑥の點に拓いて
 も下隅の如く封鎖されては少く
 とも隅に於ては不利大なほ詳し
 くは三間夾定石に於て述べる。
 一二の交換それ自身は黒が有利
 ですが一の意味は右に盡きます。

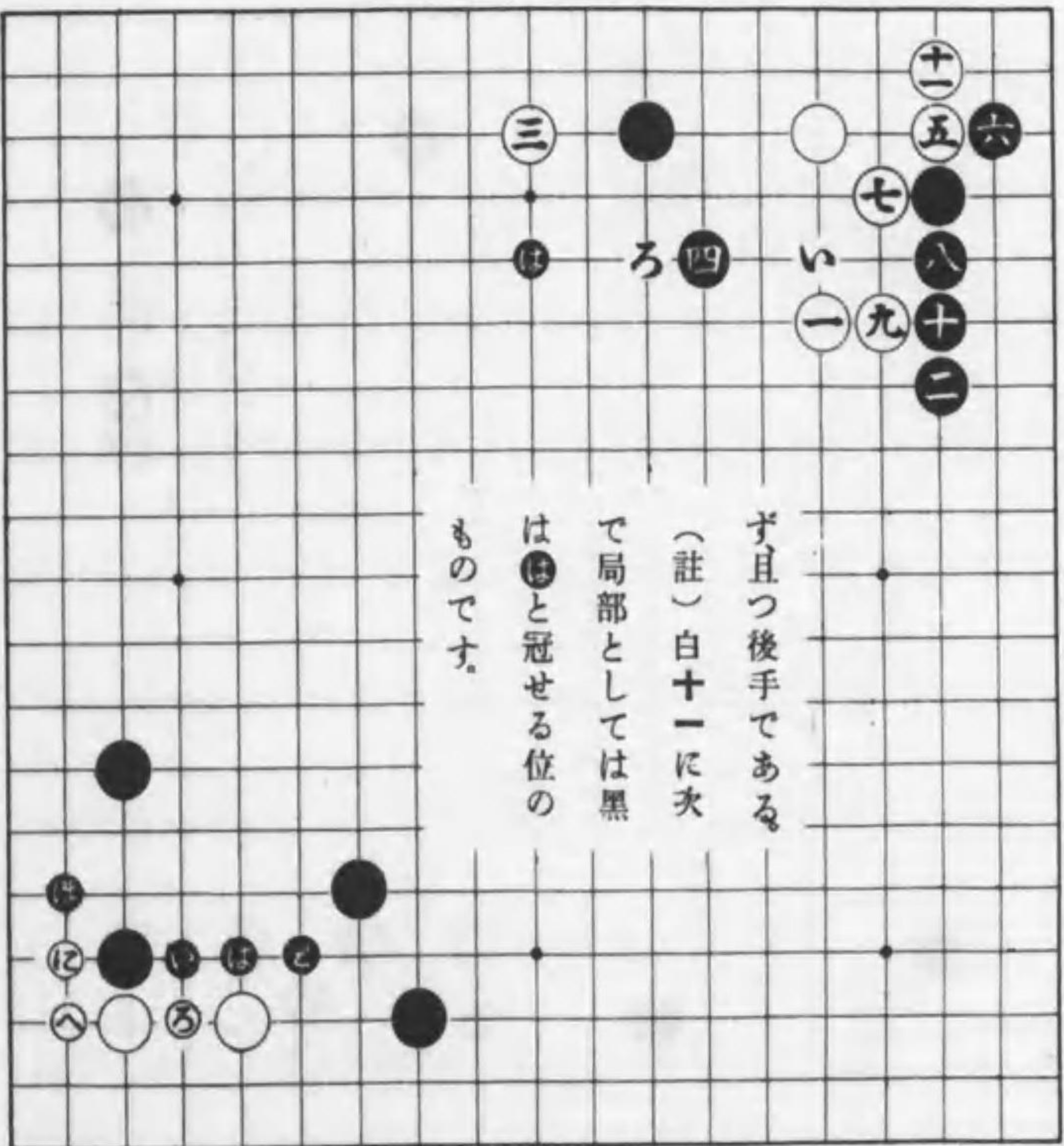


(第卅九圖) 本來自一黒二にて一段落であり黒二と受けしめれば一の目的は既に達せられた理ですが他面一は又三の夾撃を含む事は前圖で申しました従て三は機を待つて打つ事が出来ますし直ちに打つも宜しい。

黒四は二間夾から進出しつゝ一の頂越に依る遮断を狙ふ。

白五以下は先づ以て自ら治まつたのです但白九の手順肝要その理由と黒十の變化に就ては順次に示します。

黒六にて七に行るは左下隅迄となつても黒不利二間夾が働か



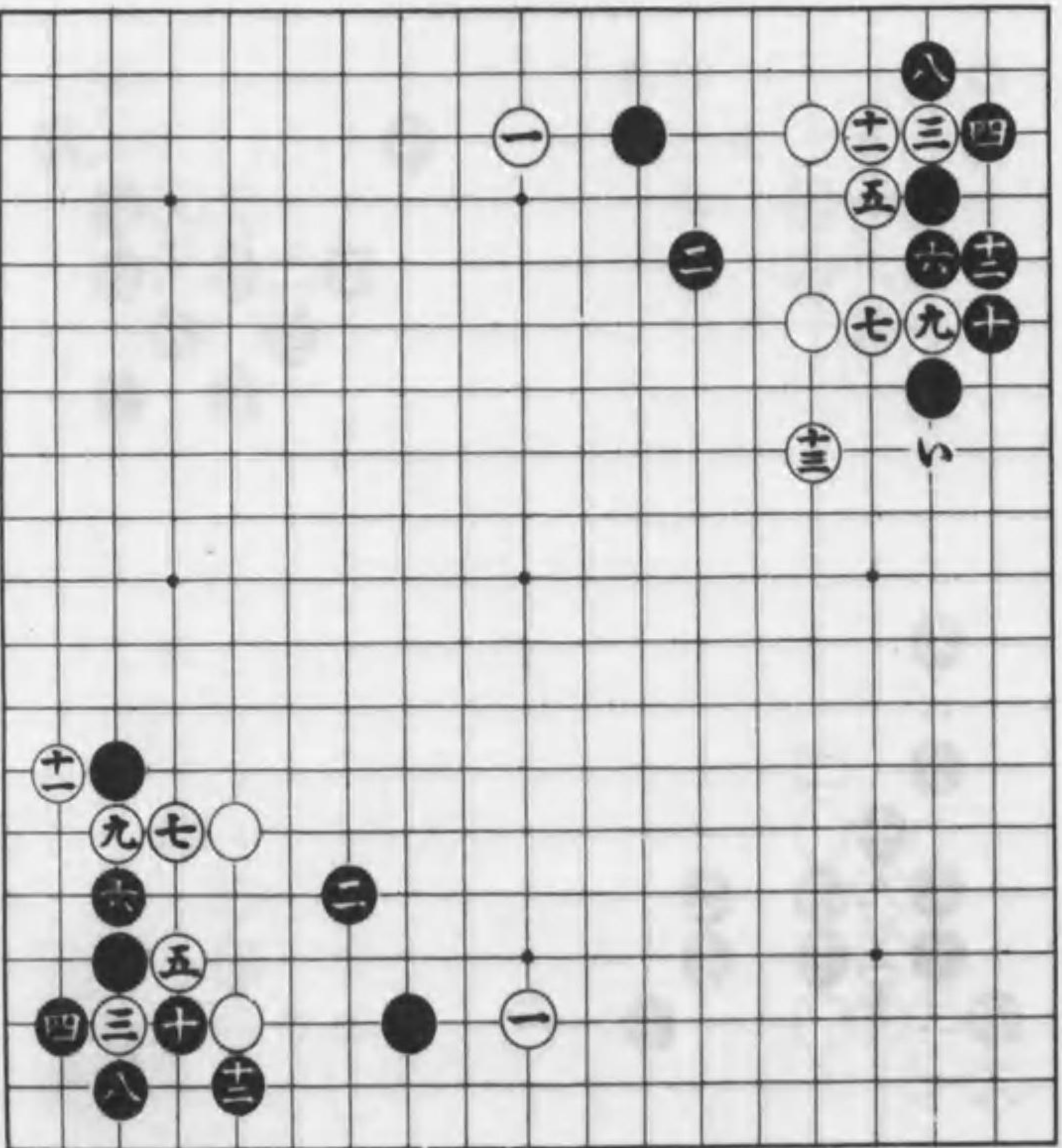
ず且つ後手である
(註) 白十一に次
で局部としては黒
はと冠せる位の
ものです。

(第四十圖) 黒八の變化白の根據を奪つて前圖の如く治まらせまいとします。

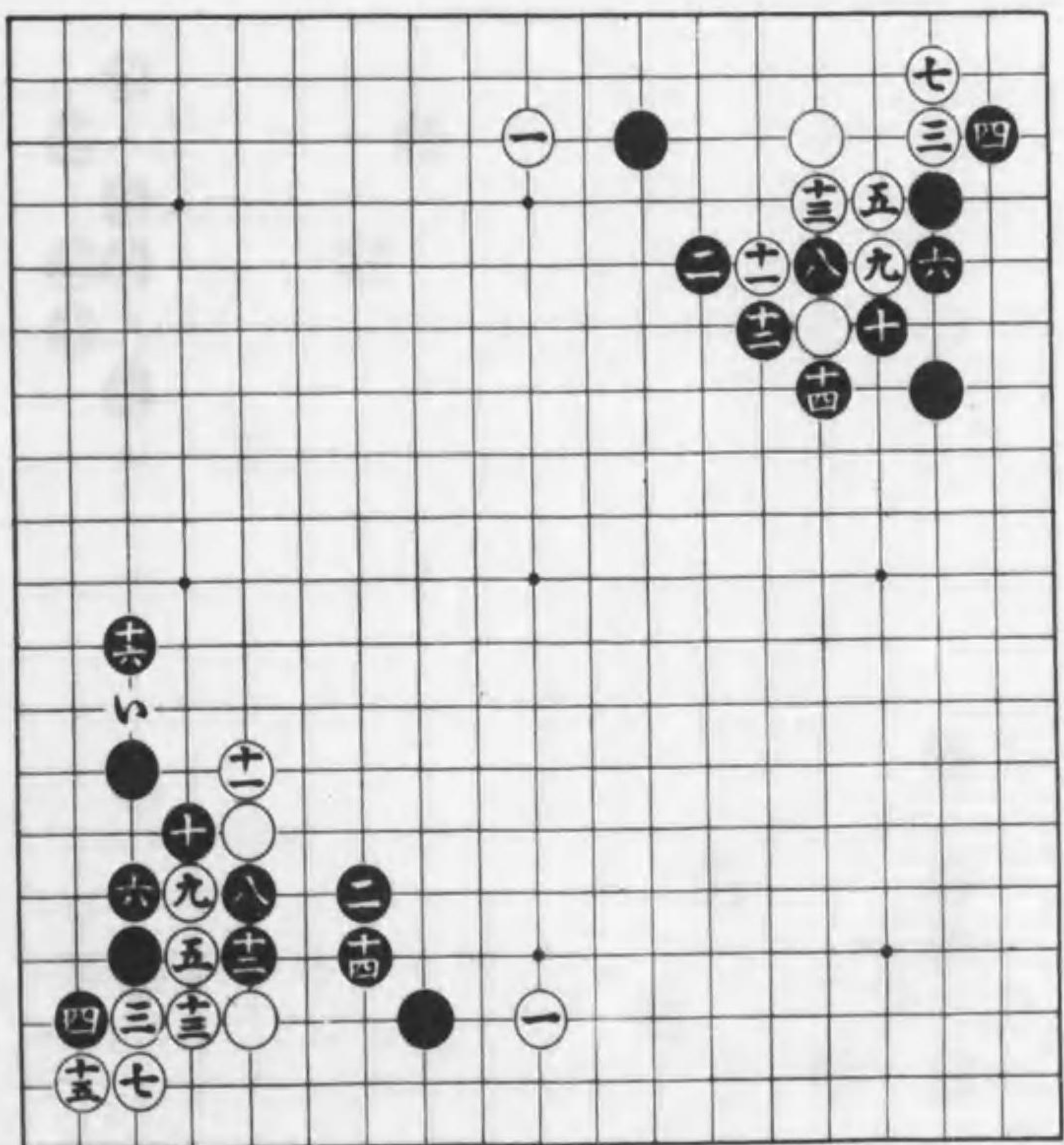
白九にて十一に粘ぎ黒九と繋かれてはその不利測り難い。

黒十の別法は下隅です十三迄の結果前圖との差は一利一害で白の根據は覆された代りに前圖黒二の石が非常に弱められておます白も利き自然二の方まで薄弱を致すべき理。

下隅は黒十と打抜いた變化です十二迄の振換りは形勢にも依るものゝ一般に黒が劣つてゐる。二の石さへ働きに乏しい形。



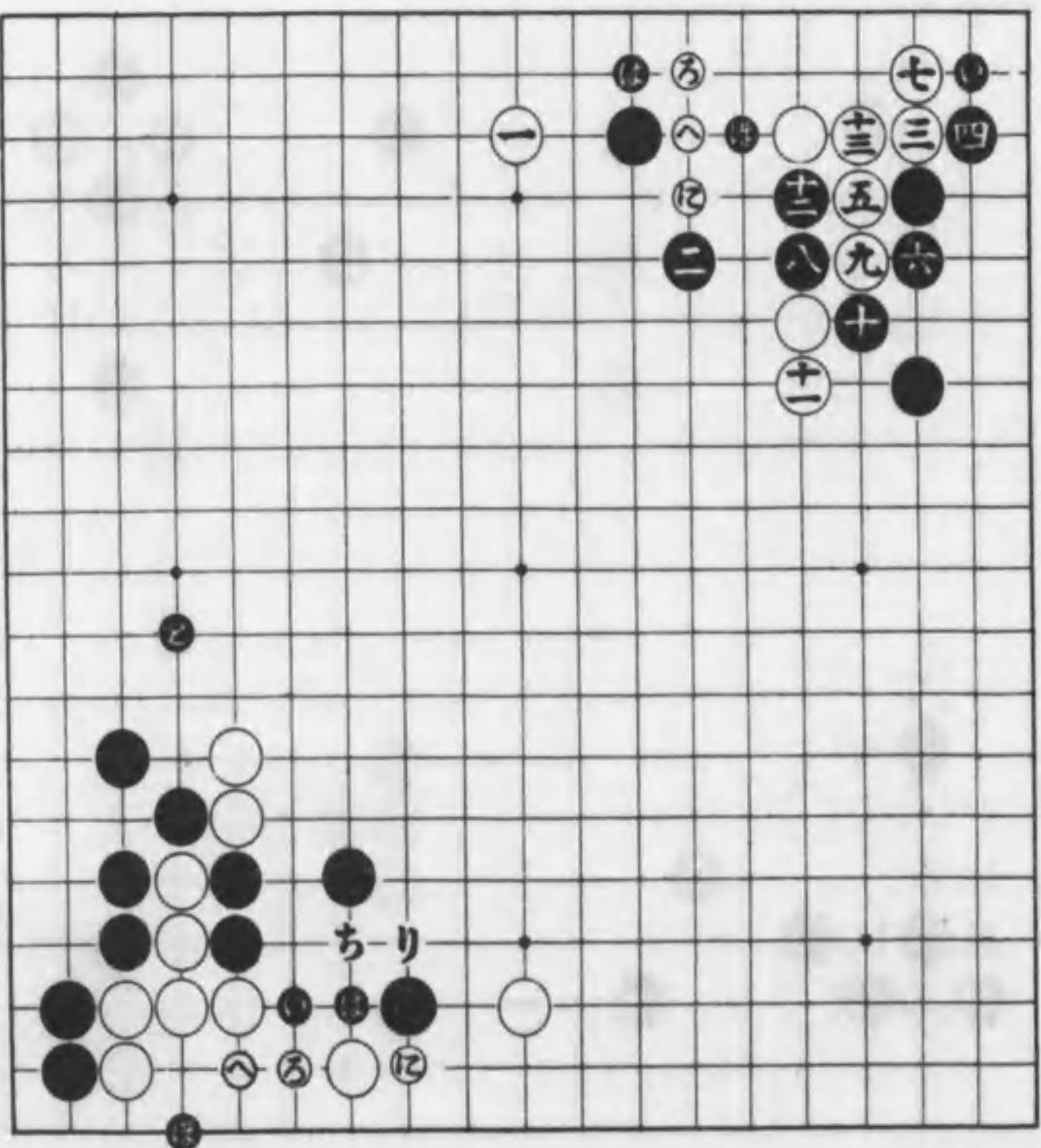
(第四十一圖) 白が十の並びを
 怠つて單に七と下れば黒八と頂
 越される酷しい手段が有る。
 白十一と抱へ、黒十二、十四と締付
 けられては其外勢の厚壯がえら
 いので一局の勝敗は茲に定まる
 と斷じても過言ではありません
 左下隅は二間飛の石を少しでも
 働かしめる意味から十一と行ひ
 たのですが黒十六迄の結果、切斷
 されたる二子が浮いてをり隅は
 活きてても白不利なる事疑ふべく
 もないでせう。前々圖白九の並び
 を手順とする所以なほ黒一六の
 飛は白いに備へた正著です。



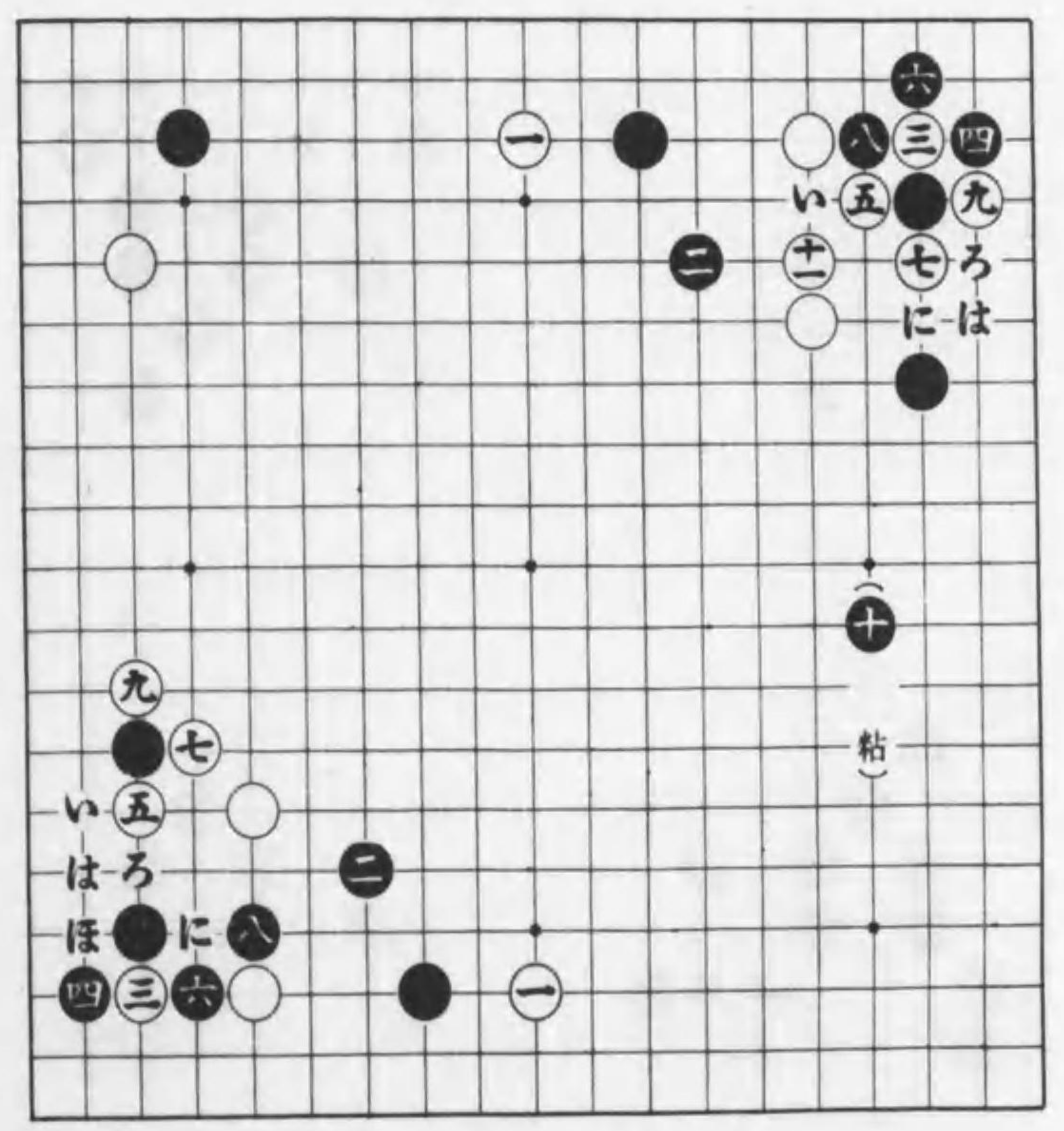
(第四十二圖) 前圖黒一四の手
 で若し●と約へれば、白は○と走
 つて凌ぐ事が出来、黒●と進
 つて取懸に行くのは白○の妙著
 が有つて失敗に終る参考迄に示
 します。

左下隅黒●の綽を先にしたらば
 如何黒●以下●迄となる位のも
 のですが、勿論部分的の優劣は言
 へません。但し黒●白○の交換は
 手順である。

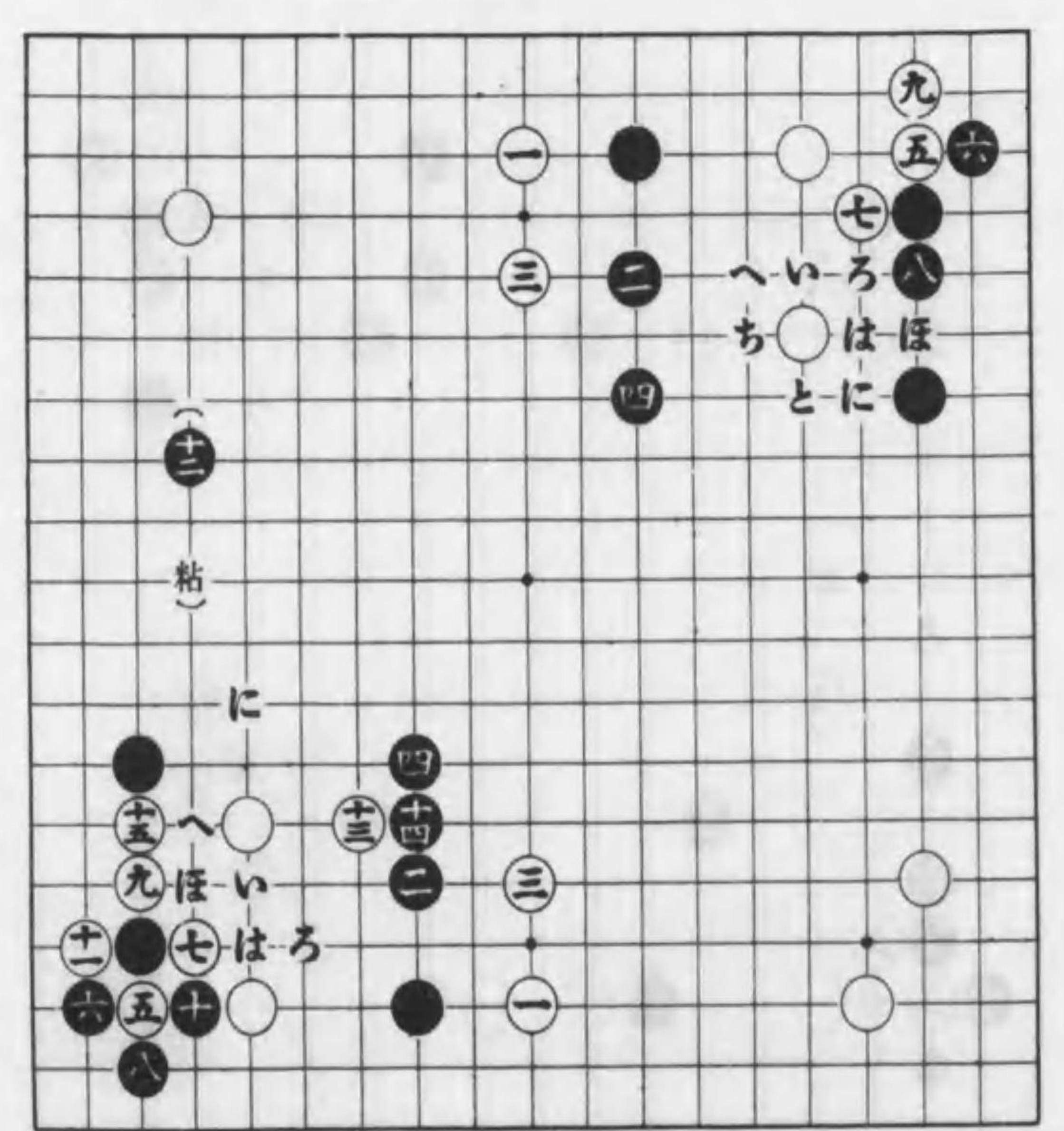
黒●にて○に約へれば白●に出
 て黒ちの時、白りと切つて凌ぎま
 す。このりを征に抱へ得なければ
 黒の無理となる。これも参考迄に。



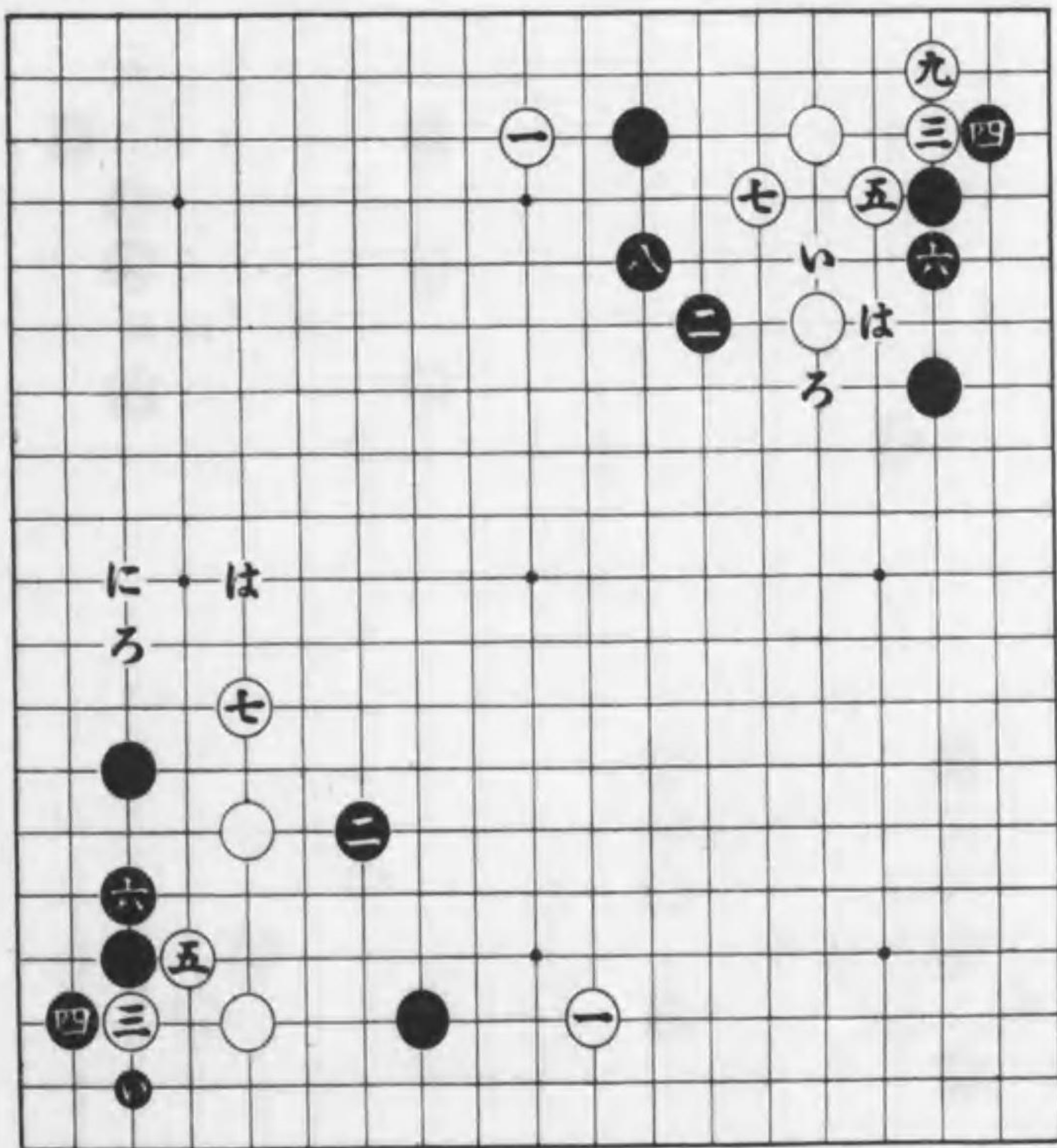
(第四十三圖) 黒六は常に手で
 ず。白十一迄平易に應じて宜しい。
 十一をいに粘ぐと黒ろ白は黒に
 と打たれる危険が有る。
 黒は左右共に孤立に陥りました。
 左下隅白五は黒六にていに受け
 させ。白ろ黒は白に黒ほと利かせ
 やうの趣向而して黒六は低く壓
 迫されるを嫌つて外したのです。
 白九迄の振換りは勢の自然とし
 てこの結果隅のみは白が損なれ
 ど左上隅の如き配置も有らば白
 五は一策として成立し得る然し
 黒は勿論充分の姿勢で白一の詰
 が働いてみません。



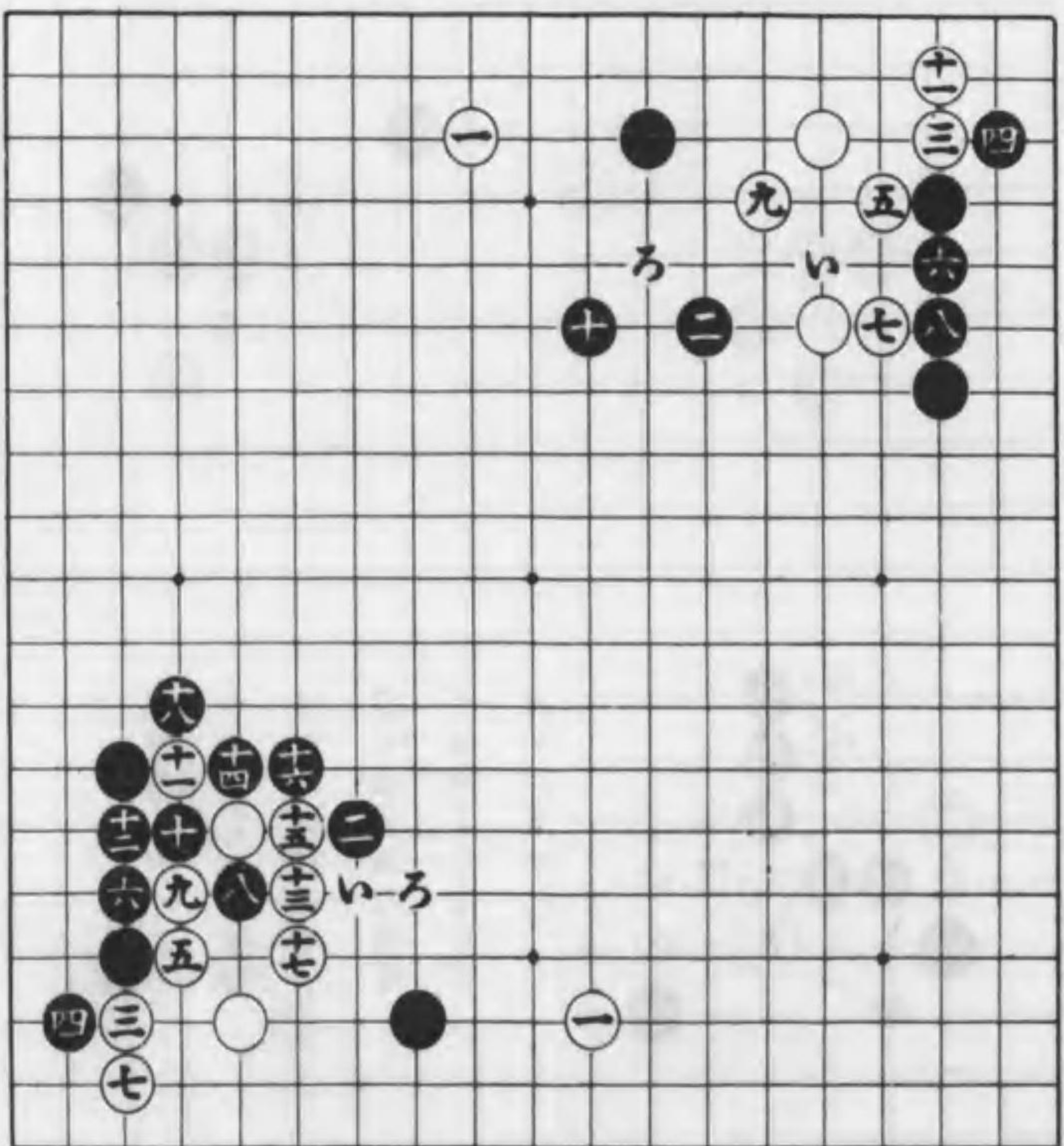
(第四十四圖) 黒二と飛ぶは最
 り普通この時に左上隅に白一手
 又は二手の配置有らば三と随い
 て飛んで左方に形勢を張ります。
 黒四に次で五以下と治まる黒い
 の趣向を白は恐れず白ろ黒は白
 に黒ほ白へ黒と白ちと應じます。
 左下隅黒八はこの場合にも不可。
 白十三黒十四の交換は省略する
 も可能なれど十五の突當りが肝
 要であつて是をいに打つと黒ろ
 の覗きを好便に打たれ、白は黒に
 と運ばれる惧れが充分に有りま
 す十五に次で黒はならば白ろ黒
 ほ白へとなつて黒の拙い形です。



(第四十五圖) 黒二と大斜走する小斜走とさして變らず、その意は二間夾の石を逃げ乍ら白に響かせてその應手を促すにある。白七は黒いに備へて後に九と治まりました。九に次で黒ろと頂るのは白はと行出されて不成功。下隅白七と飛ぶも有力。次に黒を飛ばせば白は形勢に依てろ又ははに打ち或は手を抜いて他に轉じ隅は軽く見る七に對して黒若しにとでも應ずれば白は下に下つて治まります。要するに七と飛ぶ時に上隅七と黒八との交換は無い方が優つてゐる理である。



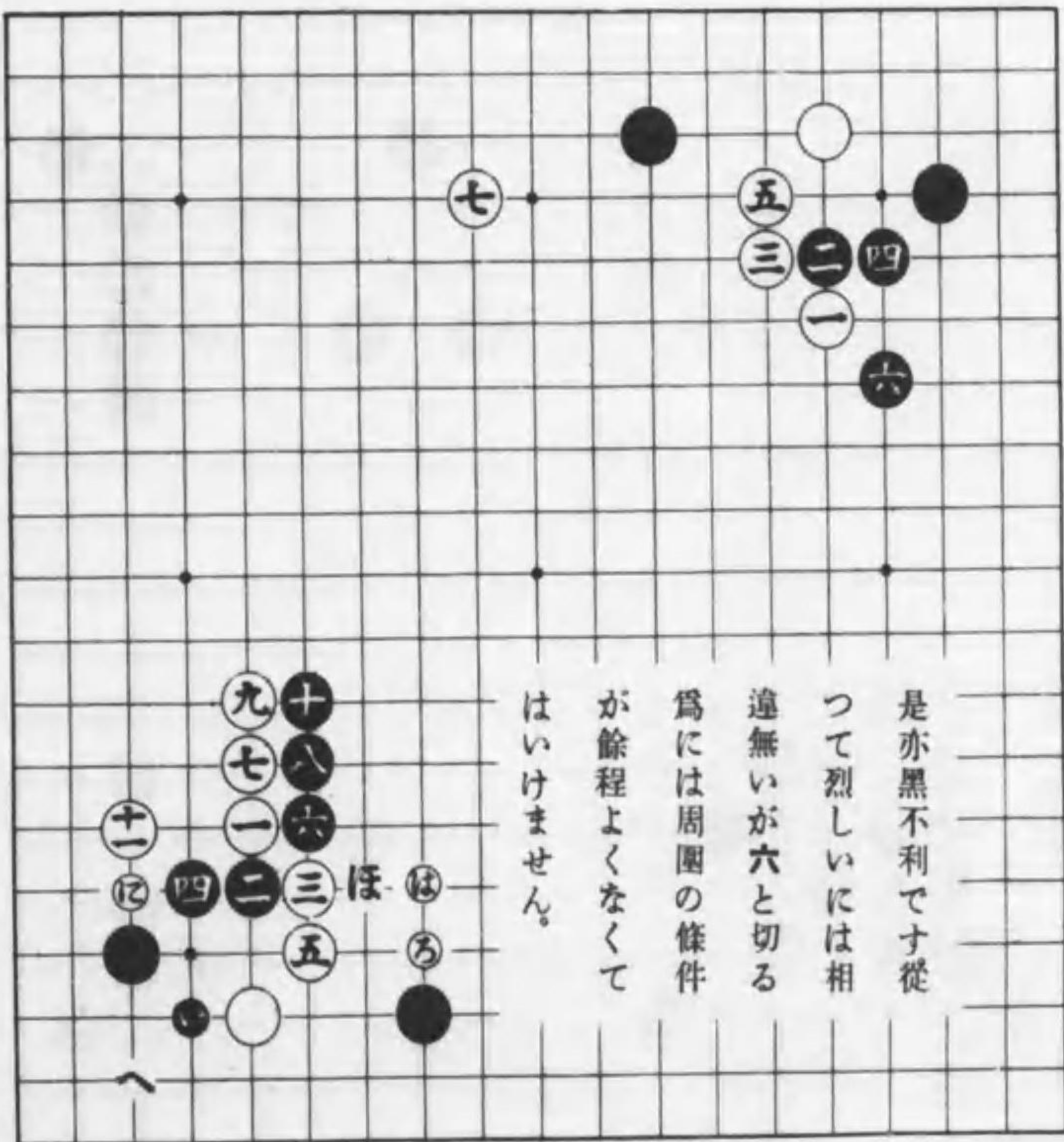
(第四十六圖) 白七は矢張り黒いに備へたのですが九は黒より此點に覗かれると二が小斜走の時よりも働いた形になる意味は有る。白一と一路遠い際には黒十が有力ろ等に受けるよりは遙かに効果的で、白十一にて一段落。左下隅は白が單に七と下るの不合理を示すので、黒八と頂越され以下十八迄となります。白十七にていに曲り黒ろと約へられると黒を愈々厚壯ならしめる上にも響く十八迄の結果は左上隅方面の配置關係にも依るけれど一般に白不利です。



(第四十七圖) 從來の如く受けてみたくない際に二と頂る事は出来ませんが黒六迄となつては二間夾が白の堅きに接するだけに面白くない。なほ三間夾にて詳説。左上隅方面の條件にも依るもの白七と迫られるが如き場合には二は穩當を缺きます。

左下隅黒六と切つて行くのは激しい手段ではある。

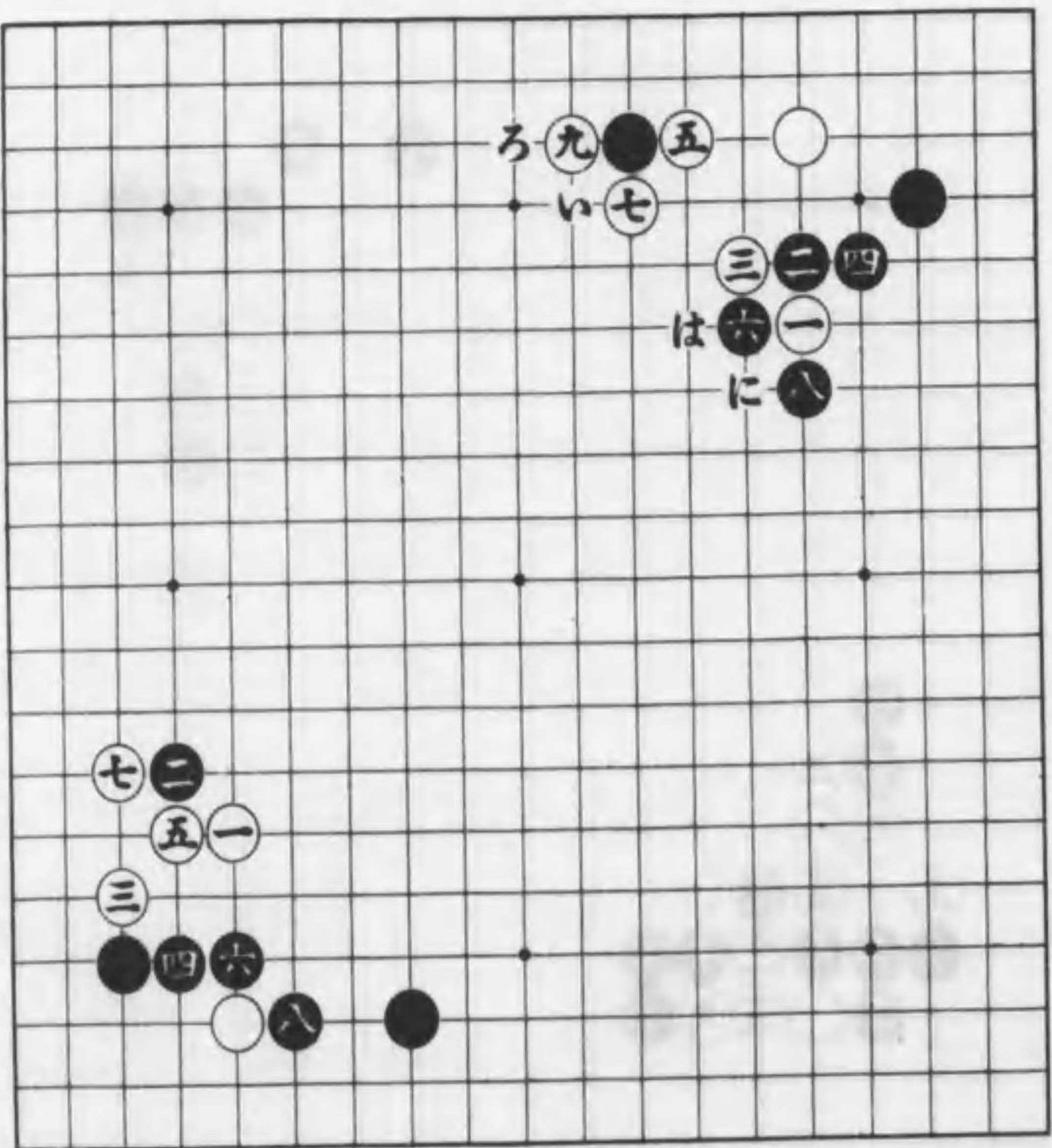
白七と單に引くに限るのです。白十一に次で黒●と尖頂れば白は○或は●を選ぶべく白○と當込まれる工合が有つて黒不宜●の手でほに打てば白へと走つて



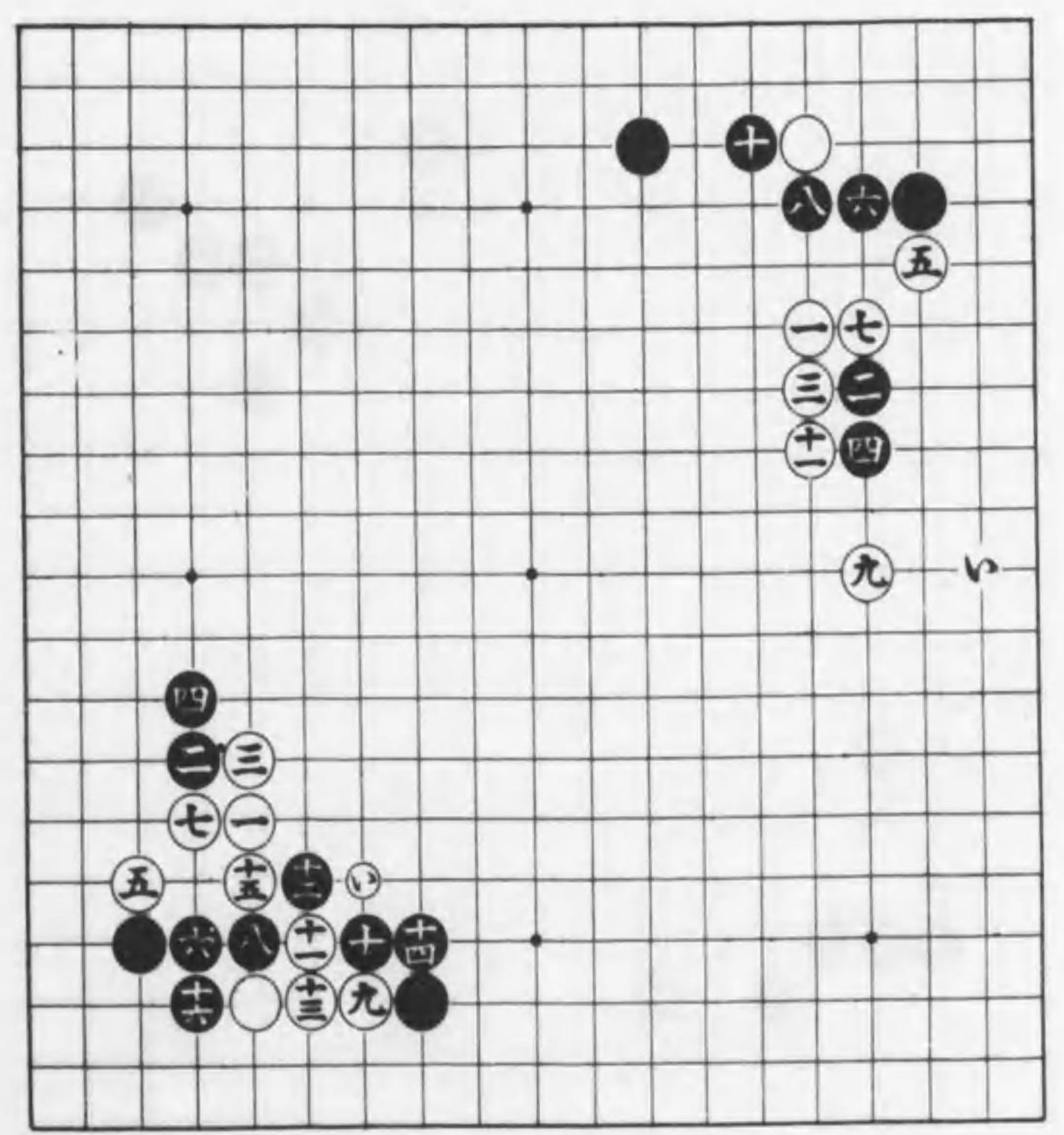
是亦黒不利です従つて烈しいには相違無いが六と切る爲には周圍の條件が餘程よくなつてはいけません。

(第四十八圖) 白五と飛頂る變

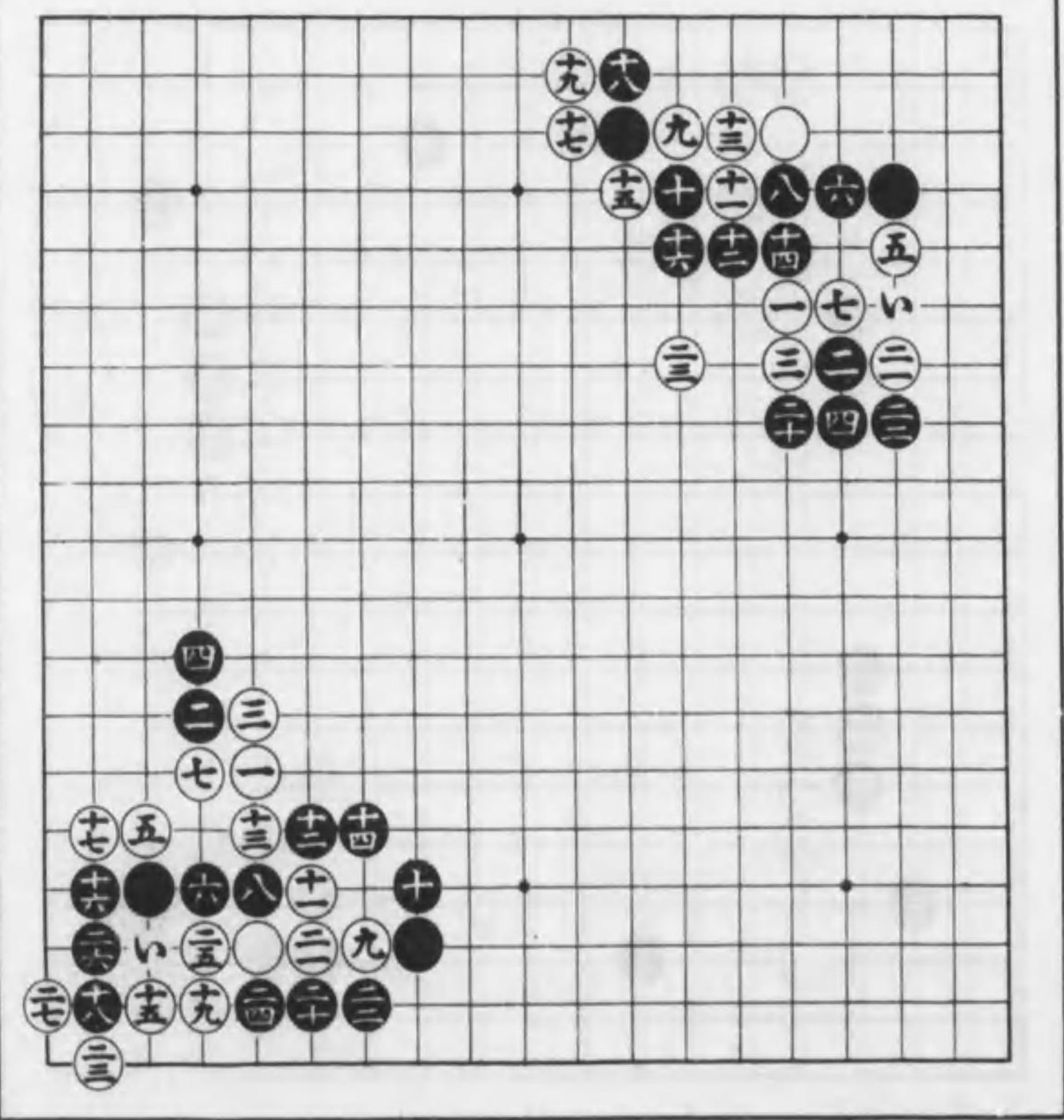
化黒六以下九迄の振換りとなれば局部としては互角の姿です。就中黒は八と抱へるに限り八にて九に行ると白い黒ろの次に白八と引かれて黒が悪い。又白九に先立つてはに當れば黒はにに粘ぐも一を打抜くも可能ですがこの交換は白に於て疑問である。左下隅は黒二と受ける新しい型。挑戦の態度です。白三の別法は順次示しますが斯く急に三と頂け以下八迄の振換りとなつては二が軽いだけに實利を収めた黒が優つてゐるものと観ます。



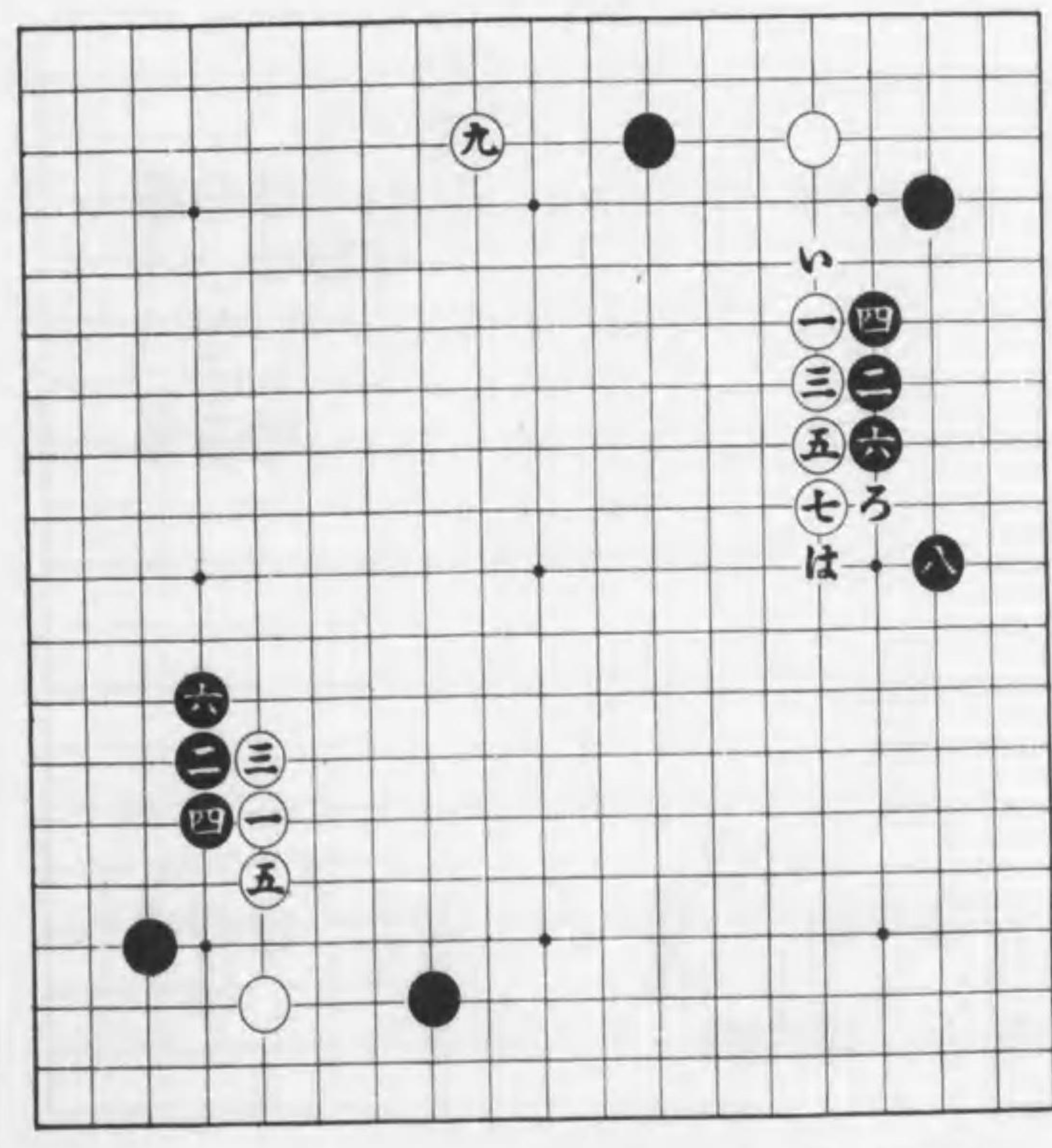
(第四十九圖) 白三と一旦押し
てから五と頂るのは、黒を二・四と
重くして置く意味、白九十一は右
下隅方面の配置と相俟つて地域
を形成し得る事を豫想したので
すが、其方面に黒の勢力有つて、後
に黒いと侵されるが如き場合は
九は適切でない。十迄の結果局部
としては黒有利なれど、今言つた
やうに右下隅の條件如何に依る。
左下隅、白九と飛頂るは即ち上隅
の芳しからざる場合。
白◎と切る征の成立せぬ時には
問題になりません。此征が黒悪し
くば十四は十五に粘り、乃ち次に



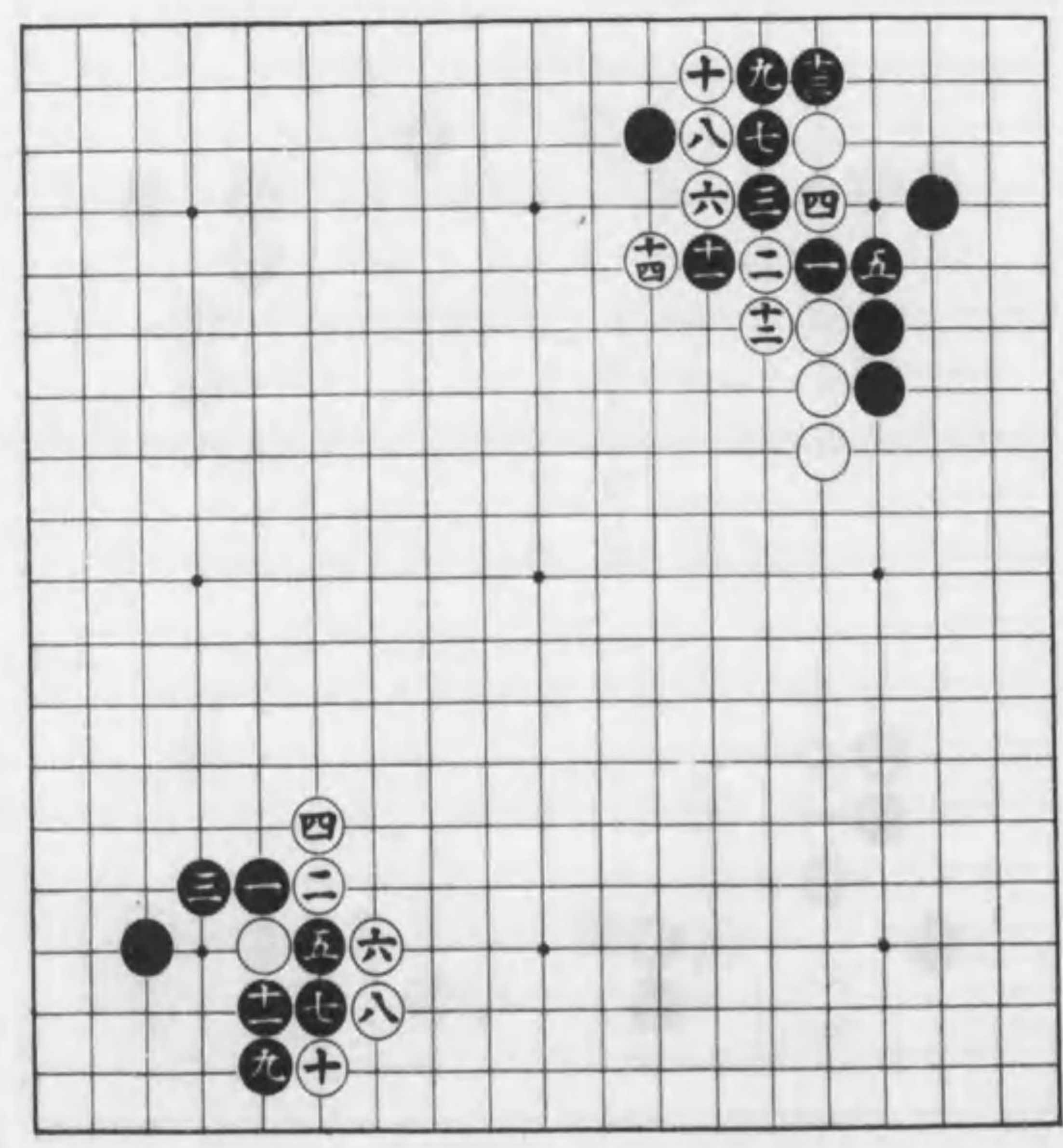
(第五十圖) 黒十四と粘がされ
る形の如何にも愚なるは否定出
來ない。白二三迄となつては黒不
利と認めます。四と行出すに當つ
て考へねばならぬ理、白二一にて
單に二三に飛ぶと黒いと當てる
手が有つて盤られて終ふのです。
左下隅は白九に對し十と立つ變
化で前圖下隅の征關係が黒に不
利なる際の別策とは見られます
が、白十五と走られるに至つてむ
つかしい劫争となるを免れませ
ん。但し白十九を二五に沿ふも同
結果なれど、十九にていに突當る
は白が拙い。参考迄に留めます。



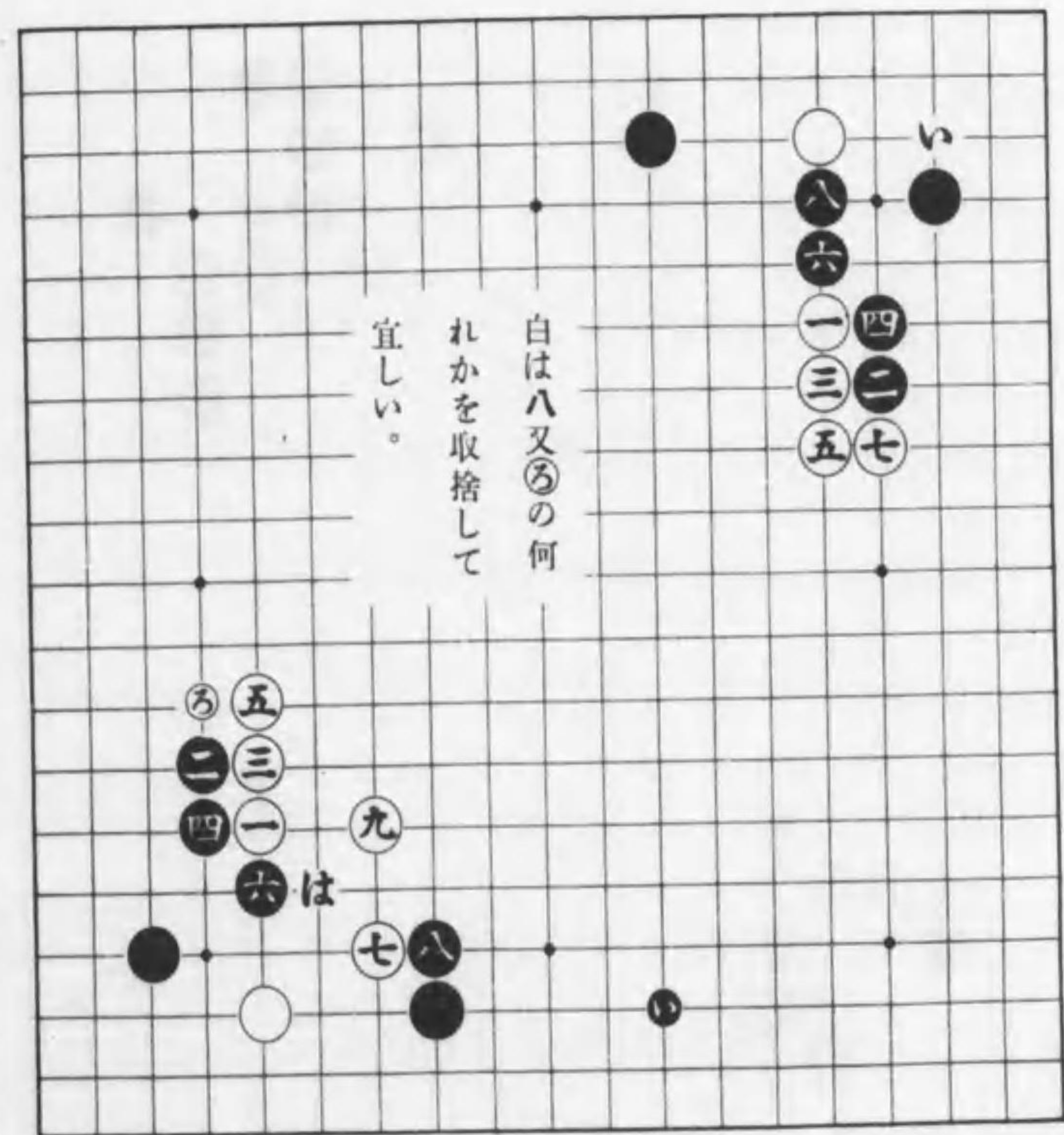
(第五十一圖) 黒は四と沿ふ方が無事です。前圖迄の諸變化が何れも面白からぬ際殊に適切。白五は斯く行切る著理。五にていに引く不合理は左下隅に示す。黒六を怠つて白から六に、又八にて九に拓いて白ろと、約込まれては厳し過ぎる。但し八にてろに押せば白は猶はと行びる事になる。要するに六以降は右下隅の配置關係が加はる故、一概には言へません。總べて初め二と打つに當り考慮を要する所以下隅は白五黒四白一黒二白三黒六に等しく、問題になりません。



(第五十二圖) 前圖上隅黒六にて直ちに一・三と綽出すが如きは多くは感服出來ない。白は四以下平易に應じて隅は捨て去つて宜しく、十四迄その外勢の厚壯は絶大です。殊に黒の二間夾は全然その効果を失ひました。但し黒十一にて十三に曲れば白は十一に堅く粘ぎます。白二の別法をなほ次圖に示す。左下隅は上巻高目定石第廿八圖に示した型ですが、是と比較しても上隅の歸結が黒に不利なる事は疑ひ有りません。二間夾の險石と化したる罪は大きい。

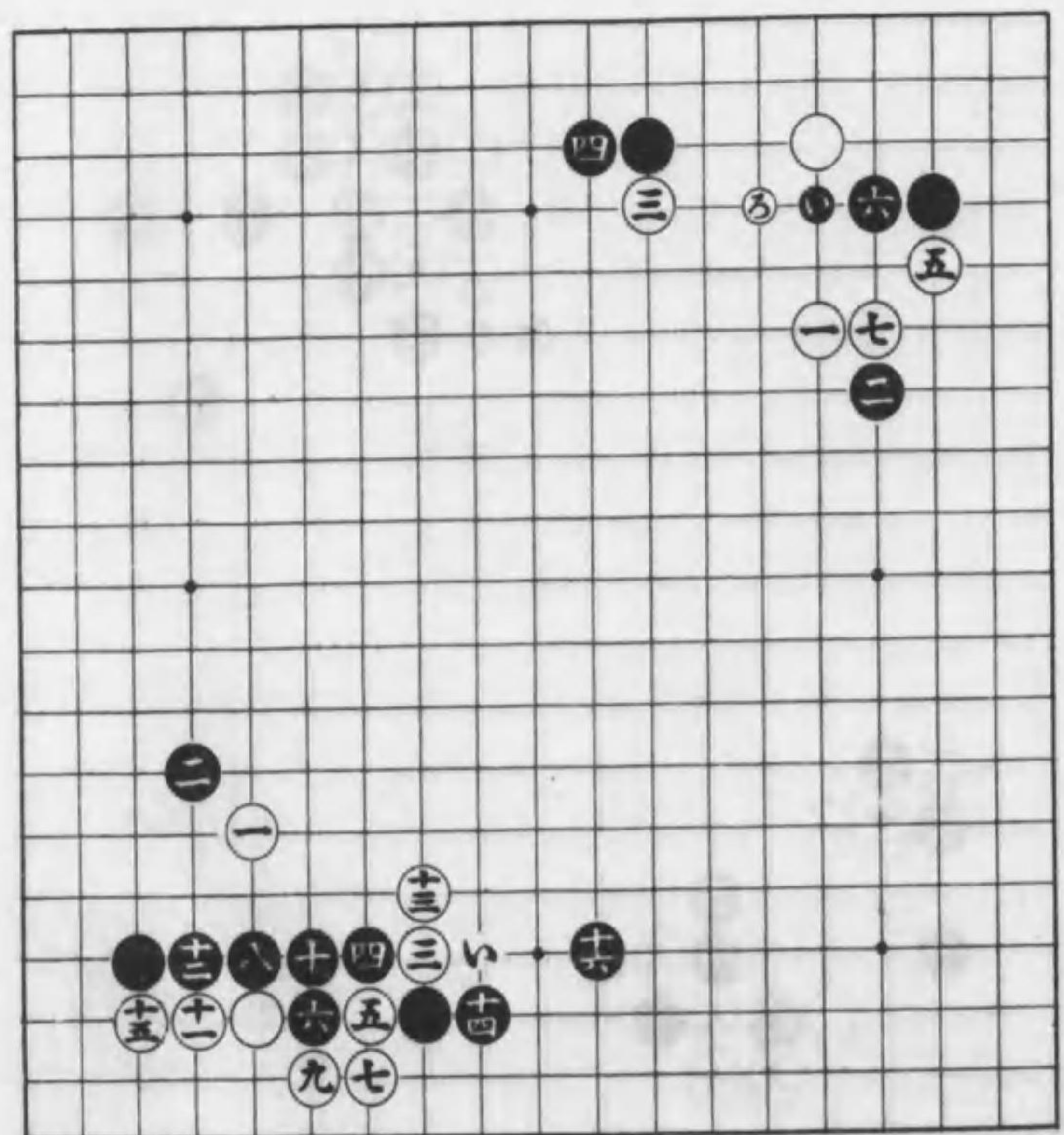


(第五十三圖) 黒六と緯^はねた時に、右下隅方面の條件に依て白七と約^{ちか}込んで形勢を張り得る場合には七も有力です。黒六若しくは當初二に於いて考ふべき所以。黒八と突當つて後にも隅にはいに頂けて活路は有ります。但し其故に白有利とは成し難く右下隅方面との配置關係に依る事多きは今申した通りです。右下隅白七と外^はす手段は有る。白九に次で①に黒が拓^ひき、白②と約^{ちか}込まれては黒不利。③の點には黒から押すのでなければなりません。黒八にてはに行ひれば

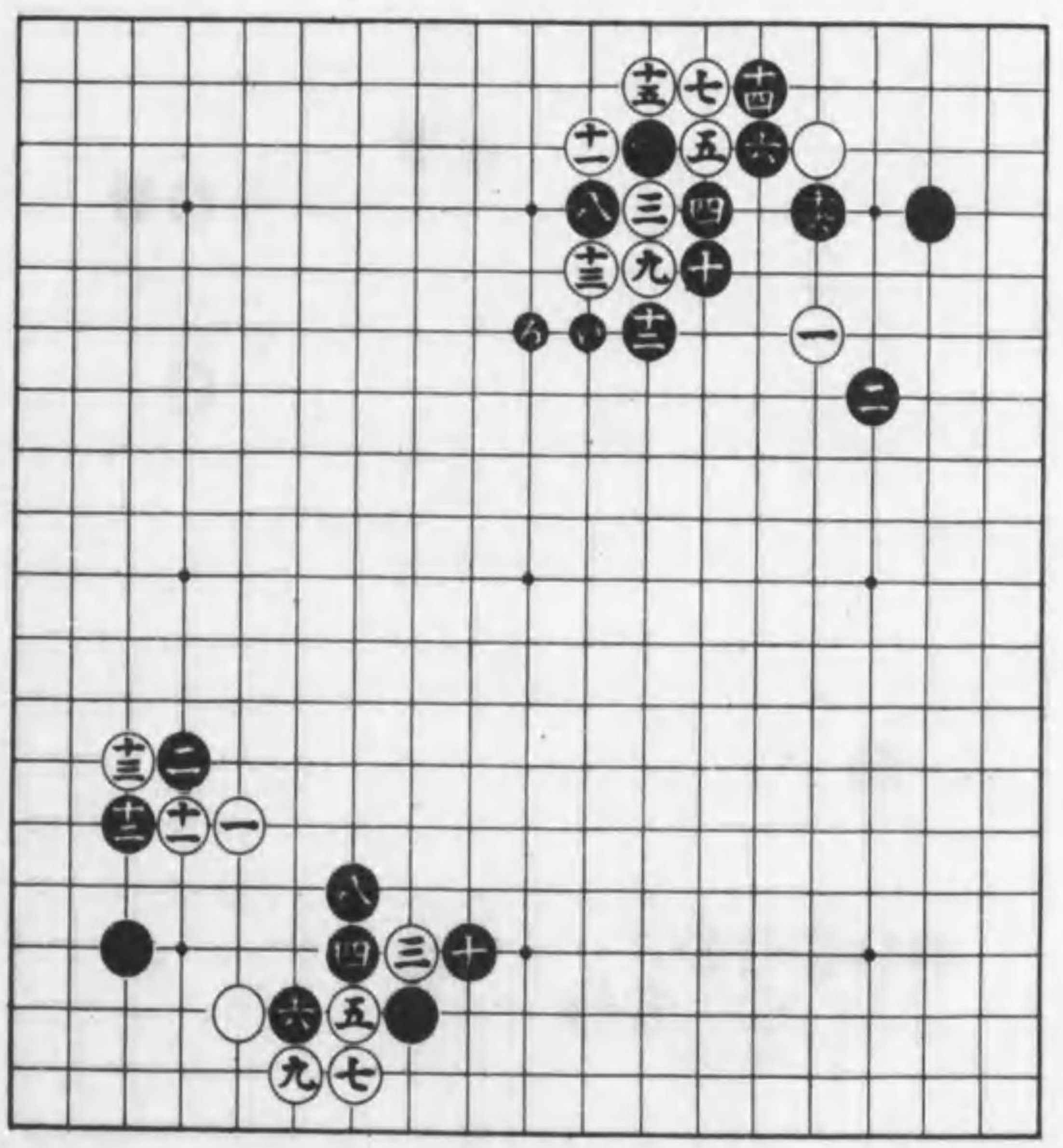


白は八又③の何れかを取捨して宜しい。

(第五十四圖) 更に白三と玆で頂けられる事を考へると、黒の受方は非常にむつかしくなる。黒四と引くのでは白五・七と打たれ、①に出れば白②と約^{ちか}へられる。是は明らかに黒が宜しくない。左下隅黒四と緯^はね出すには戦ひを覺悟せねばなりません。白十三にていに打てば黒は十五に約^{ちか}込む事になります。何れにせよ一と二との交換は有るだけ白が幾分不利。同時に十六以下の歸趨は黒に於ても成算を持し得ないでせう。なほ次に。

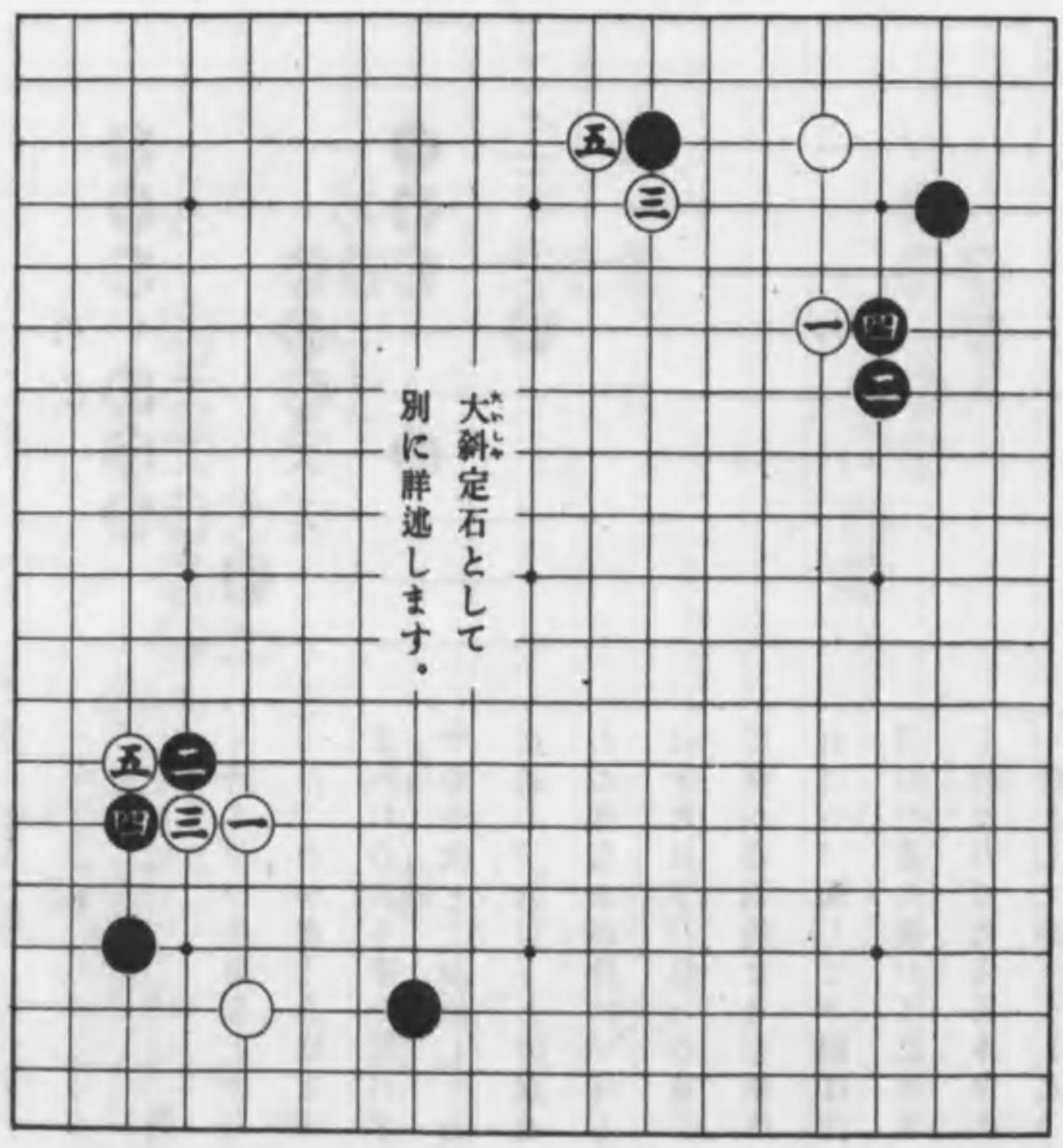


(第五十五圖) 白三を抱へる征
 關係の黒に有利なる際には八と
 切つて十と押す手段も有力。白
 十一では他にも打方はあります
 が、定石としては示し難く、尋
 常に十一と切取れば以下必然十
 六迄となつて一・二の交換があ
 るだけに黒は打てる理。次には
 ①に押し更に②の行切を含むが
 厳しい。但左上隅に白の締り等
 強盛なる勢力あつては十六迄の
 結果も黒良しとは言へません。
 下隅黒八は上隅に及ばぬ。白に
 十一・十三等其他趣向の餘地を
 與へて紛糾を招きます。



(第五十六圖) 白三に對して直

接に應ずる事が何れも悪いとす
 れば、四と沿つて守る位のもの
 ですが、さすれば白五と約へて
 この處一段落と見ねばなりません。
 黒の二間夾と白三、及び白
 一と黒二とを除いた形に還元し
 て考へて見る時に、それ等の交
 換を岩相殺するものとしても、
 少くとも黒に有利とは言へぬ。
 互角の勢としても、二間夾の意
 義を失つた罪は小さくない。
 左下隅白三・五と出切る型は初
 め一にて三に大斜走掛し、黒四
 白五黒二白一となつたに等しく

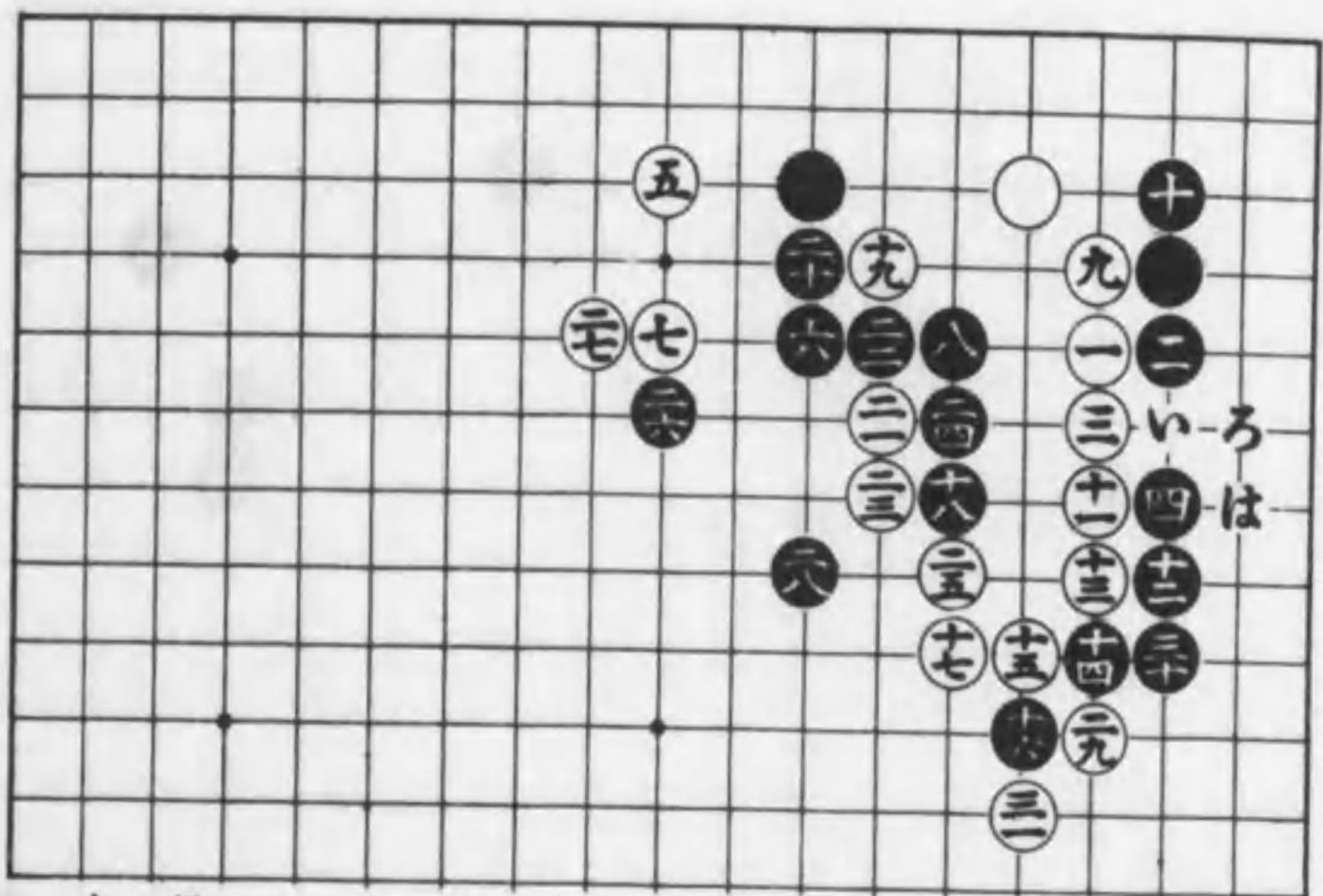


大斜定石として
 別に詳述します。

(第五十七圖) 白一の小斜走掛に關しては一問夾にも一半を示しました。二問夾に於ても併用される事は勿論ゆゑ、既出の型は重複を懼れて省略します。

一・三それ自身は従來說いた二問飛と、その意味に大差なく、たゞ彼の緩なるに比し、稍急激を加へるのみ。五・七と關聯し且つ左上隅に白の配置あることを前提とします。即ちこの方面に地域を劃するの方針。

黒八は白九を誘ひ、自然の調子を以て十の要點に下る考へてす一間夾第四十六圖下隅と、その



點は趣きを等しくします八で單に十に下れば白に八と飛ばれてしまふ。斯く十の下りを要點とするのは、白い黒ろ白はと切を入れられる事を恐れず十四十六と二段綽して白に迫り、六以下と呼應せんの意なるが故にである

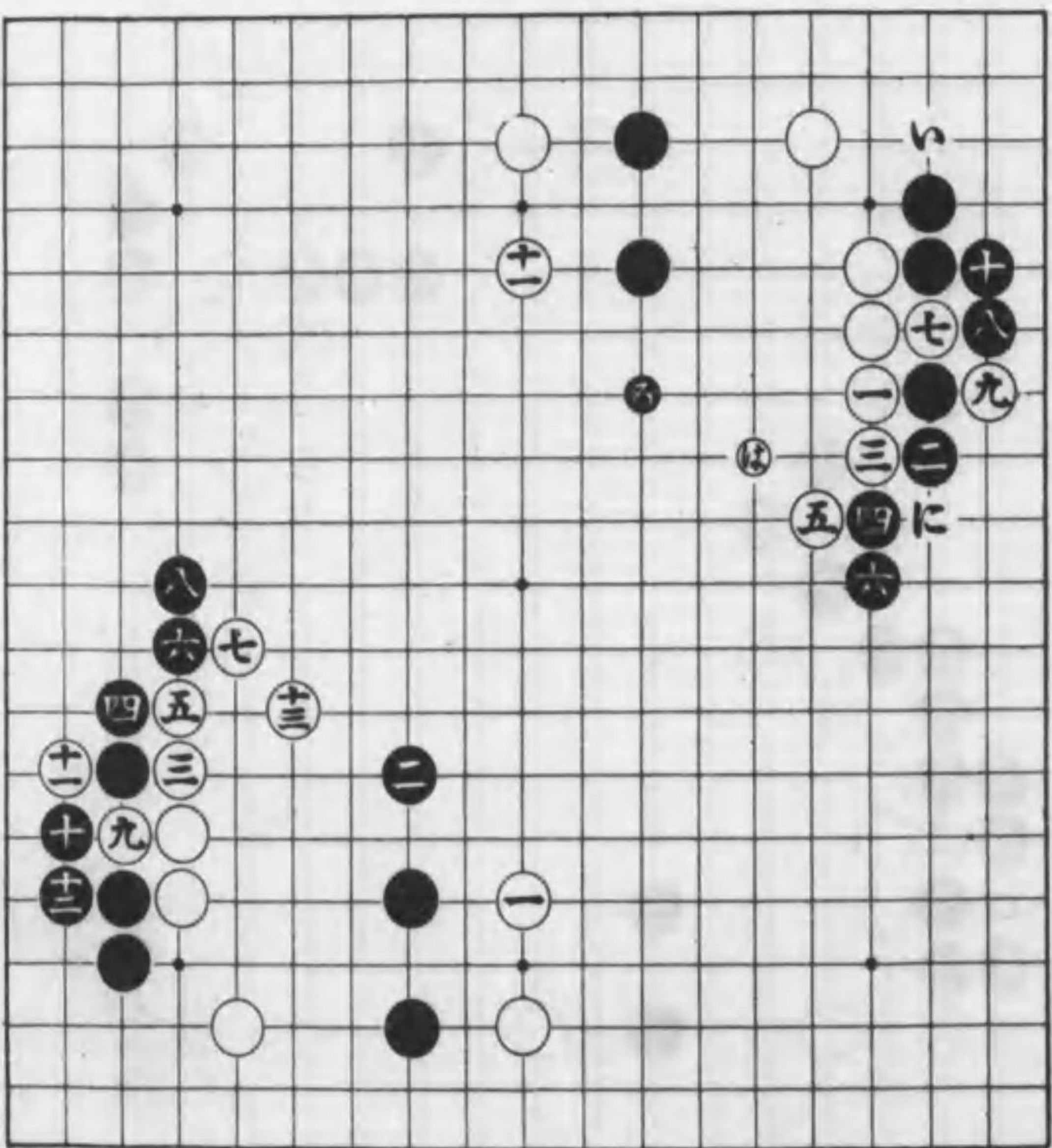
白十九以下、双方の着手に聊かの間隙なきを味はりたい。而して本圖は先哲の打碁に現れて以來永く行はれてゐる基本型の一種として掲げました。

(第五十八圖) 白一から變化。

これは前圖の如くいの要點を黒に占められる事を嫌つたのです黒十迄は一問夾第四十圖にも既に言ひました。

白十一に次いで黒②ならば、白③と備へて置きます。後に④の切を含みつゝ、尙黒に迫る狙ひを以て左上隅方面に形勢を張らんとした當初の作戰を繼承する左下隅は前圖黒八にて平易に二と飛んだ形。

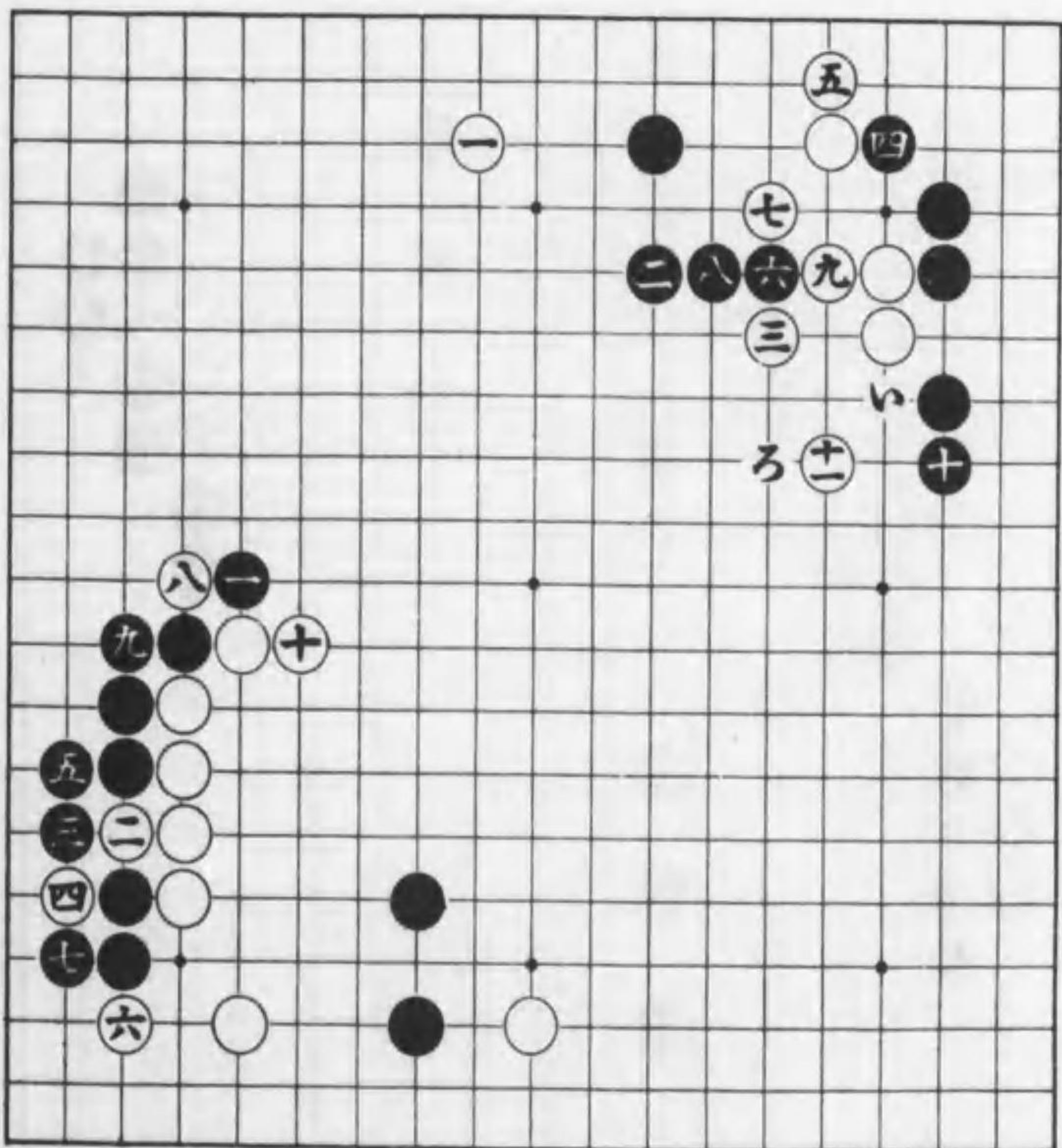
白三以下十三迄となつて、右上隅と結果を等しくする所に注意を要します。



(第五十九圖) 白の詰が左上隅との關係から一路遠く一と控へた場合には、黒二の次に單に三と飛んで打つ事がある。これは前二圖の如くいに押すのが面白くない際と觀られます。

四・五の交換は黒に損なき形。黒六・八は白の眼形を奪ひました。黒十はやがて白を攻る伏線白十一をろに飛ぶ事も可能。

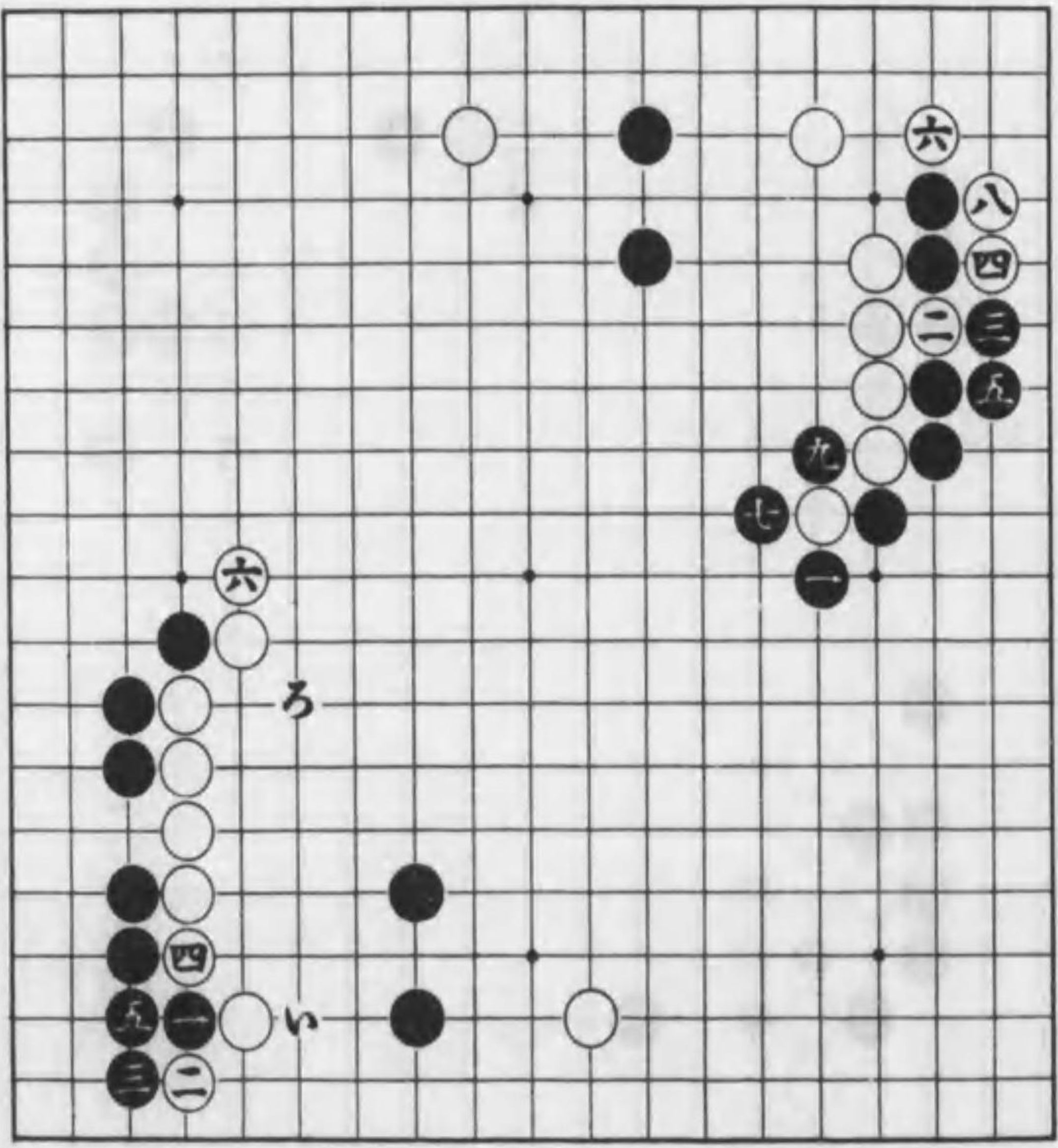
左下隅黒一は前圖上隅黒六の變化ですが、斯く二段綽して白二以下を巧みに利かされた姿は黒稍不利。一それ自身の効果も滅殺されてゐます。



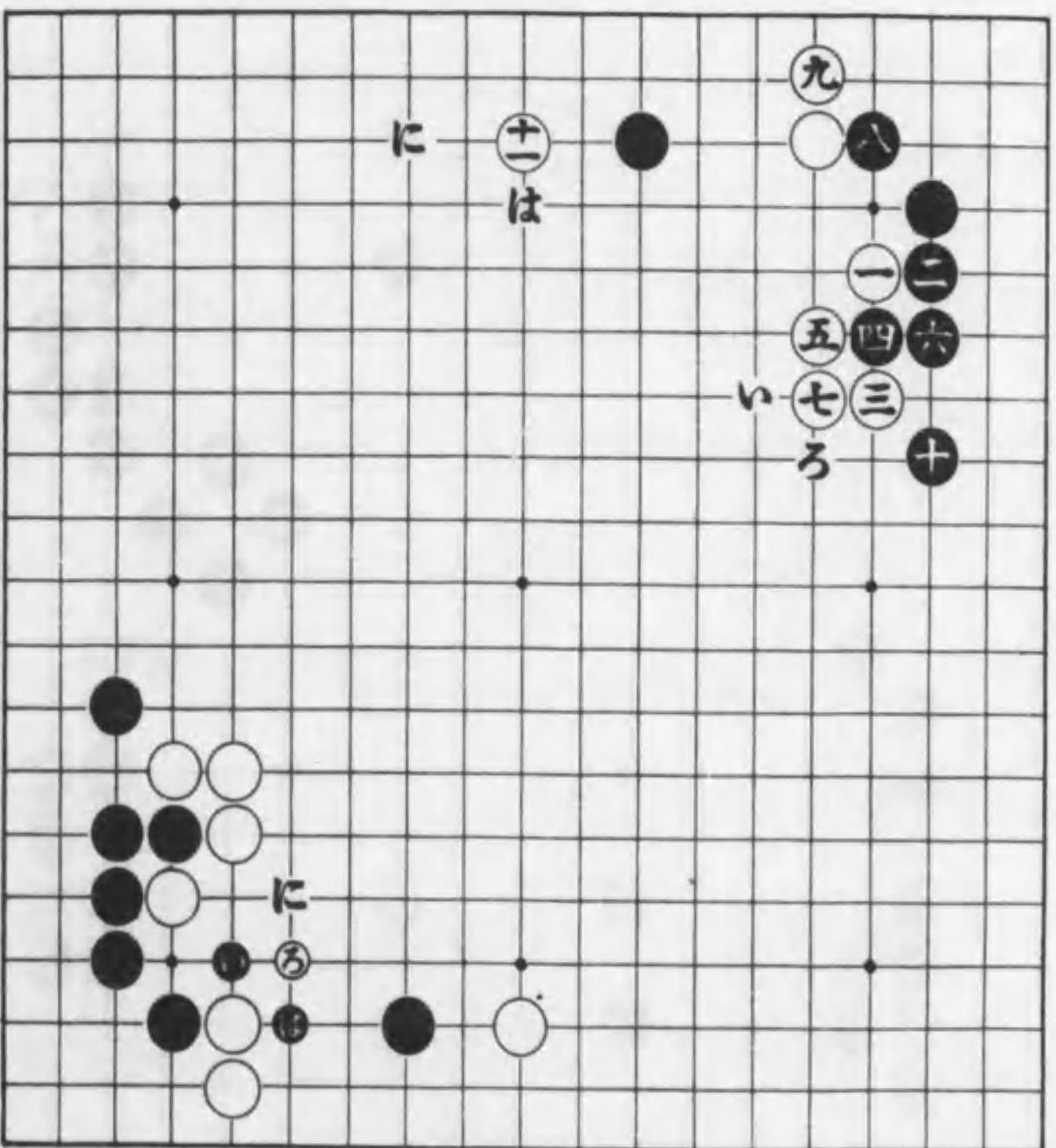
(第六十圖) 前圖下隅黒七の變化。斯く七と綽れば勢九迄の振換りとなります。白一子を打抜いた中央の厚壯はさるものとして、右下隅方面に黒の締りでもあれば兎に角、此振換りが常に黒に有利とのみは言へません。前圖下隅との選擇には全局に況つて細心の注意を要する。

下隅黒一は前圖下隅に比せば合理的です。五迄となつて後にいの夾頂を含む。

白六は黒ろの眼きを利かせまい爲で、一間夾第四十二圖にも述べて置きました。

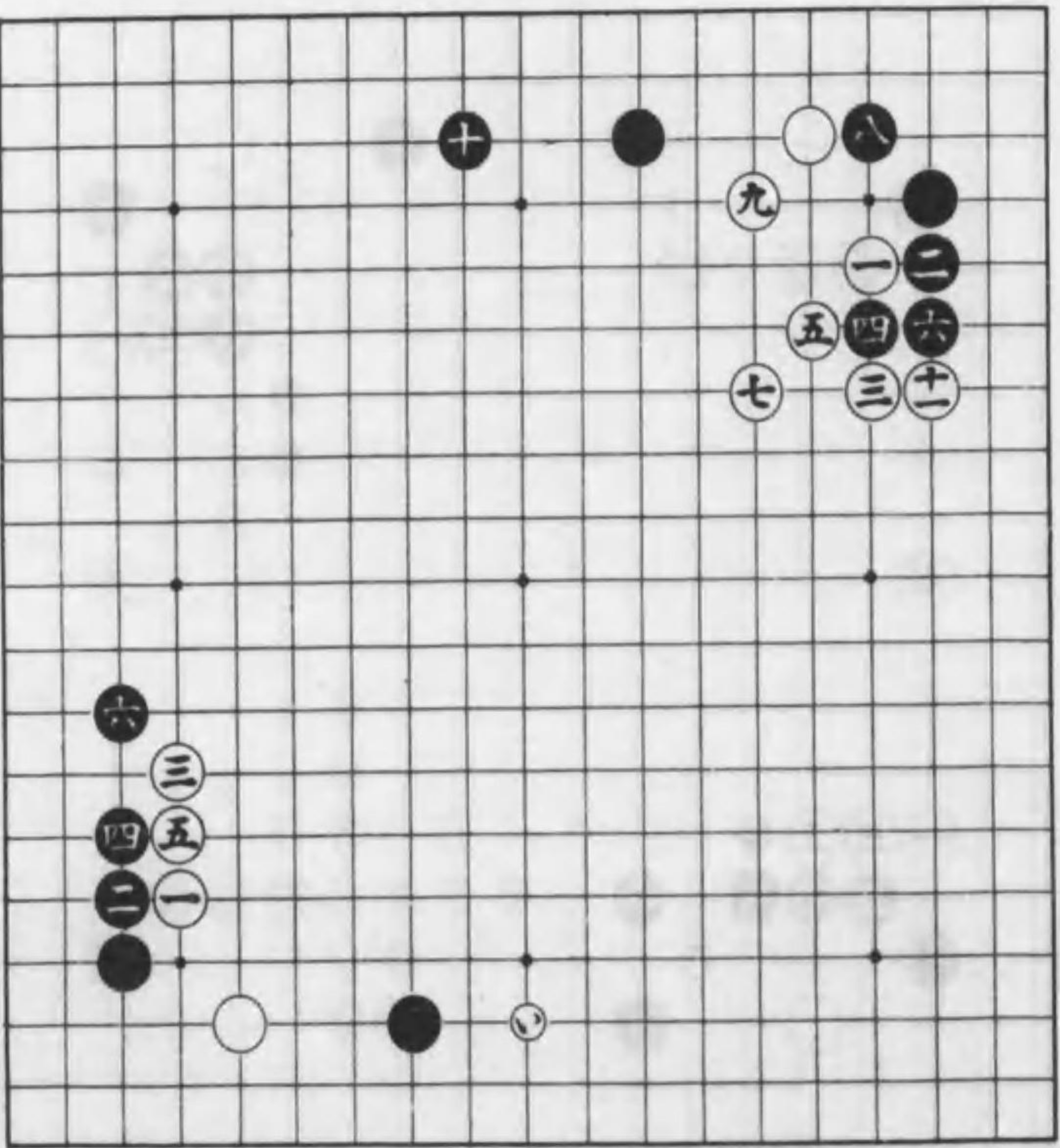


(第六十一圖) 白三と飛ぶのは前圖迄の諸型とは逆に白の方が一路先進して打たうの意。白七をいに掛粘ぐ事もある。其時黒八にてろに覗き白七との交換を先にすべきか否かは言へない。白十一に次いで黒はと頂けて二間夾を助けるか、にの方から夾んで捨て打つかは一に左上隅方面との關係に依ります。左下隅の如く黒は後に機を得て●・●と切り又●・にと二段綽の筋を狙ふ事が出来る。この點上隅九の下りは、二間夾に於ては稍無理と觀られます。



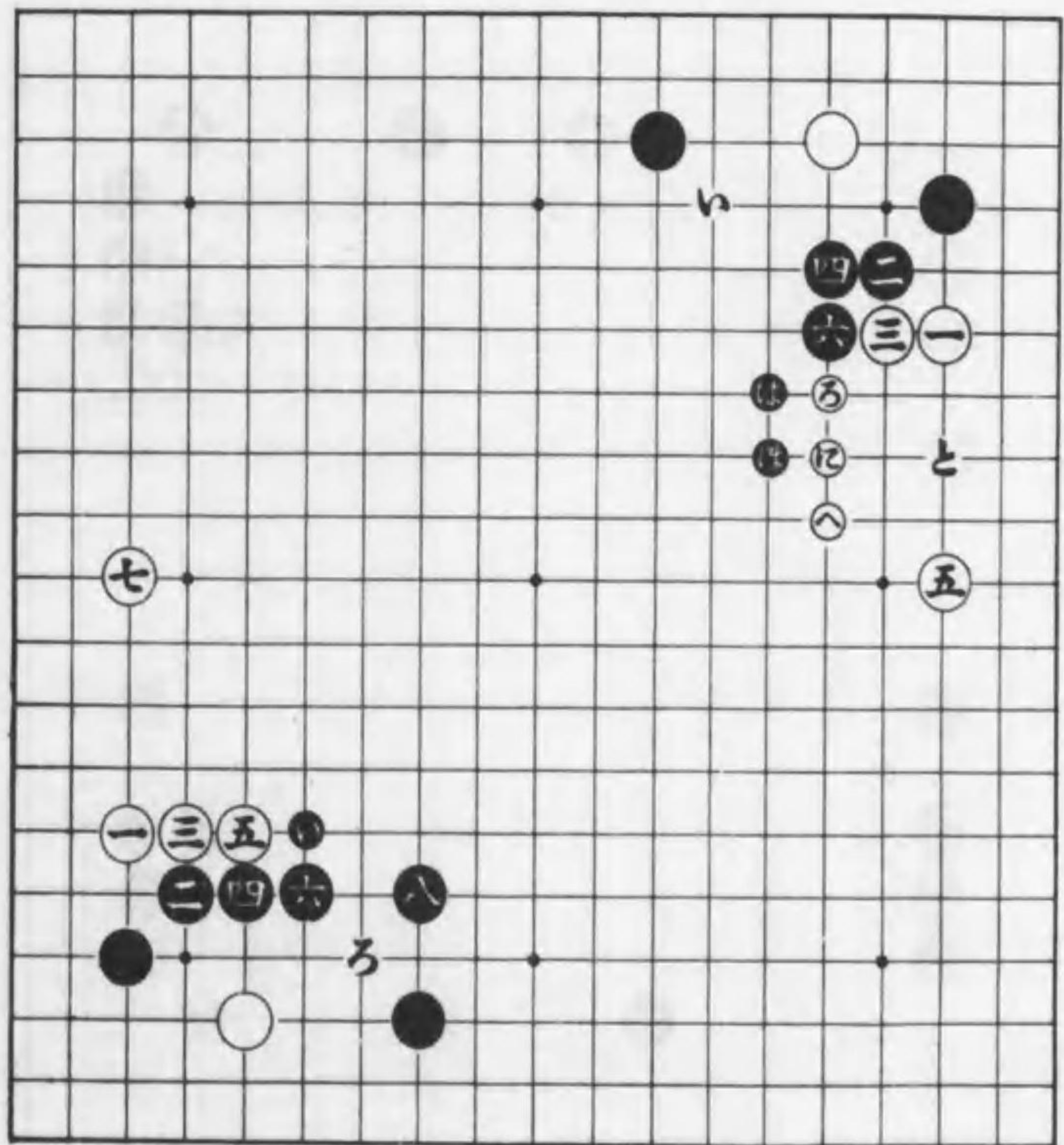
(第六十二圖) 白九と尖めば隅を願慮するに及ばぬので、白十一もさしたる苦痛とはせず、黒十と拓きます。當然に過ぎない。但し白十一と約込まれる事が特に厳しいやうな右邊乃至右下隅方面の配置關係なるか否かは先決問題であります。

左下隅黒四・六は一路餘計に這つて、換言せばそれだけ白の壓迫を被つた所が難點です。然し乍ら上隅白十一の酷しさを避け又其他の布石關係から選ばれる事が絶無ではない。黒六の次に白は矢張り⑤方面から迫る順序。



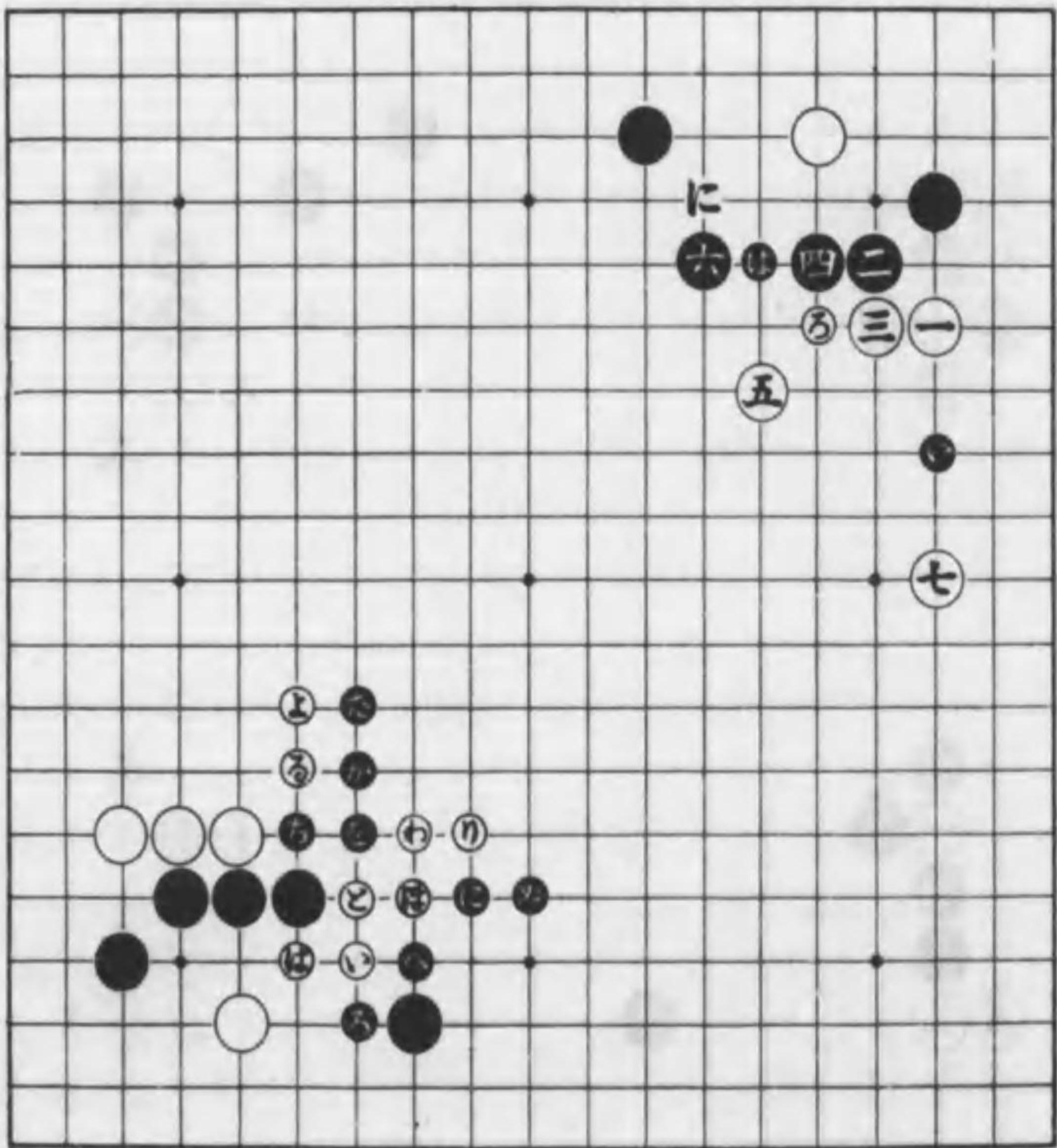
(第六十三圖) 白一の間夾返。

夾返其物は一間夾に於ると大差無く唯二間夾だけに白いとする味の存する意味に於て多少の異同ある點のみを列擧するに留め他は省略します。すべて一間夾第五十八圖以降、また上巻目外定石第十圖以降の所説を参照されたい。黒六に對する適切の應手が白に無く、⑧以下を打てば味の味が失はれ、又全然應手を略けば黒とが殿しい點、五は左下隅に従ふ方が優つてゐます。下隅黒八を⑨に曲るも白に響かず、却つて白の味を残す。



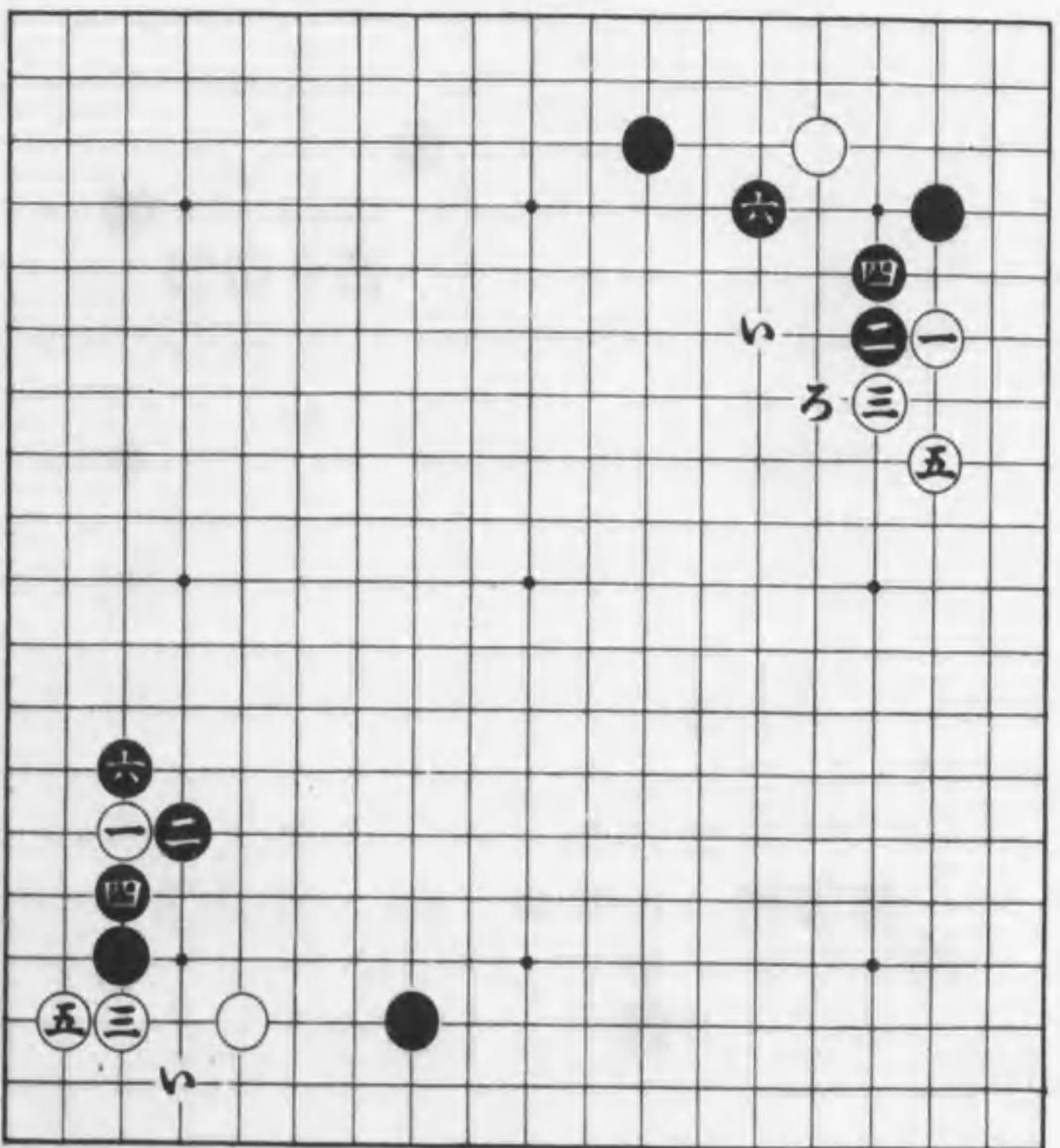
(第六十四圖) 本圖には一間夾

との差が明らかに指摘されます。一間夾に於ては黒六にて①に、白②黒③と運ぶ順序を示しましたが、それでは白にを残すから二間夾では六と飛ぶ着理です。但し黒④白⑤を先にして六と飛んでも悪いとは言へません。下隅白⑥と出る味の存する事は言ひましたが、前圖上隅白⑦で直に⑧と出ても成功は期し難い假りに黒⑨以下の應酬を考へても、白有利とは言へません。必ず機を見て、而も左邊に白の備へが加はつた後にします。



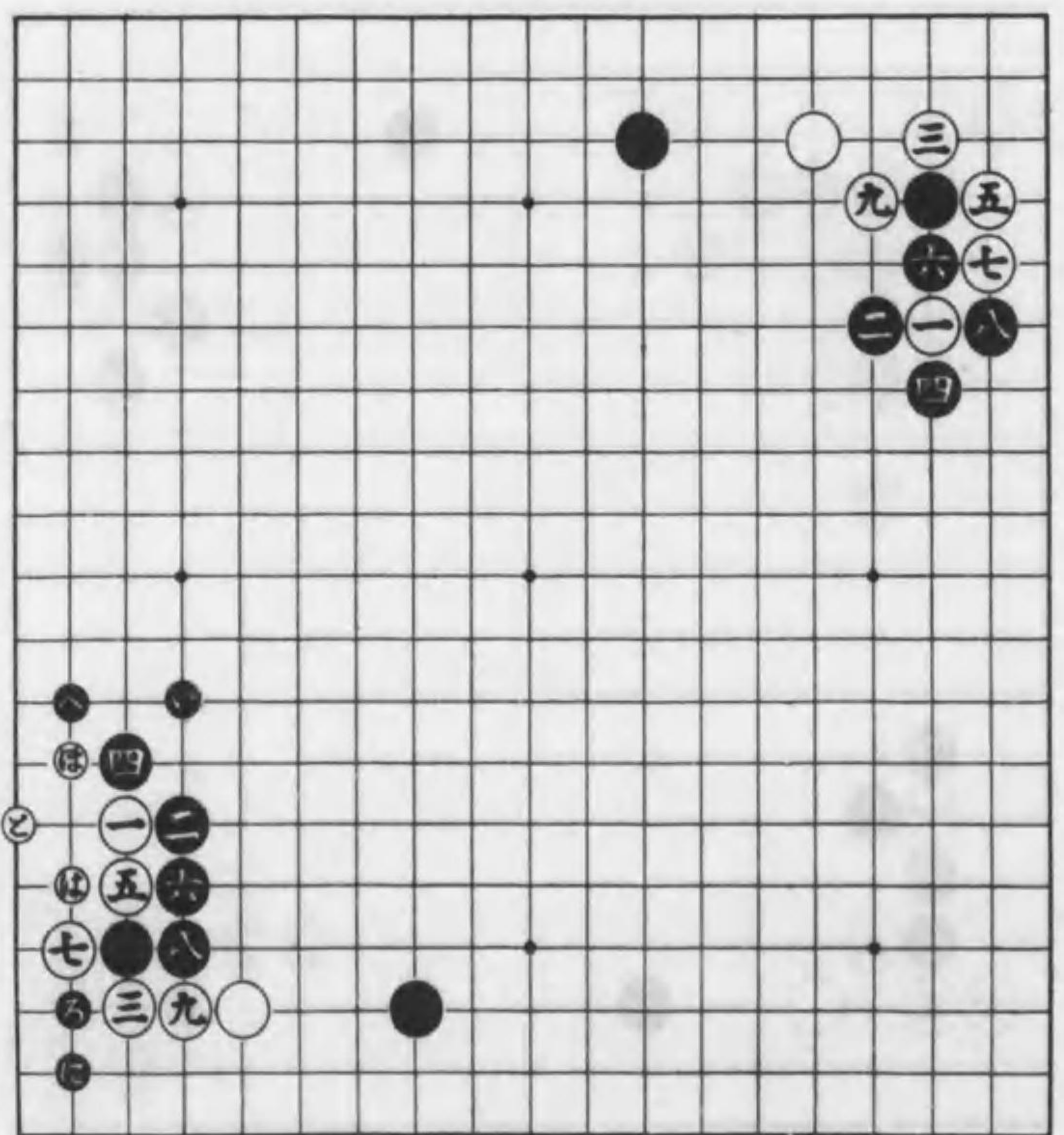
(第六十五圖) 黒二と頂ける型。

一間夾第六十三圖に比して、隅に白から狙ふ味が残る差違、それがあるのは當然です。い又はろは六の確實なるに及びません。左下隅は白三とこゝで頂ける變化ですが、一間夾第六十三圖下隅に比し、黒いの置きが利かないだけに、三・五は成立し得ません。振換りを求めて先手で隅の活を保つ趣向です。但し黒四では着理から言へば六の約へを先にした形であり、一間夾とはそこに變化の餘地があつて稍複雑を加へる。次圖以降に示す。



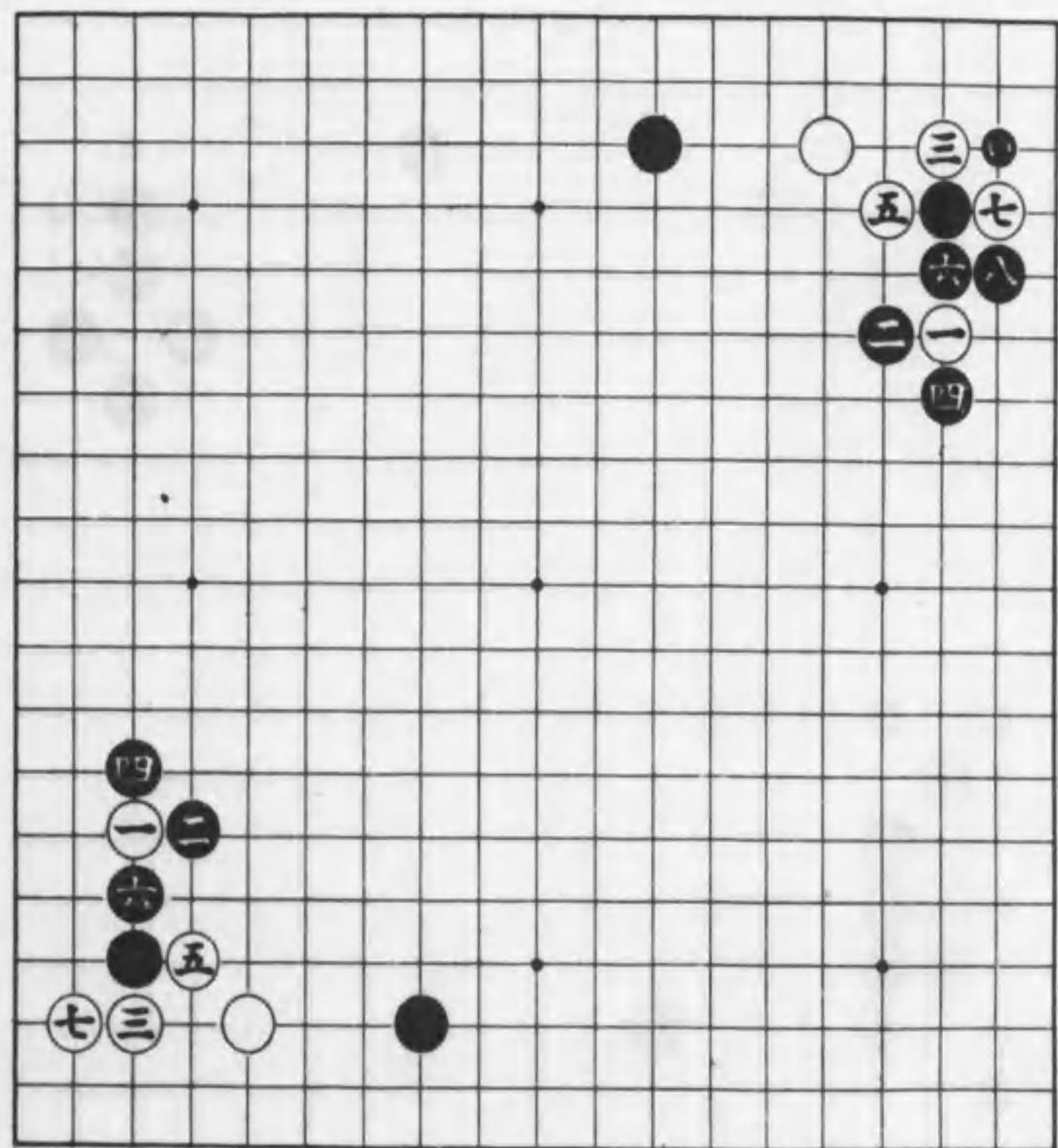
(第六十六圖) 黒が四の約を先

にした際、白五・七は卑屈の姿たるを否定できない。黒は六・八と打抜いて宜しい。白九が省略し得ない形です。左下隅は白五と突當りました。黒六と約へるのは白九迄となつて隅の損が小さくありませんから黒不利です。九に次いで黒は●と備へる事を要しますが、然る後に更に黒●と切つても白◎と應ぜられて急には成功しない斯くては最初二間夾の石さへ働きに乏しい形と化しました。黒六は單に八に引くべきです。



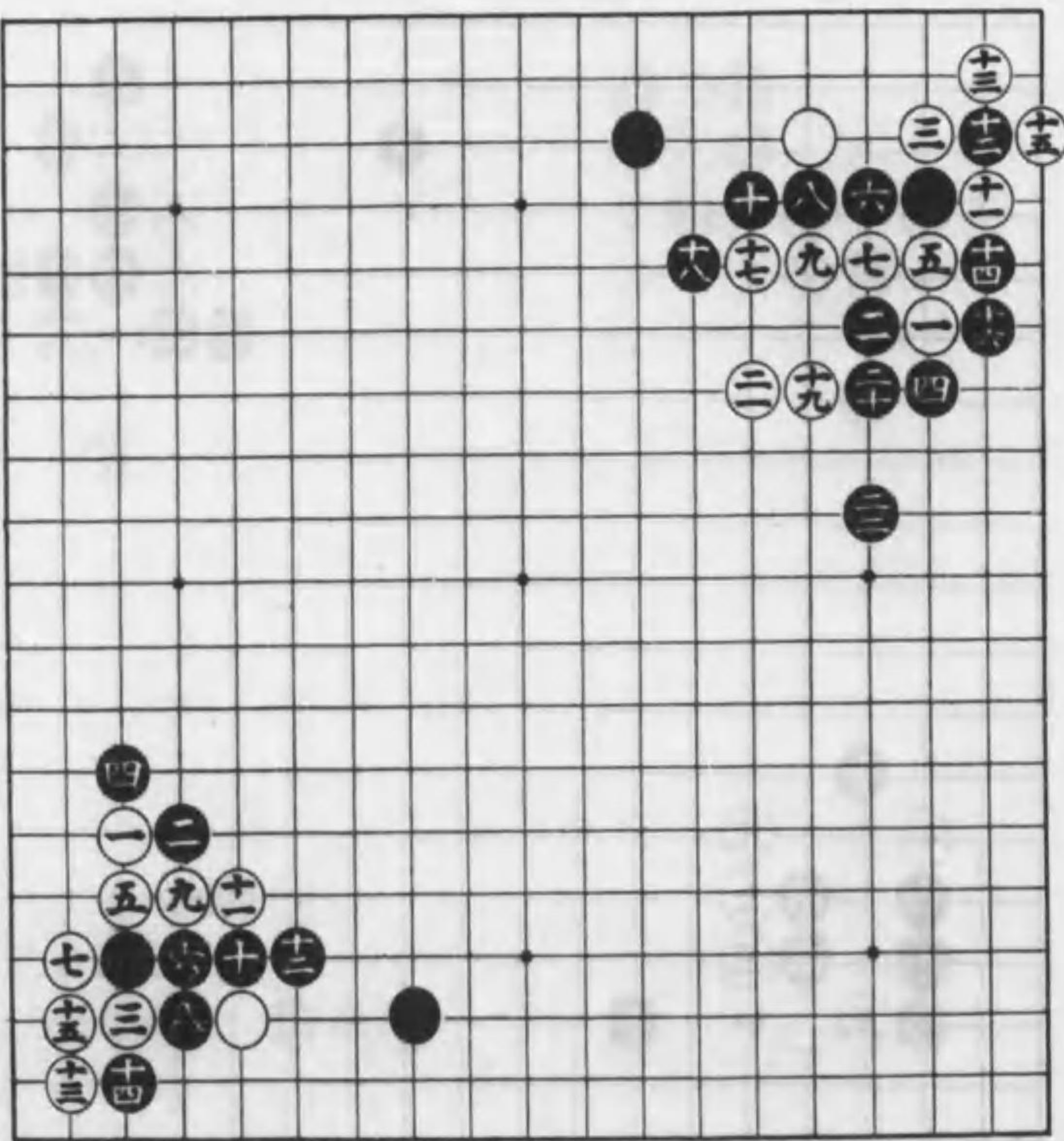
(第六十七圖) 白五とこの約へから来れば黒は勿論六と取切るの一手です。

白七は黒に●と縛られる酷しさを一旦防ぐ爲に止むを得ませんが、黒八と應じて後に機を見にする●の切提りは非常に大きい左下隅はこの意味に於て白七と單に下つたのです。然し前々圖左下隅と比較する事に依つて白の不合理は明らかに指摘されませう。五の一手が過剰です。要するに白五と約へるのは黒四の意中を行くものであり、本圖は上下兩隅共白不利。



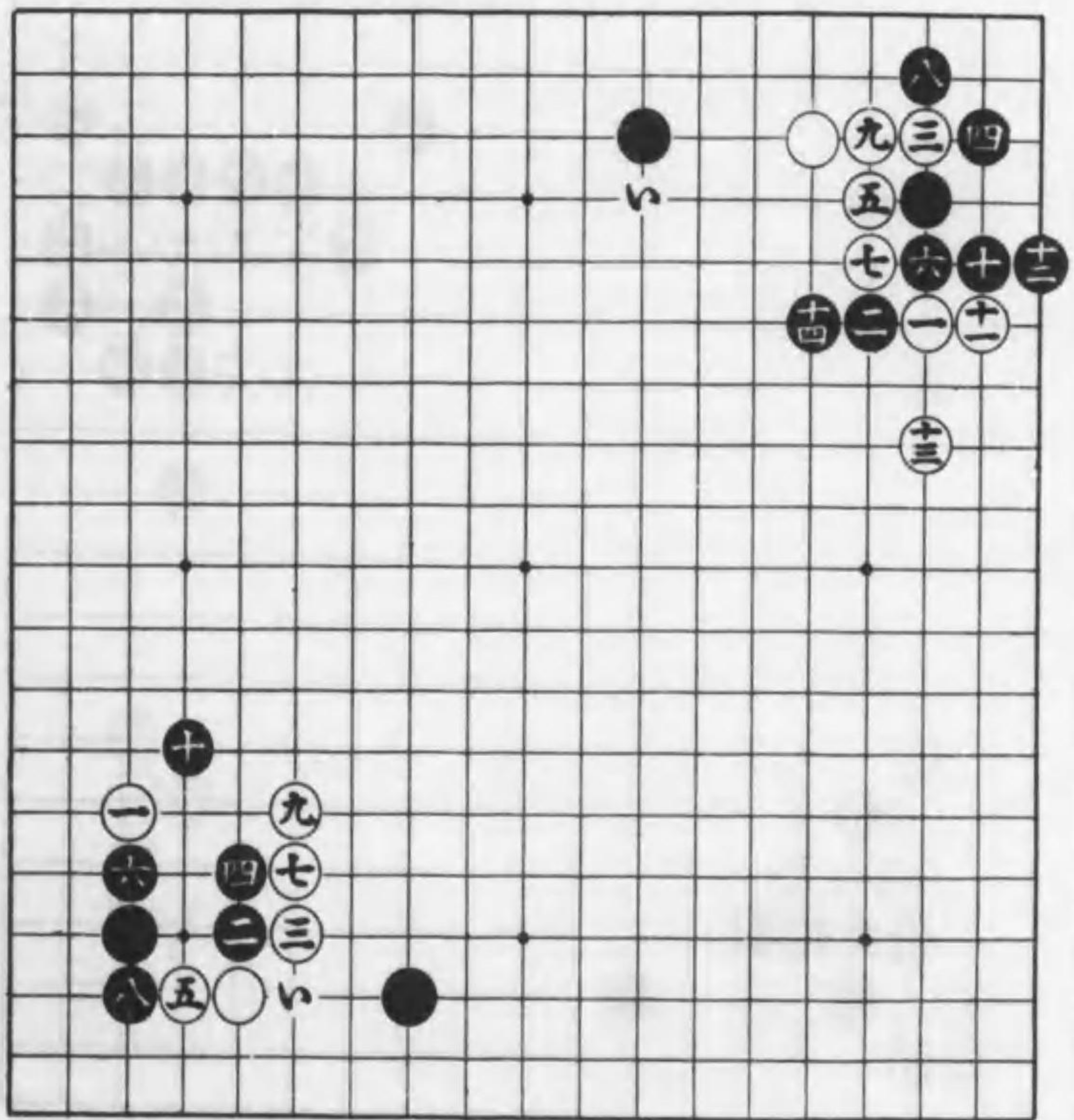
(第六十八圖) 黒六に對し、白七の出を先にすれば以下黒二二迄となるやうな運びです。四圍の條件を考慮に入れる事を要し部分を以て得失を斷ずる譯には行きません。

左下隅は白七の盤りを先にしました。この時黒八にて九に繋ぎ白八となれば前々圖下隅に歸する事は前々圖の黒に不利なる所以を十分に語るものです。然し本圖白十五迄の結果も黒が良いとは觀られません。要するに黒四と外から約へるのは勢紛糾に至る事を双方覺悟すべきです。



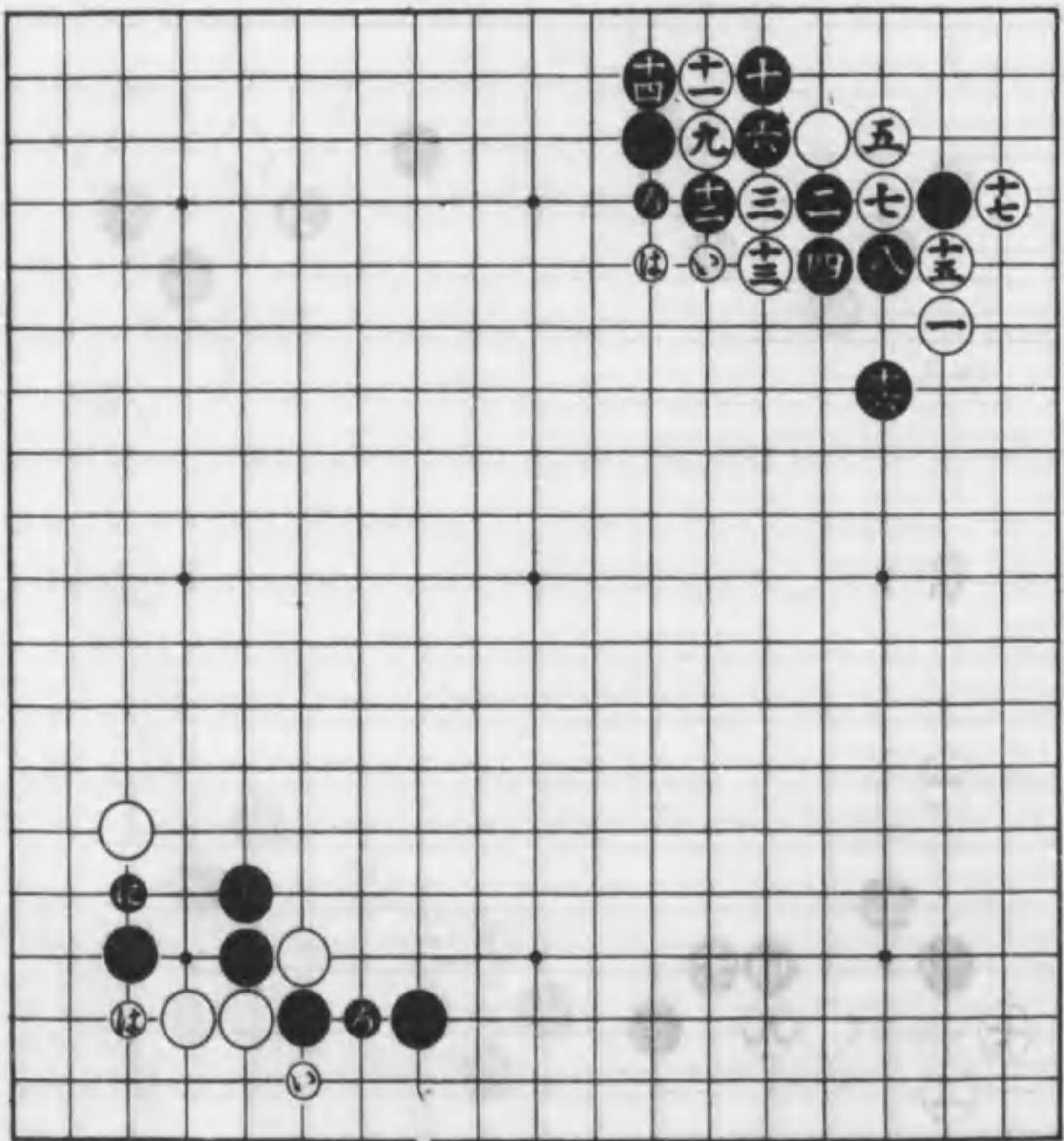
(第六十九圖) 黒四と竝で縛る

事も考へねばなりません。
白十三はむつかしい處ですが、
本来實戦ならば此手邊りていに
頂を試る等、趣向のある處でせ
う。従つて黒も激戦を承知でな
ければならぬ理。部分としては
單に十三と飛んで黒十四と引か
れては白が面白くない形です。
下隅黒二は混亂を招く基。白は
三と縛るに限ります。一間夾第
六十三圖下隅以降との差に留意
せられたい。
黒四にていに切るの變化は茲に
示すべき限りではありません。



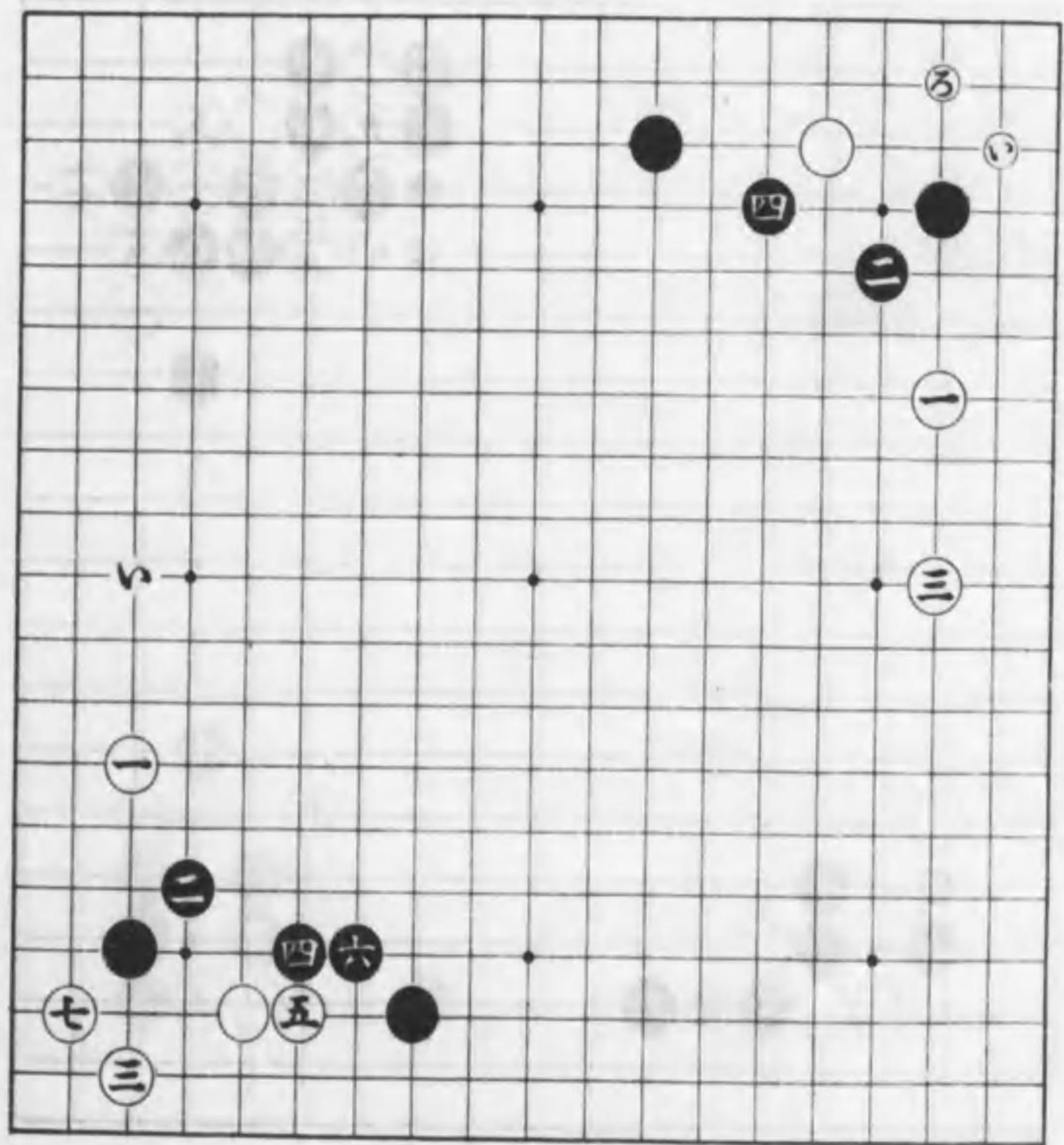
(第七十圖) 黒六と竝で切る

のは時に一手段たり得る。
白七にて十に縛ね、左下隅の
活路を求めるのではその不利
疑ひ有りません。
白七及び九の手順は前後しても
同結果です。
黒十四は勿論斯く抱へるの一手
である。
白乃ち十五・十七と切取る。
黒十六は形です。次いで白は
と當てと押す位ですが、この
後の戦ひに十分の成算がなく
は初め黒六と切る強硬手段は採
り得ない理であります。



(第七十一圖) 白一の二間夾返

に就ても一間夾返同様一間夾の場合と大差なく、一間夾第六十五圖以降を参照せられたい。
 黒四にて一段落。後に白①及③と打つ手の有る事は一間夾よりも弛む故愈々明らかでせう。但し四を省略することはある、
 左下隅白三は、上隅黒四を省略した時、即ちいに白の拓き有る際ならば兎に角、然らずして直に三と走り、黒六迄先手封鎖を被つては不利莫大です。黒いが厳しい。いに白の拓きが有つても、容易には打てません。



(第七十二圖) 白三と直ちに尖

出すも無理に近い。黒六と封鎖されて、一が愈々壓迫を感じるからです。但し白五にて更に六に尖み出せば、黒●と透かさず夾んで攻立てるが宜しい。
 下隅は前圖上隅黒四を省略した場合白一と尖出す型。
 黒四は双方の根據に關し、絶對です。怠つて白①と走られては不利大、攻守の位地が轉倒する。黒六以降は示すべき限りでありません。白一にて①に走れば前圖下隅七迄となるのですが、①と一との取捨は局勢に依る。

